桜庭和志、初の一本負け！ でも、これでいいのだ!!

enterbrain MOOK

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

kamipro Special

9.25 DREAM.16
9.25 UFC119
10.2 K-1WGP
10.3 PANCRASE
徹底詳報

2010 NOVEMBER
880yen

大会速報、選手ブログは携帯で！ kamiproMove



DEEP10周年記念特集
佐伯繁はマット界に必要だ！

女子プロレスもおもしろいだろ〜！
さくらえみ 愛川ゆず季

掟ポルシェの突撃！ 俺の晩ごはん
井上京子

桜庭からタップを奪った狂乱のファンタジスタに直撃!!
ジェイソン・"メイヘム"・ミラー

世界の中心はどっちだ!? 仁義なきフェザー級闘争がヤバすぎる！
小見川道大 vs 高谷裕之

DREAMでよみがえった拳豪——！ 世界再出撃を宣言！
ゲガール・ムサシ

格闘技界に
石井慧は必要なのか？

日本の救世主か、理解不能の怪物か——!?

ANNIVERSARY 10th thanks! eb!

kamipro Special 2010 NOVEMBER 石井慧は必要なのか？
発売元 株式会社角川グループパブリッシング 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

GENDAI

BISCAL®

ビスカル

製薬会社だから提供出来る信頼・安全！
毎日食べてウチのコ、ハッスル!!



ビスカル 150g



ビスカル 300g



ビスカル 900g



ビスカル 2.5kg



ビスカル小粒 65g



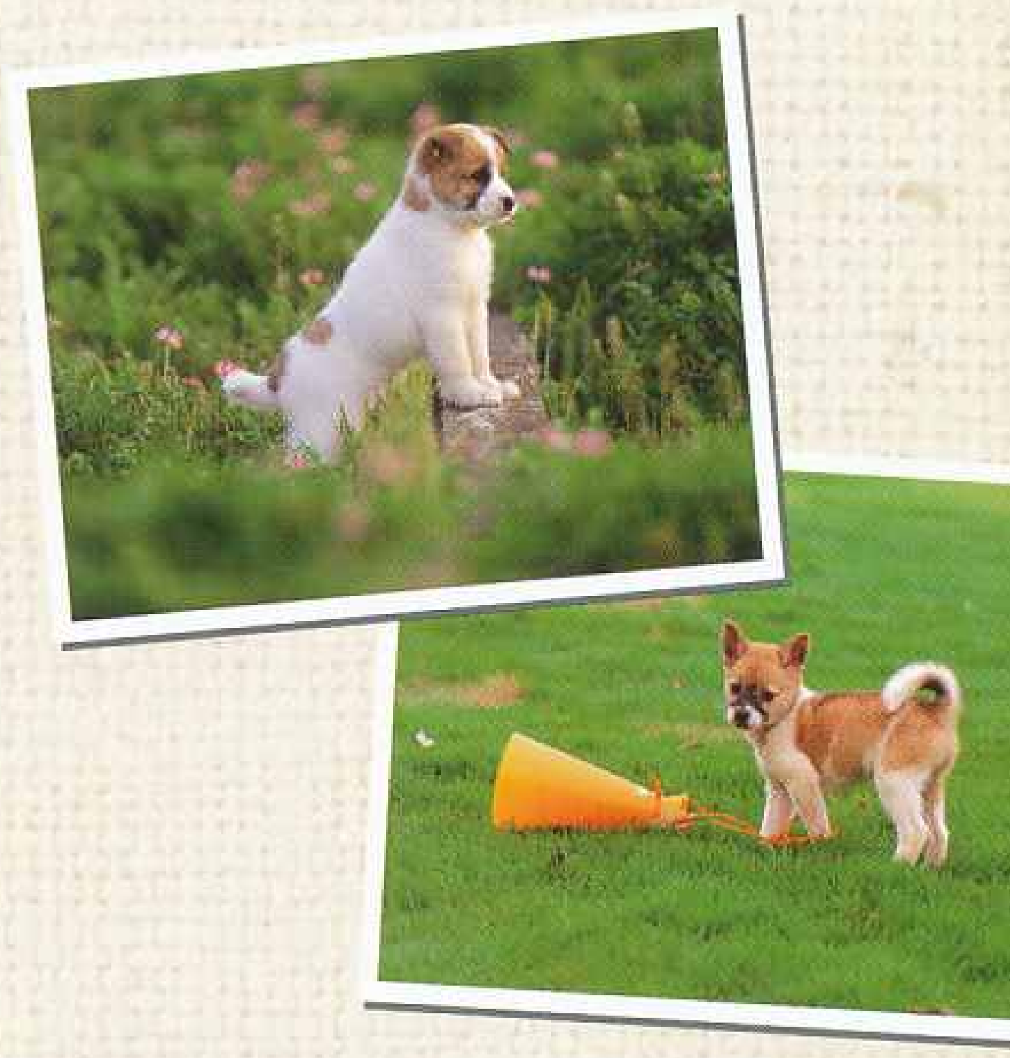
ビスカル小粒 180g



ビスカルシニア小粒 60g



ビスカルシニア 300g

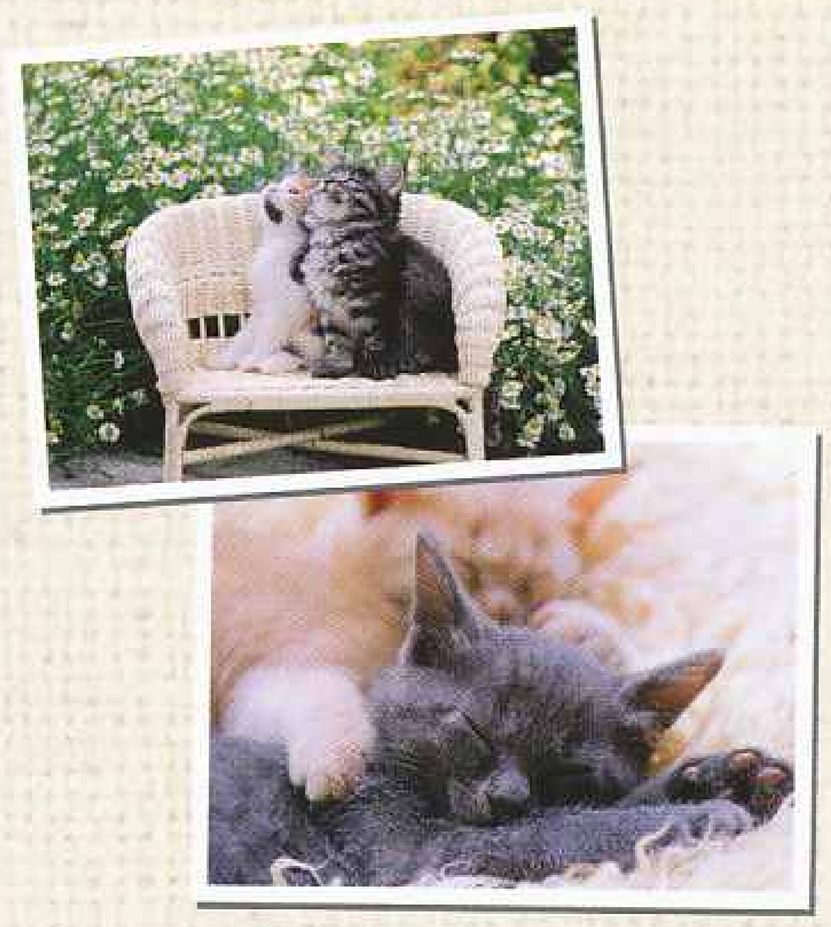




ビスカルダイエット 300g



ビスカルダイエット 900g





ビスカルcat 100g



ビスカルcat 200g

詳細（ビスカル他）はコチラ→ http://www.gendai.ne.jp/

HPから商品の
ご購入も出来ます!!



**ペットの健康と幸せ支え、人と地球に、やすらぎと潤いを提供すること。
これからも変わらない現代製薬の使命です。**

心の癒しや潤いを求める社会の変化の中で、ペットの存在は大きく変化してきました。今、ペットは、大切な伴侶や家族を意味するコンパニオン・アニマルとして捉えられています。ペットの暮らしをトータルに支えながら、人と社会に心の豊かさを発信していくこと。この理念を実現するために私たち現代製薬は、昭和32年創立されました。以来、私たちは医薬品から化粧品、食品まで様々な製品を提供し、そのフィールドをさらに多彩に広げ、深めつつあります。

高齢化や少子化が進む中でペットと人との関係は、さらに密接になっていくと考えられます。また、地球環境の悪化が深刻に進む今、ペットの存在は尊い生命と共存の素晴らしさを子どもたちに教えてくれることでしょう。その意味で私たちが果たすべき役割はますます重要になってきています。だからこそ現代製薬はその責任の重さを自覚しながら、さらに優れた品質の製品をお届けすることで業界をリードしていく決意です。今も、これからもペットの健康と幸せを支え、人々と地球にやすらぎと潤いを提供すること。それが創業以来変わらない、私たち現代製薬の使命です。

現代製薬株式会社

本社所在地　〒190-1222 東京都西多摩郡瑞穂町箱根ヶ崎東松原8-4　TEL：042-556-1971　FAX：042-557-2516
大阪営業所　〒567-0821 大阪府茨木市末広町2-24 末広13番館203号　TEL：072-633-3223　FAX：072-633-3065

CONTENTS

元気があれば、マグロの解体もできる!

祝・デビュー50周年!



MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
表紙写真／丸山剛史
2010 NOVEMBER

MMA & K-1

kamipro Special

PRO-WRESTLING

Presents



日本格闘技界

昨今、危機が叫ばされていた日本格闘技界が再生に向けてなんとか生き残った。9・25『DREAM・16』、10・2『K―1 WORLD GP 2010 FINAL16』、10・3『K―1 WORLD MAX 2010 FINAL16』。

この3大会は主催するFEGが中国の投資銀行PUJIキャピタルとの提携という再建策を発表してから初めて開催する3大ブランドの大会。

言うまでもなく、FEG再生だけにとどまらず、日本格闘技界全体が再生に向けて動きだせるかどうかの試金石ともなる重要な大会だ。

DREAM、K―1 WGPは数カ月ぶりのゴールデンタイム地上波放送。この結果が今後の放送に直接関わってくることは言うまでもない。

結果、DREAMは急きょ参戦となった石井慧効果もあり、瞬間最高視聴率18・1パーセント（平均11・9パーセント）を記録。K―1 WGPは現時点（10月3日）ではまだ視聴率は出てないが、大会内容、中継ともにファンに好評を博し、USTREAMでのインターネットストリーミング中継という新たな試みで行なわれたK―1 MAXも多くのファンが視聴した。

ジャパニーズMMAが〝メジャー〟位置を死守するには、やはり地上波テレビ放映を中心とする世間へのアピールが不可欠。そういう意味で、今日の結果は年末に向けて日本格闘技界がなんとか生き残ったかたちだ。

そして、この生き残った日本格闘技界が再生に向かうために、石井慧という存在が〝生き残った〟ことはじつに大きい。

今回のDREAMの視聴率でもわかるとおり、世間に格闘技をアピールするうえ



再生を懸ける大晦日に向け

生き残った日

で、石井のような一般的な知名度がある選手は大きな武器となる。

ミノワマン戦は試合内容こそ、まだまだファンの期待に応えうるものではなかったが、ここで石井が確実に勝利し〝生き残った〟事実は年末に向けて大きな意味を持ってくるだろう。

世間に向かう石井とは逆に、DREAMの本流を考えると、青木真也がマーカス・アウレリオを完封したことも、今後につながる勝利だった。7月の川尻達也戦に続き、難敵アウレリオ戦をクリアしたことで、いよいよギルバート・メレンデスとの世紀の再戦も見えてきた。

同様にフェザー級宿命のライバル同士である小見川道大、高谷裕之が揃って完勝したのも、次につながる意味のある勝利だろう。

そして、もう一人生き残った今後のキーパーソンは北岡悟だ。

北岡は10・3パンクラス・ディファ有明大会で、ケージフォースライト級王者・弘中邦佳から見事一本勝ちし、試合後、パンクラスからの〝卒業〟を宣言。

次の舞台は明言しなかったが、「大晦日参戦」を口にした。〝ミスター戦極〟が動いたことで、また新たな展開が待っていることだろう。

日本格闘技界のまだまだ危機を脱したわけではない。しかし、今回〝生き残った〟ことで再生へチャレンジする権利だけはつかんだ。

その舞台は、格闘技が世間に最もアピールできる大晦日。

今年の『Dynamite!!』は単なる年間最大の格闘技イベントではない。日本格闘技界が来年以降も生き残るための大一番となる！

ンクル大会2連戦
から裸一貫で出直し!!
ど頑張りました!



「（観客が少ないことには）残念です。充分なプロモーションができず迷惑をかけてしまいました。海外から資金を集めてK－1を立て直し、来年は大々的なプロモーションを行ないたいと思います」（谷川貞治K－1イベントプロデューサー）

10月3日にK－1WGP、翌日の4日にK－1MAXの大会が韓国ソウル市内のオリンピック第一体育館で行なわれた。それぞれのグランプリの勝者は決勝ラウンドに駒を進めたが、谷川氏が初日の大会総括で語ったようにイベントそのものはどうにか開催へとこぎ着けた印象が強かったのだ。

初日の客入りは6割弱、二日目は4割程度といったところ……。例年のようにチェ・ホンマンなど有名韓国人ファイターの出場がなかったことの影響もあるだろうが、なにより今回の2連戦自体が急きょ決定したことも大きな理由になったと言える。

なぜ開催がなかなか決まらなかったのか。さかのぼること7月16日、FEGは中国の投資銀行PUJIとの提携を発表した。PUJIの後押しを受けて、FEGが主催するK－1とDREAMの世界進出が図られることになったが、この提携のもう一つの狙いは経営の立て直しもあった。

ここ最近の本誌で詳しく解説しているこのPUJI問題。近年FEGの経営状態は思わしくなく、ファイトマネー未払いの話を公然と選手が口にしていたり、DREAMのスケジュールは発表されていたものの、K－1WGPもMAXも年内の日程が選手に伝えられることはなかった。

10.2&3韓国ソウ
渦中のK-1、韓国から
恥ずかしいけど



プロデューサーの谷川氏がPUJIとの交渉にかかりっきりでK-1のハンドリングがうまくできていなかったのだ（PUJIとの交渉が不発に終わっていたらFEGは完全アウトだったという声もあり、その選択は致し方ないことではある）。

金銭面の問題、日程未定——。以上の理由から〝K-1消滅説〟を唱える関係者がいたほど、K-1は追い詰められていた。「谷川さんじゃなきゃK-1は終わっている」——ある関係者は奔走する谷川氏をこう評した。谷川氏の口癖は「ピンチはチャンス」。ボロボロになりながら、恥をかきながら歩むことをやめないK-1。

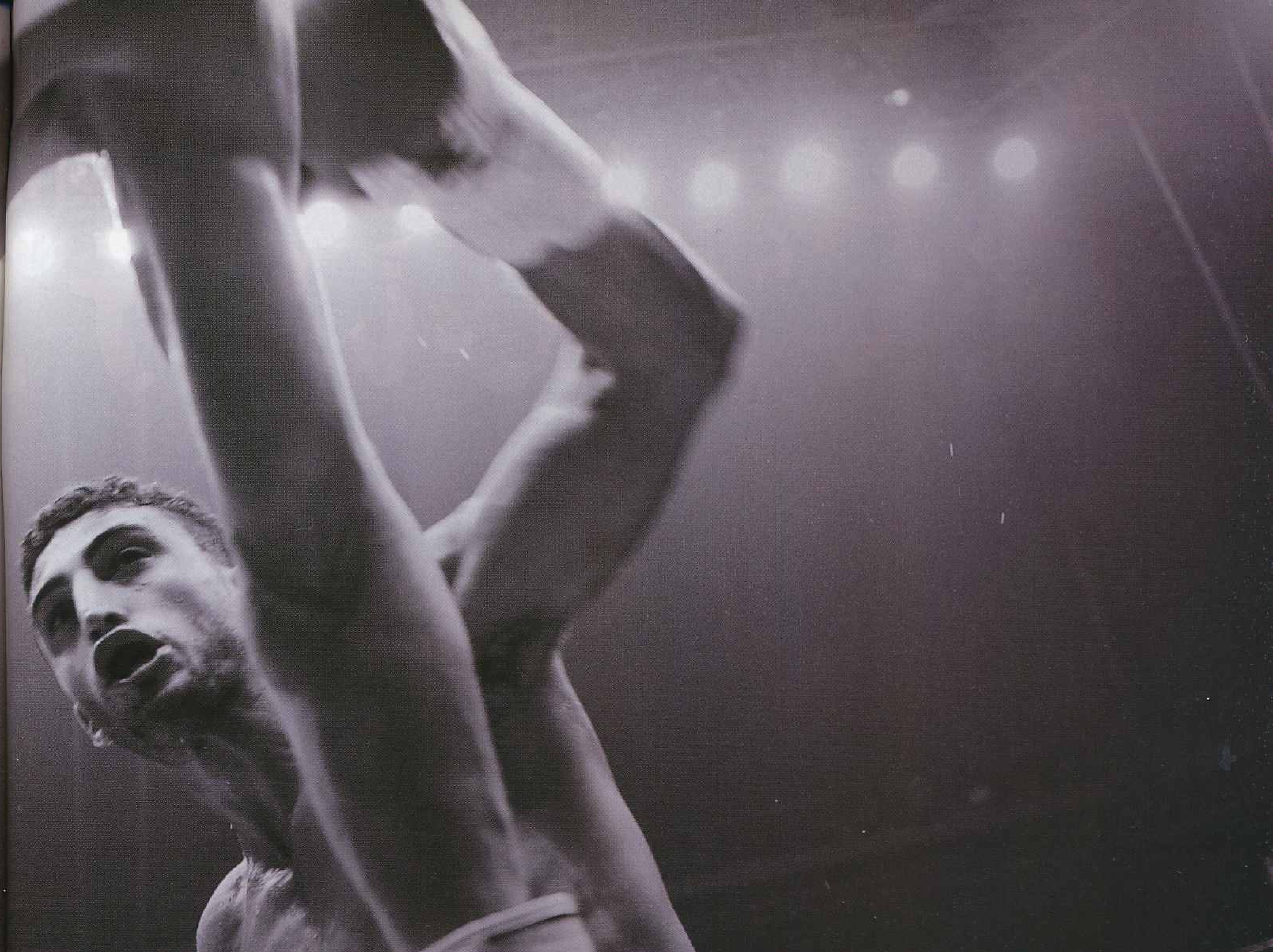
そういった緊迫したシチュエーションのなか、K-1は異国の地から裸一貫で出直したのである。その姿はまだまだ完全体と呼べるものではなかったが、話題の女子格ファイター中井りん調で言うと〝恥ずかしいけど頑張りました！〟と言ったところなのだろう。

そして一度傾きかけたものを立て直す作業はまだ途中であり、この苦しさは年内にそれぞれ決勝ラウンドを控えるK-1MAXやK-1WGPにも続くことだろう。

しかし、メジャーがメジャーたらんとする姿は日本の格闘技界の残された希望、光である。

苦しい、厳しい。つらい。でもやるんだよ！　PUJIとの提携効果がまだ目には見えてこないが、少なくともK-1は来年へと向けて、まだまだ恥ずかしいけど、一歩足を踏み出す姿があったのだ——。

（ジャン斉藤）



10月3日、インターネットによるライブストリーミング放送「USTREAM」で、ついに「K—1 WORLD MAX 2010 IN SEOUL」が放送された。

これはいわゆるプロレス語で言う「時は来た！」というヤツであろうか。放送時間も日曜の午後3時ということや、今大会のテレビ中継がないこともあり観た人も多かっただろう。そしてこれが初めてのネット生中継による格闘技観戦だった人も多いと思うが、自分がツイッター上で見るかぎり「会場にいるみたいだ」「入場から見られるのが最高」など非常に好感触だった。前日にも同じK—1の韓国大会が日本でもテレビ放送されていたので、よりネットとテレビの違いも感じやすかったのではないか。

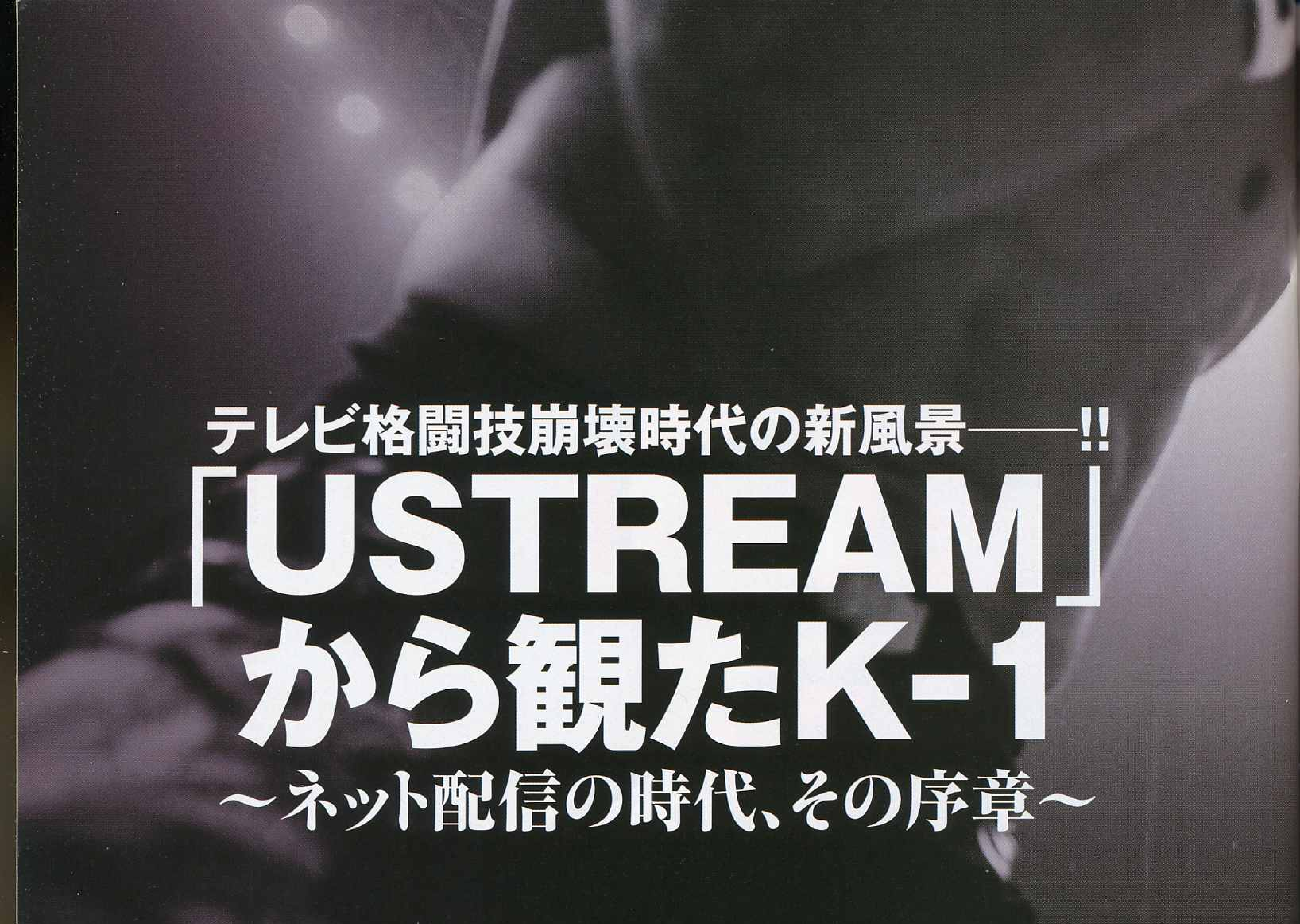
そんなネットでの格闘技観戦による一体感が日本でも起きたのが今年、4・17米国ストライクフォースでの青木真也 vs ギルバート・メレンデス戦がニコニコ生放送で中継されたとき。「キーボードを破壊するのでは？」という勢いで打ち込まれた視聴者のコメントが、ネットという媒体や国境をこえてあきらかに『ドラゴンボール』でいう青木に対する「元気玉」となったのが最初だったと思う。

それから約半年、ネットによるライブ中継はますます勢いを加速しながら我々の生活の中でも身近になってきた。最近だと記憶に新しいのが民主党の代表選中継だろう。今回のK—1と同じく「一歩踏み出した」天下のTBSが手がけたこのUSTREAM中継は同時接続で9万人超え！（強引にたとえれば東京ドーム2個分）、総視聴者数では43万人という数字を記録。アメリカにおいては今年、ネットライブ中継の視聴時間は前年の6倍以上というデータもある。こういう数字を見るたびに何か「風」が起きているのではないかと感じる。

一方のテレビでは最近だと日本でも「月9」やNHKの大河ドラマなど、これまで数字が獲れていた番組でさえも視聴率的にはあまり良いニュースは入ってこない。これはあくまでも推測なのだが、近年の大容量ハードディスクレコーダーの普及のせいでテレビの視聴時間数は変わっていないものの、実際に観るタイミングがずれていることも一つの原因ではないだろうか。好きな時間に観られることで当然その感想を言うタイミングもずれる。要は感動に対するアウトプットの「熱」が分散するのだ。そんな時代に「ライブ」を売りにするUSTREAM等のネット生中継が伸びるのは必然なのかもしれない。

さて、ここで一度USTREAMについておさらいしておこう。そもそもUSTREAMとは2007年に設立された、ウェブ・カメラやPCなど少しの機材さえあれば誰でもネット配信が行なえるサイトである。『YouTube』を代表する既存のサイトと違うのは大きく2点。一つめは「録画」が基本の『YouTube』に対しUSTREAMは「ライブ」が中心ということ（番組によっては録画したものも視聴可能だが、コメント投稿が出来ない）。

もう一つはソーシャルストリーミング、すなわちコメント投稿に人気の「ツイッター」を採用したことにより他社より一歩抜きん出た存在となっている。「ツイッター」の即効性は、たとえば普通にテレビを観ていておもしろい場面があったとする。それを誰かに伝えたい、共有したい。どうやって？　電話で？　メールで？　さて、その手段でテレビのそのシーンが終わる前に伝わるだろうか？　おそらく多くの場



テレビ格闘技崩壊時代の新風景——!!

「USTREAM」から観たK-1

～ネット配信の時代、その序章～

面で「ノー」だろう。

しかし、ツイッターであれば、それらよりも比較的瞬時にある人の発言を広める「リツイート」という機能があるので、ブログ時代には考えられなかったスピーディな情報伝達が行なわれるのだ。

そして現在、マット界でUSTREAMを取り入れた好事例が毎回視聴者数500人前後を記録している「19時女子プロレス」であろう。USTREAM配信専門で一切、観客を入れない「巌流島状態」ながら、代表の帯広さやかを軸にアイスリボンの選手が活躍する様子はあきらかにプロレス界へ一石を投じているのが現状。

さらに興味深いのは最近プロレスラーが試合以外で「人間性」を前面に出してUSTREAMで配信している点。19時女子を企画したさくらえみの「さくらえみの部屋」、パンクラスMISSIONなのにDDT参戦など幅広い活躍をしている佐藤光留の「佐藤光留の愛LOVE寂聴クリニック」、ユニオン・プロレスのチェリーも番組を始めるということでインディープロレス界は一歩先を行っている。

しかし、ここで「19時女子プロレス」でさえ解決できていない問題がある。それは「スポンサー」などのビジネスモデル化だ。現時点ではいくら視聴者数が伸びていると言われるUSTREAMでもまだまだ広告界では未知の世界であり、今後も試行錯誤する必要はあるだろう。ただ、現時点の一例としてじつはすでにビジネス・モデル化に歩み始めているプロレス団体もある。それがスペル・デルフィン率いる「沖縄プロレス」だ。まだ認知度は低いかもしれないが、同団体の選手が参加・企画しているラジオ番組では沖縄向けのラジオ放送と同時にUSTREAMでもネット配信を行なっており、そこでスポンサーを募ったところ複数件の申し込みがあったという希望の持てる話もある。

この10月からはあのJ—WAVEでさえUSTREAMに独自のチャンネルをスタートさせており、今後も同様なオフィシャルチャンネル化は進むと思われる。

では、USTREAMの何がそんなに魅力的なのだろう? それは先に書いた「ライブ感」と「(ツイッターによる)双方向性」に加え、テレビやラジオのように「2時間枠」などの時間的制限がない部分。

そこでは旧社会のテレビ制作者側が大胆にカットしながらもファンが観たがっている「入場シーン」も今回のK—1のように放送されるのだ。そして、じつはその「テレビ側がカットする場面」こそがリアルな選手の描写であり、その場面にこそファンが感情移入できる部分でもある。

よく番組の「NGシーン」で逆に俳優に人間味を感じるように。当然それはテレビ制作者側の人間も充分にわかっていることであり、そういった部分も映すべきだが……時間や視聴率の制限に縛られているのが現状であり非常に難しい状況は今後も続くだろう。

ただ、アメリカではこんな事例もある。2009年に米ABC放送が主催するアメリカン・ミュージックアワードの授賞式前のイベントをネットで生放送したところ、実際のテレビ視聴者数は200万人増えたという。そのように、これからの時代は「ネット」か「テレビ」かという二元論ではなく、いかにネットを活かしてテレビにつなげるかという「共存」がテーマだろう。その一歩が今回のK—1によるネット放送だった。と、K—1のUSTREAM放送を観た人であれば充分に感じたはずである。

buggy●音楽・プロレス日記→http://blog.livedoor.jp/buggy/　ツイッターアカウント→buggymasa



自分、頑張ってるじゃないですか。K－1も小川戦も話題を作りたいんです

ミノワマンを完封し、MMA日本初勝利
次はホントにK−1か、IGFで小川直也戦か？

理解不能な未完の怪物

“放言”の中に“本音”は見えるか？







石井慧

ミノワマンをテイクダウンからグラウンドコントロールで完封し、MMA日本初勝利を挙げた石井慧。
しかし、相手が階級下であったこともあり、一本勝ちできなかったことで、ファンの評価は以前厳しいままでもある。
さらに試合後は、「K-1挑戦」「IGFで小川直也戦」などの発言が飛び出し、格闘技ファンとの距離がますます離れた感すらある。
MMAに対する真摯な姿勢と、それに相反する放言。なかなか理解し難い未完の怪物の本音を探ってみた。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／丸山剛史

日本で2連敗したらもう終わりだと思って試合前はヒザが笑ってしょうがなかった

石井慧

――石井選手、おひさしぶりです。『kamipro』でインタビューするのは、去年の12月以来ですから、じつに10カ月ぶりですね。

石井　そうですね。自分はそのあいだ海外で修行していて、向こうにいるとき『GONKAKU』の取材は受けたんですけど、ひどい目に遭いました（苦笑）。

――どうしたんですか？

石井　なんか白髪の記者の方の取材を受けたんですけど、インタビューなのに自分の練習内容についてひどいこと書かれたんですよ。べつに自分の練習に密着してるわけじゃなくてちょっと見ただけなのに、それってひどくないですか？

――いや、僕も石井選手が載ってるのは見たんですけど、ちゃんと記事を読んでなかったんで、判断がつきませんが（笑）。

石井　ちゃんと読んでくださいよ。だから『kamipro』はおもしろおかしくやってください。

――まあ、僕は大層な技術論は書けないので、おもしろおかしくインタビューさせていただきます（笑）。で、まずは日本初勝利おめでとうございます。気持ち的にいかがですか？

石井　そんなにはしゃいでないし、淡々とすごしてます。

――はしゃいでないってことは、やはり勝ったものの納得いかない部分が多かったわけですか？

石井　いや、まだ途中の段階なんで。喜んでもいられないし、まだ納得もしてないし、これからもあるんで。

――では、初勝利の喜びと、一本取れなかった悔しさでは、どちらが気持ち的に大きかったですか？

石井　そのどっちかというか、凄いプレッシャーから解放されたことが一番ですね。

――やっぱりプレッシャーありましたか。

石井　めちゃくちゃありました。これはセコンドの人に聞いてもらったらわかりますけど、試合前に緊張でヒザが笑ってしょうがなかったんですよ。何度アップしてもヒザが笑ってる状態。



09年大晦日のMMAデビュー戦で、老かいな吉田秀彦を切り崩せず、判定負けを喫した石井。自信を持って挑んだ試合だっただけに、敗れたショックは周りが感じる以上だったようだ。

――柔道時代も含めて、いままでそういうことはあったんですか？

石井　ないです、ないです。胃が痛くなったりはありますけど、ヒザが笑うことはないですね。かなりアップしたんですよ。疲れるくらいに。でも、ヒザが笑ってるんで、ヤバいな、と。

――では、周りが思ってる以上に、今回の試合は危機感を持って挑んでいたわけですか。

石井　試合まで時間もなかったし、日本でデビュー2連敗したら終わりだろって思ってたんで。そしたら中村（和裕）選手にも「二回連続で負けたら終わりだぞ」とか言われて。わかってるのに、クギを刺されたことで、ヒザが笑い始めましたね。

――カズ選手の一言がよけいでしたか（笑）。

石井　先輩からのありがたいアドバイスなんですけど、プレッシャーがさらに増大しました（笑）。

――大晦日のデビュー戦の直後は、ほとんどメディアには出ませんでしたけど、やはり相当落ち込みましたか？

石井　えらい落ち込みました。もう正月から塞ぎ込んで、後輩が気を使ってお雑煮を作りに来てくれたんですけど、食う気にもならなかったから「菓子パン買えるだけ買ってきてくれ」ってお金を渡して。ひたすらジャムパンだけを食いながら、ひきこもってました。

――まったく明けましておめでたくない正月だった、と（笑）。

石井　「ちゃんと、大晦日の試合前は年越しそばとか食って、ゲンを担いだのにロクなことないじゃないか」って、正月行事がすべてイヤになって、餅とか食う気にならなかったですね。で、ちょうどそのときケータイが壊れるアクシデントにも見舞われまして。

――踏んだり蹴ったりで（笑）。

石井　なぜかメールで日本語が打てなくて、ローマ字だけしか打てなくなったんですよ。だから、マネージャーとか、同級生から来たメールにローマ字で打って返したら「負けたショックが大きすぎて、石井は頭がおかしくなった」とか思われたみたいで（笑）。

――ショックすぎて日本語すら忘れたんじゃないか、と（笑）。

石井　ホントそんな状態でしたよ。

――「こんなはずじゃなかった」っていうか、自分に腹が立った感じですか？

石井　いや、これからどうしようと思って。心情的にはこのあいだ捕まった〝T〟みたいな感じですよ。「もうダメだ。もう終わった」みたいな。正月明けたときの自分の顔も捕まったときのTみたいに、ゲッソリしてたと思うし（笑）。

――世間に顔向けできないくらい、ショックを受けてたわけですね。そこから立ち直り始めたのは、海外で1勝したくらいですか？

石井　その前に江種（辰明）氏に励ましてもらったんですよ。

――柔道の江種先輩ですね。

石井　「おまえは自分のやりたいことをやってるんだから、時間がかかってもいいじゃないか」「向こうは総合格闘技を8年間やってて、おまえはまだ1年であそこまでやれたんだから、もっと練習すれば大丈夫だ」って言っていただいて。あと、江種先輩は小見川（道大）先輩とも仲がいいんですよ。それで小見川先輩も最初は凄く苦労して、何年もかけていまフェザー級でトップの選手になったっていう話を聞いて、それでちょっと立ち直りましたね。

――では、そこから日本で第2戦を行なうまで9カ月かかっちゃいましたけど、石井選手的にはもっと早くやりたい気持ちはあったんですよね？

石井　ありましたけども、海外でもいい経験ができたんで、結果的にはよかったで



[10.9.25 DREAM.16]
愛知・日本ガイシホール
○石井慧 vs ミノワマン×
(3R終了 判定 3-0)

大会３日前に急きょ決まった一戦。『炎のファイター』のテーマ曲に乗って入場した石井は、序盤から積極的に前に出て、胴タックルからテイクダウンし、グラウンドで優位に進める。しかし、ミノワマンも極めは許さず、石井のテイクダウンからのグラウンドコントロールという流れが何度も繰り返されたまま試合終了。フルマークの判定で、石井はMMA日本初勝利を挙げた。

す。

——試合の3日前に記者会見がありましたけども、石井選手が凄くうれしそうに見えたんですよ。

石井 それはミノワマン選手が好きでしたし、ミノワマン選手の入場シーンを自分は何回も見てたんで、そんな選手とやれるっていうのがうれしかったんですよ。でも、今回のミノワマンはあんまり入場でポーズ決めませんでしたよね？

——そうですね。けっこうアッサリした感じで、そのぶん石井慧が不真面目な入場でしたけど（笑）。

石井 え、不真面目な入場でした？

——「なんで『炎のファイター』なんだよ！」って、みんなツッコミつつ、頭に「？」マークがついてましたよ。

石井 でも、あれは試合前日に猪木さんにお会いして、闘魂注入してもらって、ちゃんと使用許可を得てるんですよ。

——でも、なんで猪木さんのテーマ曲を使おうと思ったんですか？

石井 やっぱり、いまでも格闘技界で一番有名なのは猪木さんだと思うし、それにあやかりたいな、と。戸越銀座みたいなもんですよ。銀座にあやかりたいって。

——でも、多くの猪木ファンは「ナメんな」って感じになってたみたいですよ。

石井 マジッすか？ なんでですか？

——神聖な『猪木ボンバイエ』を軽々しく使うな、と。そういうふうに思われるとは気づきませんでしたか？

石井 気づきませんでした……（しょんぼりしながら）。自分としては猪木さんのデビュー50周年なのに、自分の試合があるからIGFの会場には行けないので、「すいません」みたいなノリで使ったんですけど……。

——敬意を表するためにテーマ曲を使った、と。残念ながらまったく伝わってませんでしたね（笑）。

石井 自分はなかなか理解されないんですよね。

——だから、ファンは石井慧がいったい何を考えているのかわからない部分があるんですよ。あとは、強いんだけど一本取ってないことのもどかしさだったり。

石井 それは僕もね、一本取りたいんですよ！（笑）。

——そうでしょうね（笑）。でも、何度もグラウンドでいいポジションを取りながら、なかなか関節技を仕掛けにいかなかったのは、やはり慎重になりすぎた部分があったんですか？

石井 いや、ミノワマンが逃げるのがうまかったんですよ。自分も取りにはいってたんですけど、ちゃんと取れる体勢にならなかった。思い返すと、マウントから腕十字に移行してたら取れてたかな、とは思うんですけど、あの時点では自分も必死だったんで。

——でも、あれだけサイド、マウント、バック、縦四方とポジションを奪っていたので、観ているほうはもどかしく感じちゃうんですよ。へんな話、「これ道着があったらすぐ極められたな」とか思ったりしませ

猪木さんのテーマ曲を使ったことでファンが怒ってる？ マジですか？



スタンドでの打撃が課題といわれる石井。ミノワマン戦では相手のパンチこそもらわなかったものの、打撃で攻めるシーンもほとんど見られなかった。はたしてK-1挑戦は本当にありえるのか？

格闘技界はテレビがつかないとマズい。自分が出ることで視聴率を獲ってほしい

んでした？

石井　ああ、道着があったらすぐに極められたかもしれないですけど、逆に相手につかまれてたかもしれないし。自分は柔道着に頼って総合格闘技をやるつもりはないんで、関係ないですね。

——だから、石井選手はいままで柔道から転向した選手が、あたりまえのように享受していた道着というアドバンテージをあえて放棄して勝負している。そこがイマイチ伝わってないのが残念ですけどね。

石井　でも、自分が決めたことなんで。今回の試合も周りからは「玄人受けする試合だね」って言われたんですよ。自分はミノワマンのパンチを一発ももらってないし、一切のダメージを受けてないんですよ。だから小見川先輩にも「デビューして1年経たずにああいう闘いができるのは凄いことだよ。今日の試合よかった」って言ってもらえましたし、とにかく試合をこなして経験を積みたいんで、そのためにはケガをしないことがテーマだったんで、それは達成できたかなって思います。

——今回一番重要視していた「ケガをせずに勝つ」ということは、達成できた、と。

石井　リョート（・マチダ）さんのお父さんに言われたんですよ。「リョートは判定勝ちだけど、リョートの顔を見てください。全然、傷がついてないでしょう。それが強さなんです」って。自分もリョートさんみたいに強くなりたいんで、それが少しはできたかなって。

——そういった石井選手の総合格闘技に対する真摯な姿勢っていうのがありながら、一方では「次はK—1に出たい」とか「IGFで小川直也戦」という発言があるので、ファンは困惑してるんですよ。

石井　それはね、わざと困惑させてるんです。

——なんのために（笑）。

石井　自分をコーディネートするにあたって、「こいつは何を考えてるのかわからない」って思う人って、やっぱり気になって見ると思うんですよ。そこを狙ってるんです。

——でも、いまは見てもやっぱりわからない状態だと思いますけどね（笑）。

石井　要するにですね、テーマは「挑戦」なんです。石井慧第2章「挑戦の巻」なんです。

——それ、ミノワマンのパクリですよね。

石井　ミノワマンから伝承しました。

——で、K—1出場って本気なんですか？

石井　マジです。「本気」と書いて「マジ」です。ピーター・アーツとやりたい。それもギリギリまで減量したバージョンの。

——でも、元K—1王者に立ち技で挑むって、総合の選手が石井選手に柔道で挑むようなもんじゃないですか。

石井　そうか……、それはヤバいね。

——いま気づいたんですか（笑）。

石井　でも、いまのアーツってそんなに強いですかね？　ちょっと前に日本人にボコられてませんでした？

——京太郎選手にKO負けしましたけど、京太郎選手も日本ヘビー級のトップです

石井慧

桜庭選手との試合はぜひお願いしたい。でも、一つだけ条件があるんですよ

からね。

石井　でも、自分も「左フックがえげつない」って言われますからね。自分は当たれば倒れる左フックを持ってるんです。あんまり言うと、ますます当たらなくなるからやめときますけど（笑）。

――じゃあ、12月3日のIGF主催『猪木祭り』で、小川直也選手と闘いたいというのは、どういったことからですか？

石井　これも挑戦です。何事にも挑戦ですから。昨日の『行列のできる法律相談所』観ました？

――いや、観てないんですよ。

石井　自分、トライアスロンに挑戦することになりましたから。

――えっ、『行列』のトライアスロンって、超過酷なヤツですよね？

石井　だから挑戦。自分は試合を観てもらったらわかるとおり、瞬発力はないですけど、持久力はあるんで。

――そういう挑戦もいいですけど、格闘技ファンは石井選手のMMAの試合をちゃんと観たいと思ってるはずですよ。

石井　もちろん、自分も試合はやりたいですよ。でも、焦ってもしょうがないじゃないですか。いま格闘技イベントのチケットがなかなか売れないなかで、やっぱりテレビがつかないとマズいんですよ。だからK－1でもなんでもテレビがあるところに自分は出るし、自分が出ることでK－1も視聴率を獲ってくれればいいし。

――では、地上波テレビがいまのところない、IGFの小川直也戦はなぜやろうと思ったんですか？

石井　話題になると思ったから。

――プロレスをやるんですか？

石井　やると見せかけて、セメントを仕掛けます。

――そんな騙し討ちを（笑）。

石井　それで「オイオイオイオイ、もう終わりかよ～！　小川直也ファンの皆さん、目を覚ましてください！」って言います。

――パクリですね（笑）。ちなみに、いまお二人の関係はどうなってるんですか？

石井　師弟関係。

――わけがわからない（笑）。そうやって話題作りをするのもいいですけど、ちょっともったいない気もするんですよ。

石井　なんでですか？

――本当は格闘技に対してもの凄く真摯に取り組んでいるのに、K－1とか小川直也っていう発言だけで、不真面目に取られてしまうのが。

石井　だから、自分は損してるんです。

――ようやく気づきましたか（笑）。

石井　発言と行動は一致してないですけど、毎日頑張ってるじゃないですか。

――いやあ、頑張ってますよ。総合転向以来、もの凄く練習しているのを知ってるからこそ、誤解されてるのがもったいないな、と。ホントは競技に対してマジメじゃないですか。



いしい・さとし■1986年12月19日、大阪府出身。小学5年で柔道を始め、06年に史上最年少19歳4カ月で全日本柔道選手権優勝。08年に北京オリンピック柔道男子100kg超級で金メダル獲得。08年11月にはプロ格闘家転向を宣言し、09年大晦日の吉田秀彦戦で黒星デビュー。現在はMMA2勝1敗1無効試合。181cm、107kg。

石井　マジメでしょ？　自分、試合が終わってからもお酒は飲んでないし、もう今日から練習再開ですから。日本のマンションを引き払って、アメリカに住んでみっちり練習して、柔道のアメリカ代表を目指しますから。

――そういう発言が誤解を招くんですよ！（笑）。

石井　でも、オレ柔道やったらけっこう強いよ？

――知ってますよ（笑）。アメリカではどこで練習するんですか？

石井　サンタモニカの猪木道場。

――あれって、まだあるんですか？

石井　跡形もない。

――じゃあ、ダメでしょ！（笑）。マジメに言うと、ブラックハウスのジムに行くんでしたっけ？

石井　ブラックハウスだけじゃなくて、いろんなところを回ります。ロサンゼルスは、足関の練習に最適のジムもあるし。

――でも、いま日本でも吉田道場を中心にいい練習環境があるわけですよね？

石井　でも、アメリカのほうが練習しやすい。広いし、のびのびできるし、自由だし。それに将来役者志望の自分にとって、ハリウッドの近くに住んで格闘家をやるかたわら、俳優デビューを虎視眈々と狙ってますから。

――そういう発言が不真面目だと思われるんですよ！（笑）。

石井　いや、マジメです。マジメに役者志望です。北野武さんに番組でお会いしたときも「自分を映画に使ってください」って直訴しましたから。

――そんな大胆な行動を（笑）。それはともかく、大晦日の『Dynamite!!』に出場したい気持ちはあるんですか？

石井　そこまで先のことはわからないね。海外からオファーも来てるし。いろんなことに挑戦しながら、日々成長していきますから。たとえば、僕の次の試合って誰との試合が観たいですか？

――藤田和之選手とかはやっぱり観たいですけど、コンディションがどうなのかわからないんで、桜庭和志選手との試合が観たいですけどね。

石井　それは自分もぜひお願いします。ただ、一つだけ条件があるんですよ。

――なんですか？

石井　ミノワマンよりさらに足関がうまそうなんで、足関なしのルールでお願いします。

――そんなルールはないですよ！（笑）。そういうことを言うから誤解される。

石井　まあ、いつかわかる日が来ますよ。今回もミノワマンはMMA48戦目、自分は5戦目ですから。その意味が、のちのちわかるでしょう！

【10年9月27日／都内・某ホテルにて収録】

生初の一本負け!

いのだ!!

(天才バカボンのパパ調)



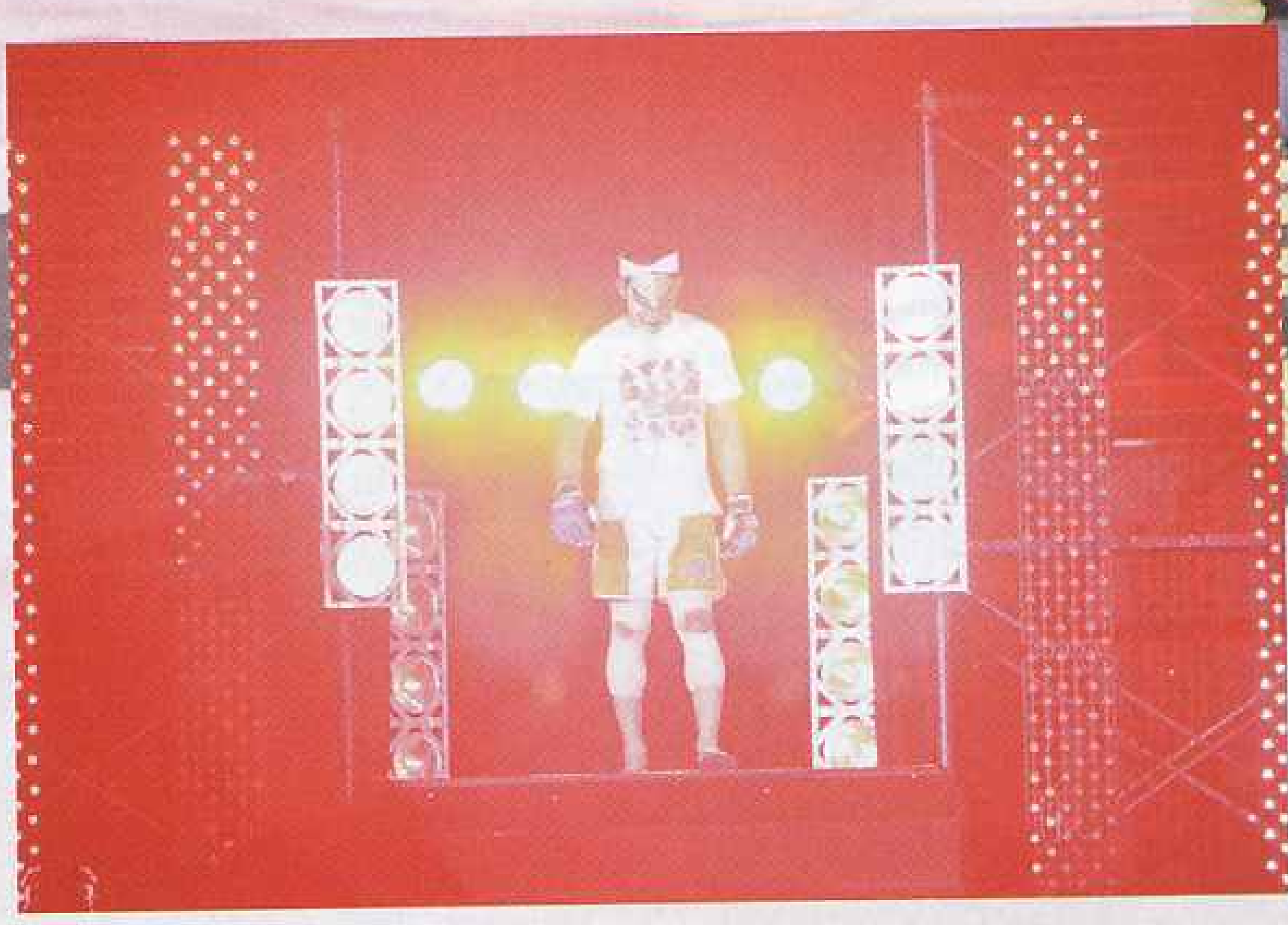





桜庭和志、人生初

これでい









「桜庭さんの精神は世界一の桜庭ファンの俺が受け継ぐよ！」

JASON MAYHEM MILLER

狂乱のサイコスター
ジェイソン・“メイヘム”・ミラー

“ファンタジスタ伝承”マッチとして銘打たれた桜庭和志戦で見事な一本勝ち!
入場パフォーマンスでもしっかり魅せてくれたメイヘムだが、試合後の表情は複雑そのもの。
“世界一の桜庭和志ファン”は何を思い試合に臨み、そしてどう振り返るのか——?

聞き手／井上崇宏　撮影／丸山剛史

——昨日は勝利おめでとうございました。昨夜はどのようにすごされましたか?

メイヘム　それがまったく覚えてないんだよ。試合をしたことすら忘れていて、今朝、ホテルで目を覚ましたら「オー、サクラバと試合をしなきゃ!」という気分になってとてもあせった(笑)。アタマ、イタイ……(日本語で)。

——仲間たちと楽しいお酒を飲んだんですね。

メイヘム　いや、昨夜のことは本当にまったく記憶にない。だけど、起きてしばらくしてからようやく、「あ、俺、試合したんだ!」って気づいたんだ。

——さっそく試合を振り返ってもらいたいんですが、2分9秒という短い試合タイムでした。

メイヘム　俺にとっては凄くいい闘い方ができたと思う。サクラバがどんなふうにパンチを打ってくるか、テイクダウンをしてくるかということがわかっていたので、自分の有利なポジションに引き込むことができたと思う。しかも最近、トレーニングしていた自分の一番得意なポジションで試合をすることができた。じつは(ホナウド・)ジャカレイ戦のあとに、ガードポジションに持ち込んだときには、もっと強いパンチを打つ必要があることに気づいたんだ。ただ、もしサクラバと再戦することがあったなら、また違う闘い方になるだろう。

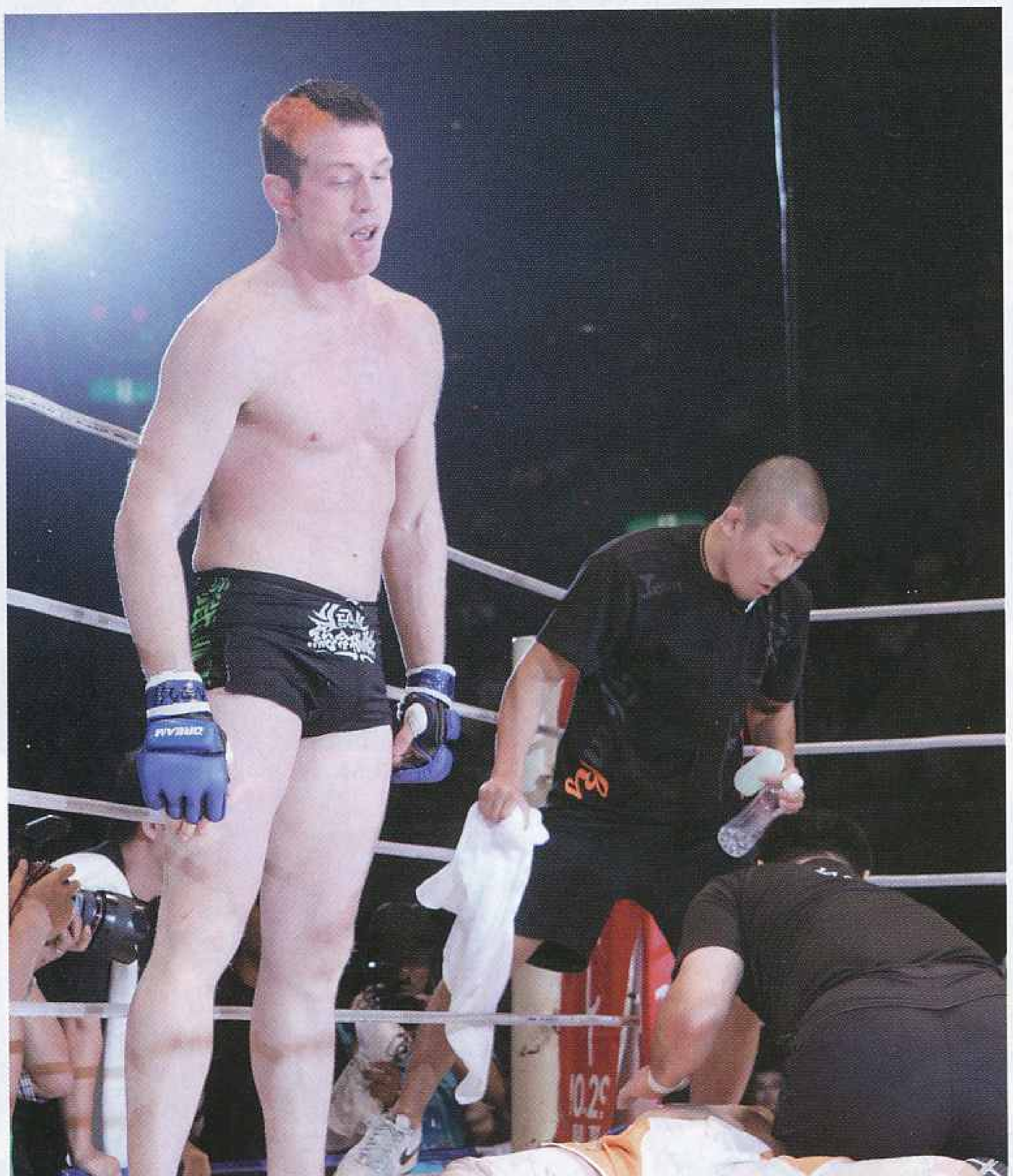
——そのパウンドでのKOが狙えたようにも見えましたが、やはりフィニッシュは一本を取るというふうに心がけていたんですか?

メイヘム　ソウデスネ。俺はこれまでサクラバがタップをしているシーンというものを観たことがなかった。だから、俺がサクラバからタップを奪う最初の男になりたかったんだ。ただ、そうするために、サクラバの顔を殴らなきゃいけないというのは非常に心苦しかった……。

——じゃあ、KOをするためじゃなくて、あくまで桜庭選手から一本を取りにいくプロセスとしてパウンドを打っていたというわけですね。

メイヘム　ハイハイ、ソウデスネ。パンチを打たずにサブミッションを極める方法もあるんだが、それを実行するにはサクラバは危険すぎるファイター。

俺とサクラバは不運なタイミングで出会ったと言える……



[10.9.25 DREAM.16]
愛知・日本ガイシホール
○ジェイソン・"メイヘム"・ミラーvs桜庭和志×
(1R 2分09秒 肩固め)

桜庭、MMA人生初のタップアウト負け！　下からメイヘムの足を取りにいったところを潰され、強烈なパウンドを連打される。そしてパスガードから肩固め……。桜庭はゆっくりとメイヘムの身体をタップしたのであった。

——できれば殴りたくなかったというのは、やはり桜庭選手をリスペクトしているからですか?

メイヘム　ソウデス!　ただ、殴らないとコーチに怒られる(笑)。じつは俺は非常にコーチに従順な男なんだ。

——実際に闘ってみて、現在の桜庭選手の実力はどう感じましたか?

メイヘム　いまでも世界最高の選手であるのは間違いない。ただ、モナリザの絵が時間とともに色褪せていくように、人にもそれぞれのいい時代があって、だんだんとその輝きや鋭さを失なっていくのは事実だろう。俺はまさにこれからその光の輝きのピークを迎えるファイターなので、その時間の噛み合わせ、スタイルの噛み合わせという点では、俺とサクラバは不運なタイミングで出会ったと言えると思う。

——本当に桜庭選手のことが好きなんですね。

メイヘム　ソウデス!　俺は昔、ジョージア州のあるジムで格闘技を始めた。グレイシー柔術の先生に柔術を教わっていたから、当時はグレイシーが最強であり、最高だと思ってた。だがある日、友だちの家で、ヘンゾ・グレイシーとある日本人ファイターの試合を観た。ヘンゾといったら、当時の俺のなかでは最高のグレイシー。ヘンゾは柔術だけでない、"闘うグレイシー"だ。そのヘンゾが相手のバックを取ったとき、一緒に観ていた誰もが「これでヘンゾの勝ちだ!」と思った。俺もそう。だが、その直後ヘンゾの腕が折れた。みんなが沈黙をするなかで、俺は「これは新しいMMAが生まれた瞬間だ!」と叫んだんだ。レスリング、柔術、キックボクシング、それらがミックスされた真のMMAが誕生した瞬間だったんだよ。その日本人がサクラバだったんだ!!(興奮気味に)。

——桜庭vsヘンゾ戦で啓示を受けたわけですね。

メイヘム　イエス。そこから俺の人生はサクラバを追いかけるようになる。練習でもサクラバの動きをとことんマネし始めた。ガードをジャンプでパスしようとしたり、モンゴリアンチョップとか。モン



今回もダンサーを引き連れて大騒ぎしながら入場!! 今回もTBSの地上波中継ではカット!

JASON MAYHEM MILLER

一番のヒーローはもちろん桜庭。二番目はマハトマ・ガンジーだ

ゴリアンチョップは実際に試合でも使うようになったし。

――メイヘム選手のなかで、桜庭選手はフェイバリット・ヒーローですか?

メイヘム オフコース! ソウデスネ。

――ちなみに二番目は?

メイヘム ファイティングで?(しばらく考えて)ウーン、ムズカシイデスネ。

――じゃあ格闘技というカテゴリーを抜きにしたら誰ですか?

メイヘム ヒーローというものを定義するときに難しいのは、最盛期の終わり方にちょっと疑問を感じる人がいることだ。ファイティングを抜きにしても、サクラバが一番のヒーローであることは間違いない。一番はサクラバで決定。二番目は……、マハトマ・ガンジーかな。

――インドのガンジーですか?

メイヘム ソウデス。ガンジーの言葉で、「自分が見たい変化というものに、自分自身がなろう。変化そのものに自分がなろう」というものがある。この言葉には凄くインスピレーションを受けた。

――まさに昨日の桜庭戦ですね。ちなみにメイヘム選手は仏教徒だったりするんですか?

メイヘム チョット。アメリカ製の6フィートある仏像を自宅のプールに置いている。それと自宅の中にも日本製とインド製の仏像を置いているんだ。

――そんなヒーローが自分の肩に手を叩いた瞬間というのは、どんな気分だったんですか?

メイヘム 不思議な感情だ。夢がかなったという瞬間でもあったし、現実のことだと認識できない感じがした。肩固めに入れるチャンスが生まれて、実際に肩固めの体勢に入った。ただ、それがすべて現実で起きていることとは思えなかったんだ。キミョウデス。ストレンジ。それが今朝起きたときに、試合をしたという認識ができなかった理由の一つだと思う。決して酒だけのせいじゃないんだ。夢のなかで起きたような体験だった……。

――桜庭選手がタップアウトした相手が、メイヘム選手でよかったという声も多いみたいです。

メイヘム サクラバをタップアウトさせた男が、ニホンジンだとかアメリカジンだというのはあまり関係がないことだと思っている。これは自分の考えだが、サクラバと俺は同じ精神を持っていて、それはお金を払っているファンのために、最高の試合を観てもらって、最高の時間をすごしてもらいたいという気持ちを常に持っているということだ。決して勝ち負けではなく、最高の瞬間というものを見せたいんだ。だから、たとえサクラバが引退をしたとしても、代わりに俺がそれを引き継ぐし、俺が引退するときには、またこの精神を受け継ぐ選手がかならず現われるはずだ。

――「ファンタジスタ伝承」ですね。

メイヘム ハッキリ言うと、俺は世界中の多くのサクラバファン、その誰よりもサクラバのことが好きだと思っている。そして、誰よりもサクラバ自身になることを願っているのも俺だ。これは言いきれる。

――狂信的なファンが自らの手でタップアウトさせたい気持ちというのは、たとえとしてどうかと思いますが、ジョン・レノンの射殺犯的というか……(笑)。

メイヘム タブン、オナジ!(笑)。俺のサクラバを好きだという感情を、ほかの誰とも分かち合いたくないくらい大好きだ!

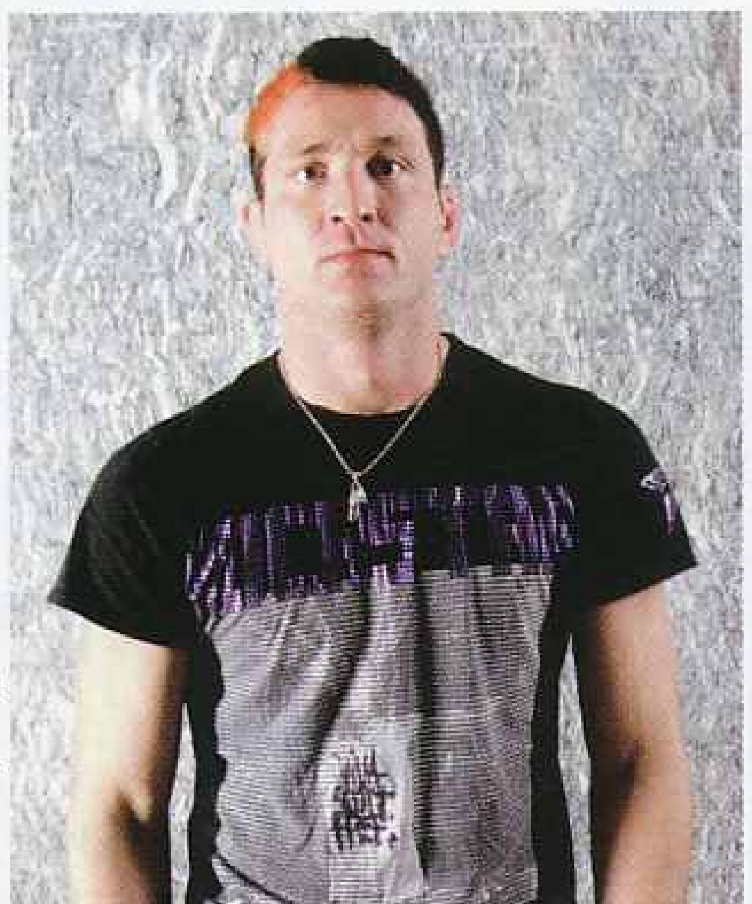
――メイヘム選手の今後の予定を教えてください。

メイヘム まだ予定は何もないし、何の計画を立てていない。ただ、このまま1週間ほど日本に滞在して、チョウナン(長南亮)の試合のサポートをしながらリラックスをして、そのあとアメリカに戻ってトレーニングを再開する。試合が決まっていない時の練習っていうのが一番楽しいんだ。今回の試合に関しても、4週間前という遅いタイミングでのオファーだったんだけど、非常にコンディションが良かったのは、いつも練習をしているからこそだよ。

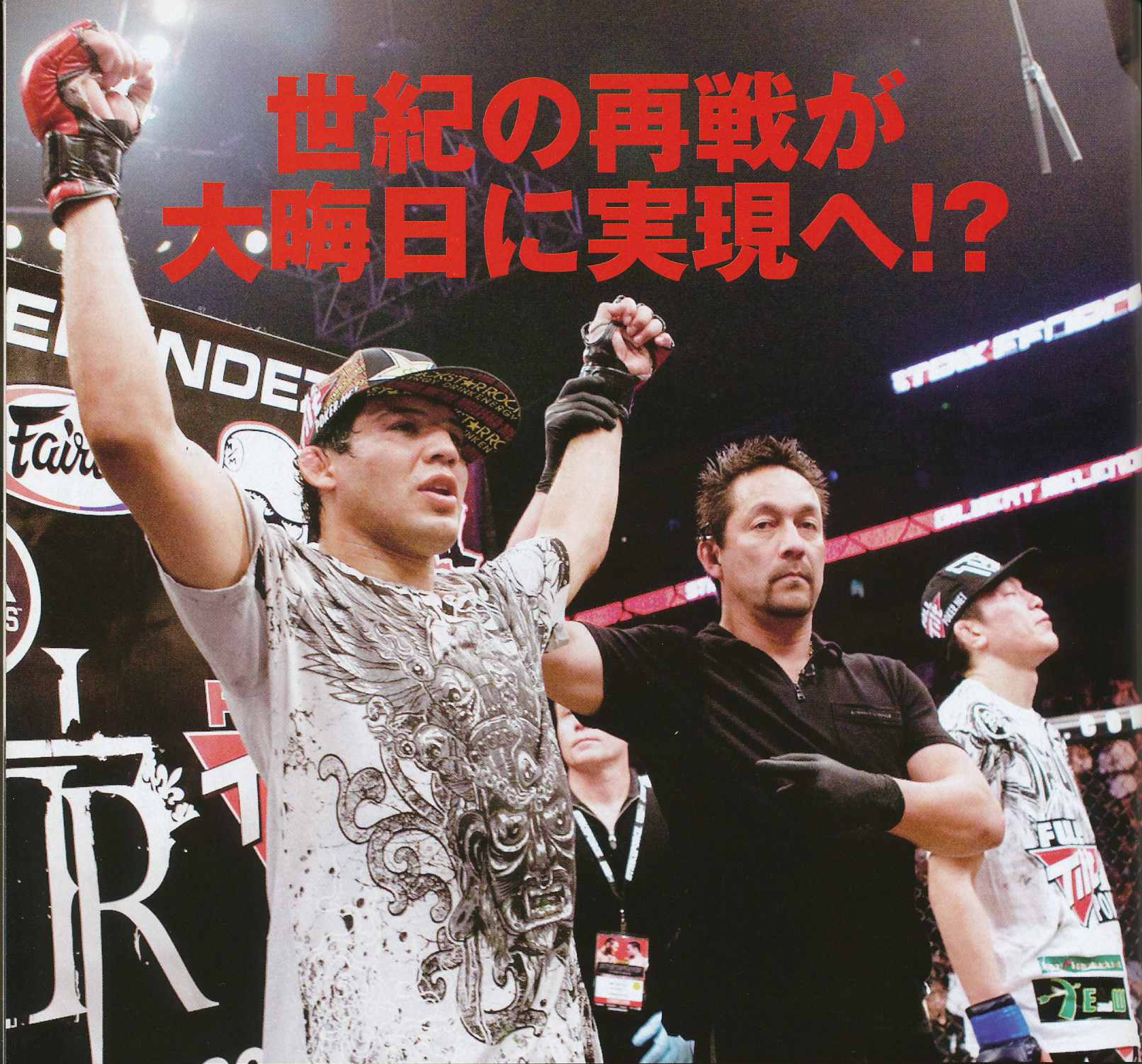
――次戦も楽しみにしてます!

メイヘム ソウデスネ!

【10年9月26日/名古屋市内・中部日本放送本社にて収録】



JASON MILLER■1980年12月24日、米国ネバダ州ラスベガス出身。ハデな入場パフォーマンスとエンターテインメント性を意識したファイトスタイルで人気を博す。ネックネームは「メイヘム」。日本語もけっこうしゃべれる。長南亮とは親友の間柄。185センチ、85キロ。



世紀の再戦が大晦日に実現へ!?

SCOTT COKER



ストライクフォースCEO
スコット・コーカー
「メレンデスがOKなら喜んで『Dynamite!!』へ送り込む」

7月に続いて、ストライクフォースのスコット・コーカーCEOが来日。『DREAM.16』の視察とともに、DREAM関係者と会談を持った模様だ。本誌はコーカーCEOを名古屋に向かう新幹線車内でキャッチ。日本格闘技界との今後の関係について話を聞いた。

聞き手／石井史彦　構成／堀江ガンツ　試合写真／Esther Lin（STRIKEFOECE）

——7月に続いての来日となりましたが、今回DREAM視察に来た目的はなんですか？

コーカー 一つはストライクフォース契約選手であるジェイソン・"メイヘム"・ミラーとゲガール・ムサシをサポートするため。もう一つはDREAM経営陣と今後の協力関係を協議することが主な目的だよ。具体的には大晦日を含め2011年度の選手の相互貸し借りに関してだね。

——すでに来年に向けて動いていますか。

コーカー 団体間の調整に関わる問題だからね。早いことに越したことはないよ。

——一部で「ギルバート・メレンデスにDREAMから大晦日出場のオファーが来た」という報道がありましたが、これは本当ですか？

コーカー 正式なオファーはまだ受け取ってないけど、今回その話をすることになるだろうね。

——スコットさん個人としては、大晦日にメレンデスを日本に貸し出す用意はありますか？

コーカー DREAMから正式なオファーがあり、同時にメレンデスが同意すれば、我々のスケジュールの問題もあるが、喜んで貸し出しするよ。ストライクフォース契約の選手がDREAMで試合をしたいっていうことに関して、我々はオープンなんだ。

——メレンデスvs青木真也のリマッチが日本で実現したら、それはDREAMのタイトルマッチになりそうですか？

コーカー そう信じているし、そうなるはずだよ。一部でメレンデスはライト級のワールドランキング2位と言われているけど、そこで1位にランクされているのはフレンキー・エドガーだろ？ 実際はメレンデスのほうがエドガーより確実に上だと思うから、実際にはナンバーワンのはずなんだ。そう思わないかい？ 対するアオキは日本でナンバーワン、そのワールドランキングでも3位にランクされている。その両者の試合がタイトルマッチにならなかったら、どういうマッチアップがタイトルマッチになるっていうんだい？ 前回の対戦はケージ、今回実現したらリングと、ルールも場所も異なってくるけど、私はギルバートの能力を信じている。きっと日本のファンの前でいい試合をしてくれるだろうから、ファンの一人としても楽しみなカードなんだ。

——メレンデスを貸す代わりに、DREAMから借りたい選手はいますか？

コーカー マッチアップも含めて言うと、10月のジョシュ・トムソンvsJZ（カルバン）の結果次第だけど、カワジリvsトムソン、アオキvsJZの再戦、またはジャスティン・ウィルコックスとの試合など、興味深いカードが考えられるね。

——10月9日のサンノゼ大会は、ニック・ディアスvsKJヌーン、トムソンvsJZという好カードが組まれました。見どころを教えてください。

コーカー ニックvsKJに関しては、3年前の対戦をコアファンは覚えているだろうし、1年前に流れてしまったカードがやっと実現できることになったんだよ。前回はニックが優位に試合をコントロールしていたにもかかわらず、流血のためレフェリーストップという残念な結果に終わってしまっているからね。巷ではKJについて、ウェルター級にしては身体が小さいという理由で評価があまり高くないけど、彼のパンチは信じられないほど重いんだよ。もしニックがスタンドでの勝負にきたら、



日本格闘技界に衝撃を与えた、4.17ナッシュビルのメレンデスvs青木真也戦。大晦日に再戦が実現するなら、DREAM、そしてジャパニーズMMAの今後を大きく左右する一戦となる。

メレンデスvsアオキはDREAMライト級タイトル戦になるだろう

それは大きな間違いだったってニックは後悔すると思ってるんだ。

——もう一方のトムソンvsJZはどうですか？

コーカー ライト級トップファイターの一人であるJZがついにストライクフォースに参戦してくることに興奮している。そのJZがトムソンに勝てば、メレンデスの持つライト級王座への挑戦。トムソンが勝てば、アオキ、またはカワジリとストライクフォースのタイトル挑戦権を賭けた試合ができる可能性が出てくるんで、日本のファンにとっても興味深い試合になるんじゃないかな。

——本来ライト級のKJが対戦相手に選ばれたように、いまウェルター級にニックの挑戦者にふさわしい選手が見当たらない気がしますが、今後ニックをどのように使っていく予定ですか？

コーカー 「ウェルター級にニックの挑戦者にふさわしい選手が見当たらない」って？ ノー、ノー。まずポール・デイリーがいるし、初代DREAMウェルター級王者であるマリウス・ザロムスキーを倒したエヴァンゲリスタ・サイボーグを忘れていないかい？ ニックの今後という意味では、まずポール・デイリーvsサイボーグを実現させ、その勝者とニックを対戦させたいね。

——先日、ジョシュ・バーネットと契約を結んだそうですが、今回契約を結ぼうとした理由を教えてください。

コーカー とても簡単なことだよ。ヒョードル、アリスター、ファブリシオ、ビッグフット（アントニオ・シウバ）、アルロフスキー、ブレット・ロジャースといったトップ選手群にジョシュが加わることで、世界でベストのヘビー級が出揃うことになるんだよ。誰も疑う余地のない真実としてね。

——確かに凄いメンバーですよね。ただ、ジョシュはドーピングで陽性反応が出ていますが、アメリカ、とくにカリフォルニアで試合をすることができるのでしょうか？

コーカー 我々ストライクフォースはアスレチック・コミッションのルールに基づいて運営しているので、ドーピングに関して一切関知しないし、もちろんサポートすることもないんだ。ジョシュはほかのリーグと契約している際に、残念なことにドーピングの反応が出てしまったけど、すでに1年以上前のことだし、その分のペナルティは充分に受けているはずだよ。そして「クリーンであること」が契約の条件にもなっているから、ドーピングテストで問題がないことを証明できないと、試合には出られないことになっている。

——ストライクフォースの契約事項に、ドーピングをしてないことを証明するということが含まれているわけですね。

ジョシュとの契約は「クリーンであること」が条件に含まれている

コーカー　最近、UFCファイターであるチェール・ソネンもドーピングの陽性反応のためにライセンスが1年間剥奪されたよね？　ジョシュは過去1年間アメリカで試合をしていないので、再テストを受ける権利があると思うし、その結果がクリーンであればカリフォルニアでも試合ができるって理解しているんだ。

——ジョシュのストライクフォースデビュー戦はいつ頃、誰が相手になりそうですか？

コーカー　来年早々にはデビューさせたいと思っている。対戦相手に関しては、現時点ではトップシークレット、あと1カ月後には発表できる予定だけどね。間違いなくタフでエキサイティングなカードになるからその発表を楽しみに待ってほしい。

——楽しみにしてます！　ヘビー級でいうと、アリスターがツイッターに「自分の兄貴（ヴァレンタイン・オーフレイム）が12月にビッグフットと闘う」と書き込んでいますが、これは本当ですか？

コーカー　その件はまだ決定したわけじゃないんだよ。確かにヴァレンタイン・オーフレイムが所属しているゴールデングローリーにコンタクトして、12月に試合ができないか、また対戦相手としてビッグフットを含む数名のファイターの名前を挙げた事は事実だけどね。

——ヴァレンタイン vsビッグフットが実現すると、ヒョードル vsビッグフットは消滅ですか？

コーカー　ヴァンレンタインがビッグフットと対戦するしないにかかわらず、そのカードは実現しないね。まず、ヒョードルが契約しているM—1との交渉をいまからまとめるには時期的に困難だし、12月4日のメインカードは、ダン・ヘンダーソン vsレナート・ババルですでに決定しているんだ。また、もしDREAMからヒョードルを大晦日の試合に出したいという要請があれば喜んでサポートするよ。日本はヒョードルにとって第二の故郷だし、日本のファンも待ち望んでいるだろうからね。もし実現したらファンの一人として試合を観戦しに日本に来るよ。

——FEGが中国の投資銀行PUJIと提携したことをどう思いますか？

コーカー　FEGの経営を健全なものにするためにも、中国市場へ参入するにおいても、非常にいいことだと思う。ただし、それがどうFEGにプラスになるかは、ミスター・タニカワが言っている2～300億円とも言われている現金がいつFEGに支払われるのか、またそのお金をFEGがどのように使うのかがわかったときに判断できることだと思うよ。

——PUJIとの話がまとまる前、ストライクフォースがK—1の買収に興味を持っていたというのは本当ですか？

コーカー　どこからの話だい？　それはまったくのデマだね。対象がDREAMということであれば、前回日本に来た7月にその可能性の話をしたことは事実だけど。

——そうなんですか⁉

コーカー　DREAMとはグッド・アライアンスの関係にあり、仮にストライクフォースとDREAMが同じオーナーによって運営されるようになれば〝パワフル・アライアンス〟は、お互いがその必要性を感じたのであれば可能性はないとは言えないけど、いまのままでも非常にいい関係にあるから、そのなかでファンに喜んでもらえるようにサポートし合えればと思ってるんだ。



昨年8月のヒョードル戦の前にドーピング陽性反応が出たため、09年1月以来、アメリカでの試合から遠ざかっているジョシュ。再検査をクリアし、再度ヒョードル戦を実現させることはできるか？

——そのストライクフォースのオーナーであるシリコンバレー・スポーツ＆エンターテインメントの社長が変わったと聞きましたが、これがストライクフォースに影響を与える可能性はありますか？

コーカー　その答えは「ノー」だね。シリコンバレー・スポーツ＆エンターテインメントの元社長はアイスホッケーの大ファンなんだよ。そのアイスホッケーチームであるサンノゼ・シャークスのほか、テニストーナメントを開催・運営する会社、そしてストライクフォースなど計9つの会社を管理していて、現場のことはすべてその会社の代表に任せていたんだ。実際に私が彼と会ったのもここ2年間で4回程度、会ったっていっても挨拶する程度でビジネスの話なんてまったくしたことがないんだよ。

——そうなんですか。

コーカー　確かに今回その社長が変わったことで、いろんな憶測や噂が飛び交ったけど、もし噂のようにストライクフォースが売りに出ているのであれば、私は一番にそのことを知る立場にいるんだよ。それにビジネスの観点で考えてみればわかるよ。ストライクフォースはシリコンバレー・スポーツ＆エンターテインメントの傘下になってから、まだ18カ月しか経っていない若い会社なんだ。その間に世界が注目するベストのショーを行ないながら凄いスピードで成長してきているんだから、いま売りに出す時期ではないんだよ。


——元WWEのスタッフで、ブロック・レスナーのマネージャーもしていたポール・ヘイマンと会談したそうですが、彼と組むことでどんなビジネス展開が考えられますか？

コーカー　ポール・ヘイマンとは旧友の仲なんだよ。とてもおもしろくクリエイティブなヤツで、また彼のパートナーであるミッチェルもクリエイティブでマーケティングの天才なんだ。現在はお互いにアイデアを出し合いながら将来、何か協力できないかを模索しているところ。タイミングが合いさえすればどこかで一緒に仕事する可能性もあるかもしれないね。

——今後のDREAMとの関係はどうしたいと考えていますか？

コーカー　簡単に言うと、ファイター・シェアリングを基本にもっと関係を強化していくということだろうね。チャンスがあれば、ストライクフォースinジャパンを開催したいんだ。もしストライクフォースinジャパンが実現できるなら、DREAM in USAというのも全面的に協力するよ。とにかくDREAMとはよりタイトな提携関係を結び、ファンに喜んでもらえるマッチメイクを実現していきたいと思っているんだ。

【10年9月25日／名古屋へ移動中の新幹線車内にて収録】



「俺の扱い方間違えんなよ」

『DREAM.16』で一本完勝も高谷、DREAM、TBSに不満爆発!!

小見川道大

小見川のDREAM二戦目はまたまた一本勝利! しかし、その喜びもつかの間、なんだか翌日の小見川は非常に怒っていた。
同じく『DREAM.16』で快勝した高谷裕之、そしてDREAMや地上波放送にまで飛び火!? その理由とは!?

聞き手／堀江ガンツ　撮影&試合写真／丸山剛史

最初は息子を映したいって話だったんですよ。けど、まさか妻があんなに映っちゃうなんて

――昨日はめちゃくちゃインパクトありましたよ！

小見川　あ、そうですか。

――試合はもちろんなんですけど、ファンのあいだでは「煽りVに登場した奥さまが美人すぎる」ということがインパクト抜群だったみたいです。

小見川　そっちですか。まあ、ありがとうございます（笑）。

――ご家族を映すというのは、小見川選手自身がゴーサインを出したんですか？

小見川　いや、最初は息子を映したいって話だったんですよ。けど、まさか息子はあんまり映らないで、妻があんなに映っちゃうなんて、かなりビックリしちゃいましたけど（笑）。

――ディレクターの趣味なんですかね（笑）。だから、「小見川の野郎、美人妻を見せびらかしやがって」という声もチラホラとあるというか。

小見川　えーっ!!　そんな、俺は子どもを映してると思ってただけだから！　でも、子どもを映しにきたのに映ってないんだもん。こっちがビックリですよ！

――ダハハハハ！　でもご家族のことはあんまり大きくは公表してなかったんですか？

小見川　いや、ブログには書きましたよ。たぶん、普通に雑誌のインタビューとかでも答えてたと思うし。

――じゃあ、そのノリで煽りVもいいんじゃないの？　と。

小見川　いやでも、ウチのは出ていなかったですよ。

――そうなんですか。でも、だからやっぱり強い男はうらやましいという声が出てます。というか、僕の感想も込みです（笑）。

小見川　ハハハハ。

――奥さんのことはともかく、昨日も見事な完勝でした。

小見川　ありがとうございます。

――やっぱりご自身でも満足のいく試合でしたか？

小見川　そうですね、はい。

――思い描いていた作戦どおりだったんですか？

小見川　いや、なんかいつも作戦を立てるというよりも、練習のなかでいくつかパターンを作っていく感じが多いんで、今回もそんな感じでした。

――それにしても、フィニッシュとなったストレートアームバーは、去年からずっと猛威を振るってますね。

小見川　いやー、でもなかなか一本は極まらなかったんですけどね。最近2回も極まったんで。

――いや、今回も見事な極まりっぷりでしたよ。あれはポジションを変えるときなんかでも使ってる技ですよね。

小見川　そうですね。極めながらスイープしたりとかにも使えるんで。

――なんかいまの状態って、精神的に誰にも負ける気がしない状態なんじゃないですか？

小見川　うーん、まあ、負ける気はしないですね。

――以前とは精神的に違いますか？

小見川　そうですね。不動になってきましたね。やっぱり家族が増えたことと、その家族を守らなきゃいけない、勝たなきゃいけない。やっぱそれが大きいです。これが俺の仕事だし。

――しかし、これでDREAMに参戦して以降2連勝ということですけど、小見川選手は初めからタイトルマッチを熱望されてましたよね？

小見川　最初の頃は思ってたんですけど……なんか、いまはたいしてって感じですね。

――あれ、そうなんですか？

小見川　たいして……だって、やらせてくれないんだもん！（声を張り上げて）。

――ああ、もう「それならいいよ」と。

小見川　「上等だよ」って感じですね。何番手扱いだよって。俺、勝ってんだろうがって話ですよ。

――つまり、昨年の大晦日で小見川選手は高谷裕之選手にTKOで勝っているにもかかわらず、なぜか高谷選手とビビアーノのタイトルマッチが今回実現する予定だったという。そこに怒ってるわけですよね？

小見川　だからいいんじゃないですか？　やってもらって。ぜんぜんいいっすよ。やってくれれば。

――そのあとにタイトルを獲ったほうと試合をしようという思いはありますか？

小見川　いや、（高谷が勝っても）ぜんぜん。興味ないもん。まったく興味ない。だって「忘れてんのか？　負けたの」って。……まあ、忘れてるんでしょうね！　だって俺に殴られたから記憶ないんだもん。

――興味ないっていうのは、もう前回の試合がすべてを証明している、と。

小見川　証明しているも何も、微妙な判定ならまだしも、あんだけやられてんだよ？　だから、忘れてんだろうね。記憶なくしちゃったんだろうね。ハハハ。

――ただ、高谷選手はその後、ヨアキム・ハンセンに勝ったりとか、昨日もチェイス・ビービにKOで勝ちました。

小見川　でもチェイス・ビービは連敗中の選手でしょ？　そこに勝ったからってどうなんすか？

――まあ、確かに……。そこは小見川選手的には「それでベルトに挑戦できちゃうの？」という話ですよね。

小見川　だから、そういうベルトなんでしょうね。もうしょうがない。しょうがないですよ。だって俺、63キロにも落とせないし。まあそういうベルトなんですよ、悪いですけど。でも、大晦日のみーんなが観てる前で倒したのに、なんで忘れちゃうかなあ。で、昨日の試合はダイジェストですか



［10.9.25 DREAM.16］
愛知・日本ガイシホール
○小見川道大 vs コール・エスコベド×
（1R 2分30秒 アームバー）
『DREAM.13』で前田吉朗をハイキックで葬ったエスコベドが相手だったが、小見川は小外刈りでテイクダウンを奪うと、エスコベトの腕をストレートアームバーで絞り上げ、一本！　苦悶の表情を浮かべるエスコベドを横目に、小見川は貫禄の勝ち名乗りを挙げた。



これでどうですか？ わかるでしょ？ 俺が世界の中心に立ってるってのが

小見川道大

らね、俺。

──ああ、TBSの地上波中継ではそうでしたね。

小見川 ダイジェストですよ。勘弁してよって。何番手扱いだよって話ですよ。扱い方、間違えんなって。あっち（高谷）出して、こっちを出さないなんて話ねえだろって。……だから、もういいよって感じですよ。

──じゃあ、いまちょっとDREAMでは目標は見えないというか。

小見川 ……知らない！ なんつーのかなあ、最強の男をナメんなよって。扱い方注意しろって。どっかいっちまうぞって。ねえ！

──その最強の男だという自負があるなかで、もともとDREAMに参戦しようと思ったのはどうしてですか？

小見川 だからDREAMに参戦するにあたって、最初から俺が言ってたのは、俺は『戦極』でマルロン・サンドロという強い選手とやって、で、高谷選手と大晦日にやったじゃないですか。だったら順番的にはそこ（タイトルマッチ）を組んでもいいだろうって。じゃあ、その首を獲ろうと思って参戦したんですよ。

──そしたら待てど暮らせど……。

小見川 どんだけ？ って。だからもう勝手にやってろって感じですよ。

──逆に小見川選手が挑戦できないとなると、そういうレベルでやってるベルトになっちゃってるんじゃないか、と。

小見川 話にならないですよ。魅力なくなっちゃいますよ。

──自分にKO負けした人が先に挑戦できるベルトはどうなんだ、と。

小見川 ……いいっすよ。63キロまで落ちないもん、何回も言うけど。

──小見川選手にとっては65キロも、落としてきた階級ですもんね。

小見川 いや、だから俺が悪いんだな。63でしたもんね、当初。ワガママすぎた。自分勝手すぎる（投げやりに）。

──でも来年から階級が分かれるという話があるじゃないですか。そこで65キロになるかもしれないですよね。

小見川 だから扱い方にもちょっと……ちょっとでいいから気を使ってほしかったですよね。来年じゃなくて今年も。

──それは「今年はなんだったんだ」という気持ちもあるわけですか？

小見川 なんだったっていうか、自分の力を確かめるうえでは、自分でも強くなってる、打撃の選手に打撃で勝てるし、寝技の選手に寝技で勝てるし。これでどうですか？ って。わかるでしょ？ 世界の中心に立ってるってのが。

──確かに。その小見川選手にとって大晦日の大舞台はどう映ってますか？

小見川 ……俺、人気とかってあとからついてくるもんだと思ってました。勝てばついてくるもんだと思ってたんですよ、正直。でもねえ、なんつーのかなあ。確かに大晦日って格闘技の『紅白歌合戦』じゃないですか。ただね、使い方、間違えんなって。大晦日だけのこのこ出てください

人気なんかどうでもいいんじゃないですか。大晦日は強いヤツで大騒ぎでいいですよ

ってのは違いますよってことでしょ。

――でも、小見川選手の闘いはぜひ大舞台でもまた観たいです。

小見川　でも、俺は「人気なんかどうだっていいんじゃないですか？」って感じなんですよ。強いヤツで大騒ぎでいいですよ、大晦日は。

――大晦日に出ることで……。

小見川　（さえぎって）いらないですよ、人気だけの大晦日なんて。

――そこには「もっとちゃんとした相手を用意しろよ」という思いもありますか？

小見川　いや、ちゃんとした相手は用意してくれてるんですよね、今回も。ただその順番というか、なんか俺がやったことを忘れたかのように、「じゃあ高谷選手とリマッチ、リマッチ」って。俺のこと、どう評価してるのかなって思っちゃいますよね。どう思います？

――確かにいまいち早すぎますよね。

小見川　いまいちというか、もう忘れてるじゃないですか。

――たとえば体重の問題がありますけど、ビビアーノ選手とタイトルマッチをやって小見川選手がチャンピオンになりました、と。次のチャレンジャーとして高谷選手が勝ち上がってきて闘うというのだったらわかりますか？

小見川　それが普通ですよ。でも、勝手に再戦を煽り立てやがって。……聞きました？　この前の7月の試合の解説。

――7月というと、小見川選手がジョン・ヨンサムと闘ったときですよね。高谷選手が解説席に座ってて。

小見川　どこにムカついたかわかんないですけど、「あのぐらいの相手には勝っとかないと」って言ってたんですよ。それ、俺に負けたヤツが言うセリフですか？

――あ、そんなことを言ってたんですね。

小見川　俺、逆の立場だったら「いやあ、強いですね」しか言えないですよ。でも「あのくらいの相手には勝っとかないと」って。あたかも俺に勝ったかのように言ってて、ホントふざけんなよ！　って。

――そういう状況だと、へんな話日本マットから気持ちが離れてます？

小見川　複雑ですよね、正直。なんか、アイツは数字を獲ってるのかどうか知らないですけど、俺は完全に実力主義ですから。だったら「もう、ほっとこ」ってなるじゃないですか。出させてもらってて悪いですけど。だから「俺、ここじゃなかったのかな」って思っちゃいますよね。俺の目指してるのは人気じゃないですよ。ホントに格闘技が好きで、それをきわめようと思ってやってるのに、そこかよって感じですよ。

――数字が獲れるとか、そういうことじゃない、と。

小見川　そう。どんだけ負けてる選手が相手なんだって。いいかげんにしろよって。それにテレビもいつまでも、同じヤツに執着してるんじゃねえって。

――なるほど、それが新陳代謝を阻んでるというか。

小見川　もちろん。だから新しいスターが出てこない。むしろ出さないんですかね。新しいスターが出てきそうになったらダイジェストって、笑えますよね。おもしろい。ハハハハ！

――そうなると、気持ちはやっぱり下がってきますよね？

小見川　うーん……まあとりあえずいまは試合終わったばっかりなんで、周りと相談しながら考えていこうかなって思ってますね。……とはいえ、やっぱり自分の実力を確かめられたし、今回もそれにちなんだキャリアあるいい選手が相手だったじゃないですか。前田吉朗選手にもKOで勝った選手で、映像観ても強い選手だったんでね。そういう選手と試合ができたということで、そこは感謝してますけどね。

――そうなると、そろそろ最初から言ってることを実現してくれてもいいんじゃないか、と？

小見川　変わってないですからね、最初から言ってることと。でもここまで来ちゃってますから、もう一回振り返って「最初から言ってることをやってください」って言える心境じゃないですよ。なんか、マルロン・サンドロ選手も俺とやりたがってるって聞きますし、だったらもう一発やってもいいし。まあ、それはいろいろ考えます。

――ほう。あっちのリマッチはOKというのは、やっぱりベルトを持ってるからですか？

小見川　いやいやいやいや、単純に強いからですよ。だから俺は単純に強い選手とやりたいだけなんですよ。

――なるほど。じゃあ、今回マイクでは出ませんでしたけど、気持ちとしてはホントに「クソッタレ！」という気分なんですね。

小見川　いや、もう「クソッタレ！」というところも通り越した。マイクで言ったとおり、世界の中心が俺だということを主張しますね。……でも、そしたら俺のをパクリやがって。

――ハハハハ。

小見川　だから、あくまで俺は自分で自分のストーリーを作ります。

――自分で切り開いていく、それがいま言えることですか。

小見川　そうです。


――今後どうなるのか、じっくり注目したいですね。でも、稼がないといけないですし、そこも複雑ですね（笑）。

小見川　はい（苦笑）。でも、自分の闘いを俺は貫きますよ。

【10年9月26日／名古屋市内・中部日本放送本社にて収録】



おみがわ・みちひろ■1975年12月19日、茨城県出身。柔道からMMAに転向し、05年5月に『PRIDE武士道』でプロデビュー。09年『戦極』フェザー級GPでは現王者マルロン・サンドロを判定で下し、準優勝。同年大晦日には高谷裕之を撃破。今大会の煽りVで奥さまが超美人であることが発覚。いろんな意味で注目のフェザー級の中心人物。168cm、65kg。



俺の試合前にジャマくさかった。「うっせえなあ!」って

覚醒した伝説の喧嘩師ビビアーノ&小見川狩り宣言

高谷裕之

ビビアーノ・フェルナンデスの持つDREAMフェザー級王座挑戦から一転、相手がチェイス・ビービに変わりながらも見事TKOで秒殺した高谷。小見川とのライバル関係が高まるなか、ケンカ師の心情はいかに。

聞き手／橋本宗洋　撮影／丸山剛史　構成／堀江ガンツ



[10.9.25 DREAM.16]
愛知・日本ガイシホール
○高谷裕之 vs チェイス・ビービ×
(1R 1分45秒 TKO)

高谷裕之が元WECバンタム級王者ビービと対戦。序盤、積極的に前に出てくるビービに対し、高谷は正面から打ち合わず、バックステップで間合いを外していく。さらに前に出るビービに高谷の右ストレートから左フックのコンビネーションがモロにヒット！ ダウンしたビービに高谷が強烈なパウンドを落とし、TKO。見事な秒殺勝利だった。

前までは作戦も何もなかったけど「考えてやればちゃんとできるんだな」って（笑）

――まずはチェイス・ビービ戦勝利、おめでとうございます！

高谷 ありがとうございます。

――会心のKO勝利でしたね。

高谷 結果はまあ、そうだったんですけど。「大丈夫かな」って感じはありましたね。相手が変わったんで、集中できてない感じがあって。

――最初はビビアーノ・フェルナンデスとタイトルマッチをやるって話だったんですもんね。

高谷 それがなくなったって聞いたのが、試合の3週間くらい前ですかね。

――そこから気持ちを切り替えるのって相当、大変そうですよね。ましてタイトルマッチであれば、気合いの入り方もいつもと違ってたでしょうし。正直、「じゃあ今回は試合はいいか」ってなりませんでした？

高谷 最初はそうなりましたね。だいたい、対戦相手が急に変わるとロクなことがないから、自分の場合。修斗でギルバート・メレンデスとやったときも決まったのが2週間前とかだったし、あと去年の大晦日。そういうときは、だいたいダメですね。

――あ～、確かに。それだけ、気持ちで闘うタイプってことかもしれないですね。

高谷 うん、そうっすね。

――じゃあ今回はメンタル面が非常に重要だったわけですね。

高谷 試合前、山田トレーナーとバンデージ巻いてるときも「なんか集中できないんすよねぇ」みたいな話をしてて（笑）。

――え、その段階でもですか（笑）。

高谷 全然怖くないし、ほんとに大丈夫かなって。無理やり興奮するようにもしたんですけど、やっぱりいつもとは違いましたね。そういう感じだったんで、勝ってホッとしましたね。

――実際、今年は絶好調ですよね。

高谷 まあ2試合しかしてないですけどね（笑）。

――とはいえ、2試合とも圧巻のKOですし。去年の悔しさがきっかけで、何か変化があったのかなって想像してたんですが、いかがですか。

高谷 トーナメントの負けがあって、大晦日はその流れでなあなあで闘っちゃって。その負けもあって、闘い方を考えるようにはなりましたね。プランを立てて試合するようになったんですよ。それが大きかった。打撃が強くなったとか寝技がうまくなったとかっていうわけじゃないんですけど、つながりができたんで。

――それ、今年からなんですか!?（笑）。

高谷 前までのスタイルは、作戦もなんにもなくて「近づいて打ち合おう」ってだけで。それをもうちょい、打撃にしても組み立てを考えるようになりましたね。「まず下を効かせてから」とか。タックルにいったら打撃も入りやすいとか。

――作戦なしでDREAMフェザー級GPの決勝までいったっていうのも凄い話ですねぇ（笑）。

高谷 まあ、そのときはそれが一番いいと思ってたんですけどね。でも、「考えてや



ればちゃんとできるんだな」ってビックリしましたね（笑）。

――メチャクチャできてますよ！（笑）。たとえば今回はどんな作戦だったんですか？

高谷　相手のとくにこれが凄いっていうのは感じなかったんですよ。でも「なんかあるんだろうな」と思ってて。打撃でいえば左フックを返してくる癖があるんで、それをもらわないようにしようとか。それがちょうどハマりましたね。

――そういう部分で、一段階成長したというか。

高谷　前とは全然、違うと思いますね。

――まさにその違いが試合で出た、と。ところで、選手って自分の一つ前の試合って観られるもんなんですか？

高谷　全然観れないですね。

――大会では小見川選手と高谷選手の試合が連続であって、小見川選手が一本勝ちしましたよね。そのへんはどう感じてたのかな、と思ったんですよ。

高谷　ああ。試合は観てなかったんですけど、歓声が聞こえて、僕が入場ゲートに行くのも急ぐことになったんで「おお、りやがったのか」みたいな感じでしたね。

――そのときの心境っていかがでした？

高谷　まあ、勝つとは思ってたんで。でもやっぱ、多少はスイッチ入りますよね。

――小見川選手の「世界のフェザー級の中心は俺だ！」っていうマイクは聞こえたんですよね？

高谷　ああ、聞こえてましたね。

――で、高谷選手も同じセリフを返して。

高谷　俺の試合前なのにあんなこと言うんで、ジャマくさかったんですよ。「うっせえなあ！」って。

――そういう緊張関係って観てる側とし

リアルに一触即発！
小見川道大VS高谷裕之 因縁のリマッチは実現するか!?

いまやDREAM、いや日本格闘技界で最も熱く、選手層も厚い階級といえるフェザー級。実力とプロとしての個性を兼ね揃えた選手がズラリと揃い、群雄割拠の時代を迎えているが、このDREAMのリングにおいて間違いなく頭一つ抜けているのが、小見川道大と高谷裕之だ。

9・25『DREAM・16』でも、一番のインパクトを残したのは、やはりこの二人。

小見川が元WECフェザー級王者コール・エスコベドをストレートアームバーで極めれば、高谷も元WECバンタム級王者チェイス・ビービを左フックからのパウンドでTKO。

小見川が「世界のフェザー級の中心は俺だ！」と叫べば、高谷も「さっき誰かがフェザー級の中心だとか言ってたけど、フェザー級の中心は俺です！」とすぐさま返すなど、直接対決ではないものの、ライバル関係に火花が散るかたちとなった。

小見川と高谷の関係はいまやリアルに一触即発。大会翌日に行なわれた一夜明け会見でも、二人は離れた席に座り、お互いに緊張感を漂わせる。さらに会見後には、別室で個別にインタビューが行なわれたが、二人が鉢合わせにならないように、DREAM関係者が時間をズラすなどして細心の注意を払ったほどだ。

さあ、機は熟した。いまこそ直接対決だ！　……と、いきたいところだが、

てはホントにゾクゾクするんですよ。高谷選手と小見川選手は、DEEP道場でカード発表の記者会見をやったときも一緒でしたよね。で、もちろん計量とか前日会見、一夜明け会見も同席しますし。対戦を望んでる選手が同じ場所に居合わせるのって複雑だろうなと思います。

高谷　全然イヤですよ（笑）。

――全然イヤですか（笑）。

高谷　意識するし、なんか口論、舌戦みたいになったら言ってやろうっていう気構えも持っておかないとダメだし。

――ちなみに今日の一夜明け会見でも、小見川選手は「もう一度言います。フェザー級の世界の中心は俺です」って言ってましたけど、高谷選手は笑ってるだけで返しませんでしたね。

高谷　なんかメンドくさくなっちゃって。

――ここまで同じ場所にいる機会があるのも、日本人同士ならではでしょうね。

高谷　いや、逆にそういうのもおもしろいっていうか、楽しい感じもありますけどね。

――緊張感を楽しむというか。高谷さんって、日本人対決に関してはどう考えてますか。やりたがらない選手も多いって話をよく聞くんですけど。

高谷　やっぱり会う機会も多いんで、顔見知りになっちゃうじゃないですか。あ、でも友だちってわけでもないですね。あいさつする程度だから。格闘技やってる人間と、普段遊ぶこともないですしね。

――そういう部分での遠慮はないわけですね。

高谷　一緒に練習してる人だけはイヤですけど、それ以外ならっていう感じですね。積極的にはやりたくないけど、っていう。それに……やっぱりアイツは別ですから。

――日本人かそうじゃないかは関係なく、やらなきゃいけない、倒さなきゃいけない。

高谷　やりたいっすよね、うん。

――大会でも試合が連続したりで、周囲も意識させよう、煽ろうとしてるのも感じますか？

日本人と積極的に闘いたいとは思わないけど やっぱりアイツは別ですから。やりたいですよね

高谷裕之



たかや・ひろゆき■1977年6月10日、千葉県出身。少年時代からケンカに明け暮れたという通称"伝説のケンカ師"。01年から掣圏道、修斗でプロ格闘家として活躍し、05年から『HERO'S』参戦。その後、WECを経て、09年からはDREAMに参戦し、フェザー級GPでは準優勝。今年に入り、ヨアキム・ハンセン、チェイス・ビービをKOし、ビビアーノの王座を狙う。167cm、63kg。

高谷　そりゃそうっすね（笑）。ただ、いまは照準をタイトルに絞ってる感じですね。アイツとは63キロじゃできないし、来年、階級がバンタムとフェザーに分かれても同じ階級になるだろうし。

――まずは9月にタイトルを獲って、そこから大晦日に小見川選手と再戦っていうのは以前にもおっしゃってましたよね。そのタイトル戦が今回は流れてしまったわけですが。

高谷　一つズレたっていう感じですよね。大晦日にタイトルマッチかなと。

――こういうタイミングのズレって、うまく消化できるものですか？

高谷　まあ、テンション下げないように、強引に前に進んでいくしかないですよね、自分で筋道作って。「次」って思うしかできないですからね。

――そういう気持ちの作業も重要なんでしょうね。

高谷　できればしたくないですけどね（笑）。

――そりゃそうですよね（笑）。

高谷　だから「しっかりしてください」ってことは言っときたいです。

――それは力強く言っときましょう。では、高谷選手としては大晦日にタイトルマッチ、来年に小見川戦、と。

高谷　やりたいっすね。

――では運営サイドにもしっかりしてもらって、大晦日のタイトルマッチに期待してます！

【10年9月26日／名古屋市内・中部日本放送本社にて収録】

これがなかなか難しい状況であることも確かだ。

小見川にとって高谷は大晦日にKO勝ちした相手。『戦極』のリングでもマルロン・サンドロ、日沖発という実力者を破ってきた自分の次の試合はタイトルマッチしかないという思いが強い。

対する高谷は、そもそも去年のフェザー級GPで、ビビアーノと決勝を争ったときの判定が微妙だったこともあり、決着戦の権利を主張。7月の『DREAM.15』では、ヨアキム・ハンセンを完全KOするインパクトを残している。


そんななかで、肝心の王者ビビアーノ・フェルナンデスは、"家庭の事情"で9・25『DREAM.16』を欠場。当初は高谷の王座挑戦が予定されていたが、流れてしまった。こうして頂上対決が決まらぬまま、緊張感のみが高まっている状況なのだ。

一日も早いタイトルマッチの実現が期待されるが、一夜明け会見で笹原イベントプロデューサーは「小見川選手、高谷選手とも主張があると思う。もちろんビビアーノ選手の意向もある。話を聞きながら決めていきたい」と語るにとどまった。

はたして王者に挑戦するのは、このまま高谷なのか。それとも小見川が奪い返すのか。いずれにしても、小見川vs高谷、因縁の決着戦が実現するためには、どちらかがまずDREAMフェザー級のベルトを巻くことが先決となりそうだ。

ベルトを腰に巻きライバルと決定的な差をつけてこそ、"フェザー級の中心"が自分であることを証明できる。

日本のフェザー級が黄金時代を迎えるためにも、真の頂上対決としての小見川道大vs高谷裕之戦実現に期待したい！



「ヘビー級、SFのベルト獲得は90パーセントの確率で達成できるでしょう」

水野竜也を下しDREAM2階級制覇達成！

GEGARD MOUSASI

拳豪
ゲガール・ムサシ

強い！ 強すぎる!!　やるとは思っていたけど、やっぱりゲガール・ムサシが2階級制覇達成！
その喜びの声を聞こうかと思った当インタビューだが、なんとムサシの目標はもっと果てしないものだった。
世界制覇を目指す拳豪の声を聞け！

聞き手／山本宗忠（THE PEHLWANS）　撮影&試合写真／丸山剛史



［10.9.25 DREAM.16］
愛知・日本ガイシホール
○ゲガール・ムサシ vs 水野竜也×
（1R 6分10秒 裸絞め）
試合開始から積極的に打撃を放つ水野の攻撃を冷静にかわしたムサシは、脇を差してテイクダウンを奪うと、強烈なパウンドをお見舞い。水野は一度立ち上がるが、再びグラウンドの展開になると、ムサシはマウントへ。そこから裸絞めで一本！ 貫禄の2階級制覇達成となった。

強い選手でもタイトルを獲れない選手 重要な試合には勝てない選手がいます

――ＤＲＥＡＭライトヘビー級王座戴冠、おめでとうございます。

ムサシ　ありがとうございます。

――試合後は「実感はまだ」とおっしゃっていましたが、いまはどうですか？

ムサシ　とてもいい気分です。大きなことを達成したんだと実感しています。強い選手でも、メジャーイベントのタイトルが獲れない、大きな意味を持つ重要な試合には勝てないという選手がいます。そんななか、私は日本とアメリカで３つのベルト、しかも異なった階級でベルトを獲ることができました。大きなことを成し遂げた自分を誇りに思っています。

――強くてもタイトルを獲れる選手と獲れない選手、その違いはどこにあると思いますか？

ムサシ　やっぱり少なからず〝運〟というのも左右しますし、あとは〝勢い〟でしょうか。私は一昨年のＤＲＥＡＭミドル級ＧＰで優勝して、その翌年にはストライクフォースのタイトルも獲得しました。ドミノ現象と言いますか、一つの大きな勝利が次の勝利への勢いとなり、その勝利がまた次の勝利を呼び込む。そういった〝勢い〟というのも重要だと思います。今回のタイトル獲得の勢いに乗って次に成し遂げたいのは、ストライクフォースライトヘビー級のタイトル奪還です。

――すでに次なる目標を定めているわけですね。今後についてはのちほどおうかがいするとして、まずは昨日の試合の感想から聞かせてください。

ムサシ　グラウンドでコントロールできる自信があったので、テイクダウンしてからサブミッションで勝負を決めたいと思っていました。ただ、ミズノ選手には本当に驚かされました。まず、あそこまでパンチで前に出てくるとは思いませんでした。もっとディフェンシブなファイトをしてくると思ったのですが、気持ちのこもった勝つためのファイトをしてきました。もう一つ、私のパンチを食らって、あそこまで我慢できる選手もなかなかいません。決して試合を投げだそうとしない、本当に精神力の強い選手です。将来、ミズノ選手が自分の目標を達成できることを祈っています。

――ムサシ選手ならもうちょっと短い時間でフィニッシュできたんじゃないかという意見もありますが。

ムサシ　それはミズノ選手の実力を過小評価した意見ですね。ミズノ選手はしっかりとした技術、そしてなにより強靱な精神力を持っています。彼は心の底からこのベルトを狙っていて、しかも母国での試合でした。そういったことも考慮に入れなければいけませんよね。

――水野選手がさらなる成長を遂げるには何が必要だと思いますか？

ムサシ　非常に優れた戦略を立てることができ、それを実行できる選手だと思いますので、あとは経験だけじゃないでしょうか？ 時間はかかるかもしれませんが、ミズノ選手が持っているポテンシャルをさらに引き上げていくにはなにより経験が必要だと思います。毎試合、トップレベルの選手と闘うのではなく、下からコツコツと試合を積み重ねていくことも重要です。あの身体の大

きさはライトヘビー級でも大きな武器になると思います。彼とリング上で対峙したとき、私がこれまで闘ってきた選手の中でも一番大きいんじゃないかと感じましたからね。今後の努力次第ではこの階級で充分活躍できる選手になると思います。

――さて、ムサシ選手の今後についてですが、先ほど次の目標はストライクフォースライトヘビー級王座の奪還ということをおっしゃっていました。次のアメリカでの試合はいつ頃行ないたいと考えていますか？

ムサシ ストライクフォースの大会が12月、そして1月にもあると聞いていますのでそこらへんかなと思うのですが、その時期、日本では大晦日の大会もありますから、スケジュール調整が難しくなると思います。私としてはひと月に2試合してもいいのですが、それは周りがダメだと言うでしょう。そこはマネージャーと相談して決めていきたいと思います。でも、DREAMとストライクフォースが提携関係にあるので、両方のプロモーションで試合ができる環境でよかったです。私にとって日本は母国のような感じで、ここまで成長するまでチャンスを与え続けてくれた日本の主催者には忠誠を誓う気持ちがありますからね。

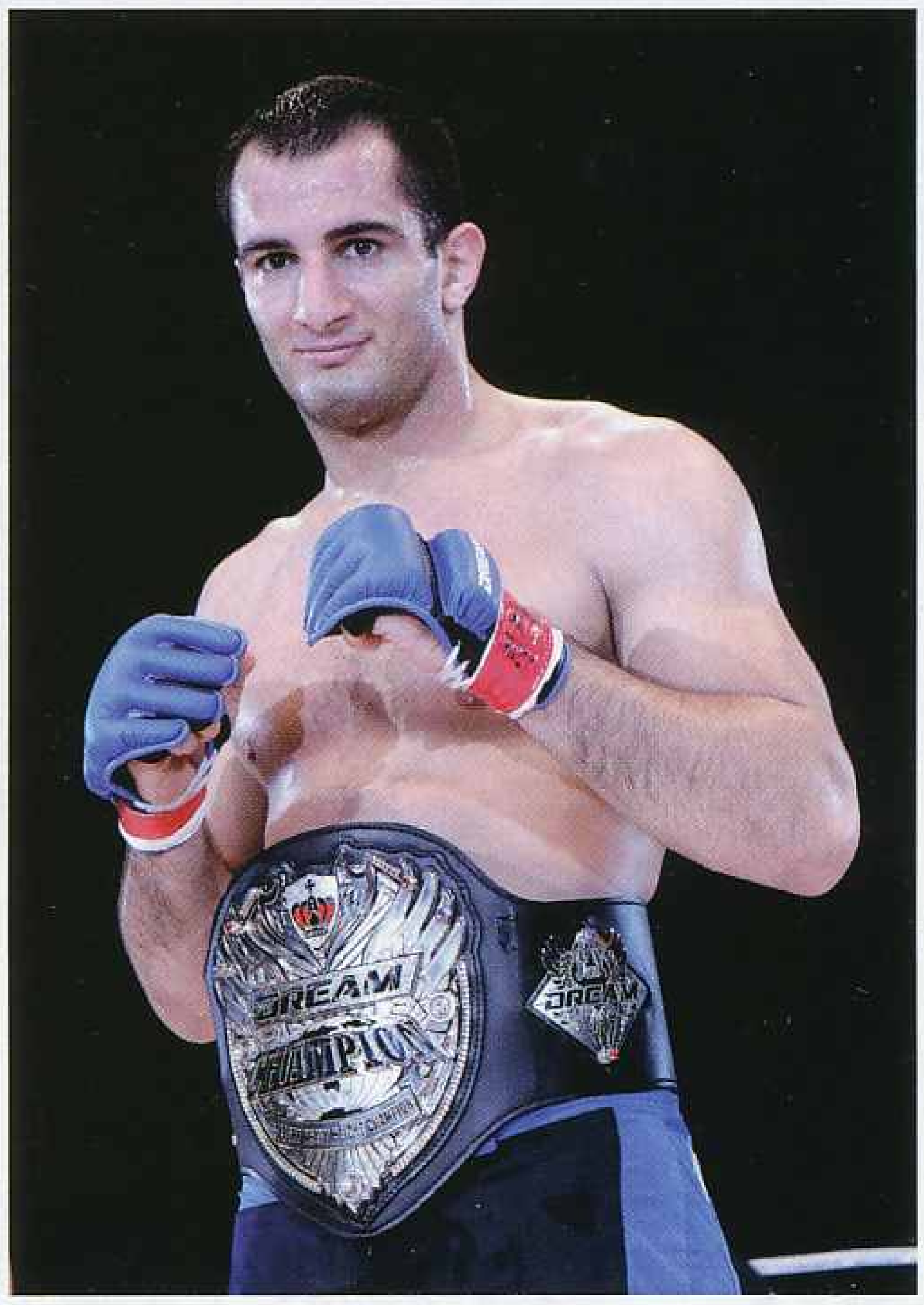
――このコメントを聞いたらDREAMのスタッフは喜ぶと思いますよ。現在のストライクフォースのライトヘビー級王者は8月にキング・モー選手をKOで下したハファエル・フェイジャオン選手です。

ムサシ もしフェイジャオン選手と対戦することになったらおもしろい試合になると思います。お互い、得意の立ち技を活かした試合となるでしょう。モー選手は手術をしたそうなので、その回復を待って彼ともぜひ再戦したいです。私は前回の彼との試合で自分が何をやらなければいけないかということを学び、より進化しました。あのときの私はテイクダウンディフェンスなんてことは考えてもいませんでした。その後、しっかりレスリングの練習をしていますので、次に彼と対戦するときは、前回とはまったく違う内容、結果になると思います。二人ともこの階級のトップ選手ですので、ぜひ対戦したいと思います。

私にとって日本は母国のような感じです。日本の主催者には忠誠を誓う気持ちがあります

――DREAMライトヘビー級王座も長い期間、保持していきたい意向を示していましたが、気が早いですけど、どういった選手が次期挑戦者にふさわしいと思いますか？

ムサシ 挑戦者に関しては、私が決めることではないのでわかりません。私としては、防衛戦は一年に一回で充分だと思っていて、あとは違う階級で試合をしてみたり、2～3ヵ月前に連絡をもらえるのであれば大晦日にK-1ルールで試合をしてみるのもおもしろいかなと思っているのですが、その一年のあいだにパッと光る選手や印象に残る勝ち上がり方をする選手が出てくると思います。主催者がそういった選手を挑戦者としてふさわしいと判断するならば、その選手と防衛戦を行なうことになるでしょう。



GEGARD MOUSASI■1985年8月1日、オランダ出身。DEEPで初来日し、その後PRIDE武士道を経てDREAMに参戦。08年DREAMミドル級GPでメルヴィン・マヌーフやホナウド・ジャカレイを下し、一本目のベルトを奪取。そして今回の水野竜也戦で見事勝利しDREAM二本目となるライトヘビー級のベルトを巻いた。このあともまだまだベルトを獲得する予定の25歳。186cm、93.0kg。

GEGARD MOUSASI

――ライトヘビー級の選手で言うと、たとえば、昨日勝利を挙げた石井慧選手もそうです。

ムサシ オリンピックで金メダルを獲るということは、アスリートとしてトップ中のトップであることは間違いありません。昨日の試合もよく闘っていたと思います。ファンの人たちが観たいと思い、主催者がイシイ選手を挑戦者に選ぶのであれば、私は闘うだけです。

――昨日の石井選手の試合の感想をもうちょっと聞かせてください。

ムサシ 頭を使う賢い選手で、強い肉体を持っているなと感じました。もちろんテイクダウンはうまいです。ただ、パンチとテイクダウンの組み合わせがまだまだですね。グラウンドはうまいです。スタンドは正直、まだまだですね。

――将来、MMAの世界でトップに立つ器には感じましたか？

ムサシ 感じましたよ。若いですし、肉体的にも強いですし、柔道という別の競技ですけど、そこで優れたテイクダウン技術を持っているということも証明しています。ただ、時間は必要でしょうね。それは周りの関係者たちも考慮してあげなければいけないことで、下から経験を積み上げることが必要だと思います。たとえば、いますぐヒョードル選手と闘う、といったことは無謀でよくないことだと思います。

――あと、ムサシ選手は今後について昨日、「2～3年したらヘビー級でタイトルを獲り、それからその座をキープして、30歳ぐらいまでに引退したい」ということをおっしゃっていましたけど、それはご自身のなかで確定事項なんですか？

ムサシ はい。ただ、もの凄い大金を提示されたら考えるかもしれないですけどね（笑）。

――条件によるぞ、と（笑）。でも、30歳でとはちょっと早くないですか？

ムサシ 一つの階級で長いあいだ、その強さを証明することはできないかもしれませんが、3つの異なる階級で頂点に立つというのは自分のなかでは非常に大きな偉業になると思っています。あとは、先ほども言ったように、アメリカでも私の力を証明したいのでストライクフォースのベルトですね。それらすべての目標を30歳までのあと5年のあいだに成し遂げたいと思います。

――そう落ち着き払った口調で言われると、きっとそうなるんだろうなという気がしてきます（笑）。

ムサシ 自分のなかでは90パーセントの確率ですべての目標を成し遂げられると思っています。自信はあります。

――いまは誰とやっても負ける気はしないんだろうなというのも感じます。

ムサシ はい。準備さえしっかりすれば、いまは誰と闘っても勝てる自信があります。

【10年9月26日／名古屋市内・中部日本放送本社にて収録】



佐伯繁の男はつらいよ

第50作 記念特集

2010.10.24 JCBホール

DEEP 50 IMPACT

苦節10年、ナンバーシリーズも50大会目を迎えるDEEP。
格闘技界の荒波にもまれながら、中堅格闘技イベントとしていまやなくてはならない団体となっている。
そんなDEEPの50回大会開催を記念して、例によって佐伯代表にスポットを当てながら特集します！



ズンドコ

DEEP 50大会記念!

人間考察
佐伯繁 至近距離の真実



DEEP リングアナウンサー

お宮の松

DEEPのリングアナウンサーとして、いつもDEEPの興行では佐伯代表との軽妙なかけ合いが名物となっているたけし軍団のお宮の松。リング外での親交も深いお宮の松に佐伯繁至近距離の真実を語ってもらった。

聞き手&撮影／堀江ガンツ　SAEKI祭り試合写真／松澤チョロ

リングアナでツッコミを入れるのは
じつは佐伯さんの仕込みなんですよ

――今日は素敵なTシャツ（佐伯爆糖族Tシャツ）を着てきていただき、ありがとうございます（笑）。

お宮の松　在庫がたっぷり残ってるのもらったんですけどね。こんなの売れるわけねーだろって（笑）。ま、僕も糖尿病の予備軍なんで。

――そうなんですか？

お宮の松　僕は遺伝なんですよ。佐伯さんの場合は不摂生ですけど。

――そういう違いはあるけれど、お宮の松さんも〝佐伯爆糖族〟の一員ではある、と。

お宮の松　そうですね。僕も血糖値はけっこういってますから。ただ、佐伯さんみたいにインシュリンの注射は打ってないですよ。佐伯さんは以前、PRIDEのラスベガス大会へ一緒に行ったとき、「ハードロックカフェ」で食事をする前にもお腹に注射打ちだしてましたから。アメリカでいきなり注射持ち出すっておかしいだろって。店員がなんか怪しそうに見てるんですよ。

――インシュリンじゃなくて、違うもん打ってるんじゃないか、と（笑）。

お宮の松　完全にマークされてましたね。

――では、今日は佐伯さんのそういったエピソードをDEEPのリングアナであり、親交の深いお宮の松さんに語っていただきたいと思います（笑）。

お宮の松　でも、あまりへんなこと言ったら、「テメェ、コノヤロー！」って怒られるに決まってるんですけど……、まあいいですよね（笑）。

――まったく問題ないと思います（笑）。もともと佐伯さんと知り合ったきっかけはなんだったんですか？

お宮の松　サムライTVの番組ですね。僕が格闘技番組をやってまして、最初は『DEEP5th』ぐらいのときに初めて佐伯さんとお会いして。芸人である僕がドス・カラスJr. vs 中野巽耀のリングアナに挑戦するっていう企画だったんです。

――有明コロシアム大会ですね。

お宮の松　でも、お会いする前のイメージとしては、佐伯さんってもともと名古屋の風俗雑誌で成り上がった人だって聞いてたんで、もしかしたらバックに怪しい人がついてるかもしれないから、ヘタなこと言えないなって思ってたんですよ。

――会う前はちょっと強面を想像していた、と。

お宮の松　ところがお会いしてみると、なんか凄い気さくな感じだったんですよ。やたらしゃべりやすい人で、そこからですね。だから佐伯さんとの交流って、ホントはその有明コロシアムの企画だけのはずだったんですけど、思った以上に佐伯さんがグイグイ来たんですよ。ことあるごとに電話が来て「メシ食いにいくぞ」とか誘ってくるんで、自然と仲良くなって。そこからさらに交流が深まったのが、『サムライ祭り&SAEKI祭り2』っていうイベントなんですよ。

――ああ、佐伯さんがディファ有明で開催したハチャメチャなプロレス&格闘技イベントですよね。

お宮の松　そのとき僕に滑川（康仁）選手とフリーノックダウン制で試合やれって言われたんですよ。

――ありましたね、滑川康仁 vs お宮の松（笑）。

お宮の松　あの試合って、滑川選手はもちろん気を使って手加減してくれてはいるんですけど、僕に対しては「ガチでいけ」って言われてたんですよ。

――ということは、〝ケツ決め〟ナシ。

お宮の松　ケツ決めナシですよ！　でも、ケツは決まってないけど、僕はケツを蹴り続けられて、タオル投入で負けたんですけど、翌日、ケツの骨が折れてましたからね。

――尾骨骨折ですか？

お宮の松　そうです。骨が直角に曲がってたんですよ。病院でレントゲン撮ってもらったら「どこか高いところから落ちましたか？　スキーの最中にお尻から落ちたりとか」ってお医者さんに聞かれて、「いや、蹴られました」って答えたら、「蹴られてこういうことにはならないから」って言われて（笑）。

――一般人の蹴りじゃ、そうならないわけですね（笑）。

お宮の松　で、その尾骨って直角に曲がってても、生活に支障はないらしいんですけど「気になるなら、真っすぐに戻すやり方が二通りある」って言われたんですよ。一つは手術でバックリと開ける。ただ脊椎が近いから、どこかがマヒする可能性がある。もう一つは、ケツの穴に指を突っ込んで、おもいっきり真っすぐにするっていう。どっちも嫌じゃないですか、そんなの。

――嫌ですね～。下半身不随の可能性がある手術か、ケツの穴に指を突っ込まれるか（笑）。

お宮の松　だから僕の尾骨はいまだに直角に曲がったままなんですよ。で、佐伯さんは僕と滑川さんの試合をリングサイドで観て、「よく頑張った」みたいな感じで涙目になってたんですよ。

――佐伯さん、感動するとよく泣きますよね（笑）。

お宮の松　泣くんですよ。「うわぁ、泣いてくれたんだ」っていうところで、僕は騙されちゃいましたね。

――佐伯さんの自分に対する思いを感じてしまった、と。

お宮の松　そこからより親しくなって、clubDEEP富山とかに呼ばれて「オマエ、リングアナを練習でやれ」って言われてやらせてもらって。そこからちょこちょこ小さい会場で、リングアナの練習させてもらってたんですね。

――それがいまやメインのリングアナですもんね。

お宮の松　でも、それも後楽園大会のときにメインでリングアナをやってた方が、ラジオの収録かなんかでできないってことになって、「誰にすっかなぁ。オマエでいっか」って、凄く面倒くさい感じで振られたのがきっかけですからね（笑）。

――大抜擢で指名されたわけじゃない（笑）。

お宮の松　「しょうがないから、オマエでいいか」って感じですからね。そこから本戦のリングアナもやらせてもらってます。

――そしていま、ほかの団体にはないリングアナが代表にツッコミを入れながらやるっていうスタイルが確立されてますよね。

お宮の松　でも、アレじつは仕込みなんですよ。

――そうなんですか!?

お宮の松　僕がアドリブでつっこん



長らくサムライTVでPRIDEの番組を担当していたお宮の松は、あのPRIDEラスベガス大会にも参加。ここでも佐伯代表との珍道中になったということだ。

でるわけじゃなくて、佐伯さんに仕込まれるんですよ。佐伯さんが僕の横に来て「こう言え」とか「この選手にこういうツッコミしたらウケる」とか。で、確かにウケるんですよね。でも、そのおかげで俺、一度、髙阪（剛）さんに怒られそうになりましたから。

——何があったんですか？

お宮の松　僕が直接言われたわけじゃないんですけど、「試合をやる選手にああいうツッコミを入れるのは失礼だ。芸人だからって許されるものじゃないだろ」って怒ってたって話を聞いて。でも、そのセリフって佐伯さんに仕込んでもらったものなんですよ。

——ホントは代表である佐伯さんが失礼だった、と（笑）。

お宮の松　それを佐伯さんに言ったら「そりゃ、マズイなぁ。メンドクセーから、オマエ謝りに行け」って（笑）。

——ひどい（笑）。

お宮の松　まあ、あとでフォローしてくれましたけどね。だから基本的に僕のツッコミは佐伯さんの指示でやってるんです。たとえばDJ・taiki選手がマイクアピールのとき、マイクを壊しちゃったことがあったんですよ。それでちょっと会場の空気が微妙になったとき、すかさず佐伯さんが僕の耳もとで「なんか言え（ヒソヒソ声で）」って言ってきて、「なんて言うんスか？」って聞いたら、「請求かけろ、請求かけろ（ヒソヒソ声）」って言うから、「え〜、のちほどマイク代はDJ・taiki選手に請求したいと思います」ってアナウンスしたら、ワ〜ッとウケるわけですよ。

——絶妙ですね。

お宮の松　あとは、佐伯さん自身が挨拶するときとか、あの人、滑舌が悪くて何を言ってるかわからないときあるじゃないですか。そのときは僕がつっこんで、場を持たせたりとか。それをつっこまないでマジメにやってると、あとで「オマエ、なんのためにリングアナやらせてんだよ。こういうときにつっこむためだろう」って言われますからね。「そんなの聞いてねーし、初めて聞いたよ」って思いましたけど（笑）。

——それが回を重ねるごとにあうんの呼吸になってきたわけですね。

お宮の松　佐伯さんの気持ちが読めるようになってきましたからね。それはリングアナやってるだけじゃなくて、普段からメシ食いに連れていってもらったりとか、佐伯さんはサウナが好きなんで「サウナ行くぞ」って誘われたりしてるからなんですけどね。

——嫌でも佐伯さんのことがよくわかるというか。

お宮の松　知らなくていいことも知りますからね。たとえば、サウナなんかに一緒に行くと、途中から「おかしいな」って思うことがあって。

——どんなことですか？

お宮の松　佐伯さんって、露天風呂に入ってるとよく白目剥きながら「あぁ〜」って声出して、気持ちよさそうな顔をするんですよ。で、「どうしたんですか？」って聞いたら、「いやぁ、お風呂入るとよぉ、オレ、オシッコしたくなっちゃうんだよ」って。あの人、オシッコしちゃってるんですよ。

——えっ……、それって湯船の中ですか？

お宮の松　湯船の中ですよ！

——えぇ〜〜〜！

お宮の松　湯船の中だからわかんないと思って、オシッコしちゃってる。だから、一緒に露天に入ってて佐伯さんが白目になってると「またオシッコしてるでしょ？」とか言うんですけど、「バカ！　代表の立場があるんだから言うなよ、そういうこと」とか言って。皆さん、ホントに佐伯さんと一緒に風呂に入るときは気をつけたほうがいいですよ。

——どんなアドバイスですか（笑）。

お宮の松　ただ、そんな佐伯さんですけど、選手からは凄く信頼されてるんですよね。

——そうなんですよね。佐伯さんほど選手に信頼されてる人はいないんじゃないですか？

お宮の松　だってDEPやってて、金銭的には完全に慈善事業ですよ。

——とくに初期は佐伯さんの持ち出しで開催が続いてましたもんね。

以前、佐伯さんの部屋に泊まったとき寝言が「金ならもうない」でした（笑）

お宮の松　だから格闘技だと、よくジムの会長がお金をぶんどってるとか、そういう話があるじゃないですか。佐伯さんはそういうのが一切ないですからね。だから金銭面は凄くクリーンだし、対戦カードを組むときも、凄く選手のことを考えて組んでるんですよ。この選手がいまコイツとやったら身体にどうだとか、いまこの選手とやったら潰れてしまうから、もうちょっと若い選手をあてたほうがいいとか。

——観ておもしろいカードかどうかだけじゃなくて、そこまで考えてますか。

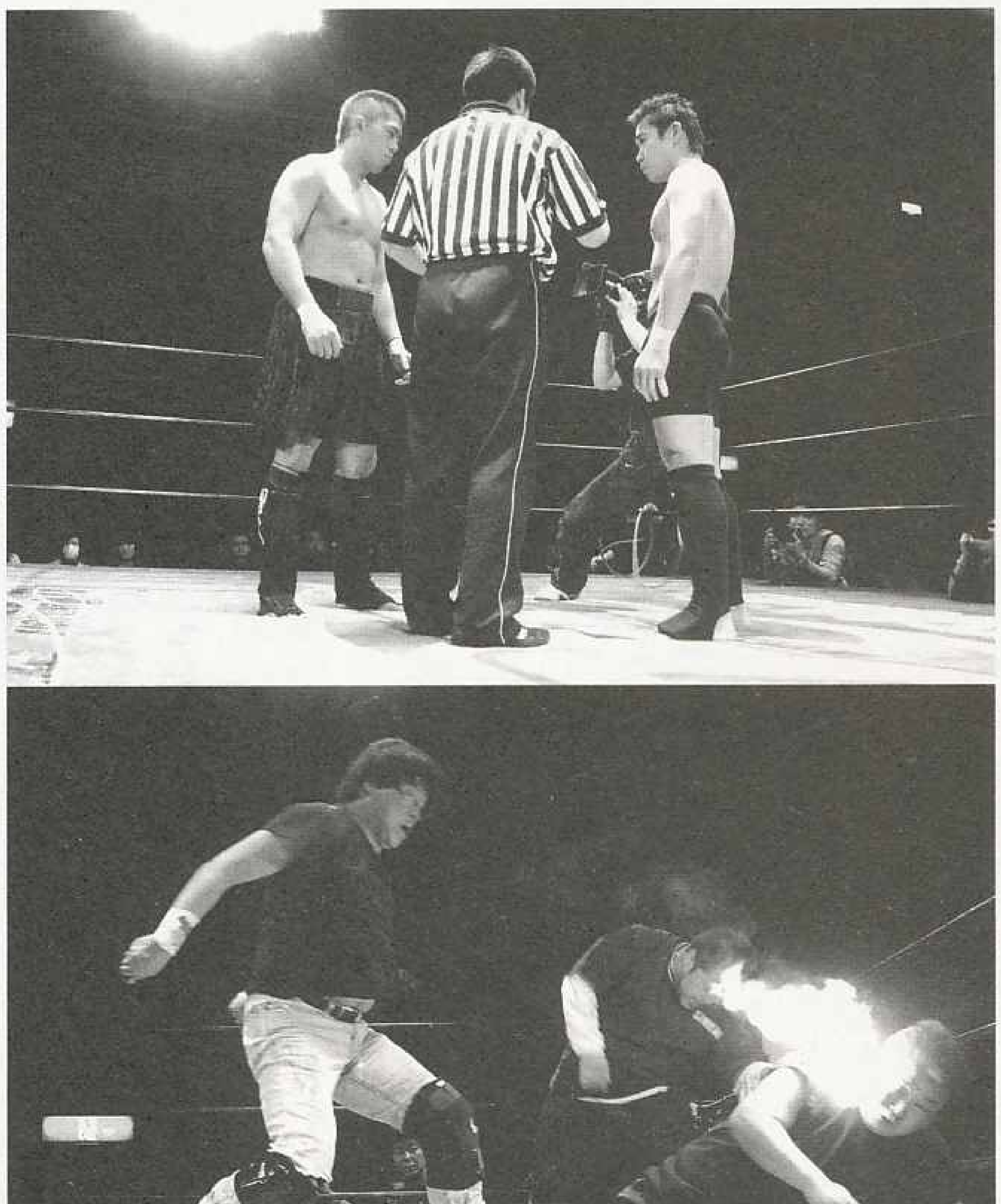
お宮の松　それで、佐伯さんは選手それぞれの試合をほとんど知ってるから、選手もやっぱ信用しちゃいますよね。だから、選手がたまに「なんでこのカードを組んでくれないんですか？」とか言ってきても「これには理由があって、こうこうこうなんだ」ってちゃんと説明できるんですよ。そうなるとやっぱり選手は納得するケースが多いですよね。

——佐伯さんはトップファイターから、アマチュアに近い選手までみんな詳しいですもんね。

お宮の松　ホント知ってますよ。ビックリするくらい。日本の総合格闘技は全部観てんじゃないですかね。そこはやっぱ尊敬しますよね。あとは尊敬できないですけれども。

——私生活は尊敬できない（笑）。

お宮の松　風呂場でオシッコしちゃったりするのは尊敬できないでしょ（笑）。でも、そこがかわいらしいとこ



2005年1月9日に行なわれた『サムライ祭り&SAEKI祭り２』で、お宮の松は滑川康仁とマジで対戦。鼻骨骨折の末、TKO負けとなった。なお同日、佐伯代表はなぜかニセ大仁田とプロレスで対戦。ファイヤーを顔面に浴びていた。

格闘技界、そして選手のためにも佐伯さんには長生きしてもらいたいです

ろなんですけどね。

―「かわいらしい」とでも言っておかないと、このエピソードはどうにもならないですからね（笑）。

お宮の松　ホント、このインタビューを佐伯さんが読んだらまた怒られますよ。「テメエ、コノヤロー。DEEP50回の記念で、なんでオレのオシッコの話がリークされてるんだ！」って、スッゲェ怒られるんだろうな（笑）。

―じゃあ、フォローのために、尊敬できる話ももう少ししておきましょうか（笑）。

お宮の松　尊敬できるところは、さっきも言ったように、とにかく選手のことを一番考えてることですよ。去年のDREAM名古屋大会の前ぐらいに、佐伯さんが「いやぁ～、まいったよ。こないだDEEPとDREAMと連チャンであって、『戦極』がどうのこうのもあってよぉ～。板挟みだわ～」とか言ってたんで、「ホントはそんなに悩んでないでしょ？」って思って頭を見たら、円形脱毛症が7個ありましたからね。

―あの円形脱毛症は僕も見ました。

お宮の松　それくらい悩んで選手のカードとかを決めてるんですよね。やっぱり一番デリケートな部分だから。

―しかも、佐伯さんが決めるのは日本人対決が多いから、よけいに気を使いますよね。

お宮の松　お互いに話をしてあげないといけないし、終わったあとは負けたほうにも勝ったほうにフォローを入れて。あれはなかなかできることじゃないですよ。

―それを10年近く続けてきてるわけですからね。

お宮の松　凄いことだと思いますよ。

―あれだけあったお金もどんどんなくなっていきながら（笑）。

お宮の松　「もう、全部戻ってこねぇ」って言ってました（笑）。以前、地方の大会に行ったとき、ホテルの部屋が空いてなくて、佐伯さんの部屋の床に寝かせてもらったことがあるんですよ。「エクストラベッドを入れるのもメンドクセーから床で寝ろ」とか言って。そしたら夜中に寝言で「金ならもうない、金ならもうない」ってうなってるんですよ。その寝言を聞いたときに、これはマジだなって。かわいそうだなって思いましたね（笑）。



おみやのまつ■1973年6月24日、福岡県出身。たけし軍団のメンバーであり、同じたけし軍団の無法松と「北京ゲンジ」というコンビで活躍していたが、2005年に解散。サムライTVではPRIDEやDEEPの番組を担当。DEEPではリングアナウンサーも務める。またボディビルにも励んでおり、「月刊アイアンマン」で連載も持っている。

お宮の松

―悪夢にうなされてたんでしょうね（笑）。

お宮の松　ホントですよ。なんの夢なんだろう、何に追われてるんだろうって。あんなに金持ちだった人が、寝言で「金ならもうない」ですからね（笑）。よっぽどリアルな夢を見たんでしょうね。億単位の金をDEEPに全部つっこんで、1～2年ですっからかんになったって言ってましたから。

―だって、第1回大会ですでにウン千万円の赤字だったんですよね？

お宮の松　そうそう。初期のことはずっとそんな感じですよ。唯一「マッハ（桜井"マッハ"速人）と長南（亮）の試合がちょっとプラスだったかな。あとはトントンだ～」とか言って。トントンって、ちっとも儲かってないじゃないですか。

―プラマイゼロってことですからね（笑）。

お宮の松　もっとプラスにならなきゃマズイでしょって。でも、なかなかならないらしいですけどね。ムリーロ・ブスタマンチvs桜井隆多をやったときなんか「ブスタマンチ呼んだおかげで、満員なのに赤字だわ！」って凄い怒ってましたから。

―満員で赤字になるって、おかしいですよね。

お宮の松　「ブラジルからセコンド何人も連れてきて、飛行機代だけでいくらかかると思ってんだ！」とかキレてるんですよ。そんな俺にキレられても知らねえよって。で、「あぁ腹が立つ～、唐揚げ食いてぇ。おし、メシ食い行くぞ」って、もう次の瞬間は忘れてるんですよ。

―イライラすると「もうコーラ飲んじゃう！」って人ですからね。糖尿なのに（笑）。

お宮の松　いつか血管切れんじゃねえかなって思ってるんですけどね。

―そして、10月の50回記念大会もまた、超満員になっても赤字だろうという豪華メンバーが揃いましたよね。

お宮の松　聞いたら、JCBホールがガッツリ超満員になって、ちょいプラスって言ってたんですよ。それで「ちょいプラスってどれくらいですか？」って聞いたら、「ホントにな、1万円いかないくらいなんだ」とか言って。「それ、トントンでいいですよ。むしろマイナスですよ、そんなの」って（笑）。

―50回記念のビッグイベントを大成功させて、儲けは数千円（笑）。まあ、18試合ぐらい組むって言ってましたからね。

お宮の松　そうなんですよ。リングアナの声もかれるっちゅうの。まあまあ、もちろんやりがいはありますけどね。

―では最後に、DEEP旗揚げ10年目を迎えた佐伯代表にメッセージをお願いします。

お宮の松　とにかく生きてください、と。選手にとっても、ファンにとっても、格闘技界にとっても、佐伯さんに生きていてもらわないと困るんですよ。いまこういう不景気の状況で、DEEPという中堅団体は厳しいと思うんですよね。でも、絶対に必要な団体じゃないですか。

―ホントそう思いますよ。


お宮の松　そのDEEPっていうのは、やっぱり佐伯さんだからできるものなんで。佐伯さんの後釜を誰かが継いでできるもんじゃないと思いますから。

―確かに、「DEEPがなくなったら、格闘技界が終わる」って言う関係者は多いですもんね。

お宮の松　そうですよ。DREAMのようなビッグマッチもDEEPがしっかりしてるからできるわけで。そのためにも佐伯さんには生きていてもらわないと。佐伯さんには、自分が生きることが、DEEPが生きることであり、選手が生きることであると思って、暴飲暴食はせずに身体をいたわってほしいですね。とにかく、佐伯さんには「生き続けてください！」これが僕からのメッセージです！

―了解しました。オシッコネタとともに、誌面を通じてお伝えしておきます！（笑）。

【10年9月22日／都内・某ファミレスにて収録】



DEEP創成期の立役者が激語り!

「佐伯さんが最も選手に愛のあるプロモーターだと思います」

ドス・カラスJr.との感動の再会秘話も披露!

元総合格闘家

謙吾

初期のDEEPは「格闘技のおもちゃ箱」と称されていたが、そのなかでも注目を集めたものといえば、謙吾vsドスカラスJr.の二連戦。今回は08年6月に現役引退してから専門誌の取材は受けていないという謙吾が、DEEP10周年のお祝いということで登場。あのドス・カラスJr.戦、そして親交の深い佐伯さんについて語ってくれた。

聞き手／高崎計三　構成／鈴木佑

佐伯さんは睡眠障害だから、運転してると信号待ちで寝てたりするんですよ（笑）

――謙吾さん、おひさしぶりです！

謙吾 うす。今日はいったいどうしたんすか？

――DEEPが10年目ということで、旗揚げ当時のキーマンである謙吾さんにいろいろお聞きしたいんですよ！

謙吾 キーマンっすか？ まあ正直、オレなんかよりもっと若い選手を取り上げてやってほしいんすけど、そういうことならいいっすよ。

――ありがとうございます！ ではさっそく、佐伯さんと最初に会ったのは？

謙吾 デビューした年（98年）ぐらいだと思いますけどね。佐伯さんは名古屋で風俗雑誌をやってて、趣味でプロレス・格闘技と関わってて、パンクラス名古屋大会に関わることになったのかな？ それで坂本（靖＝現パンクラス代表）さん、美濃輪（現ミノワマン）さんと一緒にプロモーションに行ったときに会ったとか、そういう感じだと思います。

――その頃、佐伯さんは110キロとかあった頃ですよね。

謙吾 そうっすね、睡眠障害ですよ。

――第一印象が睡眠障害？（笑）

謙吾 オレがよく覚えてるのは、佐伯さんが運転する車に乗せてもらって……たしかオレが助手席で、うしろに坂本さんと美濃輪さんが座ってて、佐伯さんが信号待ちとかで寝てたりするんすよ。睡眠障害だから、呼吸がアレで。「佐伯さん、やばいっすよ！」って起こしたのを覚えてますね。

――確かにドライバーが寝てたらやばいっすね（笑）。

謙吾 寝たらいびきがハンパないっすからね。オレは一緒の部屋で寝たことないけど、人に聞いたらいきなりいびきが止まって死んだかと思ったりするらしいんですよ。あと夢遊病じゃないけど、起き上がって歩き回ったりするんだけど、でも寝てるみたいな。最初からそんな感じですよ。

――糖尿病の治療もあるし、いまはだいぶやせましたよね？

謙吾 当時はホント太ってましたね。プロレスごっことか、よくやりましたよ。

――マジっすか！

謙吾 お互いにチョップ打ち合ったりしてね。当時、佐伯さんは名古屋市内でプロレスバーとかもやってましたから。ほかにも飲食店とかもやってましたよね。

――まだ羽振りがいい頃ですからね。

謙吾 めっちゃ金持ってましたよ。DEEPの旗揚げ戦って愛知県体育館でしたけど、選手はみんな名古屋のヒルトンホテルに泊まってましたからね。

――それは豪華だ（笑）。いかにもみんなにたかられそうですね。

謙吾 そうですねえ。そのなかでも坂本さんはたかりすぎですよ。

――ああ、あの人はいかにも（笑）。

謙吾 メシ行ったらすげえ食うし、メシじゃないときでもコンビニでカゴにパンパンに詰め込むぐらい買ってもらってましたからね。

――すげえ（笑）。

謙吾 それが坂本靖ですから（笑）。でもいろいろ食わせてもらいましたよ。佐伯さんの持ってた『辛辛』っていう店が多かったですかね。

――一緒に食べに行ったとき、佐伯さんはどんな感じで？

謙吾 いやホント、オレたちと一緒か、それ以上に食べてましたよね。あとハンバーグとかカレーとか、子どもが好きそうなもんばっかり頼んでました。

――そこはいまも一緒ですね（笑）。

謙吾 もう「糖尿病一直線！」って感じでしたよ（笑）。いつも「やせたほうがいいですよ」ってみんな言ってました。船木（誠勝）さんとかもかなり言ってましたけど、全然聞かなかったですね。



旗揚げ初期からパンクラスとの結びつきが強かったDEEP。近藤有己vsキックボクサー、鈴木みのるvsエル・ソラールをはじめとするルチャとの対抗戦など、いまでは考えられないような夢の企画が実現していた。

――で、いよいよDEEP旗揚げということになるわけですが、最初はパンクラスの興行を買うっていう話だったんでしたっけ。

謙吾 たしかそうですね。それが、船木さんだったと思うんですけど、「佐伯さん、どうせだったら自分でやっちゃいなよ」って感じで言って、なんだかんだでDEEPをやることになったんですよね。

――悪魔のささやきが（笑）。最初は「PRIDEをぶっ潰せ！」というのが目標だったと聞きましたけど。

謙吾 そんなノリでしたね。できませんでしたけど（笑）。

――グレイシーも来る一方で、謙吾さんには大刀光とドス・カラスJr.という強烈な相手が用意されたわけじゃないですか。言われたときはどう思いました？

謙吾 いや、べつに……。「あ、そうすか」みたいなノリでしたよ。ドス・カラスJr.はレスリングのオリンピック代表になるはずだったって聞いてたし、身体もめっちゃデカいし、そんなに驚くとかはなかったですね。

――じゃあ、わりと普通に受け入れられたわけですね。

謙吾 普通に腕を折られましたけどね（笑）、投げられて。

――（笑）。相手は総合格闘技初戦だし、まさかそんなことになるとは思ってなかったですよね？

謙吾 もちろんそうっすよ。そしたら、腕を折られて半年ぐらいなんにもできなかったですからね。でも、格闘家なんて結果がすべてで白か黒かしか残らないから、それを受け止めなきゃいけないですから。言い訳できないですよ。

――思わぬところでライバルができた感じですよね。

謙吾 まあでも、あの頃の自分にはよかっ

たと思いますよ。投げられて腕を折られて、『kamipro』には叩かれて（笑）、でもそれも人の意見だから受け止めて。

——受け止められたんですか？　いろんなところで「総合素人にやられた！」という感じで書かれてましたけど。

謙吾　いや————……、まあ、イラッとはしましたけどね。

——当時、「イラッと」ぐらいでした？

謙吾　いやまあ、ぶっちゃけムカつきはしましたよ。とくに『kamipro』なんか悪口しか書かないから。でもどうしようもないっすよね。しょせん第三者の意見だし。でも、そこまで書かなくてもいいんじゃないかなとは思いましたけどね。

——すいません（笑）。でもデビューからしばらく経った頃にその結果は、やっぱり痛かったですよね？

謙吾　そりゃ痛かったっすよ！　「バキーッ！」って言いましたからね。

——いやいや、もちろんそうでしょうけど、精神面の話ですよ（笑）。

謙吾　そうっすねえ。投げられたら腕がへんな方向に曲がってて、なのにドスがパウンドにきたんで、オレ、「ムリムリムリ！」ってリング上で言ってるんですよね。それでヒジは完全に外れてたんで救急車に乗って、病院で坂本さんに「オレ、辞めます」って言った記憶がありますよ（笑）。

——ホントですか！

謙吾　「オレこんな痛いこと、二度とやりたくない。もうイヤっすわ！」って。まあギャグで言った感じで、実際辞めるつもりはなかったですけどね。言われた坂本さんも笑ってましたよ。

——あれで、ドスの「チリマ」（フロントスープレックス）がクローズアップされましたよね。謙吾さんが入場でマスクを被って出てきたから、カチンときて奥の手を出した、的なことを言ってましたけど。

謙吾　あの入場は「相手がマスクマンだから被ろうか」ってぐらいで、全然意味はなかったですけどね。少なくとも、なめてはいないです（笑）。

——それで欠場期間があって、7ヵ月後の復帰戦が再戦になりました。

謙吾　やりたかったですからね。借りを返したいっていうだけで。

——で、名古屋での再戦にチョークで勝って。

謙吾　何回も投げられてね（笑）。

——さぞかしうれしかったんじゃないですか？

謙吾　そうっすね！（ひときわ大きな声で）あれはうれしかったですねえ（しみじみと）。

——あの名古屋大会は荒れてましたよね。

謙吾　ああ、ルチャと5vs5の対抗戦でしたからね。あれはおもしろかったっすね。

——鈴木みのる選手なんかは、ソラールに急所を蹴られて大荒れだったじゃないですか。

謙吾　ああ……べつにどうでもいいかなって。何かやってるなぐらいの感じでした。

——もう自分のことだけって感じですか。しかしドスとの2試合があったことで、謙吾さんにとってDEEPは大きかったんじゃないですか？

謙吾　そうっすかねえ。うーん、そうかもしれないっすね。パンクラスとはちょっと違いましたね。

——どんなところが？

謙吾　単純に違う大会っていうのもあるし、オレの場合はパンクラスの中でもちょっと立ち位置が違ってて、プロレス寄りの感覚で扱われてたってのもあって。まあ、それも時代ですかね。

——デビュー前の初お披露目が、『週刊プロレス』のスタジオ特写でしたからね！

謙吾　金になると思ったんじゃないですかね、会社は。デビュー戦もバス・ルッテンなんて、メチャクチャじゃないですか？　もしオレが社長だったらアマチュアからじっくりじっくりじっくり育てますけどね。

——あんなことはさせない、と（笑）。

謙吾　まあでも、自分も「そういうもんかな」と思ってましたけどね。いま思えば、総合格闘技の世界なんてオリンピックのメダリストが参戦してきてもすぐに通用するわけじゃないっていう、甘くない世界じゃないですか。でも昔はプロレス的な感覚もあったし、「そういうもんかな」みたいな。オレ自身も調子に乗ってた部分もあったし。

——自分としては、最初はイケイケだったんですか？

謙吾　そうっすね。ルッテンとやったときも「こんなもんか」じゃないけど、「いけるな」とは思いましたね。だけどそれから勝ててないし、自分が思うように結果がついてこないし。練習はしてましたけど……いまと違って総合格闘技自体がそんなに確立してないし、パンクラスもそうですけど、いまみたいな効率的な練習はできてなかったですしね。

——アマチュア大会とかも全然少なかったですし。

謙吾　そうっすね。それに比べたらいまは競技人口も増えて、そこからはよっぽど強くないと上に上がってこれないですけどね。

——だから謙吾さんのときみたいに、「隠し球」としてドカーン！　と出すなんてことはいまはもうできないですよ。

謙吾　そうっすねえ……。

——それこそ、刺青入れたってだけで大騒ぎだったじゃないですか。

謙吾　刺青ファイターも増えたからいいかなと思ってますけどね。「頑張れ、刺青ファイター！」って感じで、僕はいま、見守ってますよ（笑）。

——元祖として（笑）。DEEPの話に戻りますが、佐伯さんからは「エースとしてやってくれ」みたいな話とかなかったんで



01年8月の『DEEP 2nd IMPACT』で謙吾はドス・カラスJr.のチリマにより、わずか1R 50秒でTKO負け。そのリマッチとなった02年3月の『DEEP 4th IMPACT』では、チョークスリーパーにより見事にリベンジをはたした。

名古屋の再戦でドスに勝ったときはうれしかったですねえ（しみじみと）

今年、仕事関連でWWEに行ったら素顔のドスと再会したんですよ！

すか？　専属でやってくれとか。

謙吾　うーん……わかんないですけど、会社が放さなかったんじゃないですかね。そのへんはオッサンたちの話なんで、よくわかんないっす（笑）。まだパンクラス入って2年目ぐらいだし、なんだかわかんない世界だし。こういうもんかと思ってやってましたけどね。

——ドスとやったことで、ルチャとも妙な縁ができましたね。

謙吾　オレ、ついこのあいだ、メキシコに行ってルチャ観てきたんですよ。

——そうなんですか？

謙吾　帰ってきたばっかりなんですよ。お土産にマスクをたくさん買ってきました（笑）。

——ドスのは？

謙吾　ドスは買ってないですけど。オレ、いまはWWEグッズ関連の仕事をしてるんで、この前『ホール・オブ・フェイム』に行ってきたんですよ。そしたら、ヨシ・タツっているじゃないですか？　格闘技の練習に来てたときに一緒にやったりしてたから知ってるんですけど、あいつが「謙吾さんのことを知ってるって人がいるんですけど」って言って、なんかデカい、いい男が来たんですよ。

——そ、それは……!?

謙吾　顔を見たらなんとなくわかって、「おまえ、ドス・カラスか！」って言ったら「そうだ！」って言うからハグして。あの名古屋以来でしたからね。

——感動の再会じゃないですか！

謙吾　最近、WWEでデビューしたんですよね。その頃はトライアウトを受けて、WWEの下部団体でデビュー目指して頑張ってるって言ってたんで、「じゃあ、おまえがデビューしたらオレがおまえのTシャツ作ってやるよ！」って言って。

——おお、いい話ですねえ。

謙吾　いまはマスクをしないで出てるから、「ドス・カラスJr.」として出てほしいですけどね。

——「アルベルト・デル・リオ」ですよね。



けんご■1976年1月31日、埼玉県出身。学生時代はラグビーで日本選抜メンバーに選ばれるなど名を馳せ、98年9月にパンクラスのvsバス・ルッテン戦でプロデビュー。その後、DEEPや新日本プロレスにも上がり、05年8月に同団体を退団するとK-1にも参戦。08年6月に引退を発表した。

謙吾

でも彼も謙吾さんとの試合がきっかけで注目されるようになって、PRIDEにまで出たじゃないですか。

謙吾　ミルコとか中村カズとやりましたよね。頑張ってほしいと思いながらテレビで応援してましたよ。でもホント、ドスと会ったのはうれしかったですね。まさかWWEにいるなんて知らなかったんで。オレ自身も、WWEの仕事をすることになるとは思ってなかったし。

——それはどういういきさつなんですか？

謙吾　たまたまいまの会社で働くことになったら、会社がWWEのグッズを扱う仕事を始めることになったんですよ。それでそのブランドの担当をやることになったって感じですね。あれよあれよと（笑）。

——節目節目にドスが現われてますね（笑）。

謙吾　お互い「おお～っ！」ってなってハグしたのはうれしかったですね。

——それは佐伯さんに報告は？

謙吾　いや、してないですね（笑）。DEEPの会場にはなるべく顔を出すようにしてて、佐伯さんともちょっと前にひさしぶりに二人でメシ食ったんですけどね。いまの格闘技界のこととか、ざっくばらんに話しましたよ。

——「復帰しろ」とは言われませんか？（笑）。

謙吾　いや、それはないですね。オレがやる気ないのわかってるから。「プロレスやればいいじゃん！」とは言われますけどね。

——いいじゃないですか！　IGFとか。

謙吾　いや～……（笑）。ジムには週3回ぐらいは行ってますけど、前みたいには食べないから細くなりましたしね。それに、プロレスやったら飛びたくなるじゃないですか。でも、もうケガしたくないですからね。ホント格闘技やって、身体壊しただけでしたから。

——「だけ」ってことはないでしょう！（笑）

謙吾　いや、身体壊しただけですよ。おもしろかったですけどね。

——謙吾さんにとって佐伯さんとはどういう関係ですか？

謙吾　友だち……でいいんですかね？　まあでも、恩は感じてますよ。選手側の目線から見ると、あの人が一番、ファイターに対して愛があるプロモーターなんじゃないですかね。

——どういう部分に感じますか？

謙吾　マッチメイクとかも含めて、選手の気持ちを考えてやってくれてる気がしますね。

——身近に見ていた人がそうじゃなかったからよけいに感じるとか？

謙吾　ま～た、そうやってダークなほうに持っていこうとしてますね！（笑）

——いやいや（笑）

謙吾　まあとくに若いときなんて、上が何を考えてるかなんてわかんないですけどね。佐伯さんの場合は人柄ですかねえ。

——佐伯さんに聞いたところでは、謙吾さんを追いかけているうちにパンクラスのことが好きになったとか。

謙吾　そうなんですかね。まあ、髙橋（和生）さんとか鈴木さんは佐伯さんと同い年ですからね。

——そうは見えないんですけどね（笑）。

謙吾　髙橋さんがそれを知ったときに、「同い年だったのか！　オイ、佐伯！」って言ってたのを聞いたような（笑）。オレが最初の頃に会ったときなんか、30歳ぐらいだったってことですからね！　全然そうは見えなかったですけど。「プロレス好きな金持ちのオヤジ」でしたからね。「いいもん食ってそうだな、このオヤジ！」って感じで（笑）。

——（笑）。では最後に、佐伯さんに伝えたいことがあれば。

謙吾　早死にしないように頑張ってほしいですね。オレにできることだったらなんでもお手伝いしますよ。

——ありがとうございました！

【9月16日／都内・某所にて収録】

DEEPリングドクター兼サエキング主治医に聞く!

佐伯繁のズンドコ不健康ライフ



いままでよく生きてたなと思いました

このたびめでたく10周年を迎えるDEEPだが、佐伯さん自身の体調はこの10年ではたしてどう変化していったのか。佐伯さんの主治医でありDEEPのリングドクターを務める先生にその真相をうかがった。また佐伯さんを、そして日本マット界を救う大胆なプランまで提案してくれた先生。その方法とは!?

聞き手／高崎計三

――先生、今回はDEEP10年目&50回目記念ということで、お話を……あ、佐伯さんじゃないですか!

佐伯 あれ、今日はどしたん?

――いや、先生にインタビューさせてもらいに来たんですよ。佐伯さんは今日は診察ですか?

佐伯 いや、薬だけもらいに来て、もう帰るとこ。

X ちょうどいいから、佐伯さんも一緒にいたらいいじゃないですか!

佐伯 だいたい、なんの話なん?

――佐伯さんの身体のこととか、これまでのエピソードをうかがおうか、と。

X ね、だから一緒に!

佐伯 それ、オレがおったらおかしいやろ!

X べつにいいじゃないですか(笑)。

佐伯 いや、ありえんわ! 時間もないし、帰るわ!(と言って、去る)。

――ま、そりゃそうですかね(笑)。さて、まずは佐伯さんとの〝なれそめ〟からうかがいたいんですが、そもそも格闘技がお好きだったとか?

X ええ、もともと僕の親父の兄が日本拳法の道場をやっていて、そこの師範が猪狩元秀さんだったんですよ。だからK−1は93年にスタートしたときから観てて、格闘技は大好きだったんです。18歳ぐらいのときですよ。でも当時、キック系よりバーリ・トゥードのほうが好きで、幸田シャーミン司会のニュース番組で「アメリカでこんな野蛮な大会がある」っていって第1回UFCの映像が流れたんですよ。それ観てショック受けて、どうしてもこのビデオが観たい! っていって、当時入手するのに4万円ぐらいかかりましたよ!

――凄いファンですね! それで佐伯さ

血糖値も普通は高くても110～120以下のところが、佐伯さんは300～400

んとの出会いは？

X　もともと01年に旗揚げしたときから、村浜（武洋）選手とホイラー・グレイシーがやってたりして「この団体はなんじゃ？」ってことでDEEPのファンだったんですよね。だから初期の頃なんか、ずっと最前列で観てましたから。

――それはまたディープな（笑）。

X　まぁ、共通の知り合いがいたのと、ウチの実家って神田で看板屋をやってるんですよ。それで弟が継いでいるんですが、修行で名古屋の営業所で働いていたりして、そこからも共通の関係者と知り合いになったり、最初はそんなに会ったりはしてなかったんですよね。でもその関係者が、「ぜひ佐伯さんの健康診断をやってほしい」と。

――ああ～（笑）。

X　僕が働いている病院って神奈川の○○にあるんですけど、そこで検査してから、帰りにみんなで熱海に行きましょう、と。採血とかして、佐伯さんたちは先に熱海に行くじゃないですか。僕は仕事を終えてから、あとから行きますよ、と。それで検査の結果が出たら、いままでよく生きてたなっていうような数値なんですよ。

――いまより全然太ってる頃ですもんね。

X　で、僕もあとから熱海に行って、温泉の露天風呂に入って、そこで2時間、説教ですよ（笑）。

――露天風呂で2時間！

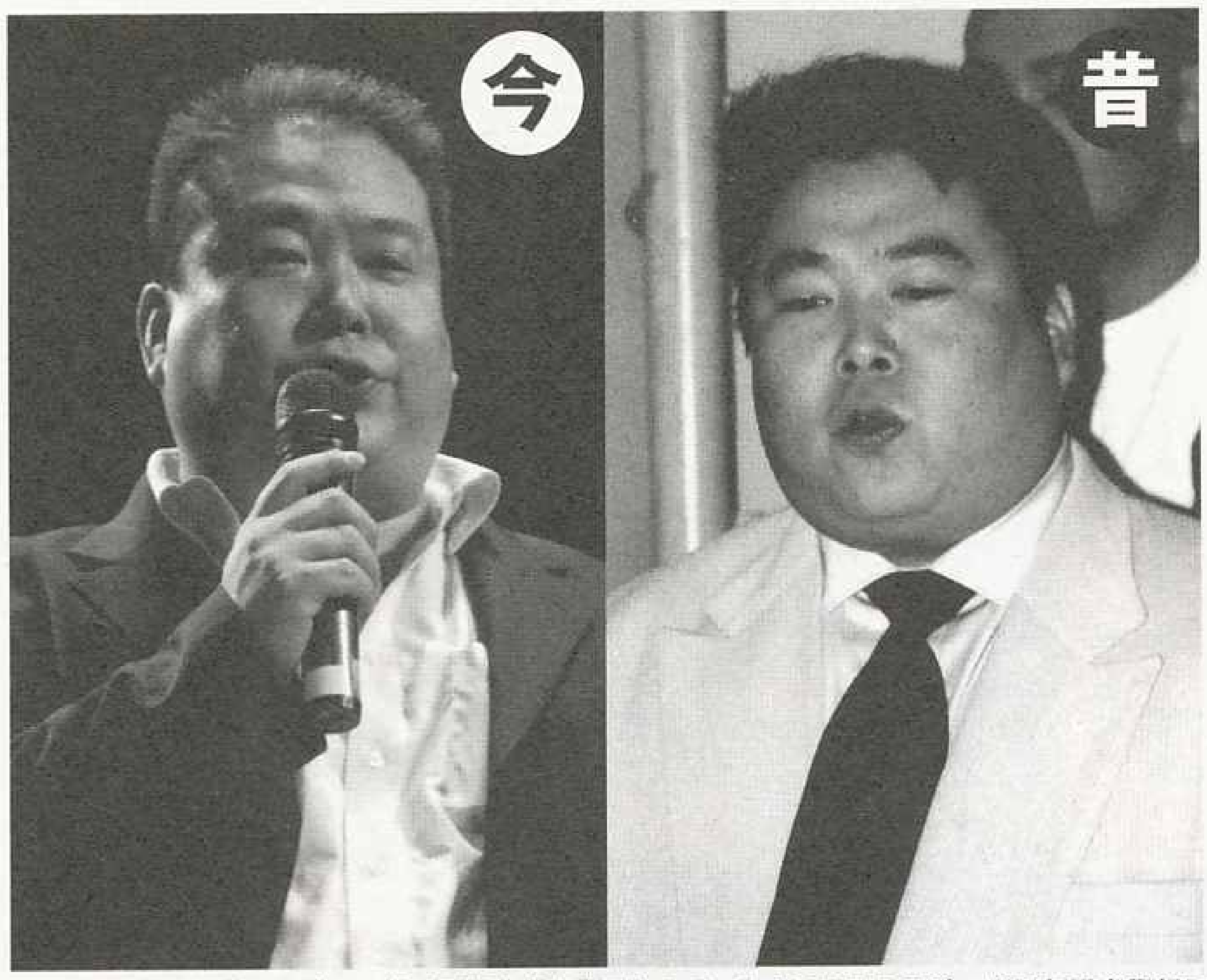
X　べつにいいんだけど、このまま治療とかする気がないんだったらそのままガムシャラに食って死になさい、と。その代わり、もしちゃんとやる気があるんだったら、ちゃんと診るよ、と。そしたら、「お願いします」って言うんでね。

――そんなに悪かったんですか。

X　そりゃそうですよ、見ればわかるでしょ！　ヘモグロビンA1cという、糖尿病の値があるんですけど、普通の人は5～6点以下なんですよ。それが11～12点。血糖値も普通は高くても110～120以下のところが300～400。

――はぁ～、それはたいがいですねぇ。

X　そうですよ！　でも僕は外科医なんで、ちゃんとした糖尿病の権威の先生に診てもらいなさいって。けっこう有名な先生なんですよ。それで最初はちゃんとやってたんですけど、だんだんとやらなくなって、いまに至っちゃってるんですよねぇ……。



佐伯さんの努力が実り、確かに昔の写真よりも若干やせているように見えるぞ。10周年記念興行に向けてさらなるダイエットをしているという佐伯さん。ぜひ細マッチョな姿を期待したい。

――ああ～……。

X　ただ、ご存知のとおり、佐伯さんの仕事ってめちゃくちゃストレスフルじゃないですか。その頃だとPRIDEのこととかもあったしね、夜中の仕事も多いし。僕は話をしていて大変だってわかるから。だから僕自身じゃなくて糖尿病の先生に診てもらってるんですよ。最初は僕と先生、向かい側に佐伯さんって感じだったんですけど、だんだんやらなくなって来なくなっちゃうんですよ、怒られるから。

――食事制限とかを守れないわけですね。

X　そう。最初はいい感じでやせていったんですけど、やらなくなったんですよね。だからそのうち僕が佐伯さんの隣で一緒に先生と向かい合うみたいになっちゃって。いまは完全に、僕が佐伯さん側で一緒に怒られてますよ。いまなんて「はい、はい、すいません。佐伯さんはホントにやる人なんで！　ねっ、佐伯さん!!」って感じで僕が先生に言い訳しています（汗）。

――付き添いの友だちじゃないんですから（笑）。

X　なんでオレがかばってんだろうってね。「佐伯さん、最近ホントに忙しいんです！　PRIDEっていうのが大変な状態でですね……」とか僕から糖尿病の先生に説明して（笑）。でもホント、佐伯さんはあの頃かなりひどかったですね。やっぱり相当なストレスがあったみたいで。最近も診察は来なくなっちゃってたんで、とにかく薬だけは飲もうよ、と。でも難しいんですよねぇ……。

――先生自身も厳しく言ったりするんですか？

X　僕は誰よりも厳しいですよ！　でも僕と会ってからはだいぶ違うはずですよ。もちろん、佐伯さんが努力したからなんだけど。初期のDEEPの映像とか観てみたら一発でわかりますよ。ひどいから！　そこから一時はライトヘビー級の93キロぐらいまで落ちたんですけどね。格闘技界の状況が悪くなってくると、佐伯さんの状態も悪くなるっていう。

――ああ、格闘技界のバロメーターなんですね。

X　そうですよ！　佐伯さんって皆さんもご存知のとおり、すっごく空気が読める人なんですよ。だからよけいに敏感なんですよねぇ。旗揚げしてたった10年なのに、いまや格闘技界の真ん中にいる人じゃないですか。

――円形脱毛症になってたときとかありましたからね。

X　そうそう。でも僕がちょっとムカつくのは、インシュリンを打ってることとかをネタにするじゃないですか！　人前でおもむろに打ち始めてみたりとか。

――僕も会見場で打ってるのを見たことがありますよ。

X　でしょう？　円形脱毛症のときも「みんな見て見て！」みたいな。「ねぇ、先生！」ってこっちに言うんですよ！「はいはい、悪いよ悪いよ」って言ってあげなきゃいけないっていう（笑）。

――はあ、裏づけ係になっちゃってるわけですね。

X　でも、実際に　悪いのは確かですよ。腎臓も検査のために一部取っちゃってますからね。

――ええっ！　それは出していい話なんですか？

X　だって、自分でネタにしてるもん（笑）。

入院してるときも「先生、サムライTV呼んだから！」って言ってさあ、病院にテレビ取材が来るってまずいんで。オレが病院の偉い人に隠れて「病院の名前出さないんで」って事務に連絡して許可取ったんだから。

――どこまで（笑）。

X　そのときにね、入院だから食事制限があるじゃないですか。だからどうしても腹が減っちゃうでしょ？　佐伯さんだし。それで我慢できなくて、コンビニに行ってカップ春雨とかのカロリー低いヤツを黙って買ってきたらしいんですよ。でも、お湯がないんですよ。

――そりゃそうだ。

X　そんなの食う人なんかいないから病棟にポットなんかないし、第一そんなことやったらバレちゃうじゃないですか。それでどうしようかと考えたあげく、風呂のお湯で作ったらしくて（笑）。

――えぇ～っ!!

X　その後、「先生、ありゃ食えんわ！」って言うんですよ。ま、「アホか」って言いましたけどね。

――もう、人間としてダメな人みたいじゃないですか（笑）。

X　いや佐伯さんは、人間のダメダメランキングの上中下で言ったら、「下」ですよね、確実に！　あるときなんて……（以下、ヤバいので中略！）。

――ヤバすぎる！　それは載せられないですよ！

X　でしょ？　まあでもね、冗談はさておき、いま佐伯さんの周りにいる人たちって、みんな佐伯さんのことが大好きなんですよ。DEEPの周りにいる人たちって、確実に佐伯さんのことを大好きな人たちですから。公武堂の長谷川社長にしても、選手たちにしてもね。皆さんもそうですけど、上司とかでホントに信頼できる人ってどれぐらいいますか？　僕もいまある程度の立場になりましたけど、上司でホントに腹割って話せて、自分のことを預けられる人なんてそうそういないですよ！　でも、佐伯さんにはすべてを預けられる。

――それを実感するのはどんなときですか？

X　興行でたくさん人が入って、いい儲けが出るとするじゃないですか。そういうときに、そのお金を懐に入れて「ラッキー！」って言う人じゃないんですよ。「これで、次はもっといい選手が使える」って言う人なんですよね。そういう人ってどの世界にも、いまいないんですよ！

――そうですねえ。

X　だから佐伯さんにしても長谷川社長にしても、お金に対して意地汚いところがまったくないし、彼らみたいにお金のこととかまったく心配しないで付き合える人ってそんなにいないんですよ。だからこそ僕も安心して、自分の身を削ってでも佐伯さんのことをどうにかしたいと思うんですよね。選手だってそうじゃないですか。帯谷（信弘）選手にしても青木（真也）選手にしても、DEEPのため、佐伯さんのためにって言いますよね。それって本心じゃないかと思うんですよ。

――長南（亮）選手もそうですよね。佐伯さんがいないとこの業界はエラいことになるって言ってて。

X　この前、大塚隆史選手が松本晃市郎選手に負けてタイトルを取られたじゃないですか。あの試合後、運営本部の控室に佐伯さんと大塚選手の二人だけがいて、佐伯さんが大塚選手を慰めてるんですよ。「今回はこういう結果だったけど、おまえの実力はまだまだやれるから、またもっと上にいこうぜ」ってね。僕、感動しちゃって……そんなプロモーター、いないですよ！

入院中、カップ春雨とかを食うのにお湯がないから、風呂のお湯で作ったらしくて

――なるほど。

X　素で選手や格闘技を愛してるんですよね。だからこそそれ以外はギャップがありすぎるというか……。この前ポーランド遠征に行ったときも、一人部屋じゃ寝られないって言うんですよ。僕がホテルとか手配したんですけど、変えてくれ、と。「先生、一人部屋だと絶対オバケが出るんです！　一人じゃ寝られないんですよ!!」ってちょっと怒り気味で真剣に言うんですよ。

――子どもじゃないんだから（笑）。

X　もうね、反論しようがないですよ！　M-1でオランダに行ったときも、向こうから夜中に電話がかかってきて、僕は仕事柄、夜中でも必ず電話に出るんですけど、佐伯さんが「先生、歯が痛い。どうしたらいい？」って。「……そうだね。頑張って薬局に行って薬を買ってね」と言うしかないでしょう！

――ホントに子どもだ！

X　そしたら「先生、それホント？」って言うんだもん！　で、帰国したら、すぐに歯医者に行けるように知り合いの歯医者に電話してね。

――お母さん状態ですね（笑）。

X　糖尿病の診察だって予約を取ってたら「インタビューがあるからそんな時間無理！」とか言うんですよ。「じゃあいいよ！」って電話切ったら、あとから「すみませんでした」って言ってくれるんですけどね。まぁ、「俺もちょっと言いすぎたよ……」って。でもまぁ、しょっちゅうケンカしてますよ、ガチで！　まあ本当によくケンカもするし、いろんな話もしますしね。

――相談役って感じですか。

X　いやいや、まったくそんな大げさなものではないですけどね。でも病院の仕事も忙しいんで、DEEPの年間スケジュールだけ休みを取ってる感じで、ホントに病院にいるか後楽園にいるかですよ（笑）。でも、DEEPのためなら頑張れるという



7.3『DEEP48』大塚隆史vs松本晃市郎のフェザー級タイトルマッチにて、チャンピオン・大塚は僅差の判定で王座陥落。落ち込む大塚を控室で元気づけていたというその行為こそ、佐伯さんが多くの選手に信頼されるゆえんであろう。

でもね、佐伯さんって医者じゃないけど ケガのこととかもわかるんですよ

か。佐伯さんには、大好きな格闘技に関わらせてもらっているのもありがたいですしね。感謝しています。

——DEEPでリングドクターをやるようになったのは？

X　まあいろいろあって頼まれたんですけど……本当はリングドクターとして格闘技を観るのは一番つまらないんですよ！　ドクターの立場としては「殴り合うなよ」と思いますからね。

——ああ、そうでしょうね。

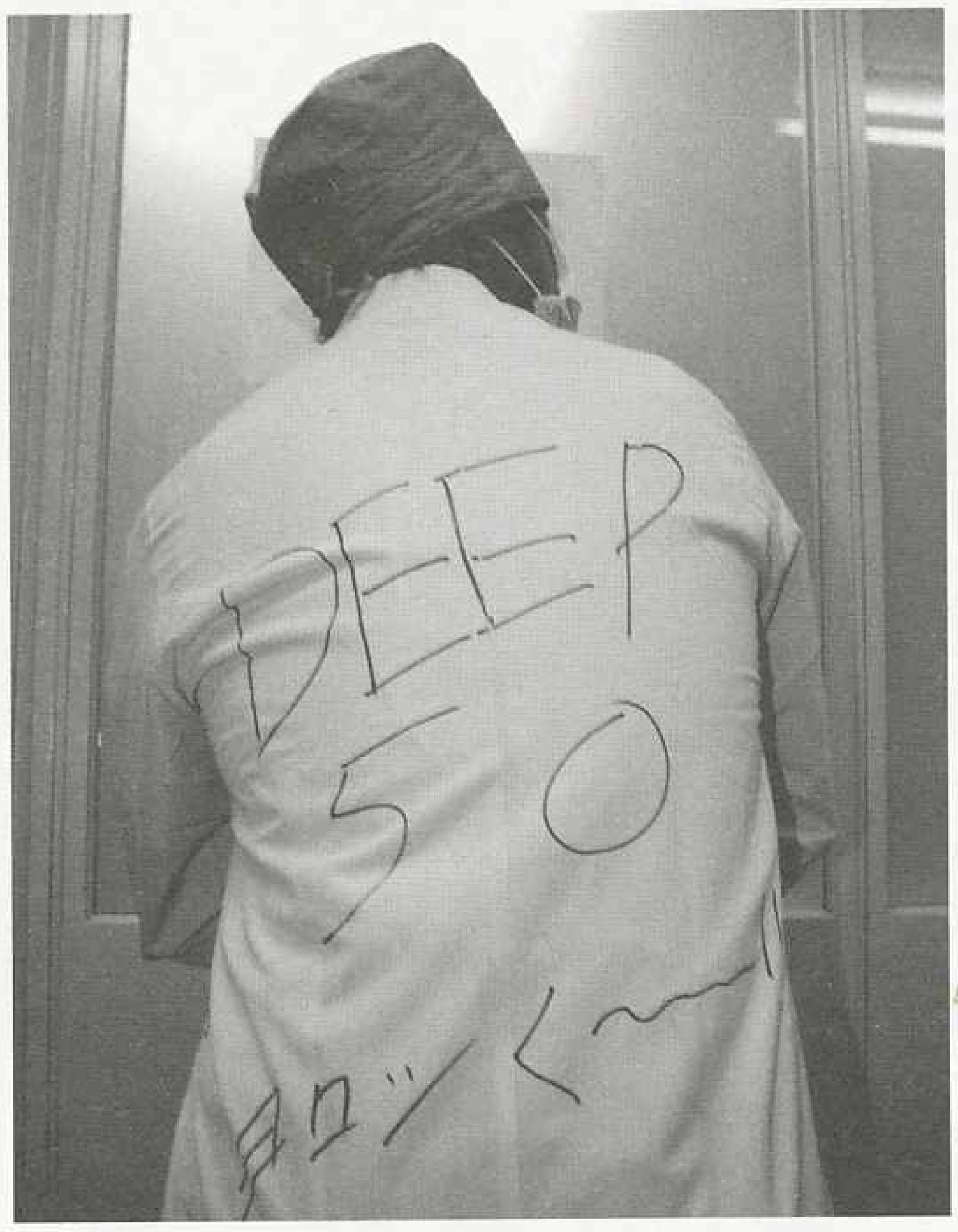
X　でも佐伯さんに頼まれたら断れないですからね。だから、僕の代わりにDEEPのリングドクターをやってくれる人を募集します！

——希望するお医者さんはDEEP事務局に連絡をください（笑）。

X　ぜひお願いします。まぁいろんなリングドクターの方々がいらっしゃると思いますけど、僕はリングドクターとしてこうしたいという思いとかはないんです。だから、僕だけの判断でドクターストップもしたくないんです。すべての基準や責任はプロモーターの佐伯さんにあるわけだから。だから、僕はいまの状況を冷静になんでも佐伯さんに話して「このケガだと今後こういう状況になりえる」とかいうのを必ず佐伯さんとレフェリーとセコンドに話します。でもね、佐伯さんって医者じゃないけどケガのこととかもわかるんですよ。そこでも空気が読めるというか。それに、選手がその試合にどれだけ懸けてたかなんて、本人にしかわからないじゃないですか。それを簡単に止められないですよ！

——……。

X　止める基準って、判断材料は何一つ決められてないんですよ。出血量、傷の深さ、腫れ具合……。すべてそのリングドクターが勝手に決めるんです。だからこの前のISEくんじゃないけど、セコンドとレフェリーを呼んで、「右腕が使えないってことは右腕が危ないだけじゃなくて、ガードもできないし、そのために下になってパウンドを食らったりするのがヤバい」と説明するんですよ。それを佐伯さんにも説明して、セコンドに「止めるなら、アンタらが止めろ」と。青木選手も前に言ってたけど、僕はセコンドの責任も大きいと思いますよ！　格闘技大会でリングドクターの権限なんて、これっぽっちもないんだから。それよりこれは格闘技ですから、ケガは絶対にするんですよね。だから、そのなかでいかに試合を成立させるかという面で努力することこそリングドクターの仕事じゃないのかなぁって。だから、こちらの意見をしっかり話して、あとは佐伯さんに委ねるのが基本だと思ってますね。それほど、僕は佐伯さんの判断能力を信頼しています。



名前と顔はヒミツな佐伯繁の主治医。無類の格闘技好きであり、DEEPではリングドクターを務めている。また、佐伯さんのノリで突然選手の公開練習に付き合わされることもあり、三島☆ド根性ノ助との公開スパーでは肋骨を折っていたことが発覚。佐伯さんの健康を管理するという重要な任務を背負っている、ある意味、日本マット界を救う役目を担う人物。

——なるほど。

X　でもセコンドは、「オレたちにはわからないからドクターに止めてほしい」って言うんですよね。まぁそれもそうで、だからその狭間でいつも悩むんですけどね。だけど僕は、佐伯さんの判断で「それはおかしいでしょ」と思ったことは一回もないですから。ケガに関してもね。

——格闘技に関しては（笑）。

X　ほかの団体はさておき、DEEPは佐伯さんに任せておけばトラブルとかになりようがないというのがわかりますからね。まともだもん、あの人。「DEEP＝佐伯さん」というのはもの凄い強みですよ。手術が必要な選手とかも、術前・術後リハビリの進み具合やあとのケアもしっかりするし、いいことはすぐ取り入れるし。選手のカルテ管理とかも提案したらすぐやってくれるしね。

——ところで、そんな先生がなぜかDEEPの公開練習に参加してたことがありましたよね？

X　ああ、三島☆ド根性ノ助選手のね。僕はたまたま三島選手とも仲良くしていて、彼が公開練習でDEEPジムに行ったときも何かの用事で一緒に行ったんですよ。それで佐伯さんに「今日は何やるの？」って聞いたら、なんにも決まってないと。そしたら佐伯さんが「三島くん、サンドバッグやるのと、先生とスパーやるのどっちがいい？」って急に聞きだして、三島選手も「じゃあ先生と」ってさぁ！

——あれよあれよと（笑）。

X　顔が出せないからマスクしてやったんですけど、あれで僕、肋骨折れたんですよ！

——ええっ！

X　バキッ！　っていって痛くてさぁ、診てもらったら折れてたね。あとから三島選手に言ったら、「そうですか。やっぱり素人の人って弱いんですね」って！

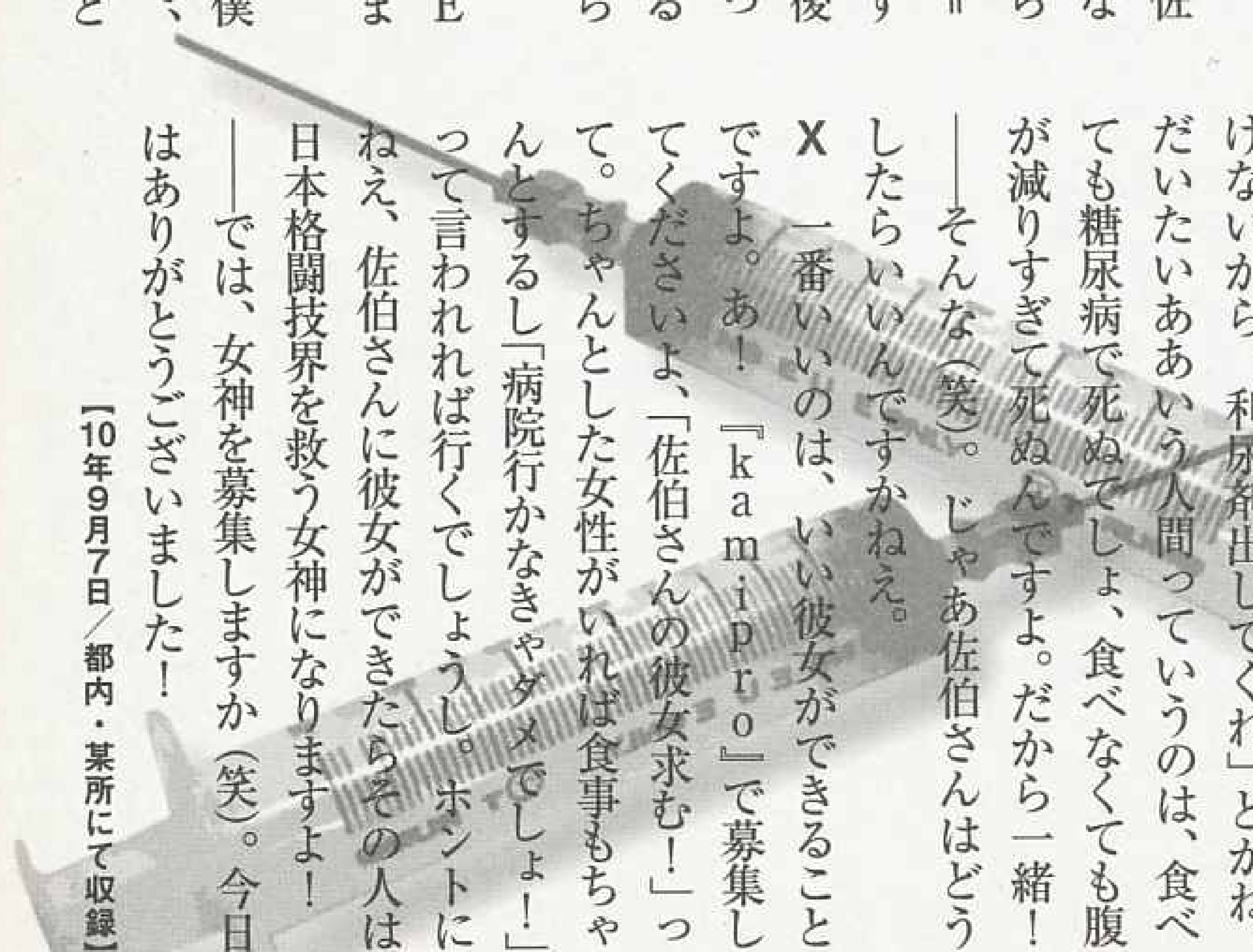
——ひどい！（笑）　ところで佐伯さんがいまやってる減量はどうですか？

X　やめろって言ったんですよ、僕は。期間限定なんて、意味がわからないから。まあそのうち、泣きついてくるんじゃないかなぁ。「先生、あと何キロ落とさないといけないから、利尿剤出してくれ」とかね。だいたいああいう人間っていうのは、食べても糖尿病で死ぬでしょ、食べなくても腹が減りすぎて死ぬんですよ。だから一緒！

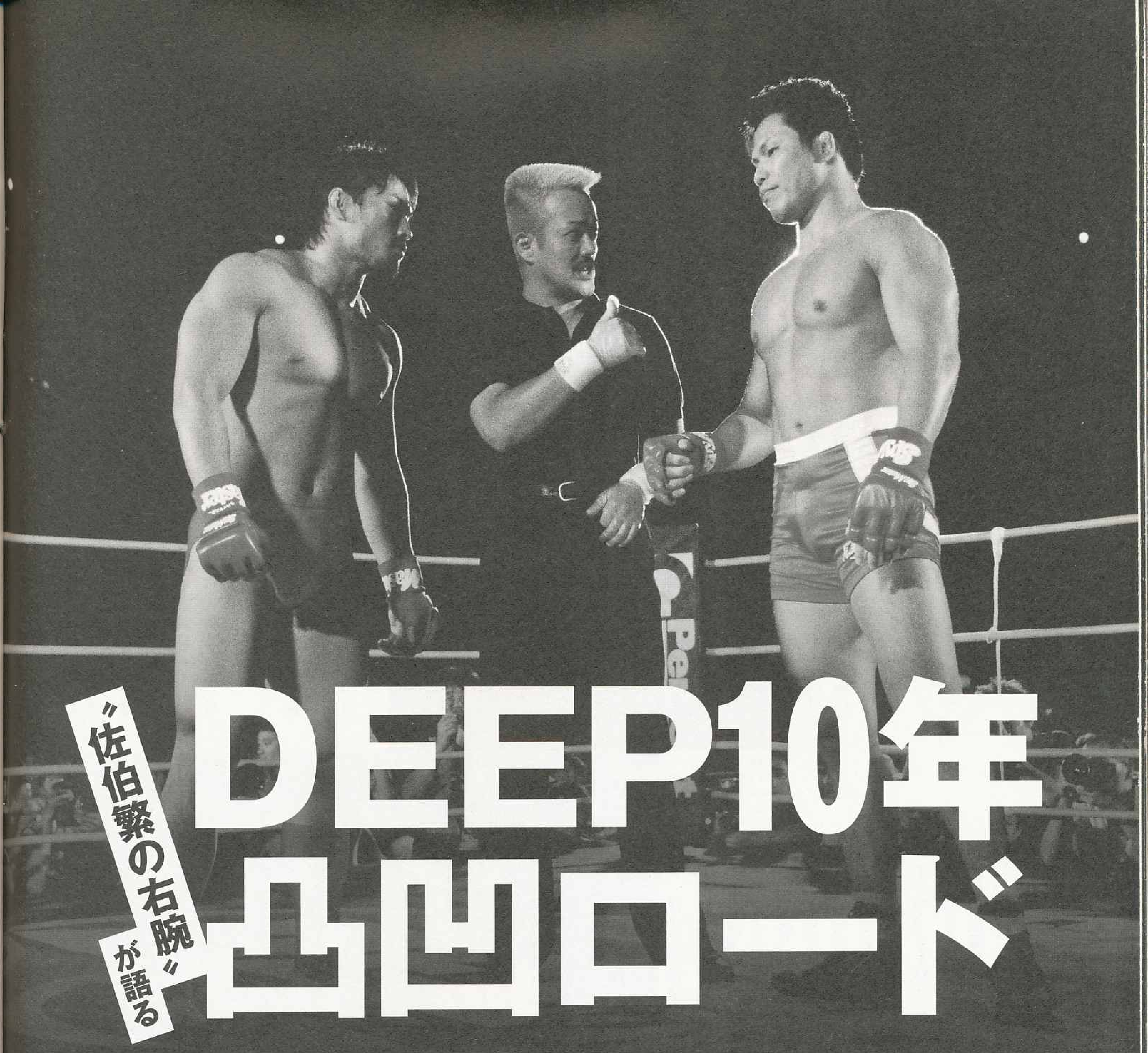
——そんな（笑）。じゃあ佐伯さんはどうしたらいいんですかねえ。

X　一番いいのは、いい彼女ができることですよ。あ！　『kamipro』で募集してくださいよ！「佐伯さんの彼女求む！」って。ちゃんとした女性がいれば食事もちゃんとするし「病院行かなきゃダメでしょ！」って言われれば行くでしょう。ホントにねえ、佐伯さんに彼女ができたらその人は日本格闘技界を救う女神になりますよ！

——では、女神を募集しますか（笑）。今日はありがとうございました！



【10年9月7日／都内・某所にて収録】



〝佐伯繁の右腕〟が語る

DEEP10年 凸凹ロード

小松憲吾

DEEP10周年を語るにふさわしい隠れキーパーソンが登場！ DEEP旗揚げ以前から佐伯さんを知りつくすDEEP取締役の小松憲吾氏である。旗揚げ当時がどんだけどんぶり勘定だったかを語っていただいたのだが、ホントに凄い！

聞き手／高崎計三

——小松さんはいままでこういう取材の機会がありませんでしたが、〝佐伯さんの右腕〟的存在だとうかがっております。

小松　そこまでのものかどうかわかりませんけど、もう佐伯さんと一緒にやって長いですね。

——『kami-pro』初登場ということで、自己紹介といいますか、お立場をご説明していただけますか？

小松　DEEPの取締役もやってます。佐伯さんが代表取締役で。大会のなかでは、いまはこれという役割はないんですけど、大阪にスポンサーがいるというときには佐伯さんと一緒に行ったりしてる感じですかね。

——確かに右腕じゃないですか！　そもそも佐伯さんとの出会いは？

小松　もともとは16年前、僕が22歳のときに名古屋の出版社に入ったんですが、そこが佐伯さんの会社と関係が深い会社でした。佐伯さんが社長兼カメラマンという感じで。僕は営業だったんで、仕事を取ってきたら佐伯さんに依頼して、写真を撮ってもらうという関係でした。

——ああ、なるほど。佐伯さんの会社が景気がいい頃ですか？

小松　ちょうど右肩上がりでしたね。名古屋で風俗雑誌をやってたんですけど、毎月100～200ページずつ増えていって、最終的には1500ページぐらいになったんですよ。

——ええっ、1500ページ!?

小松　電話帳みたいでしたよ（笑）。名古屋で風俗ブームの真っただ中で、『トゥナイト』ってテレビ番組から取材に来たりしてましたからね。

——佐伯さんはカメラマンをやってたんですね。

小松　僕がいた頃はまだ現場に出てましたね。普通にカメラバッグと三脚を担いで、クラブとか街の女の子を撮りに行ったりしてたんですよ。で、佐伯さんの会社は親会社からある部分を任されてページを作るっていう感じだったんですね。それでであるときから、大阪に関しては佐伯さんの会社に全面的に任せるみたいなことになって。

――カバーする範囲が広がったんですね。

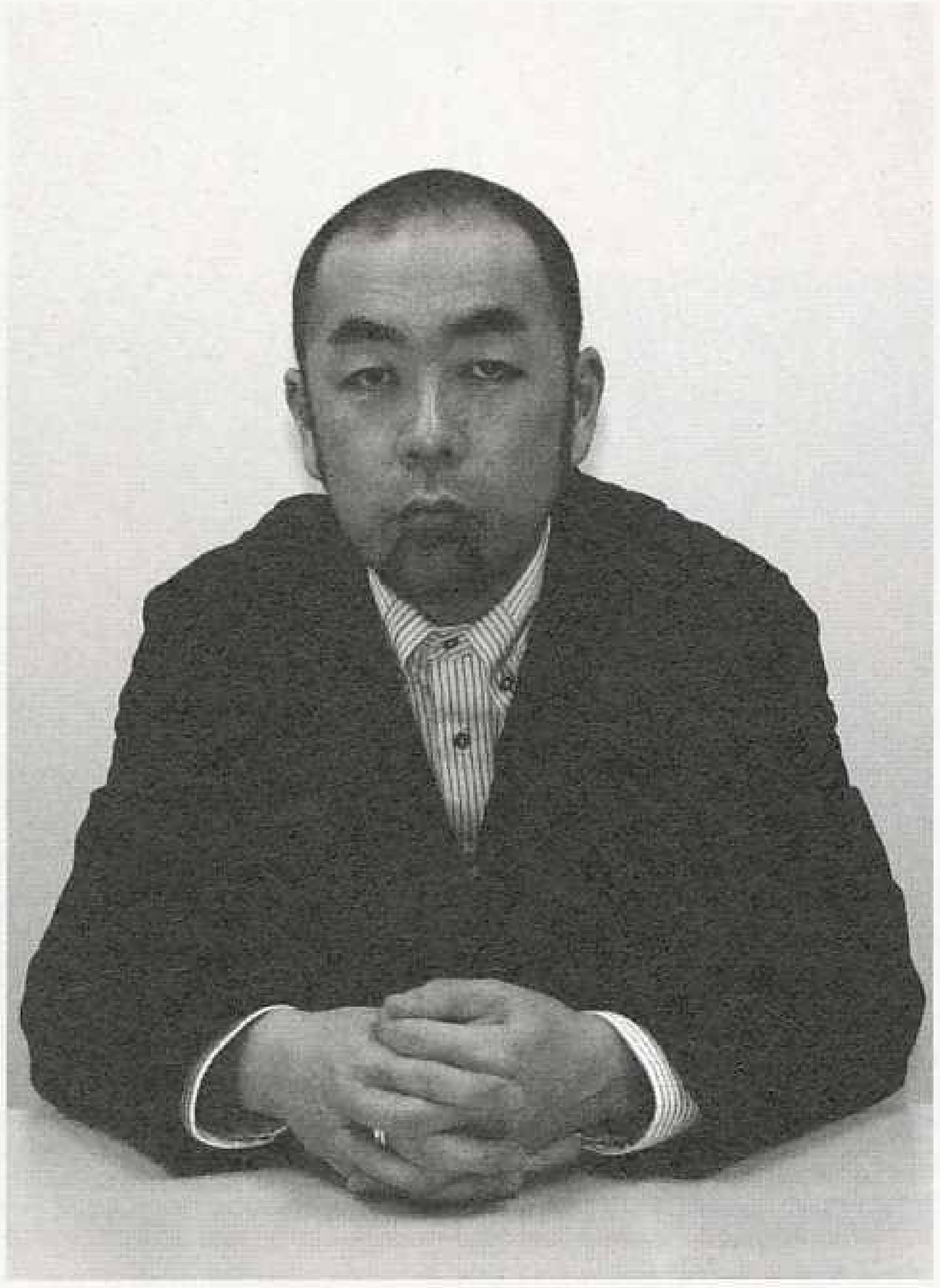
小松　でもその頃、僕は違う会社に移ってたんです。それで車で名古屋市内を走ってたら、ちょうどカレーのココイチから佐伯さんが出てくるところが見えたんですよ。

――ココイチってとこがまた佐伯さんらしい（笑）。

小松　それで声かけてひさしぶりに話したら、「そうだ、おまえいま何やってんだ⁉」って言うからあらためて会って話したんですよね。その頃、佐伯さんはCMLLジャパンのマスカラス興行とか、ちょっとあとになるとバトラーツのロード・ウォリアーズ・シリーズとかの興行をやったり、名古屋でプロレスバーをやってたんですよ。そのスタッフを僕にやらせたかったらしくて。ちょうど僕も1年ぐらい飲食店で働いてましたからね。でも飲食はちょっと違うなと思い始めてて、それは断ったんです。

――はいはい。

小松　そしたら、「大阪の仕事が増えたんだけど営業がいないから、代理店をやらないか」と。それがあって、僕は大阪に行くことになったんですよ。ちょうどその時期は大阪プロレスが立ち上がる頃で、佐伯さんの会社でパンフレットを作ったりとかもしてたんですね。ほかには謙吾の写真集の話が持ち上がって、そこからP'sLAB大阪をやるということになって。それは会社と別にしたいから手伝ってよと言われていろいろボランティアで手伝ってたんですよ。仕事ももらってましたからね。それが、あるとき急に団体を立ち上げることになった、と。それがDEEPです。



当初はパンクラスの西日本のイベントを担当する話で進んでいたようだが、ご本人の器がそうさせたのか、DEEPを旗揚げするに至った佐伯さん。しかし、現パンクラス代表の坂本氏（写真）の武勇伝もなかなか凄い。

もともとパンクラスの西日本のプロモーターをやるはずだったんですけど、船木さんに……

――急にそんな話になったんですね。

小松　もともとはパンクラスの西日本のプロモーターをやる話だったんですけど、船木誠勝さんに「自分の名前でやればいいじゃないですか」って言われて、DEEPになっちゃったんですよね。

――でも西日本を一手に引き受けようかというぐらい、金持ちだったってことですよね？

小松　金は凄くありましたよ。でも、生活自体はいまと変わらないんですよね。再会したきっかけもココイチでしたし、サービスエリアでバカスカ食うのが好きだったり。金持ちだからいい生活してたかというとそんなでもなかったですね。まあいまと同じぐらい太ってて、ちょうど鼻の手術をした頃かな？

――鼻の手術ですか？

小松　太りすぎてて鼻が通らなくなってたんですよ。

――太りすぎで？　そんなの初めて聞きましたよ！

小松　凄いでしょ？（笑）。その頃から「あと3年で死ぬって医者に言われたよ！」って言ってましたからね。だから僕からしたら長生きしてるほうですよ（笑）。

――よくもってる、と（笑）。

小松　その頃はいまよりヒドくて、話す言葉ももっと聞き取りづらかったですしね。それと不眠症というか睡眠障害ですね。あるとき僕が広告の仕事を取ってきて、撮影をお願いするじゃないですか。現場でなかなかシャッター押さないなと思ったら、そのまま寝てましたからね。

――マジですか！

小松　これは実話ですよ。撮影中に、カメラをのぞき込んだまま寝てたっていう。それで2001年1月にDEEPを旗揚げして、3月にP'sLAB大阪が始まったんですよね。だからその頃はパンクラスの坂本（靖）さんがべったりで、よく大阪に行って接待を受けまくってましたよ。

――坂本さんが佐伯さんにたかってた話はほかでも聞きましたよ（笑）。コンビニでもカゴいっぱいに買い込んでたとか。

小松　大阪に来るときは佐伯さんも坂本さんもホテルだからコンビニに行くわけですよ。だから佐伯さんのカゴにどんどん入れてて。それでしまいにはひげ剃りとか、あきらかにその場では必要ないものもどんどん買ってましたからね（笑）。

――何か坂本さんの武勇伝みたいになってきました（笑）。

小松　まあそんな感じでDEEPが始まって。でも最初は会社の税金対策でやってるところがあったんで、「儲からん儲からん」といっても、そこまで大変そうでもなかったんですよ。2回目の横浜文体ぐらいまでですかね。まだ口座にだいぶ余裕もあったみたいで、あんまり金がないとは言わなかったんですよね。僕もその頃は空いてたら手伝いに行くぐらいのスタンスだったんですけど。

――そこまではまだべったりではなかった、と。

小松　はい。で、3回目のディファでビクトル・ラバナレスとかカネックを呼んで、6回目が有明コロシアムですよね。

――田村潔司vs美濃輪育久が行なわれた大会ですね。

小松　その頃ですよね。佐伯さんはエア・サプライってバンドが大好きなんですけど、その全国ツアーがあって、大阪に観に来る、と。それで「おまえのチケットも取ったから来い」って言うんですよ。僕がそういうのにまったく興味がないのをわか

ほとんど満員なのに赤字だったりして「どういうことなんですか」とか

小松賢吾

って言ってくるんで、これは何かあるな、と。そしたらそこで、有コロ（有明コロシアム）がお金の面で大失敗だった、と。それで、プロレスショップはもう閉めてたのかな？　あと一番デカかったのは、「しげた」という焼肉と鍋の店を出してたんですけど、それが毎月○○万円の赤字だ、と。「どうしたらいい？　オレは」って言うんですよ。

——そう言われても困っちゃいますよね。

小松　それにP'sLABも、佐伯さんが大阪にあんまり来られないから東京中心でやらないとしょうがないし、パンクラスの道場をDEEPがをやってるのもへんだし。それもひっくるめて「どうしようか」と言うんですよ。それで僕がP'sLAB大阪を引き継いだんです。会社も手伝ってくれと言われ、一緒にやろうと。それには僕は乗ったんですよね。

——そこで正式にパートナーになったわけですね。

小松　ただ、いままで僕は佐伯さんが有コロでやりたいとか田村さんを出したいとか言ってたのを、ちょっと危険だなという目で見てたわけですよ。それで儲かるならいいですけどね。だから、それからは後楽園ホールとかで堅実にやっていくことにしました。だからいま思えば、そこからがDEEPの新しいスタートだったのかなと思います。

——九死に一生を得たわけですか。

小松　それまでは凄かったですもん。有コロに手伝いに行って、夜、ホテルに帰ってくるじゃないですか。で、「今日は○千万円単位の大赤字だ。こりゃあと10万多くなっても一緒だな」って言って凄く高い焼肉を豪勢に食いに行ったんですよね（笑）。

——大会の赤字に比べたら屁でもないと（笑）。

小松　それから佐伯さんは開き直って、いろんな媒体で「金がない」って言うようになったし、締めるところはちゃんと締めるようになったんですよ。それでいまのDEEPに至るようになったんじゃないですかね。



近年、本戦はほぼ後楽園ホールで開催されているDEEPだが、一時期は有明コロシアムでの大規模興行を行なっていた。取締役である小松さんは、いまも当時のようなどんぶり勘定で興行を開催していたらきっと気が気じゃないだろう。

——最初の頃は大会への金のかけ方も凄かったんですよね？

小松　凄かったですよ！　最初なんて全員名古屋のヒルトンに泊まって、打ち上げも結婚式場みたいなところに寿司の屋台とかいっぱい出してましたからね。それで、別の大会の関係者たちが名古屋に来て、「DEEPですけど」って言っただけで勝手にヒルトンに泊まれたっていう（笑）。そのぐらいどんぶり勘定でしたよ。

——泊まりにくるほうも凄いですけどね（笑）。でもお話をうかがっていると、すぐ終わるズンドコイベントの典型パターンじゃないですか。

小松　ホントですよ。当時の佐伯さんじゃなかったらすぐ終わってたでしょうね。会社にいた最後の頃でも、月の給料が○千万円で、それ以外に会社が年間○億納税してたらしいですから。

——うわ！　そりゃもう大セレブじゃないですか！

小松　その頃フェラーリを買いに行ったらしいんですけど、フェラーリってバケットシートじゃないですか。乗ったらハマっちゃって抜けられなかったらしいんですよ（笑）。それでダメだっていうんで、その足でポルシェを買いに行って現金で買ったらしいですよ。

——いまからは考えられない感じです！　しかし、もしいまだったら小松さんの立場だと笑ってられない話ですよね。

小松　そうなんですよ。佐伯さんにもし何かあったら僕のところに来ることになりますからね、役員という立場上。だから佐伯さんに言うことは言う役目にはいるんですけど、最近はこれといって言うこともないんですけどね（笑）。前はありましたけど。ほとんど満員なのに赤字だったりして「どういうことなんですか」とか。「佐伯さんがそれを言うのはいいですけど、傍から見たら頭悪いと思われますよ」とかね（笑）。でもまあ、難しいんですよ。東京と大阪だからずっと一緒に何かやってるというわけでもないですしね。それに佐伯さんもあんな身体だから、急に死ぬこともあるわけじゃないですか。そうなったらどうするか考えなきゃいけないっていうのはありますね。

——もし何かあったら、それも小松さんのところに来るわけですね。

小松　そうですね。佐伯さんからも「そりゃおまえになるわなあ」って言われました。いいかげんな感じでね。「どうしたらいいの？」って話ですよね？

——確かに（笑）。

小松　あの人のようには絶対できないですからね。でも僕とスタッフがお金の支払いとかもやることになるんで、知っとかなきゃなっていう感じでやってますね。

——ずっと佐伯さんと一緒にやっている理由というのは？

小松　なんですかねえ。まあ佐伯さんって情が深かったり、「人たらし」的な魅力があるじゃないですか。そっけない魅力もあったりしながら、話すと凄く心を開いて話してくれたりするんですよ。それで、「まあいいか！」みたいな（笑）。

——なるほど！　ではこれからもDEEPをよろしくお願いします（笑）。ありがとうございました！

【10年9月某日／電話取材にて収録】

こまつ・けんご■DEEP取締役。佐伯さんがカメラマンの頃からの知り合いで、佐伯さんのラブコールによりDEEPを手伝うことに。現在は大阪を拠点に、"佐伯繁の右腕"として格闘技界を支えている。

グラドルは女子プロを救う!?

夜のお供からリングのお供になります♥



10.31『ゆずポン祭』でプロレスデビュー!!

問答無用のバスト100cm
愛川ゆず季

100cmのバストを武器にグラビア界を席巻するアイドル、愛川ゆず季が、な、な、な〜んとプロレスデビューすることが決定! 今回は今年引退した人気レスラー風香の指導のもと、絶賛特訓中のゆずポンに直撃取材を敢行! とにもかくにも、でっかいことはいいことだ! ダッダ〜ン、ボヨヨン! ボヨヨン! (not中井りん)。

聞き手／鈴木佑　撮影／金山フヒト

—いや〜、今回は有名グラドルがプロレスデビューということで、ワイドショーでも取り上げられたり注目を集めてますね！

愛川　ありがとうございます！　そう言ってもらえるとうれしいです（ニッコリ）。

—しかし、デビュー発表会見での「夜のお供からリングのお供になります！」っていうコメントはインパクトありましたよ（笑）。

愛川　アハハハ！「夜のお供に愛川ゆず季」っていうのが私のキャッチフレーズなんですよ。だから、これからはリング上の姿も注目してもらいたいなと思って。

—愛川さんって、いままでに相当な数のグラビアに出てるんじゃないですか？

愛川　けっこういろんな雑誌に出させてもらいましたね。たぶん軽く200冊以上はいくと思います。

—凄いですね〜、夜のお供の異名は伊達じゃない（笑）。で、今日は愛川さんの練習風景も見させてもらったんですけど、かなり腰を痛めてるように感じたんですが？

愛川　じつは昨日の練習中に腰をやっちゃったんですよ〜。相手の脇に脚を挟んで前転する技をやるときに「グキッ！」ってなって。え〜と、なんて技だったかな、こう……（身振り手振りを交えて説明）。

—あ〜、カサドーラ（飛びつき前方回転エビ固め）ですかね？

愛川　そうそう！　そんな名前だったような気がします。

—ずいぶんと高度な技も練習してるんですね。練習自体は5月から開始したそうですけど、ほかにケガとかは？

愛川　ちょっと前になるんですけど、両足の甲にヒビが入っちゃって。

—けっこうな大ケガじゃないですか！



この取材後日、『ゆずポン祭』の仕掛人、ロッシー小川を代表取締役とした新団体『スターダム』の旗揚げ会見が行なわれた（旗揚げ戦は2011年1月予定）。同団体への参加が発表されたゆずポンは、この会見上で現在の女子プロ界のトップ、高橋奈苗に対戦を直訴！なんと『ゆずポン祭』で実現することが決定!

それまたどうして？

愛川　シュートボクシングのジムで風香さんとスパーリング中に、こっちの蹴りが風香さんのヒジに当たっちゃって。あとは受け身を取るだけでも身体中がアザだらけになりますし、おまけにその衝撃で気持ち悪くなったり、頭がクラクラしたり……。

私、セクシーポーズをしてたら天山さんに投げられたことあるんです

—それはまさに傷だらけのアイドルですね〜。

愛川　シュートボクシングの練習もたいへんなんですけど、やっぱりプロレスのほうがキツいですね。私の感覚では「わざわざ自分からマットに身体をぶつけなくてもいいのに」って思うので（笑）。もちろん、それがプロレスの魅力の一つっていうのはわかってるんですけど。

—受けの美学を学ぶのはたいへんだ、と。でも、そんな痛い思いをしてまでプロレスをやろうと思ったのはどうしてなんですか？

愛川　きっかけは所属事務所の人に「プロレスをやりませんか？」って言われたことですね。もともと、2年前に仕事で全日本プロレスのゲスト解説をやったことがあったんですけど、そのときに「プロレスって凄いな、おもしろいな」って思ったんです。とくに武藤（敬司）さんはオーラがあるなって思いましたね。

—ちなみにこれまでにバラエティ番組とかでプロレスラーと共演したことはあります？

愛川　え〜と……あ、天山（広吉）さんに投げられたことありますよ！

—天山に投げられた！（笑）。え、どういうシチュエーションですか、それ？

愛川　プールサイドでセクシーポーズをしてたら、うしろから天山さんに抱きかかえられてプールに投げ込まれたんです（笑）。あと、高山（善廣）さんにも投げられました。

—帝王にも投げられましたか（笑）。意外とプロレスと接点はあるんですかね？

愛川　そうですね。風香さんも同じ事務所に所属してるんで、もともとメールするくらいの仲だったんですよ。あとは女子レスラーの山田よう子ちゃんとも仲がいいので、『息吹』を観に行ったり。全日本さんも解説をやってから何度か観に行かせてもらってますし。

—じゃあ、プロレスデビューの話をもらったときは、「やりたい！」みたいな感じだったんですか？

愛川　はい！　私、『ハッスル』も観に行ってたんですよ。そこで海川ひとみちゃんとか女の子が試合してるのを観て、「かわいいな、自分もやりたいな」って思ってたんで。

—そもそも愛川さんはバラエティ番組とかでは運動音痴キャラで出てましたけど、本当はスポーツウーマンなんだとか？

愛川　ええ、じつは（笑）。8年くらい前からずっとテコンドーを続けてるんですけど。

—テコンドーっていうのもなかなか渋いチョイスだと思うんですけど、番組の企画か何かで始めたんですか？

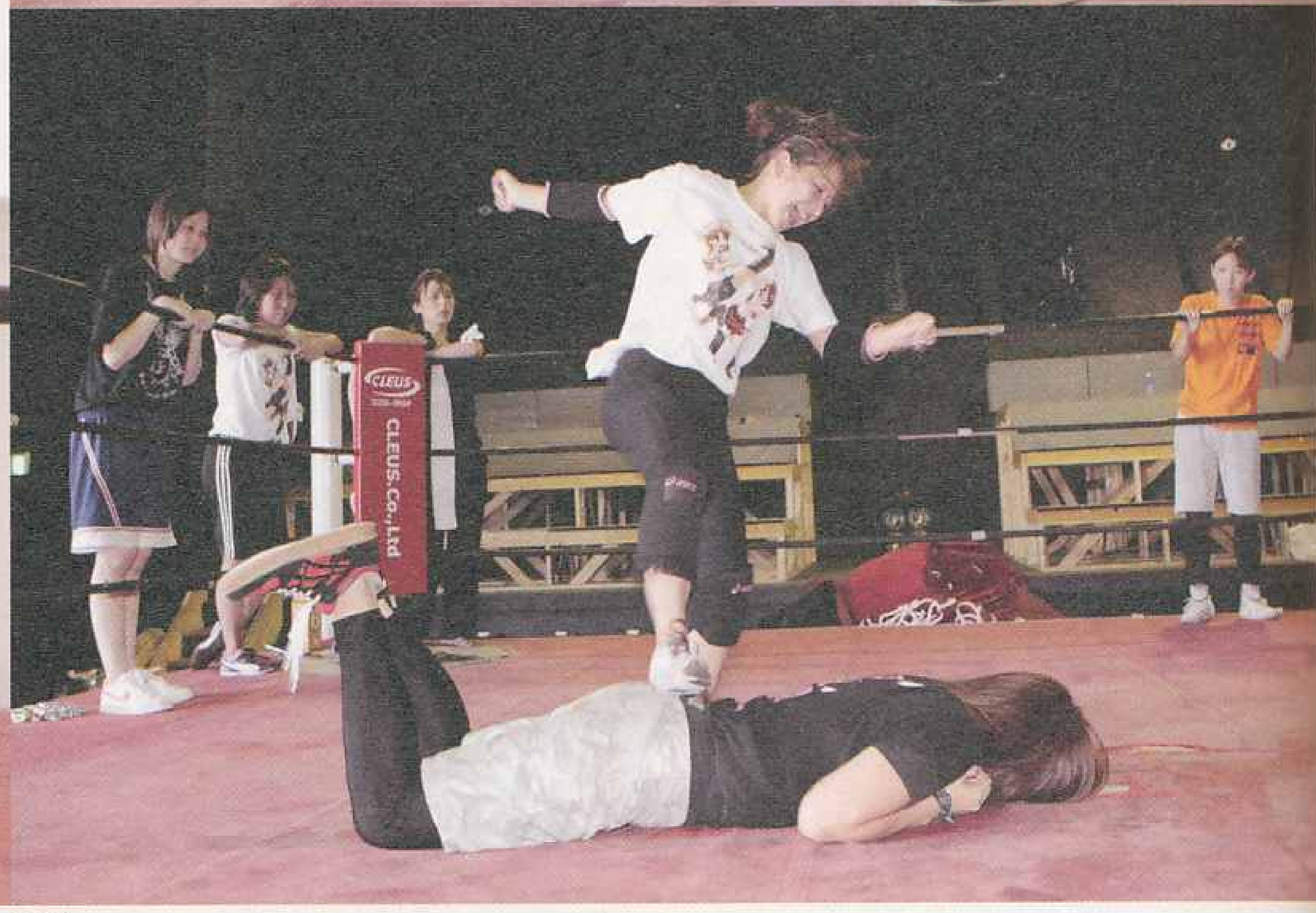
愛川　いえいえ、この仕事を始める前からやってたんです。もともと、私はオリンピックに出て有名になりたいっていう気持ちがあったんで。

—オ、オリンピックですか？（汗）

YUZUKI AIKAWA







デビュー戦に向けて練習をこなすゆずポン。この日は腰痛だったにもかかわらず、逆立ちしての腕立てなど、体力トレーニングではほかの誰よりも軽々とこなしていたのが印象的。試合当日がじつに楽しみなんである。

もともとオリンピックに出て有名になりたいと思ってたんです

愛川　はい！　というのも、当時はテコンドーも女性の競技人口が少なかったんで、これなら頑張ればオリンピックに出場できて有名になれるんじゃないかなと思って。それに小さい頃からクラシックバレエもやってたので、その柔軟性も活かせますし。あとはバレエをやってる知り合いがテコンドーを始めたら、すぐに全国大会で2位になったっていう話も聞いてたんですよ。

——へ〜。でも、それがなんでまた芸能の世界に？

愛川　渋谷の街でスカウトされたんです。それでグラビアをだんだんやっていくうちにテレビのお仕事も増えてきて、こっちの道で頑張ってみようかなって。

——そもそも、愛川さんは性格的に有名になりたいっていう気持ちが強いんですか？

愛川　そうですね、目立ちたがり屋なんです（笑）。小さい頃は人見知りだったんですけど、中学になったら急に生徒会の役員になったり。

——てことは、優等生だったとか？

愛川　はい、中学校までは。高校からは全然勉強しなくなっちゃったんですけど……。このあたりは事務所的にNGになるかもしれないので、あんまり触れないでください（笑）。

——了解しました（笑）。では話題を変えて、グラビアをやりながら格闘技をするのってたいへんじゃなかったですか？

愛川　ああ、青タンができたりしましたね。約束組手のほかに板を割ったりとかそういう練習もやっていたので。事務所からも「あまりやらないように」ってストップがかかったり。でも、お忍びで続けてましたけど（笑）。もともとトレーニングが好きなんですよ。4年前からジムにも通ってますし。

——確かに会見で愛川さんを見たときに、意外と身体ができあがってるなって思ったんですよ。で、さっき風香さんに話を聞いたら「腕力なら練習生の中で一番ある」って言ってましたし。

愛川　私、もともと凄く太りやすい体質なんですよ。だから、身体を動かしてないと不安で。

——グラドル的にはナイスバディを維持しないといけないですもんね〜。

愛川　そうですね、商売道具なんで（笑）。あとはバレエの影響もあって、身体で何かを表現するのが好きなんですよね。バレエは5歳から続けてて、高校のときはやってなかったんですけど、また東京に来て20歳くらいから始めて。

——なんでもバレエでは海外公演にも行ったって聞いたんですけど、かなり本格的にやってたんですか？

愛川　はい！　小さい頃はバレリーナになりたいと思ってて、昔は友だちと遊ぶ時間もないくらいずっと毎日練習してましたから。

——あの、愛川さんはもしかしてお嬢様だったんですか？

愛川　意外とそうかもしれないです。一

週間、ぜ～んぶ習い事みたいな生活をしてて。その反動で高校に入ってちょっとグレちゃったのかもしれないですけど（笑）。

―なるほど（笑）。さて、プロレスデビューを発表して周りの反応はどうですか？

愛川　友だちとかには「なんでやるの？」「事務所にやらされてるの？」って凄く言われますね。私的には「そんなに言うほどのことかな」って思うし、やらされてる感は全然ないんですけど。

―たとえば愛川さんのご両親やファンはどう思ってるんですかね？

愛川　やっぱり、自分の娘が「プロレスやりたい」っ言って、「ぜひやりなさい」っていう親はあまりいないと思うんですよ。お母さんは「ピアノとかバレエをやらせてきたのに、なんで正反対のものをやろうとするの？」みたいなことを言ってましたし（笑）。きっとファンの皆さんも心配っていう気持ちが一番大きいんじゃないですかね。

―それでもやるっていうのは性格的に頑固というか、一途なところが？

愛川　あ～、けっこうそうかもしれないです。バレエもテコンドーも始めてから長いので、習い始めたらずっと続けるタイプだと思いますね。

―いままでにアイドルからプロレスに参戦した人って何人かいるんですけど、けっこう腰かけっぽい人が多かったんですね。そのへん、取り組み方として愛川さんはどうでしょう？



見てみぃ、この開脚っぷり!! 打点の高さ!! 試合当日はどんな“蹴美”を披露してくれるのか、期待とどこかは膨らむばかりなのだ。ちなみにファンのあいだでは、「ゆずポンキックを食らうと病気が治る」という言い伝えがあるとか。

本格的なゆずポンキックとして“七色の蹴り”を考えてるんです

愛川　あの、始めるときに辞めることを考える子はいないと思うんです！（キッパリ）。

―おお、なんだかアントニオ猪木みたいな発言ですね（笑）。

愛川　私も先のことは全然考えてないんですけど、こんなに練習してるんだし、一回きりで終わるとかは絶対にないです。いまは続けていくための練習をしてるので。あとは実際にリングに上がって、みんなに認めていってもらえればいいんじゃないかなって。

―最近の女子プロレスの情報を集めたり、研究したりはしてるんですか？

愛川　風香さんのDVDを観たりしてますね。風香さんは指導も凄くわかりやすく教えてくれるんでありがたいです。でも、まだ練習は受け身とか基本が多くて、「いま試合しろ」って言われても全然できないので不安はありますね。

―芸能とプロレスは表現というところで共通点があると思うんですけど、リングで活かせる部分はあると思いますか？

愛川　なんか……プロレスを観てると自分にはできそうな気がするんですよね。たとえば魅せ方だったり、タレント活動で培ったものが活かせそうというか。けっこうキツい企画とかで根性もついたと思いますし（笑）。

―愛川さんはテレビ番組『崖っぷち』（TBS系）で、自分のブログを3カ月で2000万アクセスに到達させないと芸能界を強制引退するっていう企画に挑戦して、見事にハードルを越えたんですよね。

愛川　あれも凄く覚悟して臨んだんですけど、プロレスをやると決めたときも「やるなら真剣にやらないとダメだ」って思ったんで、いまはどんなに練習がきつくても食らいついてる感じですね。個人的にもケガをしないように身体を作ろうと思って、腹筋、腕立て、背筋は毎日続けてますし。

―じゃあ、食べ物にも気を使ったり？

愛川　あ、それはしないです。

―あ、してない（笑）。

愛川　食べるのは大好きなので（ニッコリ）。なんかプロレスの練習を始めてから、凄くお腹が減るんですよ～（しみじみと）。あと、食べ物の嗜好が変わったというか、お肉が食べたくなるんですよ。タンパク質がほしくなる。

―タンパク質がほしくなる（笑）。あと、会見のときに得意技は「ゆずポンキック」って言ってましたけど、ファンイベントでもよく披露してたとか？

愛川　アハハハ！　いや、よくファンの方にお尻を突き出しながら「蹴ってください」って言われてたので、ちょっと蹴ってただけです（笑）。でも、今度は本格的なゆずポンキックとして“七色の蹴り”っていうのを考えてるんですよ。いろんなバリエーションで七つくらいの蹴りを作ろうかなって。

―前田日明の七色のスープレックスみたいですね～。やっぱり蹴りを主体としたレスラーに？

YUZUKI AIKAWA

愛川　はい！「蹴りといえばゆず季」って言われるくらいになりたいですね。テコンドーには"蹴美"（しゅうび）っていう言葉があるんです。だから"蹴美"を目指して、きれいで威力のある蹴りをウリにしたいなって思います。

—愛川さんは性格的にプロレス向きだと思いますか？　たとえば負けず嫌いとか。

愛川　闘うという意味では負けず嫌いかもしれないですね。でも、いままで他人に対して「コイツに勝ってやろう」とか、そういう気持ちになったことがあんまりないんですよ。アイドル活動してても「自分には負けたくない」っていう思いだけで、「この子には勝ちたい」ってなったことが全然なくて。

—へ～。でも、芸能界ってそれこそプロレス界以上に生存競争が激しいじゃないですか？

愛川　はい。だから、『崖っぷち』のときに「そういう気持ちがないからダメなんだ」っていうことを教えてもらったので、プロレスでもその気持ちを活かしたいですね。風香さんにも「ほかの子に絶対負けないって気持ちでリングに上がってね」って言われてるので。

—さて、愛川さんはグラドルということで、そのチャームポイントである100センチのバストについても聞きたいんですけど……？

愛川　はい、遠慮なさらずに（ニッコリ）。

—ありがとうございます！（笑）。あの、いつからそんなに豊満に？

愛川　いや、中3までは「まな板」って言われてたんですよ。でも、クラシックバレエをやめたら20キロ太っちゃったんですね。

—え～！　それって相当ですよね？

愛川　はい（苦笑）だからそのときの写真とかは全部捨てちゃいました。こんな太ってる自分が嫌で。でもそのときは限界まで太ってやろうと思ってたんですよ。

—え、どういうことですか？

愛川　限界まで太って、そこからやせて"ビフォー・アフター"を作りたかったんです。それからダイエットとして20歳の頃にまたバレエを始めて。で、バレエってレオタードを着て、胸は固定して運動するんですけど、そうしたら体重が落ちても胸だけは残ったんですよ！

『ゆずポン祭』では試合以外にも何かパフォーマンスをやりたいです



あいかわ・ゆずき■1983年5月16日、愛媛県出身。2003年芸能界デビュー。バスト100cmの爆乳で男性誌の巻頭グラビアや表紙を飾り、グラビアアイドルの地位を確立。158cm、50kg、B100/w60/H89、B型。プロレス特訓の模様がつづられているオフィシャルブログはこちら→http://ameblo.jp/yuzuponpon/

—へ～！　普通はダイエットすると胸もやせるって言いますもんね。

愛川　だから「どうしたら胸が大きくなるんですか？」って聞かれたら、「成長期におもいっきり太って、20歳の頃に胸を固定して運動したら巨乳になります」って答えてるんですけどね（笑）。

—しかし、そのコスチュームも胸を強調していて、いやはやなんとも……。

愛川　アハハハ！　いや、私はポロリが怖いのでもっとしまいたかったんですけど、風香さんから「プロとしてのアピールになるから出したほうがいいよ」って言われていたので。

—そりゃ、文字どおり大きなウリになりますもんね（笑）。

愛川　はい！　だからぜひ試合と胸を観に、『ゆずポン祭』にはたくさんの方に遊びに来てほしいですね。

—その『ゆずポン祭』ですが、今回は試合だけなんですか？『風香祭』だと風香さんはダンスとかやってましたけど。

愛川　まだ全然決めてないんですけど何かやりたいですね、『パイレンジャー』とか。

—パ、パイレンジャー？？

愛川　グラドル仲間で正義の味方『爆乳戦隊パイレンジャー』っていうユニットを組んで、歌とかダンスをやってたんですよ。私はパイブルーだったんですけど。

—パ、パイブルー！（笑）。

愛川　はい（笑）。それならダンスとかも身体が覚えてるので。もちろん、試合でいっぱいいっぱいだとは思うんですけど、せっかく『ゆずポン祭』っていう看板ですし、ファンの方に喜んでいただけるようなパフォーマンスを何かやりたいですね。

—ぜひパイブルーでお願いします！

愛川　アハハハ！　あの、プロレスをやるって決めたときに、ロッシー小川さんから「いまの女子プロは昔に比べて人気が低迷してる」って教えてもらったんですね。なので、まだまだ私じゃ微力だと思いますけど、ちょっとでも話題になるようなことをやっていきたいですね。

—けっこう、愛川さんのデビューは今年の女子プロ界のキーポイントになると思いますよ。

愛川　はい、リングのお供になれるように頑張ります！

【10年8月26日／都内・新木場1stRINGにて収録】



女子プロレス界のキーパーソンが語る奇妙奇天烈なレスラー半生

女子プロ馬鹿一代記

さくらん坊主
かく語りき？

アイスリボン代表／2009年女子プロレス大賞

さくらえみ

90年代の対抗戦時代を最後に、ジャンルとしての低迷がひさしく叫ばれている女子プロレス界。そのなかで気を吐き続けている異能の女子レスラーこそ、アイスリボン代表、そしていま業界外でも話題となっている『19時女子プロレス』の仕掛人、さくらえみなのだ！ この女子プロ界の奇才が、コク深い"女の生き様"を激語り！

聞き手／鈴木佑　撮影／平工幸雄　写真協力／arrow、シン

Iジャ時代はずっと自分には個性がないと思ってたんです

さくら （席に座るなり）すいません、じつは取材日を明日と勘違いしちゃってて、まったく化粧してないんですよ……。あの、今日は撮影なしでも大丈夫ですか？

――アハハハ、では写真はあらためてということで（笑）。さて、今日は現在の女子プロレス界のキーパーソンであるさくらさんに、そのプロレス人生を振り返ってほしいと思ってまして。

さくら あぁもう、私なんかでよければ。ちなみにこれはモノクロ2ページとかですか？

――いえいえ、カラーで6ページですけど。

さくら えぇ～!? あ、あの、私、もの凄く記憶力が悪いんですね。だから、ちゃんと昔のことを思い出せるかどうか……。

――じゃあ、話しながら思い出してもらうかたちで（笑）。そもそも、さくらさんは95年にデビューされたわけですが、そのきっかけというと？

さくら えっと、高校生の頃に女子プロレスの対抗戦をテレビで観たのがきっかけになります。

――というと、93～94年ぐらい？

さくら そうです。そのときに神取忍さんを観て、「なんてカッコいいんだろう」と思いまして。ちょうど、その頃は進路に悩んでた時期だったんですけど、女子プロに出会った瞬間に「なんなんだ、この世界は？ 私の生きる道はもうこれしかない！」って感じで衝撃を受けちゃったんです。

――ちなみにそれまでプロレスを観たことは？

さくら 一切ないです。唯一知ってたのはクイズ番組にパネラーで出てたジャイアント馬場さんくらいで、あとはマンガの『ハイスクール！奇面組』が好きだったんで、登場キャラの長州力（ながすちから）とか。

――維新軍ならぬ異珍軍（笑）。周りにプロレスファンはいました？

さくら いなかったですね。それにその頃はインターネットもない時代ですから、月に一度の『全日本女子プロレス中継』を楽しみにしてた感じで。あとはレンタルビデオ店にLLPWのビデオを借りに行ったり。もう、ファンの頃から自分のなかでは「私は神取さんの愛弟子として人生を歩む」みたいな将来のビジョンができてたんですよ。



泣き顔がトレードマークだったIジャ時代のさくら。本人は「個性がなかった」と語るが、若手当時からそのキャラは際だったものを見せていた。

――でも、デビューはLLPWじゃなくIWAジャパン（以下、Iジャ）になるわけですけど、これはどういった経緯で？

さくら LLPWは高2の冬休みに入団試験を受けたんですけど、落ちてしまったんです。それから片っ端にいろんな団体を受けたんですが、全女もJWPもFMWもダメで……。GAEA JAPANは一次審査は受かったんですけど、その合否がわかる前日にIジャに合格したんで、二次審査は受けなかったんですね。だから、もしかしたら里村（明衣子）さんたちと同じ一期生になってたかもしれないんですけど。

――とりあえずはどの団体でも入れればって感じで？

さくら そうですね。というのは、当時は対抗戦も下火になってきていて、女子プロ全体が「とりあえずカードは対抗戦を組めばいいだろう」みたいな雰囲気になってたんですよ。だからどこに入団しても誰とでも試合ができると思ってたんです。まぁ結局、そんなことまったくなかったんですけど（笑）。

――現実は違った、と（笑）。

さくら もう、Iジャは全然相手にされてなかったですから。入団当初は「失敗したな」と思いましたね。

――それこそ当時のIジャはデスマッチ主流の団体でしたけど、そこに抵抗はなかったですか？

さくら あの、初めてのガラスデスマッチのときに、お客さんがリングサイドに入ってきちゃうんで、若手で手をつないでガードしてたんですね。でも、凄く押されて目の前にガラスが迫ったときには、「ああ、私はこうして死ぬんだな」って思いながらセコンドをやってた気がします。あの頃は純粋でした……（しみじみと）。

――ハハハハ。でも、Iジャは女子選手が少なかったこともあって、さくらさんも注目された部分はありましたよね。カルトヒロインというか。

さくら でも、いまだったら「男子の中の女子だから、これをやれば目立つ」とかわかるんですけど、当時はただただ一生懸命やってるだけで。それに、どこかにファン気質が残ってて「私がいるIジャと女子プロは別世界なんだ」っていう卑屈な思いは、ずっとぬぐえなかったですね。もちろん、Iジャは川崎球場でやったり、テリー・ファンクさんが来たりとか凄い団体だったんですけど、自分はやっぱり女子プロへの憧れが常にあったので。

――じゃあ、分裂騒動で選手が手薄になった全女に助っ人参戦したときは、うれしかったんじゃないですか？

さくら はい！「こんなことあるんだな」って思いました。私、全女さんのバスに凄い憧れがあったんですけど、自分がそれに乗れて、しかも一番前の席だったんですよ。だから、私が誰よりも早く会場につけるみたいな気持ちで（笑）。その頃に高橋奈苗とかに出会ったんですけど。

――当時から仲は良かったんですか？

さくら いや、その頃は凄く仲悪かったです（笑）。やっぱり試合になると、「全女以外は認めない」っていう感じなんですね。でも、自分としては「ちょっと待ってよ。人が足りないっていうから来てるのにその態度はなんだ！」みたいなのがあって。でも、あのときのナナモモやミホカヨは本当に凄かったと思いますよ。若手だから先輩の洗濯とか全部こなしつつ、団体の中心として激しい試合もして。あのときの勢いを間近で見れたのはよかったですね。

――その後、さくらさんは99年にIジャを退団するわけですが、その原因は？

さくら たぶん、単純に天狗になってたんだと思います。でも、試合はあるのにギャラがちゃんと支払われない。だからバイトしなきゃいけないのに、試合があるから出勤できない。そうすると、「何やってるんだろう、私」みたいな感じになってしまって。

――辞める時点で次のビジョンはあったんですか？

さくら 私はIジャ時代、ずっと自分には個性がないと思ってたんですね。だから、女子だけの団体に入っても生き残ってく自信がなくて、ある方を介してFMWを紹介してもらったんですけど。

EMI SAKURA

―エンタメ路線のFMWに入団して、当時はまだ珍しかったミックスドマッチをやったりしてましたね。

さくら　もう、試行錯誤しながら（笑）。FMWではいろんなことを考えて、「自分の居場所はマット界にあるのかな?」って思いながらもがいてましたね、ずっと。で、プロレスでは先輩たちに敵わないと思って、団体のHP作成やそこに載せる試合レポートを書いたり、事務仕事をいろいろとやったり。とにかく「この会社から必要とされる人間になろう」みたいな感じでした。

―へ〜、いまのさくらさんからは想像できないですけど、そんな時期があったんですね。そのFMWも最後は倒産という残念な結果になって。

さくら　私、団体がなくなるときは首のヘルニアで、ずっと欠場してたんです。で、いまでも忘れられないのが、ケガも回復してきて、たまたま事務所に行った日がバレンタインデーだったんですね。だからカラフルな包装紙のチョコが山ほど届いてたんですけど、会社の前には債権者がズラーっと並んでたので、事務所の中はドンヨリして誰も口をきかないんです。その光景はいまでも頭から離れないですね。

―そして所属する全選手が契約解除になって。

さくら　その時点で「もうプロレス、辞めようかな」とも思ったんです。でも、最後に自分がやってきたことを何かかたちにできないかって考えたときに、ウチの隣が中学校なんですけど、そこの貼り紙に「この地域の住民の方を先生としたレッスン教室を開催しています。先生も募集中です」みたいなことが書いてあったんですね。たとえば、囲碁教室とか打楽器教室とかいろいろあって。それを読んだときに「私、プロレスできるな。社会貢献の一環でプロレスを広められないかな」って思ったんです……おそらく。

―え、お、おそらく?（汗）。

さくら　ちょっとあの頃はいろいろありすぎて、記憶が定かじゃなくて（笑）。で、私はもともと、プロレスをやってた頃から技に動きを取り入れようと思って、体操教室に通ってたんですね。それで体操とプロレスの動きを融合させた「アクション体操」というものを自分で考えて、その地域に先生として登録したんですけど。



かつて、さくらが入場時に歌う『さくらえびちゅ』に合わせて踊っていた『さくらえびきっず』。このグループの中からはりほや聖菜が選手としてデビュー。子どもとともに入場してくるレスラーはときおり見かけるが、レスラーにまで育て上げたのはさくらだけ?

―要は〝体操のお姉さん〟みたいな感じですかね?

さくら　そうですそうです。まぁ、考えたといっても適当なんですけど（笑）。それでボランティアで体操教室をやっていくうちに、だんだんと「ウチでやってほしい」というお呼びがかかるようになって、最終的に5〜6校の小学校を回ってたのかな? で、それをやっていくなかで「あれ、小学生ってプロレスできるじゃん」って発見したんですよ!

―小学生はプロレスができる!（笑）。

さくら　そもそも、柔道とか野球は小学校のウチからみんなやってるのに、なんでプロレスはやっちゃいけないのかなって思いません? それで小学生にドロップキックをやらせたら、ホントこの世のものとは思えないくらいに素晴らしいドロップキックだったんで、「これだ! プロレスは体操だ!」って思ったんです。

―プロレスは体操!（笑）。

さくら　そうこうしているうちに、自分も「プロレスに復帰しようかな」という気持ちになってきたんです。

―自分のプロレス人生のまとめに入ろうとしたら、新しいプロレスを発見しちゃった感じですかね?

さくら　ホント、そうですね〜（しみじみと）。で、そのあとに今度は「プロレスは歌だ!」っていうことにたどり着くんですけど。

―え? 体操の次は歌?（汗）。

さくら　私、キャラがないって言ってたじゃないですか? 団体に所属してないから居場所もないし、気付いたら25歳になってて「もう歳だな」って思ってたんです。だったらリングで歌うキャラになって、年齢はマスクを被ってごまかそうって考えて。それで『さくらえびちゅ』っていうさくらえびの歌を、自分で作詞作曲して作ったんですけど。

―……なんだか次第に話に追いつくのがたいへんになってきたんですけど（笑）。え〜と、まず、なんでさくらえびの歌だったんですか?

さくら　私がケガで入院してたときに、知り合いがさくらえびの佃煮をお見舞いでくれたんですね。それが凄くおいしかったんで、「よし、さくらえびの歌を作ろう」ってなったんですよ。

―な、なるほど……。

さくら　で、歌を作ってるうちにこれは女子プロの歌だと思うようになって、「プロレスは歌だ!」につながるんですけど。

―あの、女子プロが歌につながるのはいいとして、さくらえびがどうして女子プロにつながるんですか?

さくら　さくらえびってちっちゃくて、100匹ぐらいが群衆になって、商品になるわけじゃないですか? それで食べれば栄養があって元気になる。あと、佃煮なんでキラキラしてたんですよ。それを見て、「キラキラ輝く女の子たちが群衆で勝負して、観ると元気になるのが女子プロレスなんだ」ってことに気づいて。

―え〜と、さくらえびを女子プロに見立てた、と?

さくら　そうですそうです。それでリングネームも「さくらえみ」にちなんで「さくらえび」に改名して。それからプロレス教室の小学生の子どもたちをバックダンサーに歌を歌ったらかわいいなと思って、「さくらえみアンドさくらえびきっず」っていうユニットを作ったんですけど。

―ああ、全女のリングとかで歌ってましたよね?

さくら　はい! そこからそのきっずの子たちを中心に集めて、「ちょっと一緒にプロレスをやってみない?」ということで、我闘姑娘を設立するんですけど。

―やっぱり当時は小学生がプロレスをやるということで、批判もあったんじゃないですか?

さくら　それはもう（苦笑）。ファンよりも業界関係者から「プロレスはそうじゃないだろ?」っていう批判が多かったですね。でも、さくえびきっずがかわいいって言ってくれた人もいたので、そういう人だけに向けて発信すればいいかなって。そもそも、あの頃は私自身が全然相手にされてなかった時代でしたしね。

―そういえば当時、長州力さんが我闘姑娘を映像で観て「俺はプロレスがわからなくなった」って頭を抱えたって話がありましたよね（笑）。

さくら　ああ（笑）。でもその後、知り合いの方を通じて、我闘姑娘でWJの道場を使わせていただくようになったんですよ。そのときに長州さんが寒ければストーブつけてくれた

長州さんが小学生たちに凄くよくしてくれたんです

り、たまにごはんを食べさせてくれたり、「はい、ケガしないでね」とか声をかけてくれたり、凄くよくしていただいたんです。

――へ～、それはいい話ですね。「ながすちから」じゃなく天下の「ちょうしゅうりき」に（笑）。

さくら アハハハ！ それまでは他団体さんの大会前に、リングを借りて練習させていただいてたんですけど、WJさんには2年くらいお世話になって。当時はりほ（アイスリボン所属選手）がまだ小学校2年生で、ロープワークをやってもセカンドロープまでしか届かなかったんですね。はたしてそれを観て長州さんはどう思ってたんでしょうね（笑）。

――ハハハ。で、我闘姑娘を経て、06年にアイスリボン旗揚げとなるわけですが、これはどういう経緯で？

さくら 単純にプロレスで食べていきたかったんです。我闘姑娘は大会が2ヵ月にいっぺんとかで、それだけじゃ食べていけないし、そもそもアルバイトする時間がもったいなく感じて。もっと自分の時間をプロレスに使うために、試合数を増やしたかったんですね。それに2ヵ月にいっぺんだと、選手から「このマッチメイクは嫌だ」とか凄く主張も激しくて。そういうのをなくして、技術を向上させるためにも試合数を増やしたいというのがあって、アイスリボンを設立したんです。

――アイスリボンが凄かったのは、旗揚げ当初はリングを使わずマットの上で試合をしてましたよね？

さくら あれも経費削減の一環だったんですけどね。当時、ファンが何を望んでるか知るために、ミクシィのコミュニティを活用してたんですね。そこで「リングのないプロレスをどう思うか？」って聞いたときに、もちろん「そんなのはプロレスじゃない」っていう意見もあったんですけど、「あれ、意外とみんなそんなにこだわってないじゃん」ってことにも気づいて。ファンとそういう交流をしてたからか、おかげさまでアイスリボンは最初からそんなに苦労することなく軌道に乗ったんです。あとはなるべくバッシングは無視して（笑）。

――ハハハ。ちなみにさくらさんって打たれ強いんですか？

さくら いえいえ、すぐヘコみますよ！ ひきこもって現実逃避して、布団にもぐったり。だって、私は業界を盛り上げたいと思っていろいろ試行錯誤してるのに、同じ業界の人から「そういうことはやめてくれ」って言われたらヘコむじゃないですか？ みんな業界を盛り上げたいっていう気持ちは一緒だと思うんですよ。ただ、やり方が違うというだけで。でも、当時はやっぱり「リングがないプロレスは認めない」「学芸会みたいなのはやらないでほしい」って人は多かったですね。

――レスラーのなかには「こんな時代だしオファーがあればどんな団体にも出る。ただ、リングがあるのが最低条件」っていう人もいますしね。

さくら ああ、なるほど……。でも、その頃になると、だんだんプロレス界の内情も見えてきたし、「何、気取ってんの？」みたいなのは正直ありましたけどね。あと、自分が頚椎のケガで長いあいだ欠場したこともあり、「大技連発してケガする必要があるの？」「一試合で何度もトップロープから攻撃する必要があるの？」っていう感じだったので、それがリングからマットになることで削られていくとも思いましたし。

――なるほど。

さくら たとえばドラゴンスープレックスとタイガースープレックスの違いって、普通の人だとわからないと思うんですよ。昔、プロレスが盛り上がってたのって、もっとシンプルな技でもっと痛みが伝わってたからだと思うんですね。そのへんが複雑になってマニア向けになってきたのも、どんどんプロレスがジャンルとして小さくなった原因じゃないかなって。やっぱり自分のなかではたくさんの人に女子プロレスを観てもらいたい、女子プロに出会ってほしいという願いが根本にはあるので。

――そういう草の根的な運動や、プロレス界きってのアイデアマンぶりが実ってか、さくらさんは昨年の『東京スポーツ』主催のプロレス大賞で女子プロレス大賞を受賞しました。でも、まさに女子プロの衰退を表すように、昨年までの5年間は該当者なしだったんですよね。

さくら そうなんですよ。だから受賞したときはびっくりしましたね。私はもともとベルトを獲ったりする選手じゃないし、受賞したのがいいことなのか悪いことなのかわからないんです。ただ、ずっと個性がないと思ってた自分に、やっと肩書きとして「女子プロレス大賞」という個性がついたのかなって。もちろんプレッシャーもありますけど……。

――要はいまの女子プロ界のトップってことですものね。

さくら 最初はロープに足が引っか



昨年のプロレス大賞でさくらは、5年間該当者なしだった女子プロレス大賞を受賞するという偉業を達成。今年も狙ってるというがその結果はいかに？

SAKURA EMI

かって転んだり、お腹がプヨプヨしてるのを笑われたりする自分なんかがもらって、「ホントにすいません」って感じだったんですけど、いまは胸を張って「みんなが悪いんだよ、文句あんの？」って開き直ってやってます（笑）。

――スタートはいわゆる雑草だったのに、キャリア15年目にしてそこまで到達して。

さくら　でも、べつに雑草が何かに変化したわけではなくて、自分は雑草のままなんですよ。こういう言い方はあれですけど、女子プロ全体が落ちてきたから私が受賞できたっていう思いは凄くあるので。だけど、それをいま憂いてもしょうがないじゃないですか？　とにかく、やれることをやるしかないし、自分が底辺だからこそ、私のやってきたことはほかの誰でもできると思うし。

――でも、いま話題の『19時女子プロレス』（以下、19時）もそうですけど、GENTAROさんなんかは「元川（さくらの本名）は発想が違う」って言ってましたよ。

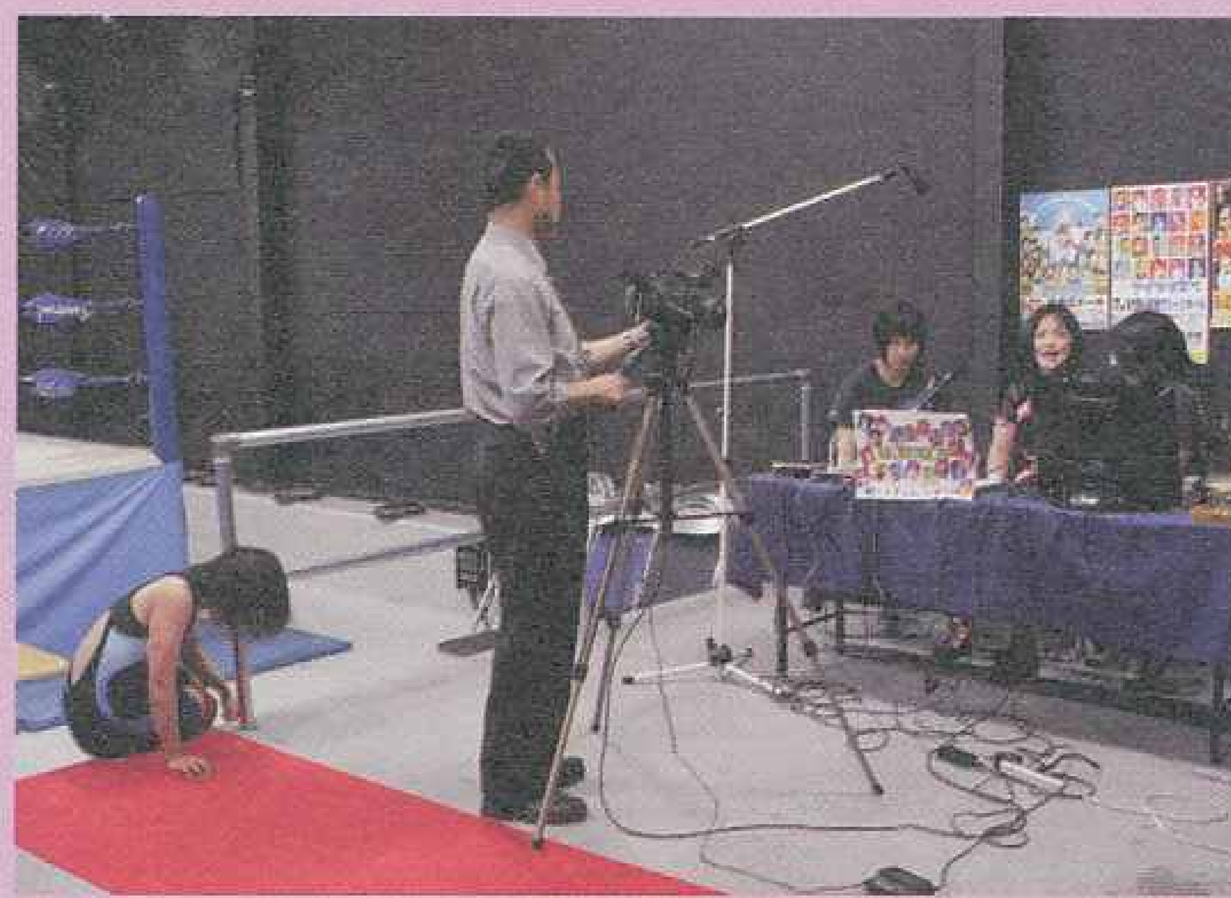
さくら　それは買いかぶりすぎです！　私は失なうものがないから怖いもんナシなだけなんですよ。たとえば、JWPさんだったら歴史と伝統があるから、代表のコマンド・ボリショイさんはそれを守らなきゃいけないっていうのがあると思うんです。

――なるほど。

さくら　その点、私は失敗しても「まぁいいや」って部分があるので、それが一番の強みなんじゃないですかね。ホントに自分がやってることは誰でもできると思うし、もしやりたいって人がいたら自分のすべてを教えるつもりだし。それに自分と同じことをやらせても絶対に違うものができるから、またそこで競争できるじゃないですか？　だから、アイスリボンにも19時というライバルを作って。

――19時は業界外でも注目されてますね、『Yahoo!』のトップ記事にもなって。

さくら　最近は取材の7割以上が19時なんですよ。同じ会社なのでそれはいいことなんですけど、いまは自分のなかで帯広さやか（19時代表）っていうのが凄く驚異なんですね。いままでだったら19時も自分でやってたんですけど、いまはそこまで手が伸ばせないっていうときに、帯広が「自分がやります！」って手を挙げて。実際、なんか彼女はほっておけない存在なんですよ。だから、ノーギャラなのにあれだけ賛同者が集ったり、会社の比重も19時に傾いていったり。



今年6月1日にUSTREAM初の女子プロレスとして、業界内外の注目が集まるなかで旗揚げした19時女子プロレス。試合観戦をUST中継のみにすることで開催試合数を増やし、全国にネット配信で女子プロを届けている。

――手応えは感じてますか？

さくら　周囲の声を聞くと、初めてプロレスを観たという方よりも、昔観ていたけど最近は観てないっていう人が、「もう一回観よう」っていうきっかけになってるのかなって思います。まだ19時は直接的に利益を生み出すものにはなってないですけど、番組のなかでタイトルマッチをやったり、ビッグマッチとして1時間枠でやったり、これからもソフトを変化させていって、スポンサーさんにプレゼンテーションができればいいなって思います。

――自分が作ったものを驚異に感じるのってうれしい悩みなんじゃないですか？

さくら　そうですね。でもこれも帯広という存在がいてこそなんですよ。あのどこまでも真っすぐな感じは凄い！（キッパリ）。



この取材後のJWP新宿FACE大会（9月19日）でさくらは、米山香織の持つJWP無差別級王座に髪切りマッチで挑戦するも、敗北を喫して坊主姿に。その4日後のアイスリボン後楽園大会では里村明衣子と激闘を繰り広げた。

――元ひきこもりの真琴や小学生レスラーだったりほちゃんもそうですけど、さくらさんには逸材を引き寄せる何かがあるんですかね？

さくら　そういうキャラのある子が集ってくるのはうれしいですよね。一応、会場に来た若い女の子には「プロレスやらない？」って声かけるようにしてるんですよ。帯広もNEOさんの北海道大会で引っかかって。

――引っかかって（笑）。え、声は昔からかかってるんですか？

さくら　我闘姑娘のときからずっとですね。会場だけじゃなく、渋谷とか新宿の街頭でも勧誘したり、いろいろしましたよ。チラシ渡しながら「こういうのあるんだけど知ってる？」って。「何それ、知らない」って反応がほとんどなんですけど、なかには「やりたい」とか、「えっ、観たい」とかいう子がいるんですよ。

――へ～。いろいろ地道な活動があってのいまなんですね。

さくら　そうですね～（しみじみと）。私はホントに記憶力がないので、昔のことってけっこう忘れちゃってるんですけど、ひさしぶりに振り返ると「あんなこと、こんなことあったな」ってなりますね。「けっこう頑張ってるんだ、私」って思ってしまいました（笑）。いったい、私はこの先どうなるんでしょうか……。

――ハハハハ！　あと、最近の女子だと華名さんが、マニフェストを打ち出して注目集めてましたけど、あれはどういうふうに思いました？

さくら　言っていること自体は凡庸なんですけど、なぜ彼女が言うと取り上げられるのかってことですよね。そういう意味ではキャラが凄く立ってるし、ああいうふうに振る舞えるのは凄いかなって思います。

――セルフプロデュース能力というか。

さくら　そうですね。たぶん、私が自分の個性がないから団体で勝負したのと反対に、彼女は自分単体の個性を打ち出してるじゃないですか？　そういう意味で自分と真逆なのはおもしろいですね。

――ほかに注目している女子選手っています？

さくら　う～ん……（熟考中）。そう言われるとなかなかいないですよね。朱里や野崎渚、あとはウチの帯広ぐらいですか。あ、ゆずポンには期待してますよ。

――プロレスデビューをはたすグラドルの愛川ゆず季さんですね。風香さんが教育係で。

さくら　ゆずポンのデビュー会見で、風香ちゃんが「3年後には業界を変えるくらいのことがしたい」って言ったときに、「あ～、本気なんだ」って思ったんですよ。風香ちゃんはかわいいうえにアスリート能力も高いし、それに頭もいい子なんでもともと評価してたんですけど、これからどんな仕掛けをしていくのか楽しみですね。

――今年の女子プロ界はNEOや伊藤道場が活動停止しますけど、新たな

この時代、なんでもありなので〝シルバープロレス〟があってもいい

動きの兆しも見えてきてますね。さくらさんはその中心にいるというか。

さくら　いやいや、私なんかグータラおばさんですよ、こんなの……。

――グータラおばさん（笑）。でも、いまは相当多忙なんじゃないですか？　代表として試合以外の業務もあるでしょうし。

さくら　というか、意外と試合してることに最近気づいたんですよ。アイスリボンと19時の試合を足すと月に15試合くらいはやっていて。

――へ～、いまの時代で二日に1試合は確かに多いですね。単純にプライベートは？

さくら　もう全然ないですよ。前は映画を観に行って息抜きしてたんですけど、いまはもうストレスの塊ですから。

――ストレス解消ってあるんですか？

さくら　それはいい試合を観ることです。「素敵だな～、こんないい試合をしてくれて」って気分になるときが、ストレスがなくなる瞬間なんです（ニッコリ）。

――は～、さくらさんって根っからのプロレスバカですよね（笑）。

さくら　ああ、そうかもしれないです……。でもでも、下の子たちの試合を観てると自分にはない発想があって、ホントにおもしろいんですよ！（力をこめて）。技一つとっても「こんな取り方あるんだ」「そんな丸め込みあったんだ」みたいなのを目にすると、まだまだ新しいプロレスがあるんだなって思うし、それを一番近くで見続けられるのは幸せなことだなって。あと、昨日も私の教えてるプロレス教室に「プロレスやりたいです」って新しい子が来たんですけど、そういう瞬間に出会えるのも凄く楽しいですし（ニッコリ）。

――さくらさん、幸せそうですね。よく結婚ネタが取り沙汰されてますけど、もう〝プロレスと結婚した女〟ってことでよろしいんじゃないでしょうか？（笑）。

さくら　いやです、いやです！　結婚したいです！（必死になって）。あの、ウチには小学生や主婦で試合してる選手がいますけど、私も結婚して子どもを育てながらプロレスを続ければ、同じような境遇で興味を持つ子も出てくると思うんですよ。やっぱりいろんな女の子の生き様をプロレスで表現したいですよね。たとえば柔道だったら柔ちゃんが表現してると思うんです。「谷でも金、ママでも金」じゃないですけど。もちろん、駆け足で駆け抜けて、次への道へっていうのも素晴らしいと思うし、それ以外にシルバープロレスっていうのがあってもいいと思うし。



さくら・えみ■1976年10月4日、千葉県出身。95年、IWAジャパンの市来貴代子戦でデビュー。99年にFMWに入団。FMW倒産後に我闘姑娘を設立。06年にアイスリボンを旗揚げ。そのほかさまざまな団体で活躍、09年には5年間該当者なしだった東京スポーツ認定女子プロレス大賞を受賞。身長158cm、体重62kg。オフィシャルブログ『さくらいと』→http://sakuraito.iceribbon.com/

――シルバープロレス！（笑）。

さくら　はい。お客さんもシルバーの方たちばっかりで、夢を与えるとかあるかもしれないし。この時代、なんでもありなのでいろんなプロレスがあっていいと思うんです。とにかくおもしろい表現ができる人が中心になるべきかなって。

――小学生をリングに上げたさくらさんが言うと説得力抜群ですね（笑）。

さくら　（唐突に）そうだ、『ｋａｍｉｐｒｏプロレス』とかやりましょうよ！

――は？　ウチが団体旗揚げですか？　いやいや、『ハッスル』というよからぬ思い出が（汗）。

さくら　違う違う、編集部の人が闘うんですよ！　鈴木さんが闘うんです。

――そんなの骨も心もすぐ折れちゃいますよ！（笑）。いや～、やっぱりさくらさんの発想は常人におよばないところがありますね。

さくら　いやいや、絶対絶～っ対、そんなことないです！　たぶん、みんな守るものがありすぎるんだと思います。もちろん守るものがあるから頑張れるんでしょうけど、背負いすぎたら何も動けないですから。

――さくらさんはもう一生、プロレスと寄り添っていく感じなんじゃないですか？

さくら　そうでしょうね。違う土地でもやりたいし、海外とかでもやってみたいし。もしかしたら、ライターとかカメラマンとかになるかもしれないし。やっぱり、とにかくプロレスを広めていきたいんですよ。真琴だって、ひきこもりだったのがプロレスに出会って人生が変わったわけですし。もちろん誰も彼もがプロレスで変わるわけじゃないと思うんですけど、プロレスがきっかけで変わる人って絶対いると思うんですよ。

――あとはプロレスがきっかけで結婚できれば言うことなしですかね。

さくら　はぁ～、ここでまた募集をしないと……（うつむきながら）。本当はプロレス大賞を獲った勢いで今年結婚するのが一番美しかったと思うんですけど、そううまくはいかないですね、人生は。とにかく、プロレスと結婚はしないです！　ちゃんとした家庭を持ちたいです！　かわいい子どもがほしいです～！

――ダハハハ！

さくら　でも、どうにもならないことが起こりすぎるんですよね。「どうしてこの人、言うこと聞いてくれないんだろう？」「なんでここはお客さんが入らないんだろう？」とか。だから、私が子どもをほしいっていうのは、もっとどうにもならないことが身近にあれば、いろんなことがすべて余裕になるんじゃないかなって思ってる部分もあるんです。赤ん坊は日本語も通じないですから。

――母の強さを身につけたい、と（笑）。

さくら　そうです。人は私を「アイスリボンの母」みたいに言いますけど、早くホントの母になりたいですね……（しみじみと）。

――アイスリボンの発展、そして素晴らしい人生のパートナーが見つかることを祈っております！（笑）。

【10年8月27日／埼玉県・イサミレッスル武闘館で収録】



いまよみがえる!
井上京子酒豪伝説!!

新連載
掟ポルシェの
突撃! 俺の晩ごはん

2杯目
井上京子『あかゆ』
AKAYU

ごっつあんです! 白飯だけ手に持ち、プロレスラーの経営するお店を一軒一軒回って土下座してなんかもらい、オリジナル海鮮丼を完成させるまでの道のりを描く大河連載(いま思いついた嘘)、『掟ポルシェの 突撃! 俺の晩ごはん』。連載第二回目に突撃! したのは井上京子さんのお店、東京・武蔵小山『あかゆ』。「プロレスラーは毎日記憶がなくなるまで飲んでナンボ」を誰よりも実践する、井上京子の超人的な飲みっぷり伝説&経営者としての談話に泣け! 吐け! 吐いてまた飲め!!

構成&撮影／堀江ガンツ

掟　ここ武蔵小山に『あかゆ』というお店を出して、もうけっこう経ちますよね？

京子　うん、9年目。

掟　プロレスラーの店としては長く続いてますよね。

京子　ありがとうございます。よくここまで頑張りましたね。

掟　これだけ続いてるっていうのは、多くの方がプロレスラーらしいごっつぁん経営をされてるなかで（笑）、京子さんが一貫して堅実な経営をしてるからだと思うんですよ。

京子　ハハハハ！　そうなんですかね（笑）。でもね、自分でお店を始めて1～2年は大変でしたよ。

掟　大変だったポイントはどこですか？

京子　やっぱり、周りの人から「水商売なめんなよ」的な感じで「二足のわらじは無理だろう」みたいに言われたんですね。

掟　当然プロレスという本業ありきで、しかも京子さんはトップレスラーで現役バリバリのなかの開店ですもんね。

京子　だから「プロレスラーだからって、お店がうまくいくもんじゃないぞ」って、直接言われたり、けっこう周りからイジメもあって。

掟　イジメ！　それは近隣のお店の人からですか？

京子　そうですね。開店当時、近くのお店のママがウチに飲みに来てくれたりしたんですけど、朝方酔っぱらってくると「水商売なめんじゃねえ！」「プロレスラーだからって甘くみんなよ！」みたいに言われて。そのとき、「プロレスも一生懸命やってますけど、水商売はなめてませんよ」って言ってね。それをわかってもらうために、悔しいからその人のお店に毎日通ったんですよ。

掟　「ちゃんとやってますよ」ってわかってもらうように。

京子　でも、お店に行っても初日、二日目とかは目も合わせてくれなかったんです。それが一週間ぐらい通い続けたらちょっと話してくれるようになって、10日くらい経つと「わあ、いらっしゃい。また来てくれたの」みたいになって打ち解けて。

掟　ようやく武蔵小山の飲食店街の一員として認めてもらえたというか。

京子　そうなんです。武蔵小山はそういう街で、何百件という店が軒を連ねてるんですけど、懐に飛び込んじゃえば、受け入れてくれるんですよね。

掟　地域に密着しなきゃしょうがないですもんね。新宿や渋谷とは違いますから。

京子　だからウチはお客さんの7割ぐらいはファンの方ですけど、土日はほとんど地元の人ですからね。

掟　もちろんプロレスラーのお店は、プロレスファンが来てナンボっていうところがありますよね。とくに開店当初は。

京子　そうですね。だからお誕生会とかデビュー記念日はプロレスファン一色になりますけど、普段は近場の人が来たりしますね。

掟　僕もこれまで何軒もプロレスラーのお店に行きましたけど、正直「ダメだろうな」っていうお店はたくさんありましたよ。

京子　アッハッハッハ！

掟　プロレス以外やったことのない人が店を持つと、こうも一般的な感覚が抜け落ちてるのかと驚くことのほうが多いんですよ。もうちょっとここなんとかすればいいのに！　っていう部分が素人目にもたくさんあるんですけど、面識もない人間がいきなりダメ出しするのは失礼だし、何も言えなくて。

京子　言ってあげればいいのに（笑）。

掟　看板もハッキリ出ていないお店とか、誰か言ってあげないのかなぁとか。なんのお店なのかわかりづらくて、プロレスファンですら入りにくい店もありましたし。差し出がましくて言えませんでしたけど。

京子　そうなんだ（笑）。

掟　そんななか、ブル中野さんがお店を出されましたけど、京子さんも行かれたんですよね？

京子　うん。行ったんですけど、記憶がないんですよ（笑）。

記憶をなくすまで飲まないと、飲んだ気がしない。ワインは一人で7本飲むと危ないですね

掟　飲みすぎて記憶がない……いつものパターンですね（笑）。

京子　このあいだもやらかしまして……。どうやってお店を出たか覚えてないんですけど、中野さんのお店の近くにDDTのカレー屋さんがあるんですよね。

掟　『フレンチカレー ミツボシ』ですよね。

京子　覚えてないんですけど、そのお店に行ったとき閉店間際で「もうごはんがない」って言われて、暴れて帰ってきたらしいんですよ。

掟　ダハハハハ！　カレー屋でごはんがないとは何事だ、と（笑）。

京子　「カレー出しやがれ！」とか暴れたらしくて、絶対に嫌われたんだろうなって。記憶ないんですけど。

掟　基本、記憶はなくすんですよね？

京子　はい、ガッチリ！

掟　記憶なくすまで飲まないと、飲んだ気がしないというか。

京子　そうですね。もちろん。

掟　気持ちいいほど言いきってくれますね！　中野さんがお店を出されるとき、何かアドバイスはされたんですか？

京子　全然全然。中野さんはちゃんと考えてお店を始めてると思うんで。私は3日で決めちゃったから。

掟　中野さんも3カ月前にパッと決めちゃったらしいですけど、それより早い3日！

京子　3日どころか、数時間かな。「ここ空いてるから、店やってみない？」「じゃあ、やっちゃおうかな」みたいな（笑）。

掟　さすがです！　『あかゆ』は、京子さんが記憶をなくすまでとことん飲むように、ほとんどの人がベロンベロンに酔っぱらって帰る印象なんですけど（笑）。

京子　べつに「飲め飲め」言ってるわけじゃないんですけどね。それなのに、みんな「『あかゆ』恐るべし」みたいに言うんですよ。

掟　アホほど飲まされるっていうイメージが定着してますよね（笑）。

京子　そうなの。「『あかゆ』に行くと泥酔する」とか、「二日酔いがひどい」とか、言われるんですよね。みんな勝手にテンション上がって飲みすぎちゃうだけなのに。私は覚えてないんですけど、（高木）三四郎がいろんなところで「京子さんに飲まされて、それ以来、お酒が嫌いになったんです」とか言ってるらしいんですよ。ひどくないですか？

掟　でも、プロレスラーとしてはカッコいいのでアリですよね（笑）。

京子　そんなカッコよさやだ！　こないだ前泊（よしか）さんが「あかゆ」に来てくれて、そのとき聞いたのは「ホントは市来（貴代子）も誘ったんですけど、『京子さんのところは怖いからイヤだ』って来なかったんですよ」って。以前、市来は私と一緒にワインを飲んで、救急車で運ばれたんだって。私は全然覚えてないんだけど。

掟　京子さんと同じ量を飲んでたら、みんな病院送りだ、と（笑）。

京子　だから、私っていろんなところで迷惑をかけてるんだなって。あらためて反省しているところです。

掟　女子プロレス界にも天龍さんがいらっしゃったんですね……。

京子　その天龍さんがお店に来てくれたんですよ。もうド緊張で。

掟　天龍さんが『あかゆ』にご来店ですか！

京子　いま天龍プロジェクトに出させていただいてるので。「一回、京子のところにも行かなきゃいけないな」とか言ってて。緊張しちゃうんで来ないでほしいって思ってたんですけど、本当に来るって聞いたときは、「もう30分で潰されてもいいや」って。みんなに「あとは頼むね。カギはここにあるから、家まで運んで」とか言っておいて。

掟　天龍さんのお酒でのかわいがり話はよく聞きますからね。

京子　そしたら、全然いい人というか、天龍さんもハッピー、お客さんもハッピーで素敵な時間でしたね。天龍さんがみんなの席を回ってくれて、店内のテレビで天龍さんの試合をみんなで観て。アットホームな『あかゆ』で、全員が天



龍さんのファンになっちゃいましたよ。私なんか拍子抜けしちゃって「もう飲むしかない」って、最後は私だけ酔っぱらっちゃいました（笑）。

掟　気が抜けて、結局いつもよりよけいに飲んじゃった、と（笑）。僕が前回、京子さんを取材させてもらったのは3年ほど前でして。そのときはちょうど子宮筋腫の手術後で、お子さんが生まれたばかりの頃だったんですよ。

京子　ああ、もう3年も経つんだ。このお店って朝5時までやってるじゃないですか。で、子どもを6時に起こして、ごはん食べさせて幼稚園に行かせるんですけど、今朝はその記憶がないですから（笑）。

掟　記憶がなくなるまで飲んでるのに、お子さんのごはんはちゃんと作らなきゃいけないし大変ですよね。

京子　まあ、記憶なくすのはいつものことなんですけどね。一番ひどかったのは、試合で足を骨折して松葉杖ついてお店に出てたときがあったんですよ。その状態でさんざん飲んで、朝帰ったんですけど、起きたら松葉杖がないんですよ（笑）。どうやって帰ったんだろうって思ったら、「京子さん、歩いて帰ってましたよ」って言われて。

掟　骨折してるのに！

京子　もう痛くてしょうがないのに。で、私が行きそうな店に電話したんですね。「ママのお店に松葉杖忘れてませんか？」「うちにはないわよ」みたいな。それでどこにあったと思う？　コンビニにあったの。ということは、コンビニまでは松葉杖で行ったんでしょうね。

掟　お酒でいい感じで麻酔が効いてたというか（笑）。

京子　そうそう（笑）。

掟　そのコンビニでは、かつてお代をツケてもらったこともあるんですよね？



毎晩浴びるように酒を飲み、リング上では観客を魅了する"女・天龍源一郎"を地でいく井上京子。女子プロレスにかける思いは熱い。

女子プロレスの王道をいく団体を作りたい。でも、『あかゆ』は絶対になくしませんよ

京子　そうそう。お金忘れちゃって、ツケでお弁当買って帰ったり。こんな良心的なコンビニないよね。田舎の店じゃないんだから。

掟　武蔵小山っていい街ですね（笑）。

京子　「お金あとで持ってくんね〜」みたいな。東京でそれが通用するんだから。やらかしまくってますよ。

掟　井上京子だからこそなせる技ですね（笑）。病気や出産も経て、年齢も41歳なのに、まったく衰えを感じさせないですよね。

京子　いやあ、昔と比べたらだいぶ衰えましたよ。もう、いまはワイン3本飲んだら記憶なくすもん。前は7本目が危ないかなって感じだったんだけど（笑）。

掟　ワイン7本！　もはや飲み方がアンドレ・ザ・ジャイアント級ですよ！

京子　「これは凄くいいお酒で、絶対に二日酔いしないから」って言われたお酒で、私は二日酔いですからね。どんだけ飲んだんだっていう（笑）。

掟　おそらく普通の人なら致死量です（笑）。

京子　でも、こんなに飲んでるのに、健康診断ではどこも問題なかったんですよ。

掟　いつ健康診断されたんですか？

京子　3年前だったかな？

掟　毎年やってください！　子宮筋腫のあとから定期検診とか行ってないんですか？

京子　このあいだ連絡が来て、MRIを見たんですよ。そのあとほったらかしにしといたら「もう一回、検査来てください」なんて言われて。来月また行ってくるんですけど。

掟　お酒飲んで、行くの忘れちゃわないでしょうね。

京子　忘れちゃうかも（笑）。

掟　ちゃんと行ってください！　載せときますよ、「井上京子、10月にMRI再検査」って。掲載誌読んで思い出してください！

京子　じゃあ、一行情報みたいに入れといてください（笑）。

掟　じゃあ、プロレスの話もうかがおうと思うんですけど。所属していたNEOが「今年の12月に解散する」と発表して、それを前に京子さんは退団したわけですよね？

京子　しましたね。解散が決まってる団体に出続けるっていうのは、あまりにも未来がないと思って。それでじつは来年、新団体を旗揚げしようと思ってるんですよ。いまはその準備を着々と進めています。

掟　先日、ロッシー小川さんも女子プロ新団体旗揚げを発表しましたけど、いまの時代に新団体ってリスキーですよね。

京子　そうですね。「なんでこの時代にやるの？」ってみんなに言われますよ。

掟　やはり勝算があるんでしょうか。

京子　勝算があるかどうか以前に、やらなきゃいけないと思うんですよ。5月にNEOを辞めたとき、「誰かがちゃんと『団体』を作らなきゃ、女子プロはなくなるな」って凄い危機感を覚えたんですよ。5年後10年後の危機じゃなくて、来年ぐらいになくなっちゃうんじゃないかって。NEOがなくなるなら、ちゃんと道場を構えて、新人を育てていく「団体」を誰かが作らなきゃホントに女子プロレスが終わっちゃうなって。「じゃあ、誰がやるんだ？」って考えたとき、「神様から授かった私の仕事なんじゃないかな」って勝手に思っちゃったんですね。

掟　新団体でも変わりなく、自分たちのプロレスを続けていくという感じですか？

京子　いや、いままでとは全然違いますね。いままでのものを残しつつなんですけど、ホントにやりたいことは、女子プロレスの王道なんですよ。いま「最強の女子は誰なんだ」っていうことがなくなっちゃったんで、それをやりたいん

です。あとは、プロレスに関わった人たちのセカンドキャリアも考えられる会社を作りたいなって。

掟　時代によって必要とされるプロレスも変わってきますけど、あえてプロレスの王道をやりたい、と。

京子　もちろんアイスリボンがあっても、タレントがやるプロレスがあってもいいんですよ。でも、王道がないと、ほかも光らないだろうし、いったい何がプロレスなのかわからないと思うんですよね。

掟　王道をやるには、王道を伝える場を作らなきゃいけないじゃないですか。いま、『19時女子プロレス』がUSTREAMで、インターネットを使ったストリーミング放送をしてますけど、そのへんはどう考えていますか?

京子　ホントはテレビ放映がほしいですよね。そういうことも含めて、いまいろんな部分で動いてはいるんですけど、コテンパンにやられてます。いつも泣かされて帰ってきてますよ。

掟　プロレスのことだけを考えてられないのが団体経営ですよね。

京子　だから41歳にして初めていろんなことを勉強させてもらってますよ。その前に、まず名刺入れを買えって感じなんですけど(笑)。そのへんから、正していこうかなって。

掟　でも、女子プロの新団体を作ったら、『あかゆ』と二足のわらじが難しくなったりするんじゃないですか?

京子　いや、そこは持ち前のパワーでやるしかないと思ってますけどね。プロレスで食べられないとき、この店にずいぶん助けてもらいましたから。私のなかで、この店は凄く大事なんですよ。プロレスでお金が出ないときも、『あかゆ』の売り上げで、若い選手を食べさせてあげたりもしたので。

掟　プロレスで食べられなかった時期っていつ頃なんですか?

京子　何度もありますよ。全女の最後の頃がそうだし、NEOじゃなく、ネオレディースが解散になったとき。あのときは、私の貯金を切り崩して、ほかの選手に給料とかあげてたんで、貯金もゼロ。何もかもゼロになりましたから。私だけには、ごはんを食べさせてくれるタニマチさんがいたんですけど、それじゃほかの子たちは食べていけないので。その頃、この『あかゆ』をオープンしたんですよ。

掟　食べていくために『あかゆ』が必要だった、と。

京子　あとは道場もなくなっちゃったんで、みんなで集まる場所すらなくなったんですよ。ファンの人がファンレターを出す場所もないし。でも、この場所があることで、ファンも選手と会えるし、そういう場所がほしかったんです。

掟　団体事務所の代わりでもあったんですね。



"ナベトモ" こと渡辺智子も週4のペースでお店に出てるとのこと。ほかにも女子レスラー多数来店。気合いを入れて『あかゆ』へGO!

京子　だから最初は接客なんてやったことない人ばかりだから大変でしたけど、このお店があったおかげで、続いてきたんで、なくしちゃいけないなって思ってます。私にとって大事な場所ですよ。NEOの道場を作るときも、『あかゆ』のお金があったからできた部分もありましたから。

掟　京子さんはだいたい毎日お店にいるんですか?

京子　かなりの頻度でいますよ。いままで火曜日定休だったんですけど、定休もなくしちゃいましたからね。

掟　タフですね〜。睡眠はちゃんととってるんですか?

京子　最近は寝てますよ。昔は全然寝ないでも大丈夫だったんですけど、いまは酔っぱらって寝ちゃいます。若い頃は3日間ぐらい寝ないで遊べたんですけどね。「井上京子も眠くなるんだ」って。ちょっと悔しいですけどね。

掟　超人の京子さんに聞くのもなんですけど(笑)、それだけ飲んでて試合のときにお酒は抜けてるんですか?

京子　いまは試合の前日は休むようにしてます。20代のときは、巡業で地方に行って朝まで飲んでたじゃないですか。でも、ちょっと走れば全部汗で出ちゃったんですけどね。

掟　三禁、ないのも同然です(笑)。飲みの席も獄門党は一緒だったりとか?

京子　地方のプロモーターが開く宴の席に、中野さんに連れていってもらってましたね。中野さんって道路でもどこでも寝ちゃうんですよ。

掟　ブル中野が路上寝!?

京子　しかも、飲む前に試合でとれたメイクを直して。

掟　それは、いわゆる普通のお化粧ではなく、「ブル中野メイク」で?

京子　そう。だから、一緒に行くのが恥ずかしくて。

掟　京子さんたちはスッぴんで行くんですよね。

京子　もちろん。でも、中野さんはあのメイクで行くから「あ、ブル中野だ!」ってなるじゃないですか。それでも、最初はカッコよく飲んでるんですけど、酔っぱらってくると、あのまま寝るんですよ(笑)。

掟　知らない人が見たらエニウェアフォールマッチの途中かと思いますよ(笑)。

京子　あのブル中野という100キロ以上ある物体がそのへんに寝るんですよ。置いていくわけにもいかないんで、道路に寝てる中野さんをずっと眺めていたことがあります(笑)。

掟　担架を持参するしかないですね(笑)。では、今後「あかゆ」に来たいと思っているお客様予備軍の読者にメッセージを。

京子　お店に出るときは真剣勝負です。お客さんも「今日は『あかゆ』に行くぞ」って気合い入れてくるんだから、「こっちも気合い入れて飲まなきゃ」って。どう楽しませてやろうかって思ってますから。あとは、みんなで飲んで歌って、楽しくいきましょう!

掟　皆さん、ぜひ記憶飛ばしに来てください!

【10年9月18日/都内・武蔵小山『あかゆ』にて収録】

『井上京子の店 あかゆ』

『あかゆ』は私女子プロレスラー井上京子がやってるお店です。女子プロレスファンもそうじゃない方も一緒に楽しく遊べるお店です。(きょんぴぃでした)

営業時間　21:00〜5:00
不定休

TEL　03-3785-8521

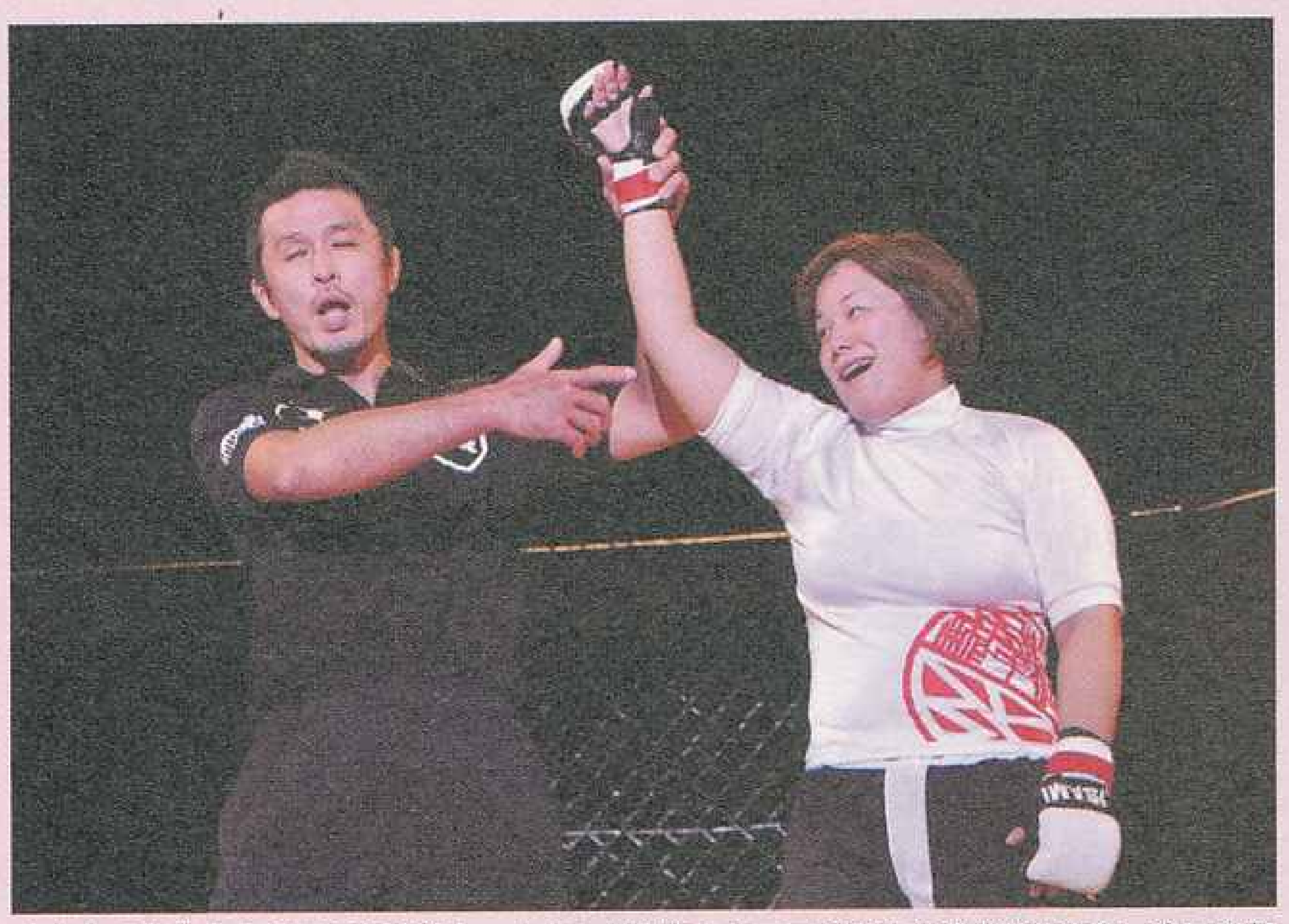
アクセス　〒142-0062
東京都品川区小山3-17-5
東急目黒線・武蔵小山駅下車徒歩2分。東口を出て交番の道を真っすぐ。コインランドリーの向かい。黄色い看板が目印です!
http://www.kyoko-akayu.com/



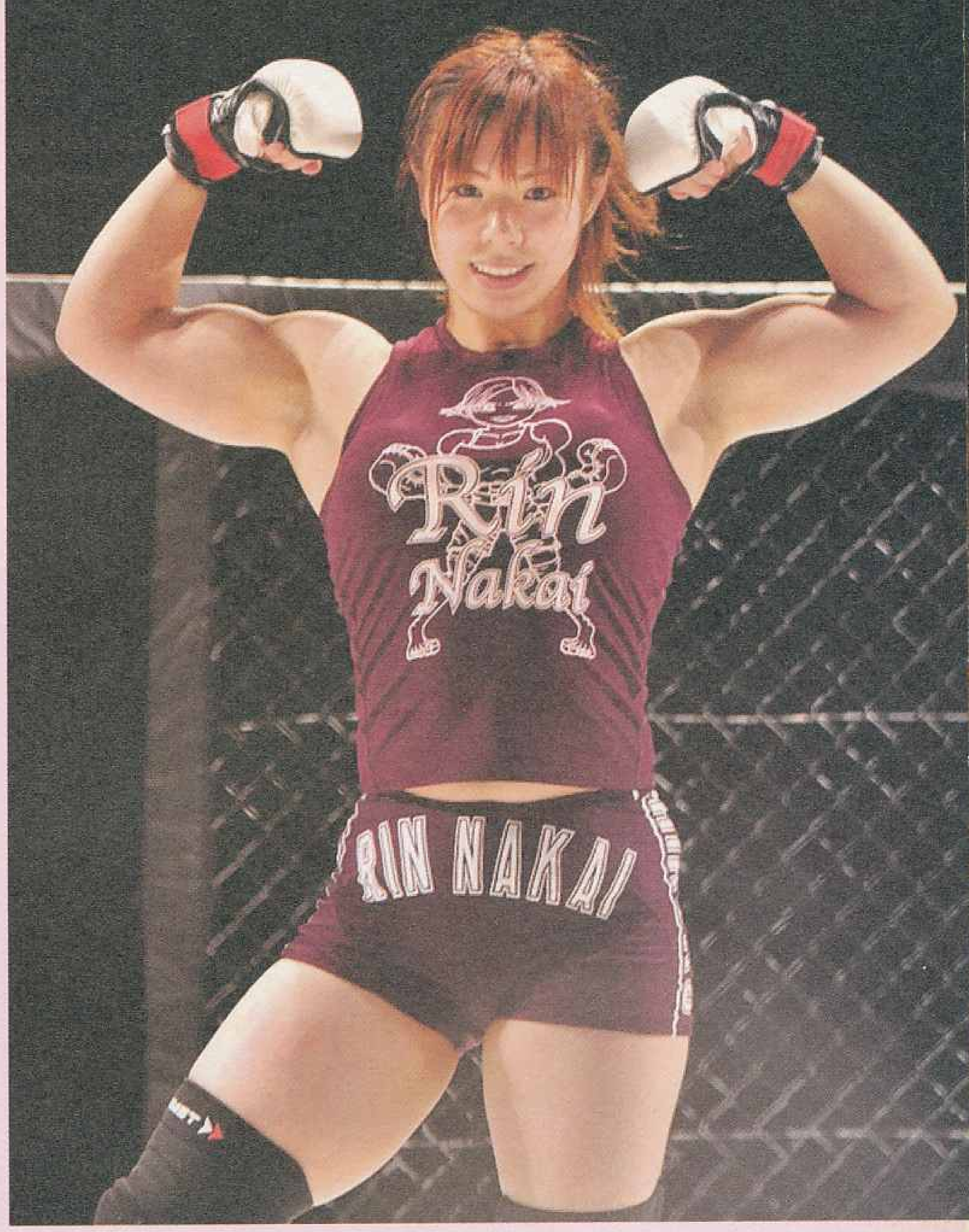
9.26『ヴァルキリー07』で貫禄の勝利!



入場から完全に獰猛な"ヴァンダレイ・モード"の中井は、対戦相手の超弁慶をキッとにらみつける。ゴング後、超弁慶のキックを素早くキャッチすると、1ラウンド終了間際で腕十字! 試合後にはケージ上でバク宙&バク転を繰り返し、中井ファンをおおいに喜ばせた。



今大会で中井とともに無差別級トーナメント決勝へとコマを進めたのは佐藤瑞穂。武田美智子を判定で下し決勝に勝ち進んだ佐藤だが、以前中井と対戦して敗戦を喫している。はたして11月の決勝で中井越えはできるのか?



"21世紀のレジー・ベネット" 中井りんがダッダーン!

文／松下ミワ　写真／©Valkyrie ©石井晃

中井りんがダッダーン! と快勝〜ッ!

最近、『kamipro』等に魅惑の衝撃ショットが掲載されたことで何かと話題の中井りん。しかし、ビジュアルとともに実力ももちろんホンモノなのだ!

9月26日にディファ有明にて開催された『ヴァルキリー07』で、女子無差別級初代チャンピオン決定トーナメント1回戦が行なわれ、中井りんは打撃に定評のある超弁慶と対戦。試合は、超弁慶が放ったミドルキックをサッと手でつかんだ中井がそのままグラウンドに持ち込み、アームロックのプレッシャーをかけつつ1ラウンド終了間際に電光石火の腕十字! 相手に何もさせない見事な一本勝ちで無差別級トーナメント決勝戦へとコマを進めた。強い、強すぎる!!

そして、なんと意外にも今回が初のメインイベンターだったという中井りん。その気概もあったのか、文句のつけようのない一本勝ちに加え、おなじみのバク転&バク宙パフォーマンスはいつもの3倍増し。試合後のマイクでは「必ずチャンピオンになります。そして世界を目指します!」という宣言まで飛び出した。『kamipro』に掲載されたアノ写真のイメージとはぜんぜん違う、"強くてカッコいい中井りん"を見せたのだった。

しかし、中井りんが凄いのはやっぱり試合だけじゃない。なんと試合後に控室に中井が戻ろうとするも、そこには色紙やカメラを持ったファンたちが群がる、群がる。そのなかにはなんと、中井りんインタビューが載った『kamipro』を手に、中井にサインを求めるファンが7〜8人いたというではないか。しかも一人2冊持ってた人もいたとか。ありがとうございます!

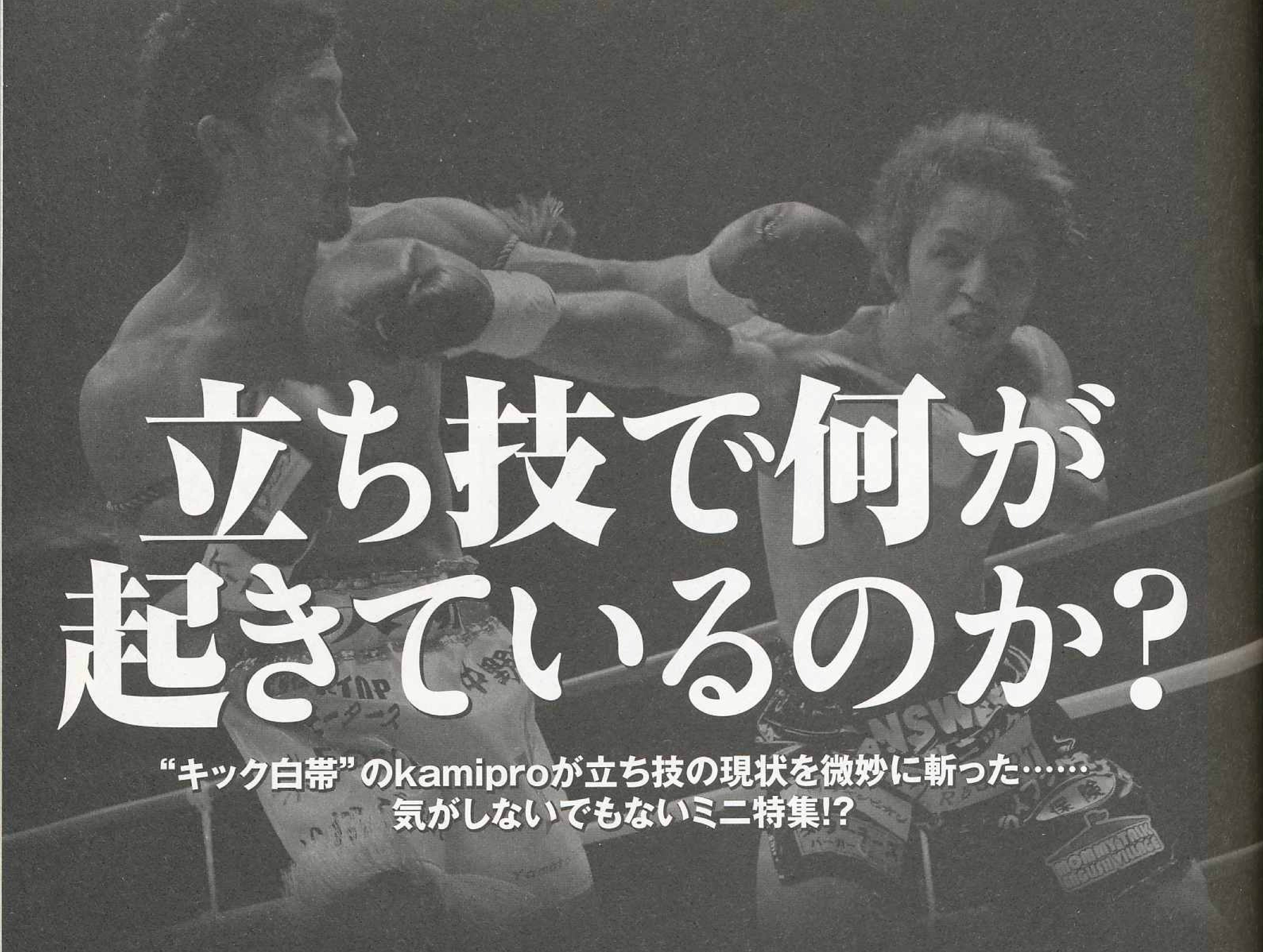
ちなみに、そんなファンにも丁寧に応じる中井りんとともに、それをほほえましそうに眺める館長(修斗道場四国館長・WILD宇佐美氏)の姿もいまや試合後の名物となっている。

こうして、今大会は中井りんのプロ魂がいろんな意味で炸裂した大会となったが、無敵の中井が目指すのは初のベルト。決勝で闘う佐藤瑞穂とは一度対戦したことがあり、中井がアームロックで一本勝ちを勝ち取っているが、再び強い中井りんは観られるのか? 11月28日の決勝戦も見逃せないぞ!

なお、この試合翌日に収録したインタビューは『kamipro』No・152に掲載予定。ハッキリ言って、恥ずかしいけど頑張ってもらった写真をここぞとばかりに載せる予定なので、そちらもお見逃しなく。ダッダーン!!

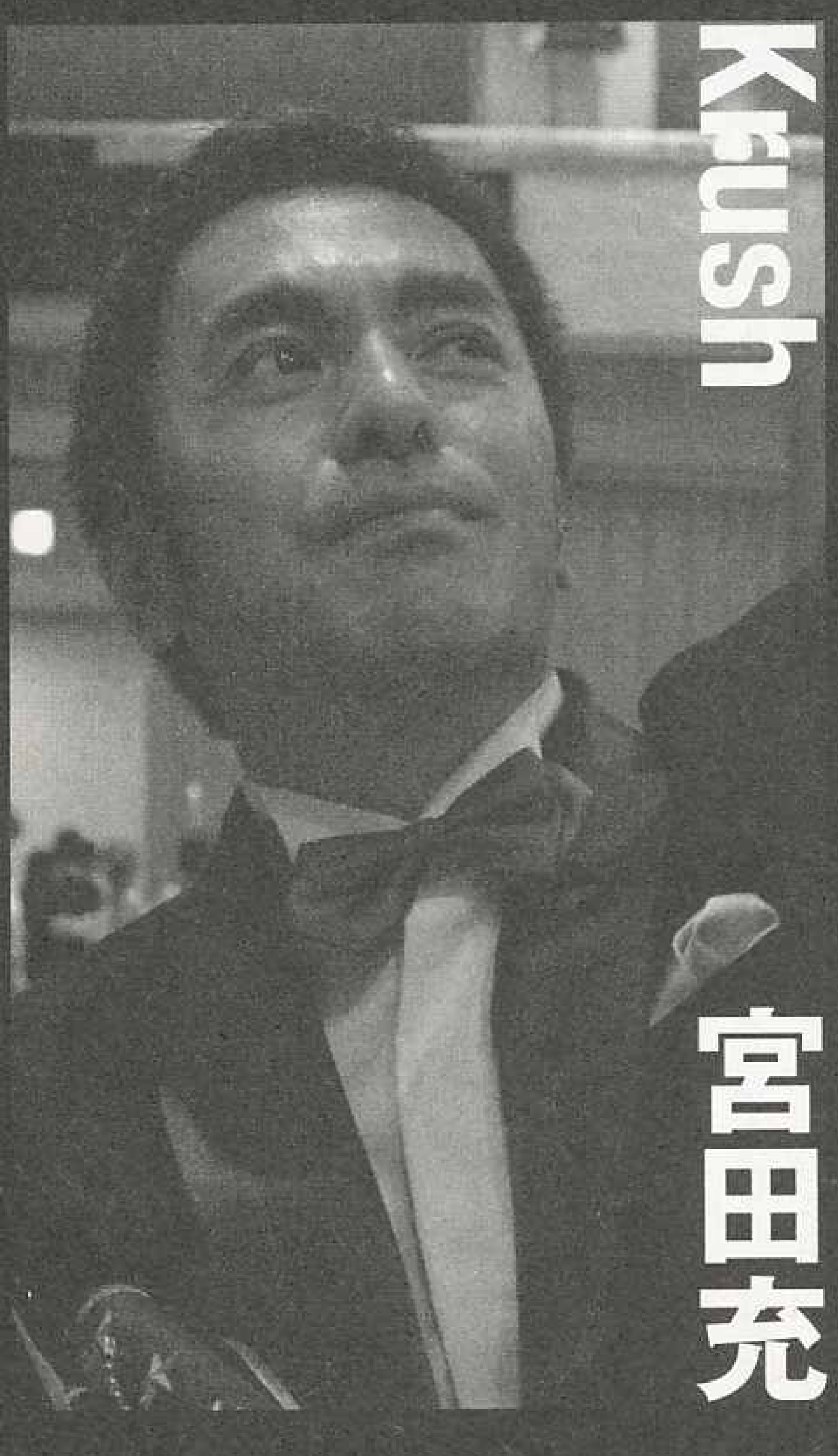
RIN NAKAI!

FEGのPUJI問題が及ぼす影響とは――!?

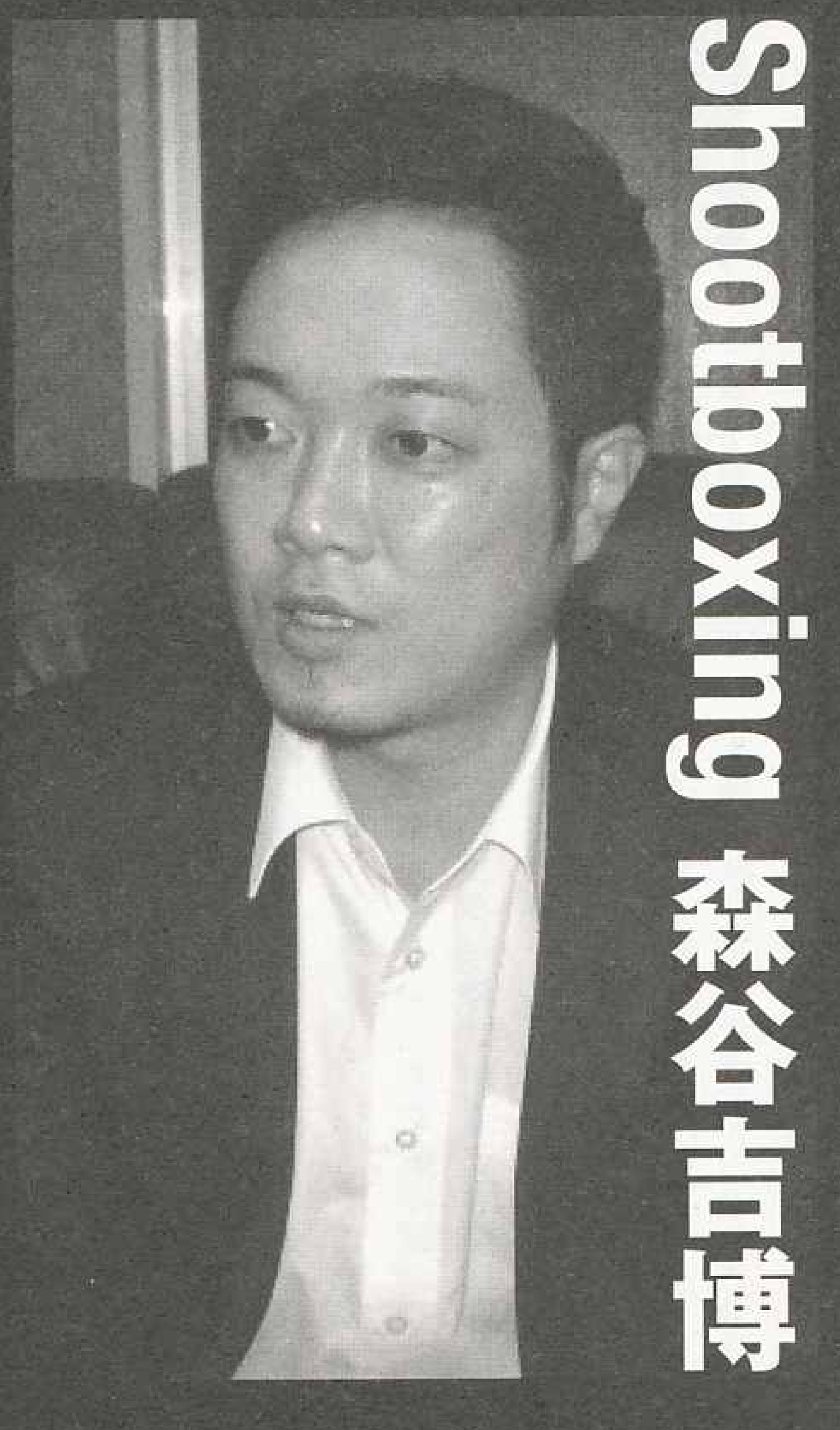


立ち技で何が起きているのか?

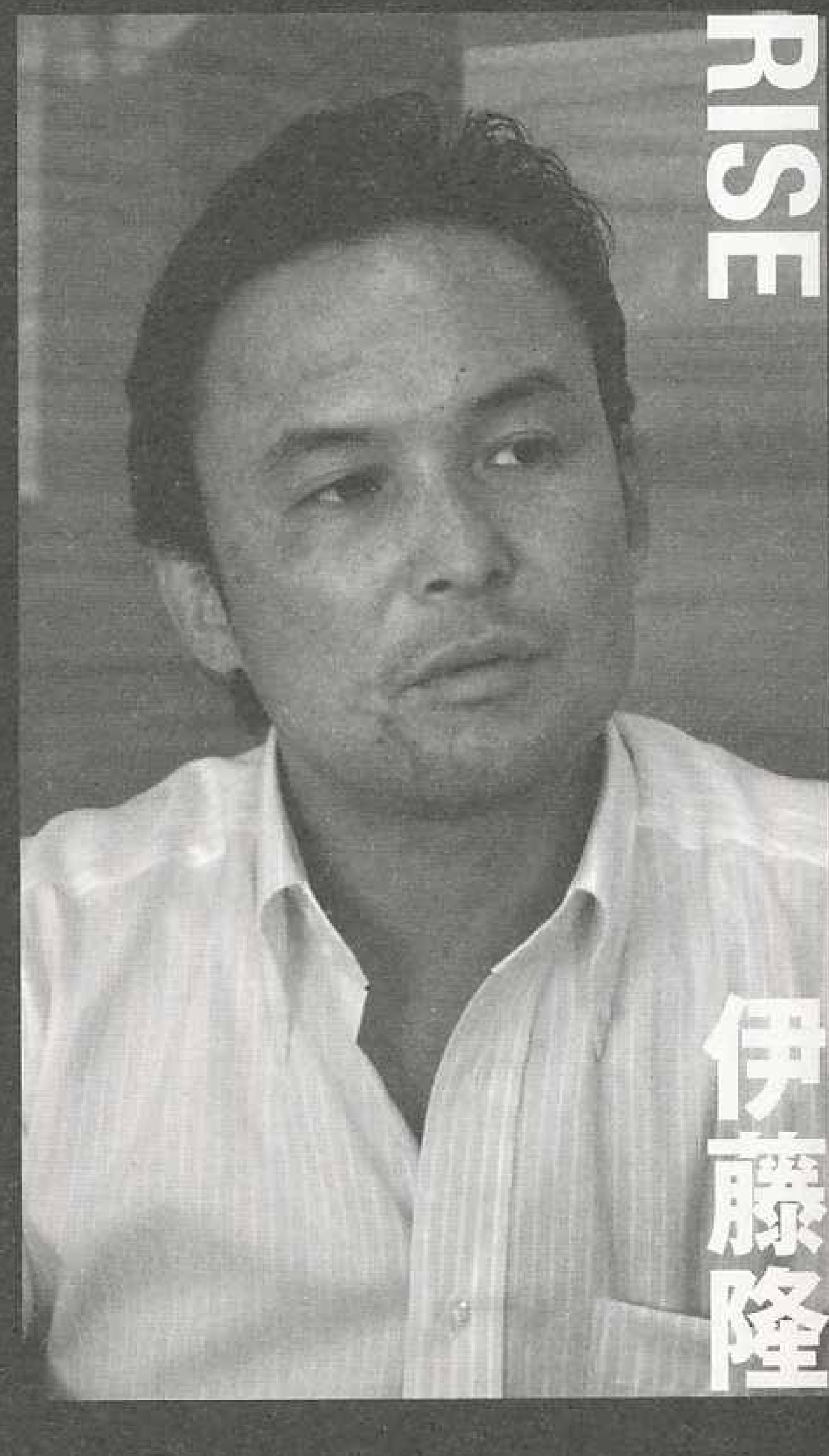
"キック白帯"のkamiproが立ち技の現状を微妙に斬った……
気がしないでもないミニ特集!?



Krush 宮田充



Shootboxing 森谷吉博



RISE 伊藤隆

2010年版相関図 初心者でも一目でわかる！

立ち技団体はいまこうなっている！

立ち技特集をするにあたって、まずは立ち技界の現状がどうなっているのか、相関図でご紹介。数えればきりがない団体数のある立ち技界だが、ここではおもな9団体を解説。その関係性とは!?

文／高崎計三

K-1 RULE

K-1

K-1は93年の旗揚げ以来イベント型の立ち技格闘技として発展し、出場する人材は欧米を中心とした外国人選手、国内団体で活躍するキックボクサーでまかなってきた。 それだけに、K-1の歴史においては国内各キック・立ち技団体とのつながりが重要なキーポイントとなってきた。03年のMAX本格スタート、今年の63キロ級開設によりその傾向はさらに強まってきている。いまも国内の多くのキックボクサーは、K-1の舞台を目指している。



提携

Krush



08年、全日本キックボクシング連盟の別枠興行としてスタートし、09年に同連盟が諸事情により解散してからは宮田充氏（元全日本キック興行部長）が立ち上げた新会社グッドルーザーの主催興行として継続。K-1ルールを全面的に採用し、注目カードを次々に実現。またK-1ファイターの試合出場の場、またはキックボクサーたちのK-1への登竜門的なイベントともなっている。今年末から4階級でトーナメントを行ない、王座を制定することが発表された。

提携

RISE

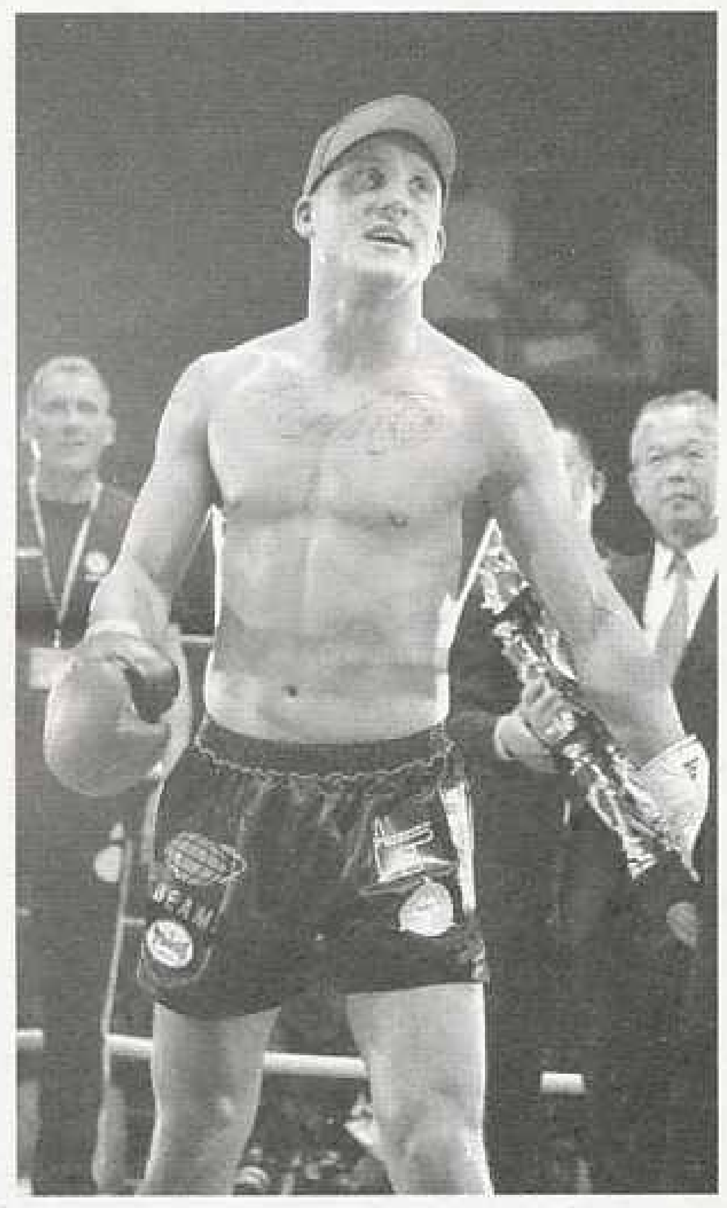


元キック王者の伊藤隆らが中心となり、93年に旗揚げ。当初はキックボクシングとの違いを打ち出すため、ショートスパッツ着用が義務づけられていた。早くから3ラウンドヒジなしのK-1に近いルールを採用し、階級別のトーナメントを中心にイベントを展開してきたが、現在は3階級の王座を制定している。このイベントからTATSUJI、日菜太らK-1のレギュラー選手も多数輩出されている。アマチュア部門KAMINARIMONも充実。

微妙

SB RULE

シュートボクシング



キック王者だったシーザー武志が85年に旗揚げした立ち技格闘技。キックボクシングの技に加えて投げ、立ち関節技を有効とするため、「スタンディング・バーリ・トゥード」との別名も。UWFと提携していたことでプロレスファンにも知られるようになり、現在ではMMAファイターの参戦も多い。K-1にも選手を派遣し、アンディ・サワーはMAX世界王者にもなったが現在は独立独歩の方向性を強めている。RENAら女子選手も活躍中。

格闘技ファンの多く、とくにMMAファンの多くが持つキックボクシングへのごく一般的な認識として、「団体が乱立している」「王者が多くて誰が最強かわからない」というものがある。確かに日本にはキックボクシング、立ち技競技だけで上に掲げたような多くの団体があり、合計すれば年間かなりの数のイベントが開催されている。ほとんどの団体が各階級の王座を制定しているので、国内にいるチャンピオンの数はやはり多いと言わざるをえない。

日本でキックボクシングが誕生したのは66年であり、70年代には複数のTV中継も得て大ブームを記録したが、やがて衰退。立ち技イベントが再び脚光を浴びるのはK－1がスタートする93年まで待たねばならない。

だが、そのあいだも国内のキックボクシング団体は地道な活動をずっと継続していた。その過程では離合集散も繰り返されており、それがキック団体の統一を妨げただけでなく王座が乱立する要因ともなってきた。

K－1以前の時代には、キックボクシングの目標は「打倒ムエタイ」で統一されていた。真空飛びヒザ蹴りでお茶の間の人気者となった沢村忠がタイ人と多く対戦し、日本人で初めてタイで王座を獲得した藤原敏男がこの世界の第一人者となったのは、ムエタイの強さが日本人のなかで知れわたっていたからにほかならない。

だがK－1誕生以降は、その目標も絶対ではなくなった。ヒジ攻撃と組んでのヒザ攻撃を禁止し、3分3ラウンドで争われるK－1（キックの基本は5ラウンド）が人気を得ると、キ

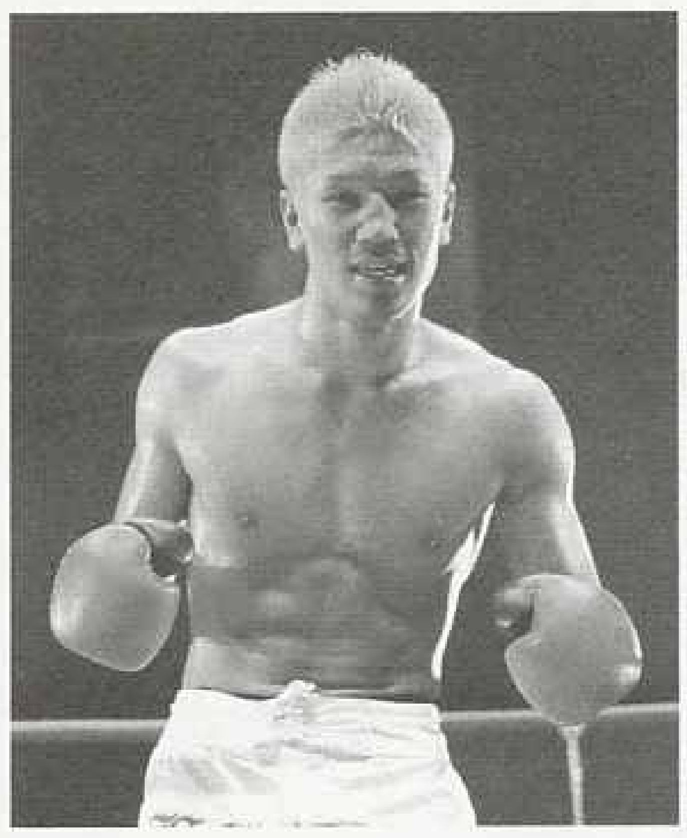
Kick & Muay Thai RULE

新日本キックボクシング連盟



キック全盛期に活躍した伊原信一を代表として83年にスタート。「打倒ムエタイ」を最大の目標に掲げ、タイでの主催興行も行なっていた。武田幸三らはタイのメジャータイトルを獲得してもいる。武田は後にK-1にも参戦し活躍した。国内では長く鎖国状態となっていたが、04年に新イベント『TITANS』をスタートさせてからは徐々に他のキック団体との交流も開始している。『ANGEL'S』という女子イベントも開催していたが、現在は休止中。

MAキックボクシング連盟



85年にスタートしたキック団体だが、その歴史は分裂など紆余曲折あって複雑だ。ただし、他団体との交流にはどの時代も比較的柔軟で、現在もK-1に城戸康裕、"狂拳" 竹内裕二らを出場させているほか、昨年からはNJKFと協力してWBCムエタイ王座の運営にも参加している。空手団体・士道館や真樹日佐夫の真樹ジムも加盟しており、それぞれが主催興行を開催している。WMAFという独自の世界王座も認定している。

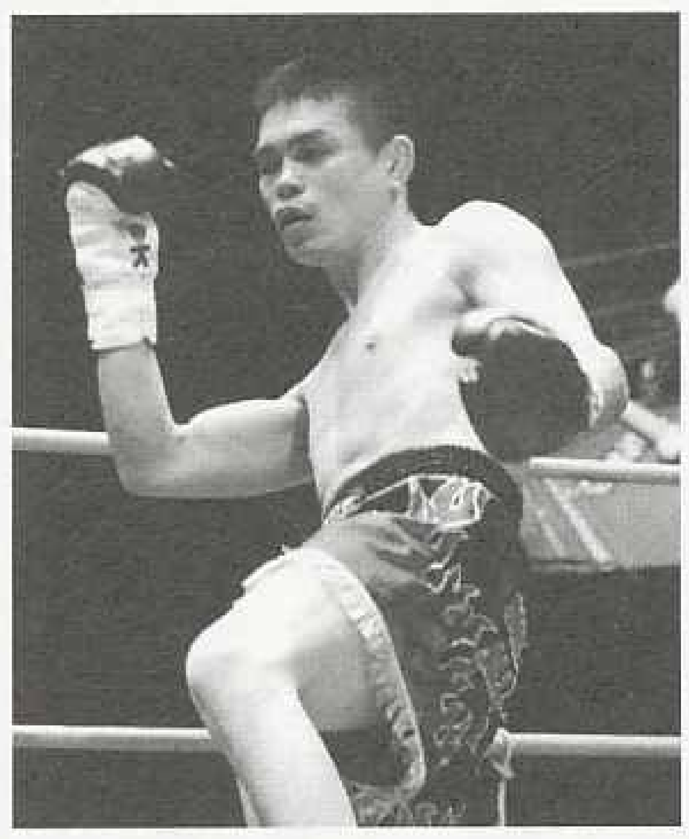
各々相互提携

ニュージャパンキックボクシング連盟



96年の全日本キック分裂時に、同連盟理事長だった藤田真を中心に設立。キック界統一を旗印に、01年にはほかの3団体と協力して統一王座・ランキング「NKB」をスタートさせたが、04年末に脱退。「打倒ムエタイ」を第一目標としてきたが、現在は活動の方向を広げてきている。K-1では長島☆自演乙☆雄一郎が同連盟のタイトルを保持したまま参戦したり、大和哲也が63キロ級の王者になっている。現在はMAとWBCムエタイ王座運営にも関わる。

J-NETWORK



97年、極真支部を母体としたアクティブJジムが全日本キック分裂時に団体化。加盟ジムは基本的にフランチャイズだが、大会にはフリージムや他団体の選手を積極的に起用。ランキングや王座に関してもフリー選手に全面的に門戸を開放している。07年以降は女子イベントも積極的に開催し、「J-GIRLS」の名称で着実な活動を続けている。今年になってファイヤー原田が、K-1・63キロ級に参戦したのをきっかけに一躍人気者となった。

M-1mc



ウィラサクレックジムが04年に開始した自主興行を母体として、現在もコンスタントに開催されているムエタイ興行。活躍するのは同ジムの選手だけではなく、他団体のトップ選手も多く参戦している。タイとの太いパイプを活かしてWPMFの日本王座、世界王座も運営。タイの強豪選手も多数招聘している。RISEにも関わる山口元気がM-1との協力のもとで開催する「REBELS」という新イベントも、昨年からスタートしている。

その他

ここに紹介した以外に日本キック連盟、APKF、K-Uの3団体が統一王座・ランキング「NKB」を運営するほか、最近は名古屋のNAGOYA KICK、大阪のDEEP KICKなど、地方でもコンスタントに活動するイベントが増えてきた。また福岡のリアルディールなど、地方の有力ジムが定期的に大会を開催したり、王座やランキングを制定している例も多い。また沖縄でも複数のキックイベントが定期的に開催されている。

ック団体でもそちらにシフトするところが出てくるようになった。どこまでいっても先の見えない「打倒ムエタイ」よりも、TVに出て人気者になれる「K−1出場」のほうが、恵まれない環境にいることの多い国内キックボクサーには現実的かつ魅力的な目標になった。

K−1ルールを採用するRISEやKrushといったイベントは、キックボクシング界の目標が「打倒ムエタイ」から「K−1出場」へと変わってきたことから生まれてきたものだといえる。

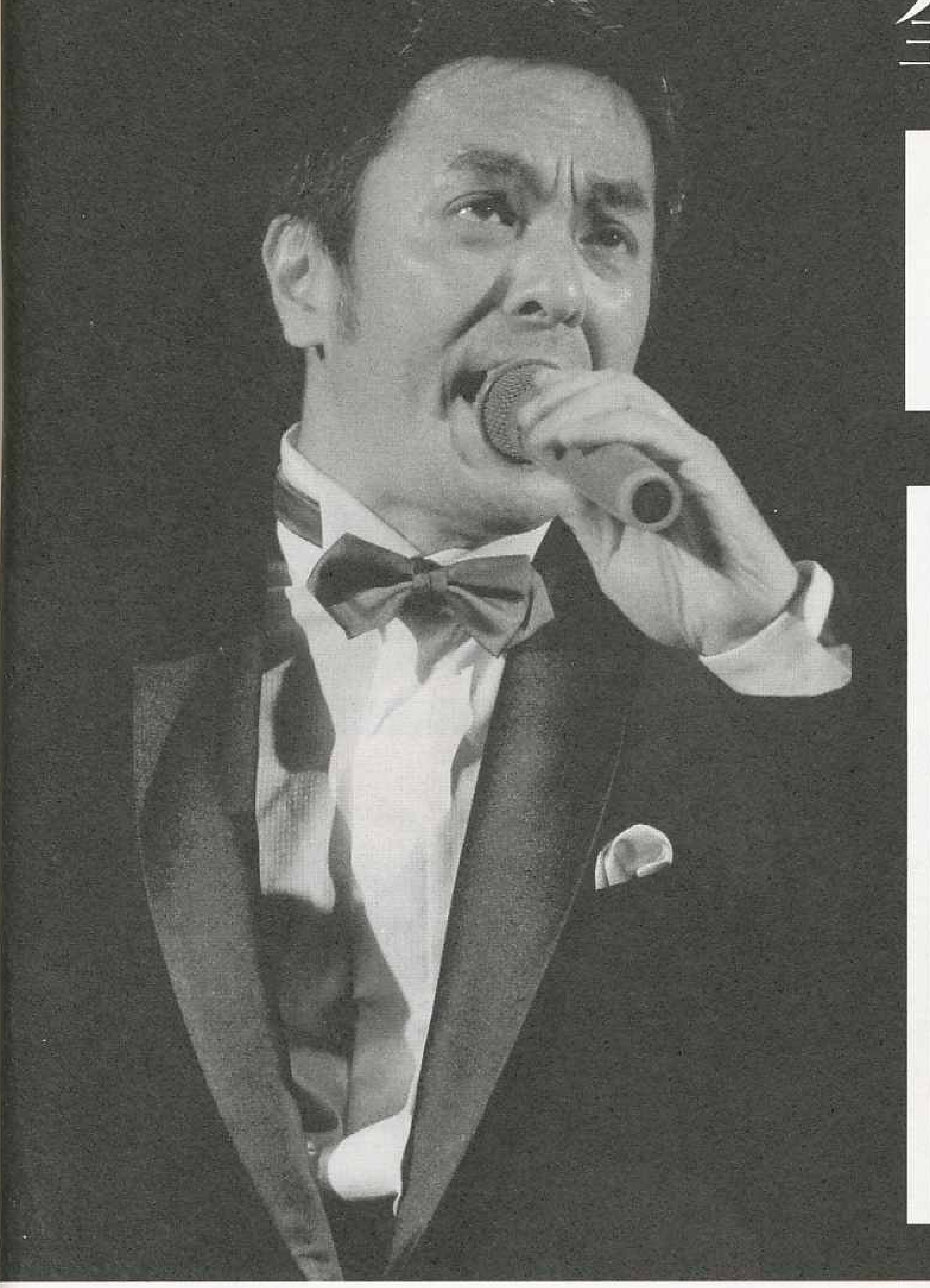
もちろん従来どおり、ヒジ・ヒザあり3分5ラウンドのキックボクシングルールにこだわる団体やジムは存在し、一途に「打倒ムエタイ」を掲げて活動する選手もいる。そんな選手たちにとって、ムエタイを看板にしたイベントが増えていることは喜ばしいことだろう。本場タイのルールや作法にこだわり、タイから現役の強豪選手を招聘するイベントが増えてきたのは近年の特徴だ。

その一方で独自ルールを採用し、我が道を行くのがシュートボクシング（SB）だ。SBはキックともK−1とも違う立ち位置にいながらどちらとも交流し、ユニークな存在感を放っている。

こうした各イベントの傾向や歴史を踏まえて見ると、乱立に見える状況でも個性が理解できる……はずだとは思うが、やはりそれはマニアの世界。一般的に見ればどれも似たように見えてしまう。「統一すればいいのに」と言われ続けるのも、仕方のないところなのかもしれない。

全日本キックの新天地

Krush



プロデューサー 宮田充

「キックを20年以上やって新しいことをやりたいと思いました」

『Krush』とは、昨年消滅した全日本キックボクシング連盟のマッチメイカーだった宮田氏や、選手たちが中心となって活動しているイベント。ルールはK-1ルールを導入し、立ち技界のなかでもK-1と密接な関係を築いている。ちなみに宮田氏はパンクラスのリングアナを務めていたこともある。

聞き手／ジャン斉藤

――宮田さん、まず『Ｋｒｕｓｈ』というイベントについて教えてください。

宮田　そうですね。『Ｋｒｕｓｈ』というイベントはＫ―１ルールでやらせてもらってまして、ボクは去年までは全日本キックという団体でマッチメイカーをやってました。まあ、ご存知だと思うんですけど、社長の事件によって団体は消滅してしまって……。

――宮田さんにも選手にもなんの罪もなかったのに。

宮田　それが去年の6月のことです。それでも7月の大会から『Ｋｒｕｓｈ』というかたちでやっていくなかで今年5月あたりからですからね、Ｋ―１のリングアナだったりとか、『Ｋｒｕｓｈ』の選手を貸すこと以外の仕事がＫ―１さんから来るようになったんです。

――全日本キックと『Ｋｒｕｓｈ』における宮田さんの立ち位置の違いってなんですか？

宮田　違い……。ぶっちゃけて言うと、ボクはもうキック界の人間ではないと思ってるので。

――え？　それはどういうことですか？

宮田　全日本キックがああいうかたちでなんにもなくなって、もちろんついてきてくれるジムさんや選手はいたんですけど、やっぱり勢いでできることじゃないんですよね。そこはやるか、やらないかは自分次第じゃないですか？

――全日本キックを引っぱってきたのは宮田さんですもんね。

宮田　いえいえ。でもたとえば、自分がやらなければ『Ｋｒｕｓｈ』なんかは誰もやらないし、なければないで選手たちはほかのリングを探すと思うし、そう考えるとほかのキックボクシング団体とボクがやってることは全然違うし、これはキックボクシングじゃないというか。

――団体を運営しているわけではない、と。『Ｋｒｕｓｈ』のルールはＫ―１ルールですし、Ｋ―１との結びつきが強いというイベントですね。

宮田　そうですね。やっぱりいまはＫ―１さんとある程度、コミュニケーションをとらせてもらいながらやらないと、Ｋ―１甲子園の選手にしても高校を卒業したらどこを目指せばいいの？　っていう話になるじゃないですか。そういう選手たちを育てる場は必要だと思ったし、高校のうちから「プロでやりたい」っていう子もいるので、そこはやりがいはありますよね。

――『Ｋｒｕｓｈ』というイベントはいわゆるＫ―１へのステップの場だったりするんですか？

宮田　そういう面もあり、団体に属している選手だったり、フリーの選手がＫ―１のルールで競い合う場ですね。Ｋ―１もやっぱり興行本数が毎月あるわけではないじゃないですか。後楽園だからこそ組めるカードもあるだろうし、Ｋ―１ルールに慣れてもらいたいこともあるし、キックボクシングの選手がいきなりＫ―１に上がってもそんなにいい結果が出せていないですしね。

――キックではなくＫ―１に準処するイベントを目指したのはどうしてですか？

宮田　ボクは全日本キックで20年以上やってたんですけど、全日本キックがなくなったときに谷川さんには凄く助けてもらったんで。その恩返しってわけでもないですけど、そこはＫ―１でやりたい選手が多かったからですよね。

――やっぱりＫ―１に上がりたい選手は多いですか？

宮田　そうですねぇ。やっぱり限界があるじゃないですか、キックボクシングだけやっても。選手は有名になりたいんですよね。後楽園ホールクラスでいいファイトマネーをもらってる選手もいるんでしょうけど……。

――現実は厳しい、と。

宮田「お金にならない」なんて言っちゃいけないのかもしれないけれど、少なくとも全日本でやってるかぎりはここまで……っていうハードルはあったので。そこでFEGが軽量級をやりたい、ボクが触ってる選手がK-1に出たいのであれば、やっぱりスムーズな道を作ってあげたいし。石川（直生）もMAXであういう結果になったんですけど（笑）、キャリアのなかでは大きなきっかけになると思うし。いままではけっこうね、全日本の頃は正直、突っぱっていたのですけどね。

――「K-1なんて！」みたいな？

宮田「K-1なんか関係ねえよ！」という感じでね。やっぱりヒジ・ヒザありで、20年近くやってきたプライドはありますよ。ただ、この1年で180度、考え方が変わりましたね。それはね、ヒジ・ヒザありもおもしろいと思うけど、僕的には「それだけじゃちょっと……」というふうになって。

――キックにこだわってるだけじゃダメだと？

宮田　それはほかの人がやればいいんじゃないかな、と。じゃあ「ムエタイを目指すのはいいけど、タイのメインイベンターはいくらもらってるの？」って話になる。ムエタイのチャンピオンになって得られるものもありますけど、K-1だってプロとして得られるものはたくさんありますよ。たとえば大和（哲也）くんも見られることで雰囲気が凄く変わっていくし、やっぱファンも自然と集まってくるし。

――その目標であるK-1が不安定な状況ですけど。

宮田　そう聞きますね。

――そう聞きますか。

宮田　やっぱり大会のスケジュールが決まってなかったりしますし（この取材後、発表された）。選手もK-1の大会に合わせて調整するじゃないですか。そのあいだに試合を入れないようにしてますし。ウチなんかは後楽園ホールを年間で押さえていますけど、FEGさんはテレビの放映日程も絡んでいるんだろうから、そう簡単にいかないんでしょうけど。



K-1で63キロがスタートしたことによって、ますます各キック団体とK-1の関係は深まっていくはずだが、PUJI問題の影響はどう出るのか……。

――K-1の大会が決まらないことで、K-1で実現してもおかしくないカードが『Krush』で決まったりしてますね。シュートボクシングにしても。

宮田　そうですね。ウチでいえば佐藤（嘉洋）くんが出たり。

――これは一過性のものでしょうか？　どう考えていますか。

宮田　どうでしょうね？　マスコミさんでもね、「この人はこういうふうにしたいんだろうな」っていう書き方をする人がいるじゃないですか？　選手にそういうことを言わせたりする、反K-1の立場を取ってるライターさんとか。

――へえ～、そういう政治闘争があるわけですか？

宮田　いたずらにK-1に背を向ける人はいますよね。記者から「ヒジ・ヒザをやるべきだ」「みんながK-1を目指すんだったら背を向けるべきだ！」と吹き込まれたら、選手はそれがやっぱり本筋だなって思い込んじゃうわけですよ。

――ああ、総合のマスコミにもそういう方はいますねぇ。

宮田　それで選手を囲ってインタビューが取れてしのぎになるのかは知りませんけど。キックボクシングの記者さんに多いのは「ムエタイの強い選手とやるべきだ！」と。そう言われれば選手もその気になるじゃないですか。だけど、勝負のさせどきってあると思うんです。やるんだったら一発勝負だから、勝てるときに勝てる可能性が高まったときにやりたい。

――それに興行ですからね。ニーズがないと話にならないでしょうし。

宮田　だから、悪く言うとモルモットみたいに……まあ、記者は純粋で悪意はないんでしょうけど。それで潰れていく選手も多いです。

――う～ん、自分の思いを選手に託したいんですかね？

宮田　そんなので客は入らないよ！　って（笑）。

――ダハハハハ！

宮田　で、やっぱり日本人が負けるとムエタイの壁は厚かったとかになる。ムエタイは素晴らしいのはわかってるんだけど……。K-1で闘うってことも凄くハードルの高いことだと思うんですけどね。

――で、今回の『Krush』に大和選手が出場したのは谷川さんに相談するかたちで決定したんですか？

宮田　もちろんですね。FEGさんと大和サイドと相談しながら。佐藤くんにしてもあくまでもFEGのイベント優先ですから。ちょうど二人とも8～9月が空いていた。

――K-1のスケジュールが決まらないあいだに『Krush』に上がれるんだったら、と。

宮田　そうですね。やっぱり選手ってケガがなければ試合をドンドンしたいので。まあ、今後のK-1のスケジュールはなんとなくは聞いているんで。まあ、日程が決まれば、とりあえず選手があれこれ考える

キックを20年近くやってきましたけど それだけじゃちょっと……という考えに

必要はないですから。

――K―1が経営問題を乗りきったとしても、いままでどおりなんの変わりもなく進むと思いますか？

宮田　乗りきってほしいですし、乗りきるでしょうね。……FEGがダメだったら俺の出番だと思ってる人、いるんでしょう？

――クックックッ。

宮田　たとえば、FEGがそうなったからって、そのままお客さんを集めるかといえば、一時的には来るかもしれないけれども、どんくさいイベントやったら格闘技を観ている場合じゃないから。

――K―1というブランド込みで観見てたところもありますからね。

宮田　そうなんですよ。PRIDEなくなってね、格闘技を観なくなった人も多いでしょ。PRIDE観ちゃったから、ほかを観てもね……。

――まあ、そういうことなんですが、そこに気づいてないMMA関係者は凄く多かったですね。

宮田　だからボクらができないことはFEGさんがやってるし、そこに縁があってボクがお手伝いさせてもらっているので、やっぱりそのまま突っ走ってほしいし。しかし、谷川さんっておもしろいっていったらアレですけど、本当にタフですね。

――谷川さんじゃなかったらK―1は終わってますよ！　へんな話。

宮田　谷川さんを見習いたいです。谷川さんになりたいですねぇ。

――なりたいんですか（笑）。

宮田　あのあきらめない精神力はホントに凄い。谷川さんは「ピンチはチャンス」って言ってますけど……まあ、1年経てば、いろんなものがハッキリしているのかなって。

――確かに来年のいま頃どうなってるのか気になりますよね（笑）。興行のあり方もどんどん変わってるでしょうし。

宮田　いまも変わってきてますからね。団体がなくなって1年経ちますけど、山本優弥はK―1で名前がようやく売れてきたし、K―1が63キロの大会をやったことで、ちょっと客層にも変化が出てきたと思うんですよ。一番の理想は一般のお客さんがどんどん詰めかけてくれることですからね。やっぱりキックボクシングって後援でなんとかもってるところがあるので、



『Krush』にはK-163キロ王者の大和哲也も参戦。判定負けを喫する波乱は起きた。63キロはMAXで完全に定着したとは言えないだけにこういった『Krush』との連携は選手のためにも強く求められるだろう。

「ピンチはチャンス」谷川さんの あきらめない精神力はホントに凄い

ウチはどちらかというと、全日本キックの頃からできるだけ一般客に観見てもらいやすというか、目を引くようなことをやってきたので。

――そういう意味ではK―1とのつながりは一つのポイントになりますね。

宮田　だから、選手からいまだに「キックボクシングをやらないんですか？」って言われるんですけど……キックはもういいよって。

――もういいですか？（笑）。

宮田　それより新しいことをやっていきたい。キックはほかにいっぱいあるし、それで儲かるのであればやっているよって。あと「昔の全日本キックのマッチメイクで勝負したい」とかも言われるんですけど、それでみんながハッピーになれるんだったらそれはやるよ。

――でも、キックをやることで選手とか含めてなかなかハッピーにしづらい現状はあるわけですか？

宮田　ハッピーにはならないと思いますね。昔ながらのシステムでコツコツとやられてる人のことは否定はしないのですけど……ボクがキックに後戻りしてもしようがない。それでK―1の二軍的な見方をされても、なんとも思わないし。キックはやろうと思えば明日にでも誰でも団体の長になれるんです。やろうと思えば1ヵ月後にチャンピオンを作れる。それをやっても誰もとがめないし、誰でもできるし……。そうじゃなくて意味のあるものを作りたいんですね。

――ボクはキックのことをそんなに詳しくは知らないんですけど、いくつ団体があるんですか？

宮田　10くらいあるんじゃないですかね。『Krush』を団体とするかどうか別にして。

――そんなにあるんだ！

宮田　だから多い日なんか後楽園、ディファ、新木場、新宿FACE、大森ゴールドジム大会があったりとか。

――それは……パイを考えたら正しくないですね。

宮田　K―1の影響で人口は増えて、ジムもそれなりに食えてるわけですけどね。まあ、この景気だと5000円のチケット買って観に行くってのもけっこう厳しい。この10年で後楽園ホールの当日券の売り上げは下がってますよね。

――当日券でふらりと観に行ける雰囲気は確かにないですねぇ。

宮田　やっぱりキックって後援とか選手のチケット売りがメインになってしまいますし。そこでやってもハッピーにならないから、一般のお客さんを呼べて、選手もハッピーになれるのがいいんじゃないか、と。

――それが『Krush』の理想とするかたちなんですね。

宮田　そうですね。できるだけキックボクシングじゃやらないようなことをやりたいな、と。

――よくわかりました。期待してます！

【10年8月某日／都内・某所にて収録】

Krush

K-1登竜門的キックイベント

RISE

KGS代表取締役
伊藤 隆

「K-1の正確な情報が入ってこないため我々も動かざるをえない状況になってしまった」



RISEは2003年からスタートしたキックボクシングイベントである。ルールはK-1に準ずる形式で行なわれ、同イベントからK-1MAXに出場する選手も多い。伊藤氏は運営を行なっている一人であり、キックで一時代を築いたチャンピオンである――。

聞き手／ジャン斉藤

現役時代に団体のしがらみで闘いたい選手と試合ができないケースがあった

――RISEというと、日菜太選手を輩出したこと、大会運営を元キックボクサーの伊藤さんが担っていることがよく知られていますが、まずはイベントの成り立ちから教えてください。

伊藤　RISEというイベントは2003年2月に大森のゴールドジムで立ち上げまして。いまは後楽園ホールでもやらせていただいてますが、私は10年前までは現役選手でその当時のキックボクシングって低迷してたんですね。それで「もっと何か新しいのができるんじゃないか?」と思い、3人（山口元気、内田康弘）で立ち上げました。

――なるほど。RISEというのはイベントであって、いわゆるキックボクシング団体ではないんですよね。

伊藤　そうですね。昔は選手もジムもどこかしら団体に所属してないと試合に出られなかったのですけど、連盟のやり方に合わなかったりして、方向性を見失なってる選手がいたんですよ。

――RISEはさまようフリー選手のためのイベントでもある、と。

伊藤　もちろん団体所属の選手も出られるんですけど、おもにフリーの活躍の場、選手と団体の垣根を越えた活躍の場として立ち上げたんです。

――RISEを作る際、伊藤さんが団体の枠組みにとらわれたくなかったのはなぜでしょう。

伊藤　やっぱり現役時代に団体のしがらみを強く感じてて、ほかの団体のチャンピオンと闘いたいのに団体の都合で闘えないことが多かった。そういうしがらみってめんどくさいなって。だって選手は強さを求めたいわけじゃないですか。だったら、団体のしがらみがないフリーのイベントを作れば、チャンピオン同士も対戦できますからね。

――でも、こういう試みに風当たりは強かったんじゃないですか?　既存の団体からすれば、縄張りを荒らす新参者と見られるわけですから。

伊藤　最初はいろいろ言われましたけどね。それは団体側からすると「勝手なことをするな!」と。でも、我々は決して間違ったことをやってるとは思ってませんでしたから。

――たとえば伊藤さんのやりたいことって、団体同士が話をして実現できないもんなんですか?

伊藤　本当はそれがベストですけどね。時代はどんどん変わってるいるので変化していかないと……。歴史を守るのも大切。けど、守りつつ新しいものを取り入れていかなければいけないと思う。キックにはいい選手がいっぱいいるんですよ。でも、関係者が変わらなければ意味がないと思うんですよね。たとえば各階級に王者は一人にしていかないと。

――王者が乱立しているとベルトの価値も軽くなりますよね。そんなに伊藤さんとは考え方が違うんですか?

伊藤　昨今、先輩方は変わってきましたけど、やっぱり選手やお客さんがメインじゃ

ないとダメじゃないですか。そこをメインにするにはどうするか？ってことですよ。

——プロ興行となれば、それが大前提になりますよね。

伊藤　そうなんですよ。だから、ただ真剣勝負をやらせればいいとかじゃなくて、どうすればキックボクシングの良さが伝わるのか、そのためには企業努力が必要だと思うんですよ。僕はプロイベントとしてやる以上、なるべくパーフェクトを目指したいです。

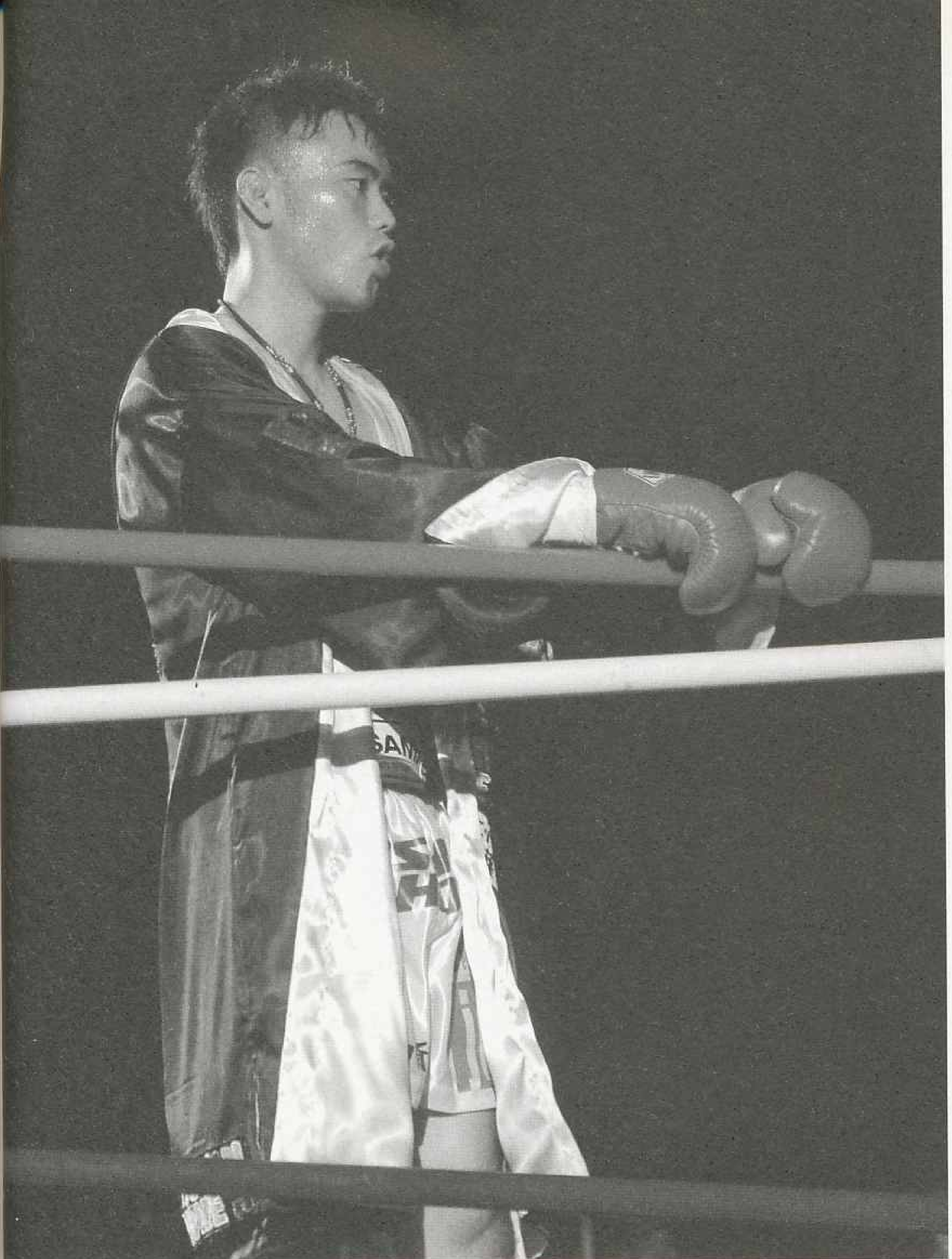
——伊藤さんは現役時代、キックボクシングに対してそういったストレスを常に抱えていながら闘っていたんですか？

伊藤　そうですね。僕らの時代はたいしてお金ももらえなかったんですし。それは自分がファイターとしてお客さんを引っぱれなかったのが原因だとは思うんですけど。正直、よっぽど好きじゃないとキックはできないんですよ。

——キックはあまり詳しくない僕でも伊藤さんがトップファイターだったことは知ってるんですが、それでも食っていくのは大変だったんですか……。

伊藤　食えなかったですよね（キッパリ）。その当時、それでも僕はまだ（ファイトマネーを）もらっていたほうだと思うんですけど、一試合のために2〜3カ月にもおよぶ練習期間があるわけですよ。

——つまり、その一試合で数ヵ月分の給料を稼がないといけない。もしケガをしたりなんかしたら、場合によっては半年近く"無給"になっちゃうわけですよね。



日菜太はRISEの70キロトーナメントを制してK-1MAXのリングに進み活躍。今後もこのようなケースが続くことがK-1やRISEにとって理想だ。

我々の時代はキックで食えなかった。よっぽど好きじゃないとできないんですよ

伊藤　僕なんかでも厳しかったから、ほかの選手はもっと大変だったと思いますね。だから"キックが好きじゃないとできない"んです。

——では、K—1MAXの旗揚げは不遇のキックボクサーにとって革命的な出来事というか。

伊藤　凄いことです。K—1がヘビー級だけだったらこうはなってないですけど、MAXができたことでキックの各ジムが繁栄したと思うんですよね。今年になって63キロもスタートしましたし、これから競技人口はもっともっと増えてくるはずですね。

——そこは"キックで食える"ってことが重要になってくるんですね。

伊藤　それと"有名になれる"。我々の時代って、キックが好きで自分がどこまで通用するのかという思いだけでやっていた。でも、いまは我々の時代とは違うんですよ。魔裟斗という人間が台頭して、いい生活をして、テレビにも出てスターになった。そしていまの若い子はみんな魔裟斗になりたいと思ってる。ただ、いまの選手には強さを求めることを忘れないでほしいしそして強くなったあとにいろんな付加価値がついてくることも。

——伊藤さんからすると、いまの環境はうらやましかったりしますか？

伊藤　うらやましいですよね（苦笑）。だからもっともっと頑張ってほしいんですよね。もっと世界に通用する選手が出てほしい。まあ我々の苦しい時代があったからこそ、いまが変わってきたと思ってるんですけどね。

——こうして多くの選手がK—1を目標にしている現状がありますが、基本的な質問になっちゃいますけど、キックとK—1はルールが違いますよね。それでもK—1を目指すファイターは多いんですか。

伊藤　はい。キックはヒジがあって、首相撲が無制限ってところですよね。で、RISEはヒジなし等、K—1ルールに準じてやってます。なぜかというと、私自身がヒジとヒザを武器に勝ってきたんですけど、関係者の評価は上がるんですが、やっぱり一般のお客さんには伝わらないんですよね。ヒジで顔をカットしても「なんで切れたの？」みたいな反応をされる。ヒジって一瞬の世界なんで角度によっちゃ何が起きたのかわかんないですよ。そのことで私自身もイヤな思いもしたし、苦労もしてきたので。

——嫌な思いといいますと？

伊藤　ヒジ打ちで勝っても「バッティングだ」とか「ラッキーだったね」と言われたり。だからヒジ打ちを技術として誇るのもいいんですけど、誰が見てもわかりやすいことも大切だと思うんですよね。もちろんヒジありでおもしろい試合もたくさんありますけど。

——伊藤さんはヒジの選手なのに、ある意味でヒジを否定するような発言は重みがありますね……。

万が一、K-1がダメになったら格闘技界はまた低迷すると思うんですよ

伊藤　そこは自分が苦労してきたし、たとえば20年くらい現役ができればいいですよ。でも、そんなに長いあいだできる職業じゃないですから、誰が観てもわかりやすいルールで選手には極力やっぱり輝いてほしいじゃないですか。でも、ヒジありの希望選手にはヒジありルールのキック系の団体に参戦させますけど。

――当然キックボクシングにこだわりを持ったマニアも多いでしょうし、ヒジなしのK-1に説得力を持ってなかったりしますよね。

伊藤　もちろんマニアなファンも大切ですよ。でも、僕はまずは底辺を広げていきたいんです。誰にでもわかりやすいイベントを開いて、それで目を肥やしてからキックに行ってもらってもいいじゃないですか。そしてキックに物足りなさを感じたらムエタイというものもある。まずは観てもらうことを考えると、ルールにしてもK-1MAXと連動するかたちがいいと思ってますね。

――そのK-1の運営母体であるFEGの経営状況が思わしくないようですが……。投資銀行PUJIとの提携でなんとか盛り返す兆しは見えてきていますけど。伊藤さんはどう思われますか？

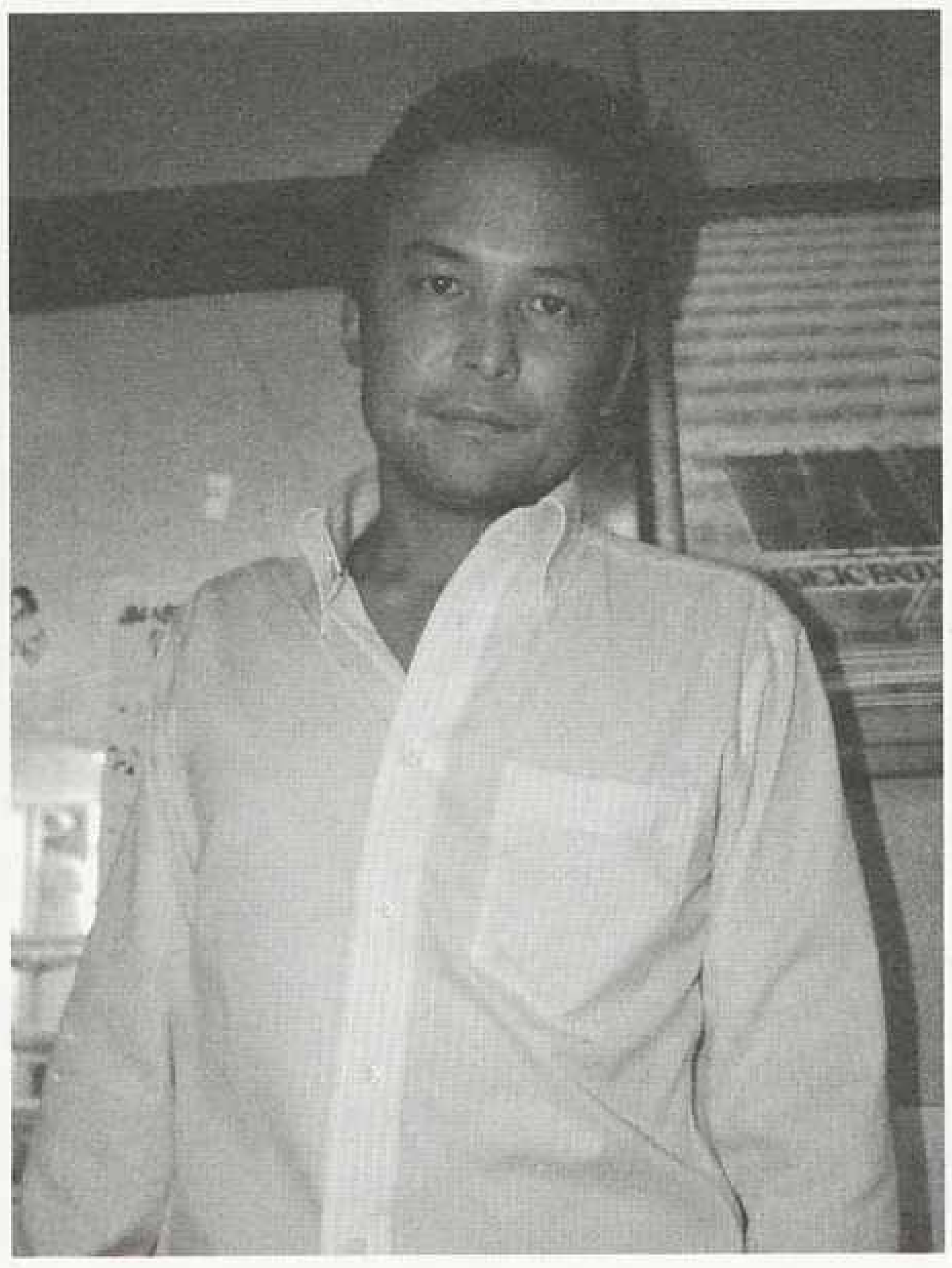
伊藤　K-1さんの話は選手からもいろんな話がありますね。事実かどうかはわかりませんが……。

――ちょっといままでにはないことが起こり始めてるように見えるんです。まずRISEで日菜太選手とK-1でおなじみの（アルトゥール・）キシェンコのカードが実現しました。

伊藤　本当はSB森谷さんと「アンディ・サワーvs日菜太を実現できたらおもしろいですね」って話をしてたんですが、いろいろあって実現できなかったんです。そのときにSBさんが『S-cup』の件でキシェンコのマネージャーと別の選手について話をしてる流れから「キシェンコが日菜太とやりたいと言っている」という話が浮かんできたんです。で、この件でSB森谷さんから谷川さんに確認連絡を取ったんですが、1〜2週間くらい全然捕まらなかったんです。

――なるほど（笑）。谷川さんもK-1の立て直しのために忙殺されていたという話ですもんね。

伊藤　で、どんどん時間だけがすぎてしまって、こちらとしてもカードを決めるために動くしかなかったということですね。



キック系イベントで初めてJCBホールを使用したのはRISE。来年に再び進出するという。どんな仕掛けを用意するのか注目だ。

――それでSBでは日菜太vsアンディ・サワーが組まれたり、何か立ち技のパワーバランスが崩れてるのではないかと見てるんですけど。

伊藤　僕も細かいK-1の内情はわからないですし、次のMAXのスケジュールもなかなか教えてもらえてなかったんです。K-1さんとはもちろん協力体制ではありますけど、我々も我々でイベントやっていかないといけません。

――RISEさんはRISEさんでやっていかなければならないなかで、伊藤さんは今後のMAXにどういう役割を求めたいですか？

伊藤　やっぱりいままでどおり世界一を決めるイベントにしてもらいたいですよね。選手の一つの目標ですし。我々としてはK-1で世界を獲れる選手を輩出したいですね。

――K-1という目標がなくなったら選手も困りますよね。それはちょっと大変なことになりかねないな……。

伊藤　選手たちの目標がなくなるのは困りますけど、万が一のようなことがあったら……我々は我々でやっていくしかないですよね。

――その動きの一つがキシェンコvs日菜太だったりするんですね。

伊藤　正確な情報が入ってこない。K-1のスケジュールがわからない、と。まあ、我々も動かざるをえない状況におかれてしまったっていうのもありますよね。でも……万が一、K-1がダメになったら格闘技界はまた低迷すると思うんですよ。これからは横のつながり、結束を強くしていくしかない。

――いまは数えきれないくらい団体数もたくさんあるからよけいに混乱するでしょうね。

伊藤　いっぱいありますよ。かつては二つだったのが、そこからバンバンバンって割れていったんですけどね。だってこんなに不安定な状況でもイベントは異様にあるじゃないですか。

――聞いたら一日3興行も重なるときもあるとか。

伊藤　毎週土日何かしらやってます、大中小含めて。不景気なのにイベント数は増えてるんですよ。

――選手もファンも分散させるのはよくないですよね……。キックボクシングの団体統一って結局は理想論になっちゃうんですか？

伊藤　う〜ん、まとめる人は業界じゃない方がいいと思うんですよね。たとえば政治家とか。

――キック界とはしがらみがなくて、そして力が振るえる人というか。

伊藤　しがらみのない方がやってくれたほうが、面倒くさい話にならないですね。「アイツより上じゃない、下じゃない」ってことになるんですよ、皆さん。関係ない人がまとめてもらったほうがいいと思います。たとえば『kamipro』さんとか（笑）。

――ウチは関係なさすぎてある意味でマズイですね（笑）。

伊藤　ハハハハ。来年はJCBホールでRISEをまたやりますよ。ほかにもおもしろい企画も考えてますので期待しててください！

――わかりました。今日はありがとうございました!!

【10年8月某日／都内・某所にて収録】

RISE

立ち技界の長州藩

シュートボクシング

SB広報

森谷吉博

「我々は何も大それたことを企んでるわけではないですよ」



シュートボクシングは設立から今年で25周年を迎える老舗団体である。投げ技に加えてスタンドでの関節技を認めるオリジナルのルールで行なわれ、立ち技シーンにおいても独自の道を突き進んでいる――。今回、話を聞いた森谷氏はシュートボクシングの選手であった方だ。

聞き手／ジャン斉藤

――いま立ち技界に「いったい何が起きてるんだ？」という声が各方面からあがっているので、シュートボクシング（SB広報）の森谷さんにお話を聞かせていただきます。

森谷　え？　何か起きてるんですか？（笑）。

――起きてないんですかね？（笑）。立ち技って90年代前半から今日に至るまで、K―1という大巨人がシーンを引っぱってきましたけど、FEGやマット界にいろいろな問題が浮上しているなかで、これからどう転がっていくのかという興味はあるんですね。

森谷　なるほど。

――まずお聞きしたいのはSBで実現する日菜太選手とアンディ・サワーの試合なんです。この一戦が実現した経緯を聞かせてください。

森谷　この試合の実現にはいろいろとあったんです。でも正式に話が進んだのは（日菜太のアルトゥール・）キシェンコ戦が終わってからですね。ウチの『ヤング・シーザー杯』という大会が8月の頭にあったんですけど、RISEさんからも選手の出場協力をしてもらってて、そこに日菜太選手も来てたのでそのときぐらいに話したのかな？

――日菜太選手はRISEと契約してるんですか？

森谷　いや、フリーですけど、RISEさんの初代70キロのチャンピオンですからね。RISEさんとはキシェンコ戦の前にもいろいろと話はしてたんですよ。「将来的に日菜太vsアンディ・サワーなんてのもおもしろいですね」みたいな。それ以外にもいろいろ。

――それはSBさんからRISEにサワーを貸し出すということですか？

森谷　どっちというわけではなく、アンディもウチの9月大会までだいぶスケジュールが空いてしまう感じでしたし、タイミング的におもしろいと思ったんですけどね。それにはいろいろとやらなきゃいけないことがありまして（笑）。

――なるほど（笑）。しかし、このクラスのカードをK―1主導じゃなくマッチメイクするのって、従来の常識からは考えられないですよね？

森谷　う～ん。……まあ、確かに〝K―1に出た選手＝K―1の管轄選手〟で、試合を組む場合はK―1に断りを入れなきゃダメ？　みたいな風潮はありましたよね。

――そういう認識はファンのあいだにもなんとなく漂っていますね。

森谷　今回も「ちょっと待ってよ」みたいな流れはありましたよ。RISEさんにもトーナメント優勝者がそのままK―1に参戦するようなシステムがありましたから、そういう意味では、ちょっと前の状況だったら実現してなかったカードかもしれないですね。

――でも、SBさんって独自路線への意識は相当強いですよね。

森谷　そもそもウチは立ち技のなかでもルールが独特ですし、打撃に秀でた選手をK―1やキックなどに出すことはあっても、シーザー（武志）会長が作った自分たちの路線は曲げないつもりでやってます。『S―cup』（2年に一度開かれるシュートボクシング主催の最強決定トーナメント）もあるし、ボクらはへんにどこかの顔色をうかがって進む道を変えたりはしないです。でも、横のつながりは大事ですからたくさんの団体さんと交流は持たせていただいてますし、K―1さんに関しても、

あのルールでも世界トップを狙えるアンディ・サワーに関しては優先してる部分はありますよ。

――でも、今回は優先はされなかった。だから驚いているんです。

森谷　う～ん、この件で話せることはかぎられますけども、ウチはウチで25年の歴史のなかで構築した世界のネットワークや信用がある。そのなかで話を進めてるだけなんですけど、「ちょっと待って」という動きがありました。

――なるほど。谷川さんもコントロールできなくなってることへの不安感はあったのかもしれませんね。

森谷　我々も、何も大それたことを企んでるわけではないのですが、敏感な時期だったのかもしれません。

――森谷さん、こういった一連の動きが起きたきっかけってなんだと思われますか？

森谷　それは……アレじゃないですか。言っていいのかはわからないですけど……ちまたで噂されてる金銭的な問題でしょうか。

――まあ、谷川さんはメディアに話してることではありますけど。

森谷　いまは「未払いの問題は解消した」と言われてますもんね。それでもできれば公には出したくないことですよね。だから、いまの状況というのは、殿様に声をかけられるのを待っていた側の人間たちが、自分たちが生きるために動きださなきゃいけない場面なんじゃないのかな、と。だからといって、みんなK-1に反旗を翻すとかそういう意味じゃなくて。

――とりあえず自力で動いてみよう！という感じですか？

森谷　そうですね。かつてのパワーバランスというのは、だいぶズレてきてしまってると思うんで。あたりまえですけど、選手たちは試合をしたいんです。いい選手ならなおさら強い相手と闘いたいはず。もちろんテレビに出て有名になりたくて格闘技を始めた人や途中で路線変更した人もなかにはいるんでしょうけど、今回の日菜太選手みたいに「アンディ・サワーと闘いたい？」と聞かれたら、二つ返事で試合に挑む本物の格闘家ってじつはいっぱいいるんです。それを観たいファンもたくさんいる。

――それにMAXの開催も流動的でしたから、いいオファーがあったら動きますね。

森谷　そうなんです。谷川さんからは「MAXは10月初旬の開催になりそう。サワーはどうする？」と連絡がありましたけど9月18日のカードが決定したあとでした。日菜太選手サイドにも「予選を勝ってないけど推薦枠も考えてる」って連絡があったようですけど……。

――日菜太選手サイドは待てなかったというわけですかね。

森谷　そうなんでしょうか。

――まあでもわかりますよね。選手も食っていくためには試合をしなきゃいけないですもんね。



アンディ・サワーやRENAなど魅力的なタレントを揃えるシュートボクシング。立ち技界を席巻する人材を多く輩出し、影響を受けた格闘家は数知れない――。

森谷　やっぱり先が見えにくいところが、みんながソワソワしてる大きな理由なのかなぁ。そこを中心にしてたらそうですよね。

――しかし、なんか幕末っぽいですよね。

森谷　確かに幕末っぽいですね（笑）。

――黒船来港で江戸幕府が揺らいでて。外様大名も最初から倒幕の意識があったわけじゃなくて「今後の日本はどうなるんだ……？」というところで動き始めて……。

森谷　そうですね。ウチはそういう声はあげ続けてきては……。

――シュートボクシングは外様大名ですか（笑）。

森谷　会長は長州出身（山口県）ですからね。ウチの立ち位置って長州藩的な感じなのかな（笑）。

――え～っと（笑）、べつにK-1に反目するつもりはないんですよね。

森谷　もちろんですよ！　K-1とは普通にお仕事としての話はしてますし、やっぱりボクシング以外の立ち技格闘技でK-1みたいなメジャーイベントって存在してないですからね、実際。テレビを通じてそれこそ老若男女問わずメジャースポーツとしての認知があって、そのK-1を観た子どもたちが格闘技を始めて、そこから天才児が現われたりしてるわけじゃないですか。

――みんな魔裟斗に憧れて格闘技を始めてるわけですもんね。

森谷　若い子たちがどこを目指すかと言ったら、やっぱりメジャーの舞台ですから。そこは目標としてあり続けていただきたい。ただ、そこに属するものばかりじゃないと思うので。シュートボクシングはシュートボクシングですし、各競技や団体さんもそれぞれのスタンスで選手の意識や競技の価値を上げる努力はするべきだと思うんですよ。

――それで、K-1はきたる11月にMAXをやるというお話ですけど、同じ月には『S-cup』もあるじゃないですか。

森谷　そうですねぇ。11月にはオランダのイッツ・ショータイムもありますね。

――アンディ・サワーは『S-cup』を優先するんですよね。

森谷　今年はそうなりそうですね。

――なるほど。その〝11月〟によって、立ち技自体がどう転がっていくのか……。

森谷　（さえぎって）立ち技にかぎらずですよ。結局、総合格闘技のメジャーであるDREAMさんもFEGさんが主催してるわけですし。

――まあ、MMAもドタバタしてますからねぇ。アッチにもいわゆる〝大名〟たちが幕府を支えていて。

森谷　名古屋にも恰幅のいい凄腕大名がいらっしゃいます（笑）。

――佐伯繁大名ですね（笑）。この〝谷川幕府〟はできることなら続いてほしいですか？

森谷　そうですね。でも……歴史的に幕府はなくなってしまったんですよね……。

――ダハハハハ！　幕府はなくなるもん

SBには25年の歴史のなかで構築したネットワークや信用がある

ですか（笑）。

森谷　いやいや、いままでの歴史的に言ってですよ。

――じゃあ質問を変えます（笑）。いろいろと騒がれてますが、今後立ち技はどうなると思われますか？

森谷　う～ん、良くも悪くも以前と同じような状態に戻るのは難しいんじゃないかって思いますけど。

――もとの状態に戻るのは不可能だ、と。それはFEGという組織がPUJIとの提携によって力を取り戻したとしても……。

森谷　やっぱり時代は流れてますから、いろいろと難しい問題が出てくると思います。現状のイベント形態を持続するのは大変です。チケットがたくさん売れてそれだけでイベントが回るならいいですけど、実際にはなかなかそう単純じゃない。テレビがあってスポンサーがあって初めて成り立つものでしょうし。外資が絡んでくるとなれば、良くなったとしても以前とは違ったかたちになる気がします。それでもメジャーのK－1さんが業界を先導してくれたらそれが一番いいんですけどね……。

――一番怖いのはそこですよね。今後FEG先導型ではなくなるということは、いわゆる各大名が争う戦国時代になってしまう。

森谷　はい、そうなってもなんら不思議はないと思うんですよ（笑）。

――う～ん、そして〝新政府樹立〟という雰囲気もないですし……。

森谷　結局もしK－1が倒れたとしても、横で協力し合ってみんなで仲良く行きましょー！　なんてことには絶対にならないはずですから。歴史的に。

――ダッハッハッハッ。絶対にないですか（笑）。

森谷　ないですね（苦笑）。もちろん「誰かを立てましょう！」なんてこともありえない。理念や利害関係がはっきりしてないと難しいですよ。

たとえば後楽園ホールを常に満員にする力があれば、いままでとなんら変わらない



注目のアンディ・サワーvs日菜太の一戦はサワーがスタンディングチョークで秒殺! まさかの決まり手に納得のいかない日菜太陣営だったが、これぞシュートボクシング! という試合だった。

――となると、江戸幕府というか戦乱が続く室町幕府っぽい感じですね（笑）。

森谷　ああ、そうですね。けっこう乱世っぽい。僕個人の見解としては、いまもしもK－1が倒れるようなことがあったら、確実に〝冬の時代〟は来ると思ってるんですけどね。ただ、何が〝冬の時代〟なのかってことで。たとえば後楽園ホールを常に満員にできる力があれば、いままでとなんら変わったことをする必要もないですし、コツコツやっていくことで選手たちは育ってくるんです。ウチはシーザー会長が25年前にSBを創設してからずっとその方向性でやってきてますし、それは修斗さんとか、ほかの競技さんにも言えることだと思うんですね。

――なるほど、冬をどう解釈するかはおもしろいですね。

森谷　形態は別として、冬が来たことによって潰れてしまう団体というのはわりと少ないと思うんですよ。ただ、K－1の代わりに何か格闘技イベントが台頭してテレビでメジャー化するなんてことがあるかといえば、それもないでしょう。

――立ち技の日常は変わらないけれど、いわゆるメガイベントやマスイベント的なものが新しく誕生することはない。

森谷　非常に難しいことですよね。しかもそのマイナスって凄く大きいと思うんですよ。たとえば格闘技を応援しようというスポンサーだって減るでしょうし、それこそ選手を目指す人間も少なくなると思うんですね。

――イメージが悪すぎますもんねぇ。

森谷　さっきも言いましたがメジャーな舞台への目標もなければ人材も不足するかもしれない。でも、ないならないなりに工夫したらいいんですよ。ウチの会長も昔から〝打倒K－1〟とは言いながら、決してあの位置で格闘イベントを開催したいわけではないですから。あの位置でやるにはテレビの視聴率やスポンサー重視の試合も組まなければいけなくなるでしょうし、選手の育成にまで手が回らない。それは本来会長がやりたいことじゃない。ボクシングや柔道のように本当にコツコツと選手層を広げ競技を確立して、いずれはオリンピック種目にまで～……というのがボクらの目指すはるかなる天竺ですからね。そのなかで『S－cup』や『GROUND ZERO』といった、ウチの選手が目標にするビックイベントを定期的に開催していけばいいわけで、意地も張れずに体制に頼るばっかりじゃ存在する意味もないし何も残せないですよ。ウチには吉鷹（弘）さんら先輩方から、緒形（健一）、宍戸（大樹）、アンディ・サワーがいて、いままた梅野（孝明）やRENAといったエースと呼ばれる選手たちが必ず出てきてるでしょ？　それがシュートボクシングの実績だし、ボクらはイベントよりもそこが重要だと思う。

――マスイベントの確立はほとんど考えてないという。


森谷　そうですね。だってこの業界ってケンカして別れて、くっついてまた別れての繰り返しでできていますからね。ウチはシュートボクシングという競技として一枚岩ですから、そんなに慌てなくてもコツコツと確実に一本道を歩くのが一番の近道だと思ってます。

――そうなると11月の『S－cup』まで目が離せないですね。

森谷　ちょっと離さないでください。『S－cup』までと言わず、ずっと離さず愛してください（笑）。

【10年8月某日／都内・某所にて収録】

Shoot Boxing



シュートボクシング再浮上のいまこそ、この男を知れ！

シーザー武志 侠気伝説

元『シーザー魂』メインパーソナリティ 三又又三

格闘技界のスーパーヒロイン、RENAのブレイク。そして今年は『K−1 WORLD MAX』の向こうを張って『S−cup』開催と、いま再浮上してきたシュートボクシング。そのシュートボクシングを長年守り続け、シュートボクシング精神そのものである、シーザー武志会長の侠気伝説を、親交の深い三又又三に語ってもらった。

聞き手／高崎計三　構成／堀江ガンツ

あの前田日明を黙らせるシーザー武志に怒鳴られたら、そりゃあテンパるでしょ！

シーザー武志 侠気伝説

――三又さん、今日は最近立ち技の世界でどんどん存在感を増しているシュートボクシング（以下、SB）と、その総帥であるシーザー武志会長のことをうかがいに来ました！　シーザー武志会長と親交のある三又さんならうってつけだと思いまして！

三又　そうですね（笑）。なんでも話しますよ！

――誌面に載せられる範囲でお願いします（笑）。そもそも三又さんとSBのなれそめは？

三又　ちょうど僕が26～27歳の頃、オフィス北野に所属することが決まって一発目の仕事がSBのリングアナだったんですよ。

――一発目で！　三又さんが希望したんですか？

三又　たまたま、僕がバイトしてたショーパブにSBと仕事で関わりのある人がいて、「おまえ格闘技好きだったよな?」ってことでシーザー会長に会わせていただいて、「じゃあ、リングアナやるか」と。まだシーザージムが文京区白山にあった頃ですね。

――その頃のSBって……。

三又　メインが吉鷹弘さんで、村浜武洋選手が下から上がってきたところですね。緒形健一はまだ出てきてなかったんじゃないかなあ。

――次のエース候補として村浜選手が急上昇してた頃ですね。最初は後楽園ホールで？

三又　そうですね。最初の3試合を担当したんですけど、とんでもなく緊張してカミッカミで、リングサイドのシーザー会長がブチ切れて「コラ～ッ！」ってなってたんですよ。それ見てまたテンパってまた噛んで、会場から「頑張れ～！」って声援をもらいました（笑）。

――それは生きた心地がしなかったでしょう（笑）。

三又　頭ん中真っ白ですよ！　シーザー武志という男にビビりまくってるときですからね。何しろあの前田日明にも言うことを聞かせる男だから。

――そこですか（笑）。

三又　ドン・ナカヤ・ニールセン戦のとき、とんでもないゴンタ顔になってた前田が、シーザーさんが花束贈呈したときにはちょっと表情緩んでましたからね！　前田のゴンタ顔を鎮める男ですよ！　そのシーザーさんにリングサイドから「コラ～ッ！　〇〇〇～！」とかなんとか関西弁で言われたら、そりゃテンパるでしょう！

――大会前に挨拶に行ったときは平気だったんですか？

三又　白山に行ったときは……これはいい思い出なんですけど、ご挨拶して、「じゃあ、おまえはこの試合とこの試合を……」っていう話をして。森谷（吉博＝元バンタム級王者、現SB広報）くん、オガケンとあとスタッフがいましたかね。で、ちょうどK-1がまだ始まったばかりの頃で、代々木大会の前日だったんですよ。それで打ち合わせが終わったら会長が「よし、行くか！」って言って、原宿駅から会場までの道にSBのポスターをずら～っと貼りに行ったんですよ。夜中に。

――夜中！

三又　ホントはやっちゃいけないことなんですけどね。会長が見張ってて、「行けーっ！」って言われたらオレと森谷とオガケンでダーッと走って、ババババッとポスターを貼るわけですよ。

――ちょっと待ってくださいよ。森谷さんと緒形さんはジムの若手だからいいですけど、三又さんは……。

三又　もう、「会長の犬にならなきゃ」的な空気を感じ取ったんでしょうね。

――最初からSBに忠誠を誓ってたわけですね。でも大会では大変なことになって。

三又　ホントですよ！　でも会長、大会後にバックステージで会ったら笑ってたんですけどね。あとアレックスっていう、ずーっとやってる黒人のリングアナが凄く優しくしてくれましたね。それが救いでした。

――なるほど。そこから大会ごとに？

三又　いや、もう二度とやりたくないって言いました（笑）。でもその後もイベントとかには呼んでいただいてるんですよね。それは森谷くんがあいだに入ってくれて。それでCSで『シーザー魂』って番組にも使ってくれることになったんですよね。たぶん森谷くんが、「三又さんだったら会長もしゃべりやすいし」って言ってくれたんでしょうね。僕もちょうどピンになってすぐの頃で、いろんな意味で緊張するじゃないですか。シーザー会長をうまく回さなきゃいけないっていうんで、何かと勉強になりましたね。ビビってても、会長にはしゃべってもらわないと番組にならないですから。

――緊張してるわけにもいかない、と。

三又　そうなんですよ！　会長と二人だけで、クロマキーのバックでしゃべるんですけど、これがまた凄いオチがあってですね。

――なんでしょう？

三又　師匠のビートたけしが番組を見てくれてて、「おまえ、シーザーさんと番組やってんだな」って言われたんですよ。「ウワッ、見てるのか！」と思ってね、うれしかったんですけど。それで基本的には大会ごとに番組の収録があるんですけど、あるとき、収録がちょっと空いてるなーってときがあったんですよ。そしたらたけしさんが、「なんだおまえ、あの番組降ろされたのか」って言うんですよね。

――ほう！

三又　「いやいや、そんなことないですよ。なんでですか？」って聞いたら、「シーザーさん、グラビアのネエチャンと番組やってたぞ」って言うんですよ！　「ナニーーーーッ！」ってなってね。

――知らぬ間にすげ替えられていた、と。

三又　一切聞いてなかったし、事務所にも連絡はなかったんですよ。それを師匠から知らされて！　すぐ森谷くんに電話入れて、「何考えてんだ！　ひと言あるだろ普通！　水くさいじゃないか！」って文句言いましたよ！　しかも、そのまま番組が終わっちゃいましたからね。復活できないままですよ。

――ちなみに電話で、森谷さんはなんと？

三又　笑ってました。「ふざけんな、オガケンに代われ！」って言ったら、オガケンは「僕に言われても……。僕も知りませんでした」なんて言ってね。そんなわけないだろって！

――ダハハハ！　そういうところもSB

らしさですか（笑）。シーザー会長とはよく話されるんですか。

三又　もう長いですしね。『お～い！　竜馬』の舞台を企画・プロデュースするときも相談する相手っていなかったんですけど、そのときに興行のノウハウを全部教えてくれたのがシーザーさんでしたね。

――興行の大先輩ですもんね。

三又　『お～い！　竜馬』は、だいたい7ステージやって合計動員数が2000人ちょいなので、ちょうど後楽園ホール1回分ぐらいなんですよね。そういう部分で、協賛の取り方とかいろいろリアルに教えてくれたし、実際にあいだに入ってくれたりもしてますからね。そういう部分でも、足を向けては寝られません。

――どんなアドバイスをしてもらったんですか？

三又　「おまえはいいソフトを持ってる。格闘技はどこまでいっても殴り合いだから、協賛は凄くつきにくい。おまえのは頑張れば格闘技以上に協賛がつくようなソフトなんだから頑張れ」って言われましたね。

――なるほどぉ。

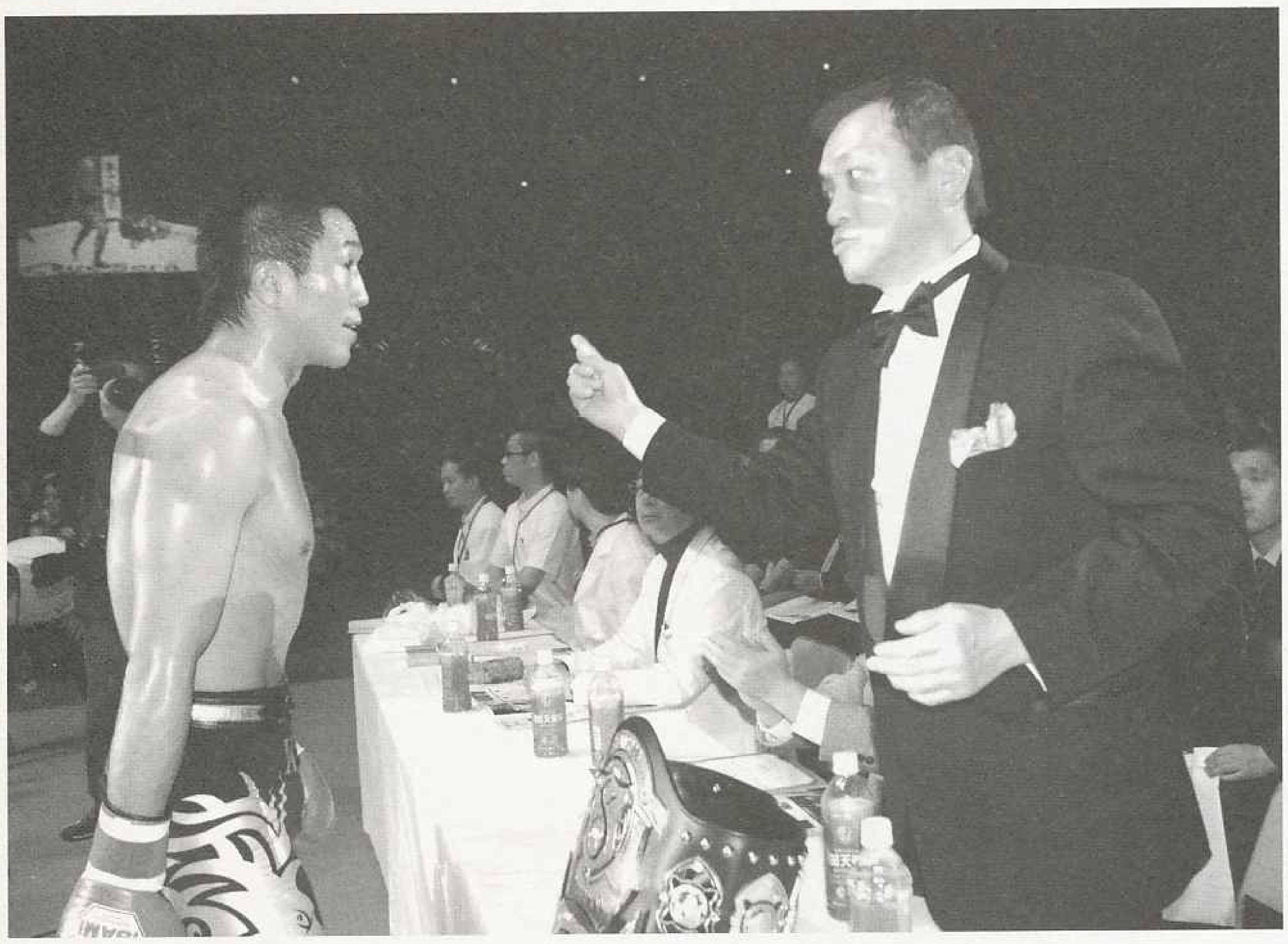
三又　あとホントの意味での「協賛とはなんぞや」というところで、「企業は協賛なんかしたって潤わない。不動産屋が協賛したからって物件が売れるとかないんだよ。じゃあ何かっていったらここ（自分の胸を指す）だよ。おまえがこれをやりたいんだっていう夢を、社長がどう受け止めるかだから」と。借りてきた言葉じゃないから、凄く刺さるんですよね。

――親身になってくれてる証拠ですね。

三又　それに企画書とかも森谷くんが作ってくれたりとか。異常にリアルな関係性ですよ。「オレ、SBの選手じゃないのにな」と思うぐらい怒られるときもあるし。

――ダハハハ！　なんでですか（笑）。

三又　まあ人付き合いのこととかですね。オレもいいかげんなところもあるんで。「オレ、ビートたけしの弟子だったよな？」ってぐらい怒られるんですけど、それもありがたいことですよね。



会長であるシーザー武志とトップ選手たちが、強い師弟関係で結ばれているのがシュートボクシングの特徴。シュートボクシングが20年以上の長きにわたり続き、底力があるのは、この関係があるからであろう。

――そういう話って、飲みの場とかでされるんですか？

三又　『シーザー魂』の収録が終わったあとは、必ず北千住に連れていかれて二人で飲むというのが恒例だったんですよ。けっこうそれが楽しみでね。会長は「今度、浅草キッドの玉ちゃんと飲ませてくれ！」って言っててね。玉さんも「おお、ぜひ！」って言ってたんですけど、浦安のディズニーランドのホテルでSBの弟子の結婚式があったんですよ。そしたら会長が「頭が痛い」ってしきりに言っててね、前夜に山本譲二さんと飲んでて二日酔いだって言って。

――……。

三又　「会長、大丈夫ですか？」なんて言ってたんだけど、そしたらシーザー会長のスピーチがもの凄く中途半端なところで終わっちゃったんですよ。いつもちゃんとオチをつけて終わる人なのに。それで同じテーブルに戻ってきたら、まったくろれつが回らなくなってて。脳梗塞だったんですよ。

――そんなところで！

三又　もう式も始まってるし、めでたい席じゃないですか。こっそり森谷くんを呼んで、「会長やべえ」って言ってオガケンと森谷くんでわからないようにスーッと会場から出して。たまたま浦安に脳梗塞の権威の病院があって、そこに運び込めたからぎりぎりセーフだったんですよ。

――そうだったんですか！

三又　僕は現場見てますからね。第一発見者ですよ。そこからシーザー会長は酒が飲めなくなっちゃったんですよね。

――そうですか……。でもいまはかなり回復されましたよね。

三又　そうですね。あるとき、北海道にSBのジムができるっていう話があって、町おこし的なイベントでSBを実際に見せるっていうのがあったんですよ。それに僕も呼んでもらって、リングでパフォーマンスやってくれってことだったんですけど、翌日はゆっくりだったんで、会長と森谷くんとオガケンと僕で、車で景色のいいところを走ってたんですよ。

――『北の国から』的な。

三又　車を降りて、大自然のなかで「うわ～、やっぱり北海道はいいなあ～！」って言ってたら、急に会長が「そういえば、おまえに護身術を教えたことなかったよな」って言い出して。

――雄大な風景を前に（笑）。

三又　「ないですね」って言ったら、「じゃあ教えるわ。いいか、まず相手が日本刀を持ってたらどうする？」って。

――いきなり！

三又　そんな場面あるわけないじゃないですか！（笑）。でも会長は「どうするんだよ？」ってマジで聞いてくるから、「距離を取ります」って答えたら「馬鹿おめえ、距離を詰めるんだよ！」と。「ただな、気をつけろよ。オレのダチがな、ヤクザ映画の見すぎで調子に乗って刃のところをグッとつかんだら、指が4本、ポロポロポロ～

「相手が日本刀を持っていたらどうする？」ってシーザー会長が聞いてくるんですよ

って落ちちゃったから。それだけは気をつけろ」って。

—ダハハハ！

三又　「日本刀を持った人と、そんなことがあったんですか⁉」って聞いたら、「まあな、あったんだよ、ちょっと……」ってね。いい景色を前にして（笑）。あと、「スッポン事件」ってのもありますよ。

—なんですか、また（笑）。

三又　『シーザー魂』が終わったら普通は北千住に行くのに、浅草に向かってて「東京で一番うまいスッポン料理食わせてやる」と。それで店に着いてスッポン鍋を食べ始めたら、すぐに「どうだおまえ、効いてきたか?」って、股間を指して聞いてくるんですよ！

—すぐに（笑）。

三又　「まだ食べ始めたばっかりですよ！」って言って食べてたら、またすぐに「どうだどうだ?」って（笑）。「ちょっと会長、これ、そんなすぐに効かないでしょう！　会長はどうなんですか?」って聞いたら、「バカヤロウ、オレはもう年だから、こんぐらいじゃ効かねえ……よ」の「よ」のところでタラーッと鼻血が（笑）。

—素晴らしい！（笑）

三又　ミラクルですよね（笑）。物凄く照れくさそうにしてましたよ。

—その頃、シーザーさんはよく飲んでたんですか?

三又　そうですね、北千住の頃はだいたい3軒ぐらいハシゴしてましたよ。シーザー会長から受け継いだ歌もありますよ。吉幾三の『ありがとうの唄』っていうんですけどね、会長が必ず歌うんで覚えたんですよ。

—それで自分の十八番にもなったわけですね。歌はうまそうですよね。

三又　そうですね。歌も気持ちが入るから、熱いですよ。あ、「錦糸町事件」っていうのもありますよ！

—はい、うかがいましょう（笑）。

三又　やっぱり会長の知り合いの店に連れていかれたんですけど、錦糸町って、外国人の女性がやたら立ってるじゃないですか。

—まあ、詳しくは言いませんが、立ってますね（笑）。

三又　会長は彼女たちのうしろ姿だけで、どこの国から来たかわかるんですよ。「おい、あれナニ人かわかるか?」って。わかるわけないじゃないですか。「あれはロシアだ、ちょっと聞いてこい」って言われて、確かめたらやっぱりそうなんですよ。うしろから見ただけなのに、全部わかるんです。

—どんな才能ですか（笑）。

三又　「凄いですね、なんでわかるんですか?」って聞いたら……（以下略）。

—ダハハハハ！　それは載せられません！

三又　「オレは不良はしたくなかったんだ。でも若い頃はキックじゃメシが食えなかったんだから、たまたまよぉ……」と。オレも笑って聞いてますけどね。あ、ほかにも……。



みまた・またぞう■1967年5月27日、岩手県出身。オフィス北野所属。劇団「マッチョドラゴン」を主宰し、三又又三総合プロデュース「お～い! 竜馬 青春篇 ザ・ラスト」を10月27日より新宿シアターサンモールにて公演。お～い竜馬2010公式ブログ
→http://ameblo.jp/ryoma-seishun2010/

シーザー会長には「スッポン事件」や「錦糸町事件」というのがあるんですよ

—お願いだから載せられる話をお願いします！（笑）

三又　そうですよね（笑）。あ、『シーザー魂』の収録が終わって、会長のベンツに乗せてもらってたときなんですけど、渋谷あたりで……ちょうどその頃って、渋谷はチーマー全盛期だったんですよ。

—はいはい。

三又　信号待ちで、前に大音量で音楽流してる四駆がいたんですよね。会長が「うるせえなあ……うるせえなあ……」って言ってイライラしてるんですよね。ヤバいなあと思ってたら車を降りて、ツカツカってその車のとこに行って、「おい、ボリューム下げろ」と。

—相手も怖そうな若者なんですよね?

三又　そうそう。でも何かを感じとったんでしょうね、「はい……」って静かになりましたよ。普通、避けるじゃないですか。この人はすげえなあ、と。

—相手が言うこと聞かなかったらどうなってたか（笑）。でもそれだけ肝が据わってないと、興行を打ち続けられないんですかね。

三又　それこそ、2年前にさいたまスーパーアリーナで『S-cup』をやったじゃないですか。大きい会場だから、僕らでも心配になるわけですよ。それで会長に、「次、さいたまなんですよね?」って言ったら、何を言いたいのかわかったんでしょうね、「あのな、やったことないヤツにガタガタ言われる筋合いはねえんだよ。やりゃあいいんだよ！」と。「のちの緒形たちが、さいたままでやったってことをどう考えるかなんだよ。そんなことを心配される筋合いはねえよ！」と。はぁ～、カッコいいなあ……と思いましたね。

—いい話ですねえ。

三又　それで、大会も凄く盛り上がったわけじゃないですか。SBとK-1の違いは何かって言ったら、谷川さんの命令で選手が「はい！」って動くことはおそらくないじゃないですか。


—そうですね。

三又　でもシーザー会長がひと言言えば、SBの選手はみんな動きますよ。そこの違いだと思うんですよね。やっぱりSBには、ここ（再び胸を指す）のつながりがありますよ。大会を盛り上げなきゃいけないっていう気持ちが、みんなにありますからね。そしてその部分を、オガケンがしっかりと受け継いでるじゃないですか。オレ、あいつの入場を見てたら泣けてきますからね。それにオガケンは、社長としてお金の部分もしっかり背負ってますから。そういう後継者がちゃんと出てくるところがSBの強みであり、シーザー会長の力だと思いますよ。

—まだまだSBは安泰ということですね。今日はありがとうございました！

【10年9月17日／都内・オフィス北野にて収録】

レスナーvsヴェラスケス、秋山再起戦、
DEEP王者・福田と契約……



UFC BURNING SPIRIT IN AUTUMN

この秋、UFCがさらに燃え上がる!

日本の秘密兵器 UFC出陣！

高山vsフライを超える大激闘を制したDEEP王者 ベルトを巻いたままオクタゴンへ殴り込み！

福田 力



「UFCに出るだけじゃ意味がない。必ず勝って生き残ります！」

日本ミドル級を背負って立つ逸材として期待されていたDEEPミドル級王者・福田力のUFC参戦が決定した。8.27DEEP後楽園大会で桜井隆多との壮絶な一戦を制し、DEEPミドル級王座防衛をはたした福田は、DEEP現王者としてUFCに乗り込むことになる。この日本の切り札に決意のほどを聞いた。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／笹井孝祐　試合写真／鈴木佑

――まずは8・27DEEP後楽園ホール大会でのDEEPミドル級王座防衛おめでとうございます！

福田　ありがとうございます。

――桜井隆多選手との試合は、とんでもなく壮絶な一戦でしたね。

福田　ハードでしたね。まあ、試合内容については、技術的な課題はいっぱいあったんですけど、自分も桜井さんもホントに精一杯闘って、結果としてみんなが喜んでくれたので、そういう意味では満足しています。

――今回、桜井選手とは3度目の闘いでしたが、あんな殴り合いの試合になると思ってましたか？

福田　いや、もっと冷静に闘おうと思ってたんですけど、熱くなっちゃいましたね。

――桜井選手も最初からラッシュを仕掛けて、勢いが凄かったですよね。

福田　そうですね。いままでやった2回よりも覚悟が違った感じがしました。圧力もいままでで一番強かったし。

――その気持ちを受けて立った感じですかね？

福田　それもあるんですけど、下がったら負けだという思いもありましたね。あと、自分が先に出血したんで、もういくしかないなって。試合が長引いたらレフェリーに止められる可能性もあったんで。一か八かでこっちも勝負かけましたね。

――試合中、セコンドの声とかは聞こえてましたか？

福田　ちょっと届いてないときもあったんですけど、途中からは大丈夫でした。

――なんて言われてました？

福田　やっぱり「落ち着け」とか言われましたね（笑）。あと「顔だけじゃなくボディも打て」とか具体的に言ってもらえたんで、熱くなりながらも、ちゃんと上下打ち分けられたんで、助けられましたね。

――だからか、試合を観ていて「かつての高山善廣vsドン・フライ戦のようだな」と思ったんですよ。でも、高山vsドン・フライ戦はお互い相手の頭を抱えながらフックの連打をするだけでしたけど、今回はフック、アッパー、ヒザを入れるなど、熱くなりながらも技術的な要素も高かったですよね。

福田　そこは、やっぱりセコンドに助けてもらえたおかげですね。

――そして最後はヒザ蹴りですよね。あれは手応えはありましたか？

福田　やっぱり「入ったな」っていう感じはありました。

――そして劇的な終わり方。リングアウト勝ちという（笑）。

福田　そうなんですよね（笑）。

――まあ、リングアウトというか、場外KOですけどね。

福田　ああいう終わり方はあんまりないですよね。でも、倒れたほうが負けだと思ってたんで、きっちりと倒せたと思います。

――ああいう壮絶なドツキ合いになったというのは、やっぱりこの試合に懸ける思いがそうさせたと思いますか？

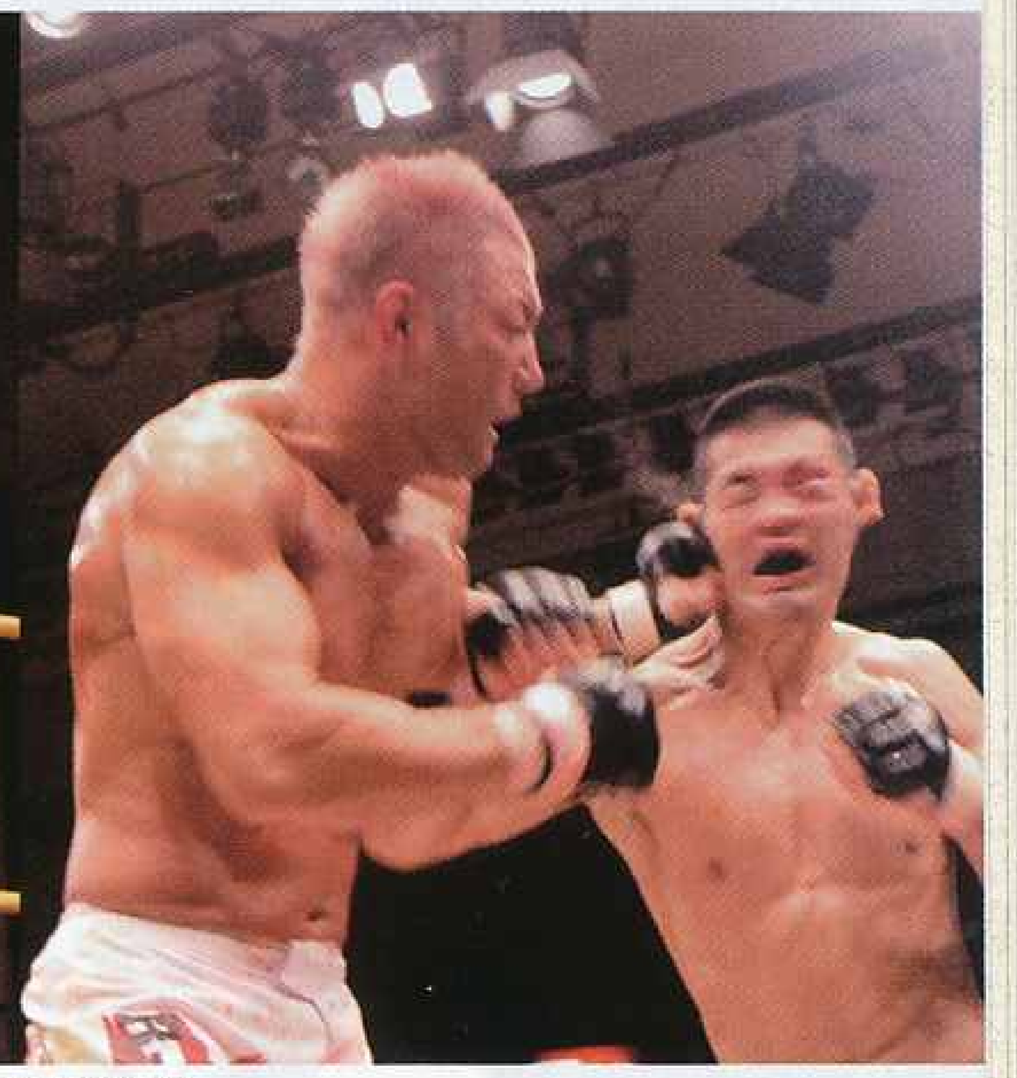
福田　そうですね。桜井さんもこれまでやった2回よりいい状態に仕上げてくるだろうなと思っていましたし、厳しい試合になることは予想してたんですよ。だから、そういう意味では、戸惑うことはなかったですね。それと、これは試合前には言えなかったんですけど、やっぱり自分は「これに勝ってUFCに行きたい」という気持ちがあったんで、とにかく勝ちたいと思ってましたね。

――では、これがDEEPラスト、日本で


DEEP JAPAN
MIDDLEWEIGHT CHAMPION

のラストファイトになるという思いもありましたか?
福田　DEEPのラスト、日本のラストファイトっていうよりも、「負けたら格闘家人生終わっちゃう」という気持ちなんです。だから「生き残った」感じですね。
——で、実際にUFC参戦が決定したわけですか?
福田　はい。決定です。
——お～、正式決定ですか！　DEEPの防衛戦が終わったあとに契約に至ったわけですか?
福田　そうですね。
——このオファーはいつ頃から来ていたんですか?
福田　オファーはDEEPの防衛戦の直後にいただいて、佐伯さんの承認をもらってから交渉したんですよ。それで正式契約に至ったのが、9月中旬。日本のメディアに発表してもいいという許可をUFCからもらったのが『kamipro』さんから取材依頼をもらった先週末です。オファー自体はじつは1年前にも一度あったんですよ。去年の11月のUFCでデビューということで、対戦相手の提示までしてもらったんですけど、そのときはまだDEEPの契約が残ってたんですよね。そしたらUFC側が「UFCに来るつもりがあるなら、契約をきれいにして来てほしい。ただし、その間に負けたらこの話はなかったことになる」って言われていて、それで今回防衛して、あらためてオファーが来た感じですね。
——では、UFCが1年待ってくれたわけですか。
福田　そうとも言えるかもしれないですね。自分のDEEPの契約というのは、防衛戦とセットになってたんですよ。防衛



[10.8.27 DEEP 49 IMPACT]
東京・後楽園ホール
○福田力 vs 桜井隆多×
(2R 0分32秒 TKO)
福田vs桜井、DEEPミドル級を牽引してきた二人の3度目の対決は壮絶な殴り合いに。福田は流血、桜井は場外転落など激しい闘いの末、最後は福田のヒザ蹴りで桜井が場外KO!　衝撃的な幕切れとなった。

DEEPミドル級現王者として UFCのオクタゴンに乗り込みます

したら次のタイトルマッチまで契約延長という。で、UFCから最初に話が来たときは、中西（裕一）選手とタイトルマッチをやってチャンピオンになった直後だったんですよね。
——DEEPとの契約が〝チャンピオン契約〟として自動延長された直後だった、と。
福田　だから1年前はUFCに行けなかったんですけど、その時点から佐伯さんに「次の防衛戦が終わったら、UFCに行かせてください」ってお願いして、それを佐伯さんも了承してくれて。今回、チャンピオンでありながらUFCに挑戦できることになったんです。現チャンピオンでありながらUFCに行かせてもらえることに感謝しています。
——ではDEEPのベルトは返上せず、チャンピオンのまま参戦ですか。
福田　そうですね。ベルトの扱いは佐伯さんと相談しないといけないんですが、とりあえずDEEPミドル級チャンピオンとしてUFCのオクタゴンに上がれることになりました。
——でも、負けたらUFCの話はなかったことになっていたわけですから、今回の試合はかなりのプレッシャーだったんじゃないですか?
福田　そうですね。プレッシャーはこれまでで一番でしたね。
——もし負けたら、ベルトもなくなる、UFC参戦もなくなる、そしてまた下からやり直しになるという。
福田　でも、プロ格闘家をやっているかぎり、負けても大丈夫というような安定はないと思うし。どんな状況でも負けたら終わり、負けたらダメだっていうのは一緒なんで。それは、これからもそうなんで、現役でいるかぎりはプレッシャーと闘っていかなきゃいけないと思います。
——それでも、絶対に負けられない試合ってあるわけじゃないですか。そこであのリスキーな殴り合いをするのは凄いですよ。
福田　まあ、もっと頭を使って冷静に闘いたかったんですけどね（笑）。
——このあいだ三崎（和雄）さんに話を聞いたんですけど「福田には試合後『こういう試合はこれで最後にしろよ』って言いました」って言ってましたよ（笑）。
福田　言われましたね（笑）。試合直後に「今日でこの闘いは封印しろ」って。「次からはちゃんと試合をしよう、あれじゃケンカと一緒だ」って。まあ、熱くなっちゃったし、出血もあったんで仕方がなかったんですけどね。桜井さんの圧力がいままでで一番凄かったんで。
——三崎さんのほうこそ、サンチアゴ戦のような死闘をやってたら、身体がもたないだろうというくらいの激戦でしたけどね（笑）。
福田　そこはノーコメントで（笑）。
——了解しました（笑）。ちょっと話を戻して、UFCからは1年前から話があったとのことですけど、DREAMからのオファーはなかったんですか?
福田　正式なオファーではなかったんで

このチャンスをいま逃したら格闘家人生で悔いが残ると思ったんです

すけど、去年の夏ぐらいに「10月のDREAMでパウロ・フィリオとの試合が組まれるかもしれない」という話は聞いていたんですね。そしたら正式なオファーがある前に、8月くらいにUFCから話が来て。実際、その時点まではUFCに行くっていう発想は自分のなかにはまったくなかったんですよ。

——それまではDEEPで王座防衛して、DREAMに上がるようになりたい、みたいな。

福田　そうなんです。でも、実際にUFCから話が来たら「やってみたい」という気持ちがどんどん強くなってきて、佐伯さんやDREAMの関係者の方とも、一度、菊田（早苗）さんを交えてお話をさせてもらったんですね。でも、そのときは「まだ契約が残ってるから、『頑張ってこいよ』じゃ終わらないよ」という話で終わったんですけど。DREAMに関しては、結局10月大会への正式なオファーは来ませんでしたね。

——では、UFCを選ぶということは、ある意味、今後のDREAM参戦という道を閉ざしてもという選択でもあったわけですよね。それでも勝負したかった、と。

福田　そうですね。自分らが闘える時期というのは限られているし、いまが格闘人生で一番いい時期だと思うんで、その時期にUFCにチャレンジできるのなら、チャレンジしたい気持ちが抑えられなかったですね。

——いまおいくつでしたっけ？

福田　29歳です。

——じゃあ、ちょうどあと数年が一番いい時期かもしれないですね。

福田　そうだと思うんですよ。ここ数年が勝負だなって。このチャンスを逃したら格闘家人生で悔いが残るんじゃないかって。だから自分のわがままというか、自分の気持ちを優先してチャレンジさせてもらおうと思いました。

——不退転の決意での挑戦なわけですね。

福田　だから、とにかくまずはUFCで1勝したい。そして、ただ出るだけじゃなくて、生き残りたいという気持ちがもの凄くありますね。ぶっちゃけ、UFCって出るだけだったら、けっこういろんな選手が出てると思うんですけど、UFCで1年2年と勝ち残ってこそ、UFCファイターと言えると思うんで。自分は出ることだけで絶対に満足しない、勝ち残らなきゃ意味がないと思ってやるつもりです。

——UFCは契約自体はいろんな選手としますもんね。そうやって多くの才能からふるいにかけるというか。だから1〜2試合でリリースされてしまう選手もまた多い。

福田　出ました、負けました、クビですじゃ、ただの思い出作りですからね。そうはならないように、とにかくまずは1勝。大きいことは言えないですけど、必死に食らいついていきたいです。

——1年前から話があったということは、もう1年前からUFCを想定した練習もしていたんですか？

福田　ヒジとかはとくにはやってないんですよ。でも、やっぱりリングとケージでは少し技術も違うと思うんで、タイミングを見てAKA（アメリカン・キックボクシング・アカデミー）に行かせてもらおうと思ってます。AKAには実際にUFCで闘ってるファイターも多いんで、勉強したいなと思います。

RIKI **FUKUDA**

——AKAには以前も行ったことがあるんですよね？

福田　はい、4年前に行きました。

——そのときはどんな選手と練習したんですか？

福田　そのときはジョシュ・トムソン、ジョン・フィッチ、ジョシュ・コスチェック、トレバー・プラングレー、フィル・バローニ、それからケイン・ヴェラスケスが来たばかりでしたね。ケインとはルームメイトでしたから（笑）。

——あのケインとルームメイト（笑）。

福田　あとは、ポール・ブエンテロ、マイク・スウィックとかですね。

——大きい選手から小さい選手までトップクラスが揃ってるわけですね。

福田　そうですね。しかも向こうはみんな下の階級でもデカいんですよね。フィッチとかウェルター級ですけど、自分と変わらないですから。

——フィッチは練習してみてどうでしたか？

福田　全然強いですよ！　あとアメリカの選手はパワーばかりが取りざたされてますけど、技術も細かいんですよね。練習でも凄く合理的に教えてくれるんですよ。「立ち上がるときには、ここに手を置いて」とか、「足はこの位置に」とか、具体的なんですよね。

——では、日本との一番の違いはなんでしたか？

福田　練習のときに、コーチが常に見ていてくれるところですかね。AKAには各分野のヘッドコーチが3人いるんですけど、彼らが練習中に細かくチェックして、悪い部分は修正してくれるんですよね。それが自分にとってありがたいですね。

——日本だとプロの選手同士が集まってスパーリングするのが主体ですけど、アメリカだとそこに必ず専任のプロのコーチがついている、と。

福田　はい。その場でそのコーチがメニューを組んでくれて、悪い部分は修正してくれるんですよね。

——それって思い返してみると、大学時代にレスリングをやってた頃と同じ感覚なんじゃないですか？

福田　まさにそうですね。監督がいて選手がいるかたちなんですよ。



2006年に福田がアメリカの名門AKAにトレーニングに行ったときのショット。左からトレバー・プラングレー、柔術コーチのデイビッド・カマリロ。そして我らがフィル・バローニだ。

──向こうではそれが刺激になり勉強になる、と。

福田　そうですね。僕はあまり練習中のひらめきがないほうなんで（笑）。

──ダハハハハ！　新しい動きが自分からはひらめかない（笑）。

福田　だから周りの人に「ここ、こうしたほうがいいんじゃないか」って言われて気づいてやるタイプなんで（笑）。それは非常に助かりますね。選手のなかには自分でいろいろ試してみて、独自のスタイルを見つけるのが得意な選手もいるだろうし、一概には言えないと思うんですけど、自分にはAKAの練習スタイルが合ってましたね。

──いま日本ではどこで練習しているんですか？

福田　GRABAKAとパワー・オブ・ドリーム。それから大山峻護さん、吉田善行さんがゴールドジムでやってるプロ練にも参加させてもらってます。

──三崎選手や高瀬大樹選手なんかも一緒に練習しているところですね。

福田　そうです。

──パワー・オブ・ドリームでは岡見勇信選手とも一緒に練習されてるんですよね？

福田　はい、そうですね。

──いかがですか、UFCの先輩である岡見選手との練習は。

福田　いやあ、強いですね。正直、いまはまだ差がありますけど、ホントにUFCのトップクラスの選手なんで、その選手の強さを練習で経験できたのは大きいですね。

──なるほど。UFCミドル級トップの実力というのも肌で感じられてるわけですしね。

福田　だから岡見さんと練習やってるんで、UFCで闘うことに対しても未知の怖さみたいなのはそんなにないですね。

──これでUFCミドル級は秋山成勲選手も含めて日本人が3人になりましたけど、お二人に対してはどんな思いがありますか？

福田　岡見選手はホントにUFCで何年も生き残ったトップファイターだし。秋山選手は……UFCというより三崎さんとやった試合の印象のほうが強いんですけど。あの強い三崎さんからダウンを奪ってるのは凄いなって思いますね。UFCでもベストバウト賞を連続で獲ってて、とにかく凄いなって。

──福田選手もそこに食い込んでいかなきゃならないわけですよね。



09年4月5日、『DREAM.8』に急きょ出場した福田は、大物ムリーロ・ニンジャから文句なしの判定勝ちという金星を挙げる。将来、日本ミドル級を背負う逸材と期待されていたが、福田の選択はUFCだった。

長州さんにUFC参戦を報告したい。まだテーマ曲使用許可も得てないんで

福田　はい。頑張って、なんとか食らいついていきたいと思います。

──まだ、デビュー戦の対戦相手候補は出てないんですか？

福田　じつはUFCデビュー戦が11月で「相手はこれでどうだ？」っていう話があったんですよ。

──あ、もう11月にデビューの話があったんですか。

福田　でも、桜井さんとの試合のダメージとちょっとケガがあったんで、11月は難しいってことで来年2月ぐらいで動いてもらってます。まあ、最初に11月の相手として提示されたのが、UFC3戦3勝で"デビュー戦殺し"とか言われてる選手だったんですよ。

──門番みたいな感じで（笑）。

福田　その餌食にならなくてよかったです（笑）。まあ、自分は相手をどうこう言える立場じゃないんで、誰とでもやります。

──では、来年に向けてコンディションも整えて、年明けのデビューに備える、と。

福田　そうですね。今年は2試合で終わっちゃいました。もうちょっとやりたかったんですけどね。

──まあ、桜井戦のような試合だと年2試合ぐらいしかできませんよね（笑）。

福田　なので、ああいう自分も壊れる試合は封印して（笑）。ただ、UFCだとそんなことも考えずにすべてを出さなきゃ勝てないと思いますけどね。ホントに甘い場所じゃないんで。

──でも、それだけ夢もあるんじゃないですか？

福田　そうですね。UFCだったら待遇面も含めて夢がありますからね。

──ちなみに、いま福田選手はプロ格闘家以外の仕事もされているんですか？

福田　セキュリティの仕事をやってます。全然、格闘技一本の生活じゃないですね。

──福田選手クラスでもやはりそうなんですか……。

福田　自分は田舎出身なんで、東京に住んでると家賃とかあるんで、格闘家だけだとちょっとキツいですね（苦笑）。

──自宅通いじゃないと格闘家一本は務まりませんか（笑）。でも、チャンピオンでもその状況というのは、現実は厳しいですね。

福田　いま日本だとDREAMやSRCに年4回ぐらい定期的に出られないと、格闘家一本というのは難しいんじゃないですかね。1試合のファイトマネーが凄く高い選手は別ですけど。

──たとえば年間にDEEP2試合、DREAM1試合ぐらいじゃ、食えませんか？

福田　自分の場合は無理でしたね。

──じゃあ、やはりUFCに挑戦したいというのは、プロとして金銭的な魅力も大きかったですか？

福田　もちろんそうですね。

──福田選手は結婚されていて、お子さんもいるんですよね？

福田　はい、まだ8カ月なんですけど。

──これから大変じゃないですか（笑）。



福田　ホントに子どものためにも、ミルク代を稼がないといけないので（笑）。なんとかUFCで生き残らなきゃダメだと思ってますね。

——ちなみに、かつての師匠である長州（力）さんには、UFC参戦決定の報告はされたんですか？

福田　いや、まだなんですよ。いずれしたいな、と思ってるんですけど……。

——WJプロレスを辞めてから長州さんと会うことはあったんですか？

福田　ないですね。辞めるとき「いつでも、ちゃんこ食いに道場に来いよ」って言っていただいたんですけど、実際には行けないですよね。「おひさしぶりです。ちゃんこ食べに来ました」っていうのは（笑）。

——「またぐなよ！」って言われるかもしれない（笑）。

福田　でも、ようやくDEEPのチャンピオンになって、UFC参戦が決まり、報告できる状況になったんで、この機会にご挨拶に行きたいな、とはホントに思ってるんですけどね。

——『パワーホール』を入場テーマ曲に使ってることは報告してないんですか？

福田　じつはまだ許可が取れてないんですよ（笑）。

——あ、そっちもまだですか（笑）。

福田　これもちょっといいかげん、正式に報告しておかないとまずいなって思ってるんで。

——完全な事後承諾ですけどね（笑）。

福田　長州さんとお会いできたら、挨拶だけじゃなくて、闘いに対するお話も聞けたらなと思ってるんです。自分がUFCに出るにあたって、理想の闘い方は長州さんが提唱している〝ハイスパートレスリング〟だと思ってるんで。

——どういうことですか？

福田　長州さんのスタイルというのは、大きい相手に対しても動きと運動量で自分のペースに持ち込むじゃないですか。僕もUFCに行ったら、相手は自分より大きくて力が強い相手ばかりだと思うんで、とにかく運動量でどんどん攻めて、自分から仕掛けていかなきゃダメだと思ってるんですよね。

——なるほど。


福田　だから、そういったことも含めて、長州さんにいろいろ聞いてみたいんです。ホント、アメリカ人と闘うのにどっしりやってたら絶対に勝てないんで、もう運動量で3ラウンド動きまくって、仕掛けまくって勝ちたいですね。スタミナは自分の大きな武器だと思ってるんで。

——では、とにかくUFCでの活躍を期待しています！

【10年9月21日／都内・某喫茶店にて収録】

RIKI **FUKUDA**

ふくだ・りき■山梨学院大学レスリング部から、卒業後WJプロレスの練習生となったがデビュー前に退団。03年にMMAデビュー。パンクラス、DEEPなどで活躍し、09年4月にDREAMに初出場。ムリーロ・ニンジャを下し注目を浴びる。さらに09年6月にはDEEPミドル級王座を奪取。2011年からはUFC参戦が決定している。183cm、84kg。



ro Cop

[10.9.25 UFC119]
米国インディアナ州インディアナポリス・コンセコ・フィールドハウス

○フランク・ミアvsミルコ・クロコップ×

(3R 4分02秒 TKO)

動きの少ない試合展開に客席からはブーイングも起こったが、3R終盤にミルコが左を伸ばしたところを、ミアが右ヒザで顔面をヒット! 追撃のパウンドを打ち込んでTKO勝ちを収めた。



満身創痍のミルコが“凡戦”の果て
フランク・ミアに壮絶KO負け!

燃えつきたPRIDE魂

UFC移籍以降、かつての輝きを失なっていたミルコ・クロコップだが、
今年に入ってからは2連勝を飾り、復活への兆しが見えた。
しかし、9.25『UFC119』のメイン、そこには大の字になるミルコの姿が……。
戦前からケガが取り沙汰されていたミルコ。
この一戦を本人のコメントをもとに振り返る。

文／ジーニアス　試合写真／Josh Hedges/Zuffa, LLC

ミルコ・クロコップ

Mirko Cr

「近年のUFCのメインイベントの中でも最低の内容に見えた」

アメリカの『Yahoo! Sports』のコラムでフランク・ミアvsミルコ・クロコップはこう酷評された。そのほかの有名MMAサイトでも似たような評価。『UFC119』唯一のKO決着であったにもかかわらず、ミアが「ノックアウト・オブ・ザ・ナイト」（ベストKO賞）のボーナス7万ドルを獲得できなかったことからも、〝UFC公認の凡戦〟だったということになる。

それほど見栄えの悪い試合だったわけだが、やはりミルコは肉体的にも精神的にもボロボロであったことが、ここ最近の発言を見てもわかる。

そもそもミルコは『UFC115』のパット・バリー戦で引退することを考えていたフシがあった。今年の6月5日には『MMA Weekly』で「今回が現在の契約で最後の試合になる。今後についてはこの試合が終わってからわかるだろう」とコメント。

6月9日の『MMA Junkie・com』では「（UFCとの）契約が延長されるか引退するかのどちらかだ。俺は闘い続けると思ってるけどね」「現役を続けるということはUFCで闘い続けるということだ。他団体に行くということはない。みんなが俺の試合を観たいと思ってくれるかぎりは闘い続ける」と、一見強気とも受け取れる退路を断ったコメントをしているが、その一方でクロアチアのテレビ局『Nova TV』が、『UFC115』の前に「ミルコ・クロコップはパット・バリーに勝っても負けても引退するつもりでいる」と報じており、『UFC115』の放送中も「最後の試合」とアナウンスしていた（6月13



Cro Cop

日・『Fighters Only』)。

さらに、パット・バリー戦翌日の6月13日には、クロアチアの地元マスコミである『Juntarnji LIST』で、「パット・バリー戦はPRIDEグランプリ決勝戦同様、自分のキャリアの中でも大好きな試合の一つになった。だが、練習の大半で年齢的な衰えを実感することになった……。UFCと新たに契約を結ぶのかはわからない。いままで多くの試合をしてきたし、最強のファイターたちとも対戦してきたと思ってる」「俺は20年間格闘技生活を送ってきた。そしていま、試合をするモチベーションがなくなったし、スパルタ的な練習をする気力もない。勝利に対する貪欲さも以前ほどではなくなった。トレーニング自体はやめないだろうが、1時間よけいに寝るほうを選択するだろうね」と、本音を打ち明けている。

さらにとどめを刺したのが7月2日の『Fighters Only』の独占インタビュー。一応現役続行に色気は見せているものの、ここでミルコはこれまでとは別人としか思えないコメントを連発している。

「今後のことはわからない。まずはしばらく休むとしか言えない。ロレンゾ・フェティータとはこれから話をするのは確かだ。だが、闘い続けるかどうかは断言できない。もし現役続行ならコンディションも万全じゃないといけないしね」

「まずはやる気になるきっかけが必要だ。イワン・ヒポリットと8週間の地獄の練習を耐えてもいいような対戦相手じゃないといけない。『ランディ・クートゥアーは46とか47歳になっても現役だから、おまえもまだまだやれる』と言う人もいるが、みんな彼のキャリアが16〜17試合だということを忘れてる(実際は28試合)。俺はMMAで35試合(実際は37試合)、K−1で26試合(実際は23試合)、アマチュアボクシングで44試合もしてるんだ。ランディ・クートゥアーよりも3年早く闘い始めている。もちろん年齢的にはまだまだ若いが、それだけ多くの試合をしてきて疲れてるということだ」

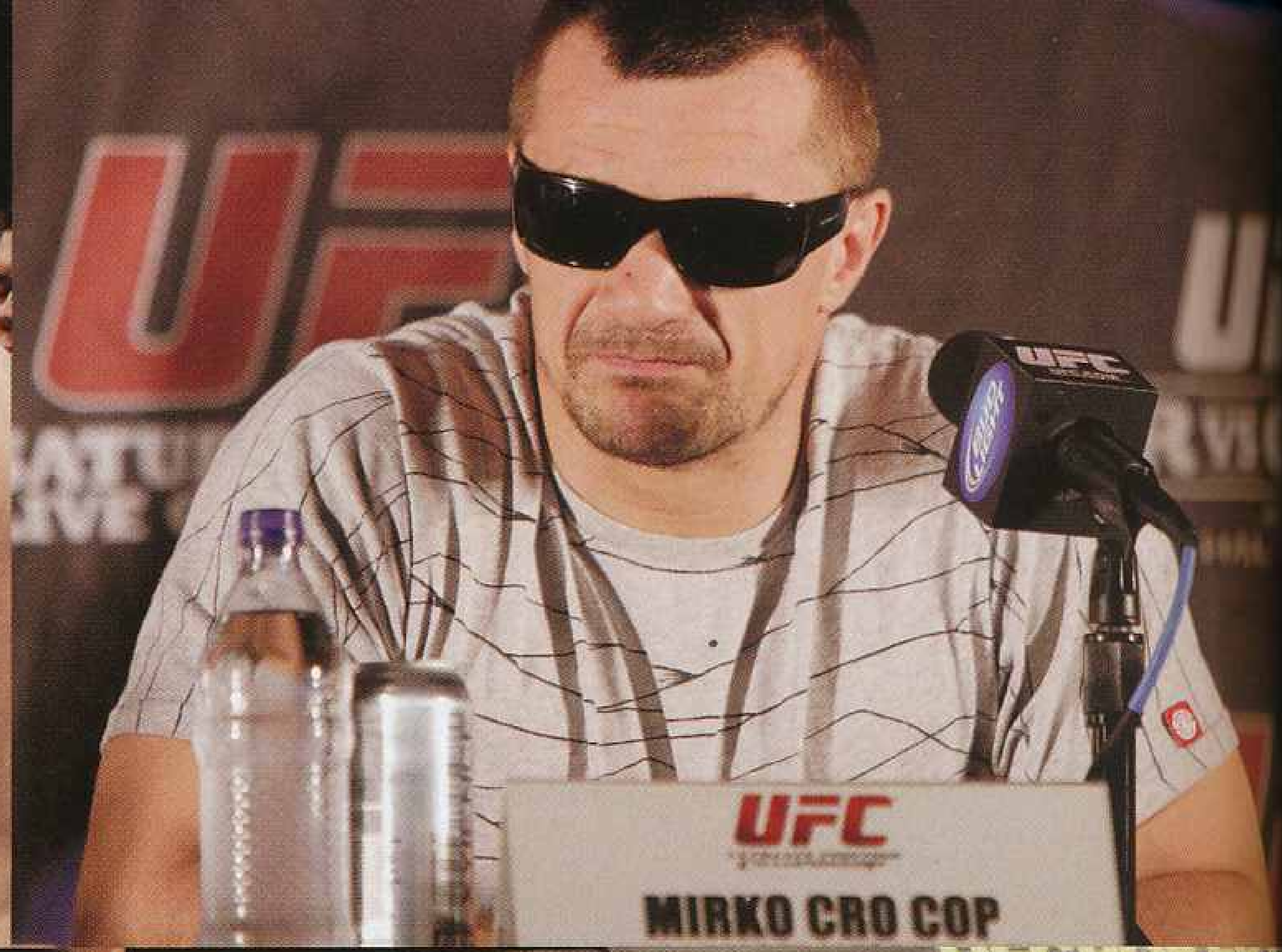
「俺は日本に44回も行った。44回もベッドから起きて、空港に行って、日本に着いて、試合をした。44回、日本に行くたびに時差ボケ、睡眠不足、骨折、縫合をしてきた。誰だってうんざりするはずだ。いまは今後どうすべきか考えているところだし、休養が必要だ。ロレンゾと話し合ってから決めたい。いまはモチベーションが必要だね」

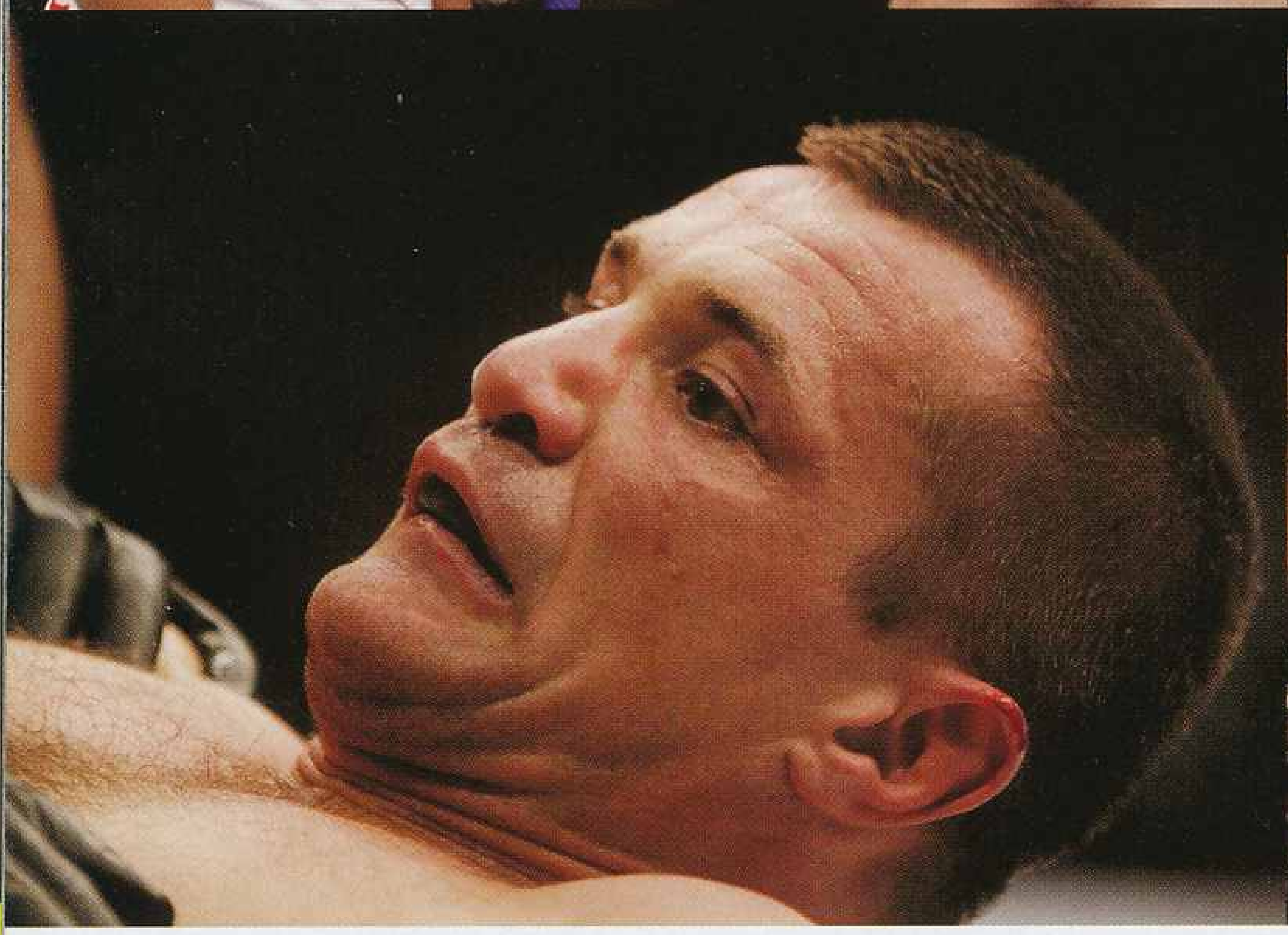
「やはりモチベーションが上がるのはレジェンドファイターとの対戦かな。やるならランディ・クートゥアー、アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ、そしてガブリエル・ゴンザガだ。とくにゴンザガとは再戦したい。クートゥアー、ノゲイラ、ゴンザガの順番で闘いたいね」

「パット・バリーは優秀なファイターだしとてもタフだ。彼は誰に勝ってもおかしくない実力を持っている。だがもう彼のようなタイプに刺激を受けることはないだろう。彼らを軽視しているわけじゃないんだが、もうビッグネームとの試合以外には興味が湧くこともないだろう。自分が感化できる試合が必要だ」

「ノゲイラだったら2003年以来の再戦になる。彼は真のレジェンドファイターの一人だし、おもしろい試合になるだろう。クートゥアーはレジェンドであると同時に、この世界のパイオニアでもある。PRIDEにいた頃はしょっちゅうクー









Mirko Cr

トゥアーと対戦したらどうなると思うか聞かれたが、いまならやれる環境にある」

「現役を続けるなら、ヨーロッパで闘えればと思ってる。自分の都合だけどね。時差ボケにはうんざりしてるし、9～10日間も家族から離れてすごすことにもうんざりしている。自宅を出るたびに小さな子どもは泣くし、妻は妊娠してる。もちろんこれはビジネスだし、金を稼がないといけないこともわかってるが、自宅を出るたびにつらいんだ」

「わざわざ遠征するための理由もなくなってきている。もう充分なお金は稼いだし、有名にもなった。ある意味でいまが立場的にもベストなのかもしれない。いまさら金のために闘う必要もないし、ファンに楽しんでもらう試合をするだけだ」

「というわけで、もしロレンゾと話し合って契約することになったら、これまで闘う機会が少なかったヨーロッパのファンの前で試合をすることに興味があるね」

「繰り返すが復帰するかはまだわからないよ。なんらかのインスピレーションが必要だ。金の問題じゃない。もちろんファイトマネーは支払われてしかるべきだが、モチベーションの中では一番下だ」

つまりミルコは、「このまま引退してもかまわない。でもUFCがどうしても試合をしてほしいというのならヨーロッパで、なおかつ対戦する意味のあるレジェンドファイターとの試合ならOKだ」というサインを送っているのだ。UFCもその意向を汲んだのか、8月3日にクロアチアのサイト『INDEX・HR』が「UFCがミルコ・クロコップに11月13日にドイツで開催される『UFC122』への出場オファーをした」と報じている。

ところがその後、『UFC119』でフランク・ミアと対戦予定だったアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラが負傷欠場、代わりにミルコがミアと対戦することが8月16日に電撃発表される。そこから先は紹介したとおり。見事なまでに弱気発言のオンパレードであるが、そうなるのも無理はないというもの。

ミルコはUFC公式サイトでは「彼はアメリカ人らしくビッグマウスで挑発しているが、口は閉じておいたほうが身のためだ。ノックアウトされないよう神に祈っておいたほうがいい。俺を甘く見ないほうがいい。俺にはその準備ができている」と強気に出ているが、希望していた条件とはまるで違う開催地と対戦相手に加えて、5週間前のオファーということですっかりネガティブモードに突入してしまった。

それに追い打ちをかけたのが右目の負傷だ。9月16日に『INDEX・HR』がミルコ欠場説を報じ、直後にミルコやダナ・ホワイトは必死に否定している。結果、ミルコは無事に試合に出場したが、右目は真っ赤で、試合前の記者会見では終始サングラスを外すことはなかった。大会直前の9月24日に『Fighters Only』が右目負傷直後の写真を公開しているが、目からは出血が確認でき、「よくこれでインディアナ州の担当医は試合の許可をしたものだ」と思えたほど。

以上のことを踏まえると、ミルコは試合前の段階から〝詰まれていた〟と言っていい。にもかかわらず、時間切れ残り58秒というところまで粘ったうえに、フランク・ミアのテイクダウンを一度も許さなかったのは、見方によっては大健闘とも言える。もっとも積極的に攻撃を仕掛けたのは、フィニッシュとなるカウンターのヒザ蹴りを浴びる直前のみだったのだが……。

マーク・ハントがUFCに登場することを、いったい誰が予想していたであろうか。

2004年にPRIDEに参戦してから始まったハントのMMAキャリアは、吉田秀彦戦で幕を開けている。このときは腕ひしぎ十字固めで吉田に敗れるものの、意外なまでのMMAへの適応力を見せて評価をおおいに高める。続いて大晦日の『PRIDE男祭り』では、負傷欠場した桜庭和志に代わってのスクランブル出場。当時PRIDEでは無敗だった絶対王者ヴァンダレイ・シウバを強烈なフックで吹っ飛ばし、大激戦を制して判定勝利している。その後も西島洋介、髙阪剛といった選手と命を削り合うような熱戦を展開。K―1時代から続く「名勝負製造機」っぷりをおおいにアピールしていた。

そもそもハントという選手は、べつに世界最強になりたくて格闘技をやっているわけではない。ナイトクラブの用心棒をしていた頃にキックボクシングと出会い、てっとり早く稼げる手段として格闘技を始めたすぎない。しかも稼いだ金には無頓着で、K―1ワールドGPで優勝した際のファイトマネーと優勝賞金は、高級車の購入や自宅のゲームセンター化などに散財し、1年足らずで使いきってしまったというほど。「闘うモチベーションはマネー」と常々公言し、自宅にひきこもってケンタッキー・フライドチキンとチョコレートとタロイモを食べながらゲームに興じ、稼いだ金がなくなるとほとんど練習をしないままに試合をするという、間違ったスローライフを実践する半ニートだ。だが試合では驚異的なタフネスぶりと、相手の長所を引き出しまくる闘いぶりで、世界中のファンを熱狂させてきたファイターである。

しかし『PRIDE無差別級GP』の2ndラウンドでジョシュ・バーネットに敗れて以来、エメリヤーエンコ・ヒョードル、アリスター・オーフレイム、メルヴィン・マヌーフ、ゲガール・ムサシに敗れて5連敗。対戦相手はすべて各階級の世界のトップランカーであることは差し引いても、ヒョードル戦以外はいいところなく敗れてしまっていることもあって、ファイターとしては致命的な戦績となってしまっていたのは動かしがたい事実であろう。

ところが7月9日にハントがUFCと契約し、『UFC119』でショーン・マコークルと対戦することがMMAニュースサイトにすっぱ抜かれ、翌日にはダナ・ホワイトがこれを認めるつぶやきをツイッターで発言。それもファンからの「なんで5連敗中のハントと契約したんですか？意味がわかりません」というツイートに答えてのもので、「PRIDEを買収したときにハントの試合契約も含まれていたから」と、ハントなんていらないけど仕方がなかったと、契約は本意ではないことをアピールしている。

しかしなんだかんだでUFCと契約したハントの、最初にして最大の難関は減量であった。ハントの通常体重は130キロ。ネバダ州アスレチック・コミッションが定めるヘビー級のリミット体重である265ポンド（約120キロ）まで10キロ



“マット界の風来坊”がUFCデビュー! しかしあっさり秒殺負け!!

それでも……

そんなハントが大好きだぁ～!!

の減量が必須となる。いままで試合のための激しいトレーニングをしたこともないと公言しているハントだけに、当然闘うために減量するなんてことは未経験。大好きなフライドチキンもチョコレートも我慢し、人生初のパーソナルトレーナーをつけて減量を実施。さらにアメリカン・トップチームへ出稽古に出向き、ジェフ・モンソンらとトレーニングを敢行。そのときツイッター上にアップされた写真を見るかぎり、別人のように精悍な姿のハントがそこにた。いままでとはひと味違うハントとして復活する予定であった。

そして試合当日。そこにいたのはいつもどおりのでっぷりした体型のハントであったが、コンディションは非常に良さそうに見えた。対戦相手のマコークルは、9戦9勝7KO勝ちというストライカーではあるが、しょせんはローカル大会での戦績。地元インディアナポリス出身ということもあって抜擢されたご当地ファイターであり、アメリカのスポーツベッティングではK−1王者のハントが有利というオッズが示されていたし、MMAニュースサイトの『SHERDOG』でも、ハントが1ラウンドTKOするであろうという予想を提示していた。

試合は開始早々ハントが圧力をかけ、マコークルは下がる展開。マコークルが苦し紛れに出したタックルも余裕で切り、逆に流れるように上を取るハント。まるでMMA選手のような動きに驚かされる。しかし上からパウンドを打ち始めたその瞬間、マコークルがハントの左腕をキャッチし、そのままストレートアームバーに捕らえてハントは無念のタップアウト。わずか1分3秒で、ハントのUFCデビュー戦は終了した。

無様な負けをさらしてしまったハントは、1試合でUFCをリリースされてしまうのだろうか? ぼくはそうは思わない。前述のとおり、ダナは本意ではなかったがハントと契約したと愚痴っているが、UFCはPRIDEから移管された契約の多くを破棄してきたし、契約が残っていたというわりにハントはDREAMやK−1でも試合をしている。これは完全にぼくの妄想なのだが、やはりダナはハントを獲得したかったのではないだろうか。ハントほど異色で、魅力的なファイターはほかにいないからだ。

ぼくは今回の負けでハントの価値は下がってはいないと思う。ハントは誰よりも腕っぷしが強く、誰よりもファンを沸かせるファイトができ、そしてなんでもないところでコロリと負けてしまう。


近い存在を挙げるなら、練習も何もせずに初期UFCで猛威をふるって大人気となったタンク・アボットだが、ハントはアボットほどバイオレントな雰囲気はなく、逆に魅力的な笑顔をたたえたハントの気のいい兄ちゃんっぷりは多くのファンが知るところだ。

今回の負けに関するアスレチック・コミッションが課したサスペンションは、左ヒジのX線写真の提出があるまでの無期限の出場停止。しかしハントのことをよく知る我々からすると、「あんなもんでハントのヒジが壊れるわけねーだろ!」という感じだ。シェーン・カーウィンやジュニオール・ドス・サントスとの剛腕対決、ロイ・ネルソンとのデブ対決など、ハントと対戦したらおもしろくなりそうなファイターはUFCにゴロゴロいる。UFCでのハントの闘いは、まだ始まったばかりなのだ。頑張れハント!



[10.9.25 UFC119]
米国インディアナ州インディアナポリス コンセコ・フィールドハウス
○ショーン・マコークルvsマーク・ハント×
(1R 1分03秒 キムラアームロック)
開始早々、ハントの打撃を避けるように、低いテイクダウンを仕掛けるマコークル。そのままアームロックを狙い、左腕を伸ばすとハントはあえなくタップ! わずか63秒での決着となった。

文/高橋ターヤン　試合写真/Josh Hedges/Zuffa, LLC　構成/鈴木佑



10.23『UFC121』でヘビー級王座に挑戦!

怪物は怪物が始末する

ブロック・レスナー

Cain Velasquez

ケイン・ヴェラスケス

文／高橋ターヤン　試合写真／Josh Hedges/Zuffa, LLC　構成／鈴木佑

世界最高峰の舞台となったUFCには、世界中から強豪が集結している。
それゆえ、全勝無敗のパーフェクトレコードを持つ選手というのも珍しくなってきた。しかし彼らの多くは、UFCの前座試合での切磋琢磨のなかで、ある者は敗北の味を覚えてさらなるレベルアップをはたし、ある者は挫折してUFCを去っている。そもそも世界的なブームによって全体レベルの底上げがなされた現代のMMAにおいて、パーフェクトレコードというのは、弱い相手との対戦によって意図的に作り上げられる記録であるか、よほどの幸運に恵まれた選手でなければ成しえない記録である。
だが、そのような規格に収まりきらない本物の規格外選手も存在しているのも事実。それはライト級で13戦無敗の戦績を誇るチャールズ・オリベイラであり、ウェルター級で14勝無敗のジョン・ハサウェイであり、ライトヘビー級のジョン・ジョーンズ（暴走して反則負けしたことがあるが）である。そんな次世代のモンスター候補生の中でもっとも底を見せていない怪物が、10月21日の『UFC121』でヘビー級王座に挑戦するケイン・ヴェラスケスなのである。
ヴェラスケスの父は金も職もないままカリフォルニアに流れ着いたメキシコ移民であり、ヴェラスケスはそんな両親のもと、1982年にカリフォルニア州で生まれた。高校時代にはレスリングとアメリカンフットボールの選手となり、抜群の身体能力を活かして両チームのキャプテンとして活躍した。
アイオワ中央短大ではレスリング選手として全米王者となり、卒業後はアリゾナ州立大学に入学。レスリングのディビジョンIと呼ばれる最高ランクで活躍し、二度のオールアメリカンに選ばれるなど、レスリングエリートとしての道を歩むかたわら、教育学の学位を取得するなど文武両道の活躍を見せていた。
しかし2005年に大学を卒業すると、ヴェラスケスはとるものもとりあえずアメリカン・キックボクシング・アカデミー（以下、AKA）に入門。MMA選手を目指して激しいトレーニングを開始する。
2006年10月、AKAと関係の深いストライクフォースでプロデビューをはたす。対戦相手はキャリア4戦3勝のジェシー・フュージャルシクだったが、開始早々テイクダウンを奪うとパウンドアウトによる秒殺勝利。次戦はロシアで行なわれたボードッグ・ファイトで、4戦4勝のキャリアを誇るジェレマイア・コンスタントを圧倒し、これまたパウンドでTKO勝ちを収めてしまう。
こんなバケモノのような選手を、モンスターコレクターのダナ・ホワイトが放っておくはずもなく、キャリアわずか2戦のヴェラスケスはUFCと契約。UFC初戦であるブラッド・モリス戦では、開始早々左フックでダウンを奪い、そのままマウントポジションからパウンドを連打。わずか2分10秒で圧倒的な虐殺を完了したのだった。続くジェイク・オブライエン戦、デニス・ストニッチ戦も圧勝。すでに前座レベルの選手ではないことは誰もが認めるところだった。
そんななか組まれた次戦の対戦相手はチーク・コンゴ。ミルコ・クロコップと互角以上の打ち合いをしたフランス人キックボクサーだ。これまでの対戦相手とはレベルの違うコンゴとの対戦は、UFCヘビー級トップ戦線に割り込むための試験的要素も含まれたマッチメイクだった。
この闘いでヴェラスケスは、何度もKOされてもおかしくないような強烈な打撃を浴びながら、そのたびに驚異的な打たれ強さを発揮。さらに打たれた際に必ずタックルからのテイクダウンを奪い、安全なポジションでリカバーしたあとにパウンドを開始するというクレバーな試合運びを披露。結局判定までいくことによって、逆にヴェラスケスの底が見えなくなるという衝撃的な試合であった。
そしてオーストラリアで開催された『UFC110』では、レジェンドファイターのアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラと対戦。ここでのヴェラスケスは、NEWヴェラスケスとして覚醒していた。これまでの殴られても蹴られてもテイクダウンし、パウンドでTKOをもぎ取るという、いかにもレスラーらしいファイトスタイルから、まるで中量級のキックボクサーのような華麗なワン・ツーに随所で強烈なキックを混ぜる見事な打撃テクニックを見せ、カウンターの右フックからダウンを奪ってのパウンド連打で、ノゲイラに何もさせないまま轟沈させたのだ。
闘うたびに進化した姿を見せるヴェラスケス。すでに前戦から半年経っているが、このあいだにヴェラスケスの何がどこまで進化しているのかはまったく見えていない。ただフランク・ミア戦で柔術への、そしてシェーン・カーウィン戦で打撃への耐性のなさを露呈したレスナーに対して、レスリングで輝かしい実績を誇り、AKA仕込みの打撃を持ち、柔術紫帯を持つヴェラスケスがどのような闘いを見せるのか楽しみで仕方がない。2010年10月23日は、UFCヘビー級の新たな伝説の幕開けの日となるかもしれないのだ。

Cain Velasquez Lastest 3 Games



[09.6.13 UFC99]
ドイツ・ケルン ランクセス・アレーナ
◯vsチーク・コンゴ
(3R終了 判定3-0)
コンゴの打撃にヒザをつく場面がありながら、レスリング仕込みのテイクダウンでうまくバックコントロール。そしてコンゴからマウントを奪うと強烈なパウンドを叩き込んで、判定勝ちをスコア。


[09.10.24 UFC104]
米国カリフォルニア州ロサンゼルス ステイプルズ・センター
◯vsベン・ロズウェル
(2R 0分58秒 TKO)
2R開始早々、ヴェラスケスがテイクダウンからロズウェルをコントロール。そして立ち上がろうとしてがら空きになったロズウェルの顔面にパンチの猛打を浴びせ、レフェリーストップ勝ち。



[10.2.20 UFC110]
オーストラリア・ニューサウスウェールズ州シドニー エイサー・アリーナ
◯vsアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
(1R 2分20秒 TKO)
序盤からパンチを交錯させる両者。ノゲイラの右フックに対し、ヴェラスケスの右クロスカウンターがモロにヒット！ ダウンしたノゲイラにパウンドを追撃、わずか140秒で衝撃のKO勝利を収めた。





Michael Bisping

マイケル・ビスピン

文／高橋ターヤン　試合写真／Josh Hedges/Zuffa, LLC　構成／鈴木佑

10.16『UFC120』でメインを飾る
ミドル級トップコンテンダー

秋山成勲 魔王を阻む イギリスの英雄

ロンドンのO2アリーナで開催される『UFC120』のメインイベントで、秋山成勲と激突するのはマイケル・ビスピン。いま、イギリスで最も若者に支持されるスポーツ選手の一人だ。

ビスピンは1979年生まれの31歳。幼少時から武術を学び、15歳からバーリ・トゥードの世界に身を投じて、すでにキャリア16年となるベテランファイター。地元イギリスのローカル団体で経験を積んだ後、イギリス最大のMMAイベントであった『ケージレイジ』に参戦して、ライトヘビー級王位を戴冠。同じくイギリスのローカルプロモーションの『ケージ・ウォリアーズ』でもライトヘビー級王者となるが、マネージメントの問題で『ケージレイジ』を離脱することになる。

その後アメリカへ渡り、UFCファイターの登竜門番組『ジ・アルティメット・ファイター』（以下、『TUF』）の第3シーズンのライトヘビー級トーナメントに参加。不作と言われたこのシーズンを圧倒的な存在感を発揮して勝ち抜き、見事優勝して10万ドルの契約金とUFCとの複数試合契約をゲットしたのだった。

UFC本戦に出場したビスピンはエリック・シャファー、エルビス・シノシックを連続KO葬。『TUF』同期生のマット・ハミル戦では、初めての判定までもつれ込んだものの、キッチリと勝利を収めている。続く『TUF』第2シーズン覇者のラシャド・エヴァンスとの『TUF』ウィナー対決ではスプリットの判定負け。これがキャリア初敗北となったビスピンは、ミドル級への転向を決意する。

ミドル級に転向してからはチャールズ・マッカーシー、ジェイソン・デイ、クリス・リーベンに連続勝利し、人気・実力ともに認められるようになると、自身が躍進したきっかけとなった『TUF』第9シーズンにコーチとしての参加を要請される。チーム・アメリカvsチーム・イギリスという構図で製作された第9シーズンは、チーム・アメリカのコーチであるダン・ヘンダーソンに対抗するチーム・イギリスのコーチとして登場。

ビスピンは熱血コーチぶりを発揮してシーズンを牽引した。そして恒例のコーチ対決の舞台は『UFC100』という記念大会。しかし直前の一方的なトラッシュトークに反して、試合では古豪ヘンダーソンの圧力に圧倒されてしまい、強力な右フックからのダイビングパウンドによって、自身初のKO負けを喫してしまう。

だが続く『UFC105』ではPRIDEウェルター級GP準優勝者のデニス・カーンと激突。ピンチもあったが2ラウンドTKO勝利を収めて、復活の狼煙を上げている。

翌年にオーストラリアで初開催された『UFC110』では、当初ヴァンダレイ・シウバvs秋山成勲のカードが決定していたが、オーストラリアがイギリス連邦加盟国であり、地元での人気選手ということで秋山に代わってビスピンがスクランブル出動。

ここでも抜群の事前煽りを展開して大会を盛り上げたが、歴戦の強者ヴァンダレイの勝負強さに判定負けを喫してしまった。しかし『UFC114』では実力者ダン・ミラーに僅差とはいえ判定勝利を収め、あらためてチャンピオンシップへの復活ロードを歩み始めている。

ビスピンはUFC登場当初から、「弱い相手を当てられて勝ち星を稼ぐプロテクトされたファイター」と揶揄され続けてきた。確かにビスピンの対戦相手は常に強豪中の強豪というわけではなく、逆にダンヘンやヴァンダレイといった古豪との試合では、その勝負弱さを露呈しているというのは認めざるをえない。しかし190センチ近い長身と、ライトヘビー級でもまったく力負けしなかったパワー、キックボクシング王者になるほどの打撃、古武道柔術からスタートし、20年以上のキャリアを誇る寝技など、MMAファイターとしてのビスピンを侮る要素は何一つないことも事実であろう。

これまで秋山が対戦したなかでも、ビスピンは間違いなく最高の難敵であることは間違いない。しかもビスピンはイギリスでは凄まじい人気を誇っており、イギリスで『最もクールな男性スポーツマン』に選ばれるなど、イギリスの国民的スポーツであるサッカー選手に勝るとも劣らない人気を誇るスポーツ選手として認識されている。またその大声援に応えるかのように、イギリス大会ではビスピンはさらなる力を発揮しており、イギリス大会でのビスピンの戦績は15戦全勝、うち判定は2試合だけである。

しかし今回、秋山は「アグレッシブな試合をする選手」として、ビスピンと互角に闘えるという認識をUFC上層部が持ったからこそ、メインイベントに抜擢されたはず。前戦は一本負けを喫している秋山ではあるが、逆にビスピンを撃破すればミドル級トップコンテンダーとして認識されることになるのは間違いない。

またビスピンもこの試合に勝利すれば、いよいよタイトル戦線に浮上することが約束された非常に重要な試合だ。つまりこの試合は、両者が本気で激突する戦争のような闘いが確定している試合なのだ。

Michael Bisping Lastest 3 Games



[09.11.14 UFC105]
英国マンチェスター マンチェスター・イブニング・ニュース・アリーナ
◯vsデニス・カーン
(2R 4分24秒 TKO)
1R、ビスピンはカーンの右フックでダウン。しかし2Rはテイクダウンに再三成功し、パウンドを連打。最後はカーンの顔面にヒザを合わせてレフェリーストップ。逆転勝ちを収めた。



[10.2.20 UFC110]
オーストラリア・ニューサウスウェールズ州シドニー エイサー・アリーナ
×vsヴァンダレイ・シウバ
(3R終了 判定3-0)
シウバのミドル級転向初戦の相手となったビスピン。1Rはリーチに勝るビスピンが打撃でペースを握る。しかし、2R&3Rとシウバの打撃と絞め技に攻め込まれ、無念のフルマーク判定負け。



[10.5.29 UFC114]
米国ネバダ州ラスベガス MGMグランドガーデンアリーナ
◯vsダン・ミラー
(3R終了 判定3-0)
ゴング前、額を突き合わせながらにらみ合った両者。ビスピンは1Rこそミラーにリードされるも、2Rになるとパンチと左ハイキックで流れをつかみ、そのままミドル級実力者対決を制した。

9.25 IGF『GENOME13』
アントニオ猪木デビュー50周年記念大会レポート



今宵もズンドコ大漁! 大漁!!

アントンがマグロを解体した日

元気があればマグロも切れる! ということで、これまでにも数々のズンドコぶりで我々を楽しませてくれたIGFが、アントンのデビュー50周年記念大会を開催! ここではそのカオスな模様を徹底レポート! 迷わず読めよ、読めばわかるさ、バカヤロ〜!!

文/T 構成/鈴木佑 試合写真/平工幸雄

JCBホールの入口をくぐれば豪華な花々の数々。そう、ここは先日9月25日に行なわれた『GENOME13』、別名「アントニオ猪木デビュー50周年記念大会」の会場である。と、その付近でじっとたたずむ、見覚えのある人物が。おお、アントンの黄金時代を支えた懐刀、新間寿さんではないか! どうやらチケットの用意の不手際で足止めを食っている模様(笑)。花々の華麗さとは裏腹のそんな出だしに若干の不安を感じつつ、中に入ってみれば……。

場内はやたらと物々しい印象。というのも、ほぼすべての観客が入口で無料配布された真っ赤な闘魂タオルを首にかけているのだ。常人に勢いをつけさせるこの赤いタオル同様、大会は非常に弾みよく進む。ただし、第4試合までは。

空気が緩やかになり始めたのは「勝利者賞」が用意されたレジェンドマッチ、藤波辰爾 vs 初代タイガーマスクから。10分時間切れの引き分け後、「勝利者賞ですが、引き分けということでお二人に敢闘賞を」(田中秀和リングアナ)と授与されたのは、「桃屋の『辛そうで辛くない少し辛いラー油1年分』」(ドラゴン)、「コロナビール1年分」(タイガー)。「逆にすべきなんじゃねえの?」との客のつぶやきに、「あいかわらず動けないですね〜」と開口一番、自らを正直に総括する初代タイガーの試合後コメントが被さった。

遺言で「恥はかいても字は書くな」と言われましたが……（猪木）

休憩明けには「猪木」コールに包まれてアントンが登場。「青い（北朝鮮拉致疑惑日本人救済議員連盟の）バッジをつけてる人たち、おまえら命懸けで（北朝鮮に）行ってこい！」と、おおいに啖呵を切るが、リング上の敷布がかけられた物体を目にすると「ところでなんでしょう、これは？」と、まるで聞いてないとばかりのとぼけた様子。

そしておもむろに敷布が外されると、なぜかそこには巨大マグロの姿が！「……へえ～」と気色ばむアントンは、「俺の冗談を真剣に聞く奴がいる」とボヤきながら、用意された真剣でマグロの頭を切り落とすと、続いて最近お気に入りの書道パフォーマンスへ。

しかし、マグロ（ツナ）だけに「皆んなで手をソナGO」（みんなで手をつなごう）と大書したものの、「ツ」を「ソ」に書き間違えるという一寸先のハプニングを巻き起こす。自身が書道前に語った「親の遺言で『恥はかいても字は書くな』と言われましたが」との前振りが、ここで効いてくるとは……さすがアントン！

大会は後半戦。マーク・コールマンを相手にデビュー戦を迎える元・若麒麟こと鈴川真一がドレッドヘアで登場すると、一部の客席から「殺せ！」だの「生きて帰すな！」だの、やや物騒な声が飛び交う。そんな殺伐なムードのなか始まった試合は、鈴川の張り手による出血のためか、コールマンが何度もタイムポーズ。さらにコールマンは、アントンに向けて戸惑いの視線を送る。すると、和田良覚レフェリーは戦意喪失と見なしたのか、ゴングを要請。鈴川のTKO勝ちとなる不思議な展開に。

その直後、なぜかアントンのいる放送席に向かって中指を突き立てたかのように見えたコールマン。いったい試合で何が起こっていたのか？

一方で鈴川はコメントルームでの第一声が「冷たい水、ないの？」という大物ぶりを発揮。さらに前夜祭でコールマンを挑発し、この日もセコンドを務めたラッパー軍団が「ヤツ（コールマン）がオールドスクールすぎただけでしょ」「こいつの仲間は今日300人来てるぜ！　それがストリートで生きてきた証って話」とゴキゲンにまくし立て、最後はマスコミに「おまえ、（鈴川が）疲れてんだろうが？撮りすぎだろ！」と凄むと、意気揚々と去っていった……。

そしてセミでは澤田敦士がエリック・ハマーと対戦。小川直也不在のなか、次期日本人エースの期待がかかる澤田だったが、試合中にいきなり意味もなくエプロンに出たり、鉄柱攻撃を試みたりと不可思議なムーブを連発。「ちゃんとやれよ！」の客の野次も届かず、ついに澤田は木槌とゴングまで持ち出す始末。そしてハマーを殴打すると、あっさりと反則負け！

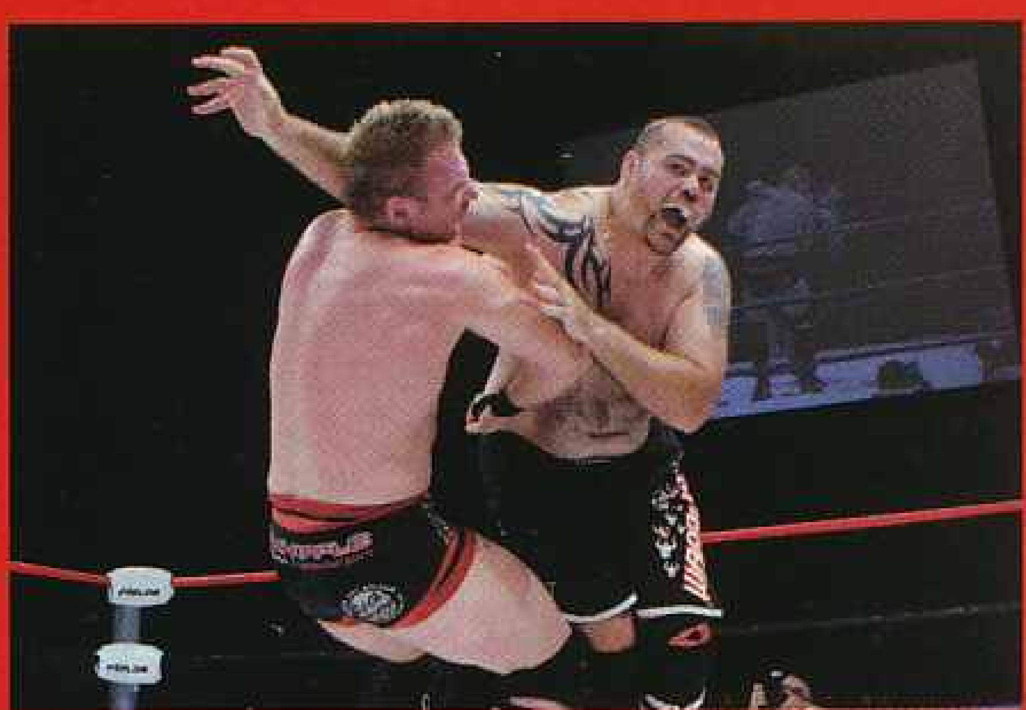
ちなみにハマーの勝者コメントは「いますぐ再戦してもいい。ただし、物を使うのはなしで」という、ごもっともなものであった。



もはや不条理文学としか思えない「皆んなで手をソナGO」の文字。書道もここまでくると芸術の域を超えたと言っても過言ではないだろう。猪木が書けば世界が笑う!?



ラッパー集団「練マザファッカー」のリーダー、D.Oは鈴川とともに麻薬取締法違反容疑で逮捕された人物。「悪そうなヤツはだいたい友だち」にもほどがあるというか、ムフフフフ。


見てみぃ、この説得力のないラリアット！　あきらかにサボった身体でモッサリ度指数高めのムーブを披露したシルビア。ある意味、素材は抜群なので今後もIGFに継続参戦希望！

注目のメインは元UFC王者対決、ジョシュ・バーネット vs ティム・シルビアという、アントンのデビュー50周年とはあまり関連性の感じられない試合。噂されたDREAM参戦と見せかけての登場となったシルビアが繰り出す攻撃は、ジュシュをコーナーに寝かせてのパンチやラリアットという、コテコテのプロレス殺法。

さらにエプロン越しの蹴りがかわされると急所を打ちつけ、大げさに痛がる2メートルの元UFC王者。うん、あたりまえだがやっぱりプロレスは初心者だ。

試合はそのまま5分9秒、両者リングアウトのゴングが鳴らされたが、これに激怒したのがリングサイドにいたアントン。「もっと試合しろ！」と、客の声を代弁するかのようなマイクでそのまま試合は再開！　するとマイク内容を知ってか知らずか、わずか66秒でジョシュが腕ひしぎ逆十字からタップアウト勝ち。この日もアントンが朗読した『道』のように、迷わず極めたジョシュであった。

終わってみれば、ボブ・サップとボビー・ラシュリーが、ケンドー・カシンの奸計により仲間割れして一敗地にまみれたタッグマッチが、試合として一番まともだったような『GENOME13』。さらにそのズンドコぶりは、大会終了後に行なわれた猪木の50周年記念パーティでも勃発した。

宴もたけなわ、司会の谷隼人が コメントをもらおうと藤波に壇上から呼びかけるが、このときにかぎってドラゴンは不在。すると、アントンは「台本どおりやろうとするからダメなんだ！」と、いまさっきの大会のズンドコ進行を忘れたかのように谷を叱咤！

さらに、なぜか唐突に壇上で池谷幸雄がバク転を披露すれば、ジョシュも「猪木サン、イツモ、アリガトウゴザイマシタ」と微妙な日本語で感謝を述べるなど、パーティも大会同様に混沌たる空間に。もう何がなんだか、ムフフフフ。

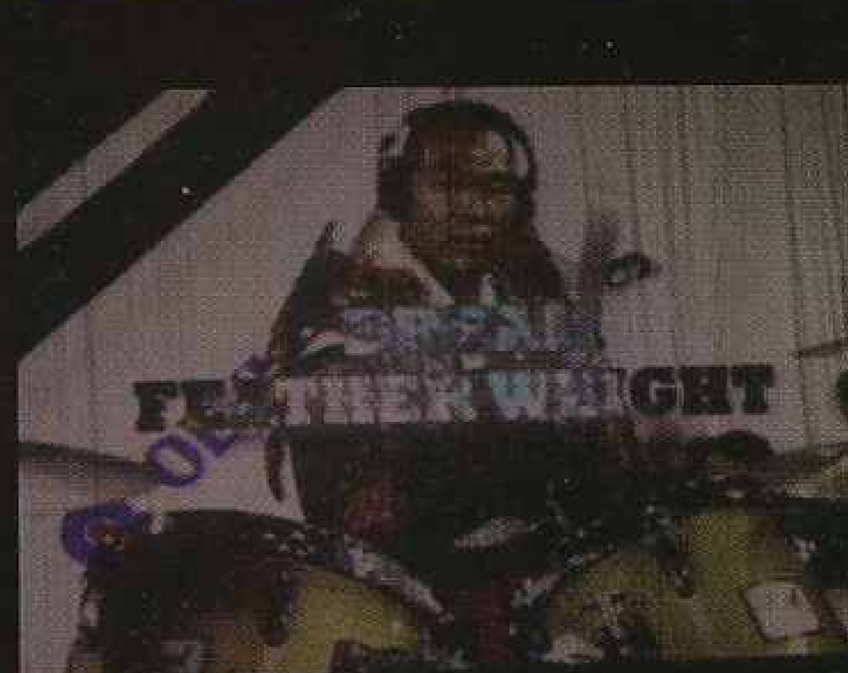
そして最後に「ある先生の電気を貯める技術が、来年に向けて実現できると思います」と、どんなときも夢をあきらめないマイクで締めてみせたアントン。結局、興行＋パーティで計5時間半にわたり、ズンドコ満載となったアントンの50周年記念イベント。終わってみれば、パーティでのボブ・サップのマイク、「次回のIGFをお楽しみに！」の言葉だけが、妙にけなげに響いた夜となったのだった。

サクラバとイシイをカタレ!!



DREAM.16 座談会











石井慧“ハダカのデビュー戦”となったミノワマン戦。その剥きだしぶりはどの大物新人のケースにも当てはまらない。ファンが異物として受け入れるのは仕方のないことか……。

――さて、先ほど終わった『DREAM・16』の座談会ということで、ペールワンズ総帥の井上崇宏さんと堀江ガンツさんをゲストにお迎えしました。

井上 井上でございます。

ガンツ 堀江ガンツでございます。

――ということで、今日の『DREAM・16』を総括したいと思うんですが、まずは緊急参戦をはたした石井慧ですけど、ボクのツイッターのタイムラインを見ると、試合内容に凄く不満が多いですね。

井上 そうなんだ。俺は、確かにミノワマンとの体重差は凄くあったんだけど、「こんな石井慧のデビュー戦が観たかった」と思いましたね。やっぱり、昨年大晦日の吉田秀彦とのデビュー戦ではああいう内容だったから、「とんだ一杯食わせ者」的なキャラが浸透していたけど、今回は4戦目だよね？　海外での試合を除けば実質2戦目。それなのにミノワマン相手にあそこまでできるのは凄い。あれがデビュー戦でできていれば、もっと盛り上がったのになって思ったけど。

ガンツ だから、現時点だと本当にプロレスラー・MMAファイター vs 柔道家ですよね。「柔道の金メダリストがMMAをやると、こういう強さなんだ」っていう。まだ未熟なんだけど、テイクダウンは取りまくってるし。だから逆に言うと、「まだグリーンボーイまる出しなのに、ミノワマンに完勝できるくらい強いんだ」って。

井上 完封だよ。

――だから、批判的なコメントが多いのは、石井に期待するハードルが高いからなんでしょうね。

井上 単純に「勝ってほしくない」っていうのもあるんじゃない？（笑）。

――エリート柔道家って嫌われますからね、昔から（笑）。小川直也がデビューしたときもそうだし、吉田秀彦に対してもそういう感情はありましたよね。

ガンツ やっぱり「石井慧」「現役五輪柔道金メダリスト」って、あまりにもビッグネームだから、最初から観る側の要求が高いんですよね。それから吉田秀彦なんかは最初から連勝街道を走ってたじゃないですか、それと比べられてる部分もあるんだろうけど、あの頃と比べてMMAは競技として確立されてるし、石井はこれまでの柔道家が武器にしてた、事実上の〝ハンデ〟だった柔道着を着てないことを加味しないと。今日の試合だって、もし柔道着を着ていたら、田村潔司 vs 吉田みたいにファーストテイクダウンで終わってたかもしれない。ただ、石井はそれをやらない。現時点の実力だけで勝負してる、初の「幻想ゼロ」の大物ルーキーだと思うんだよね。

――今回、ミノワマンがテーマを「露出」としましたけど、じつは全露出したのは石井慧だったという（笑）。

ガンツ これまでの大物柔道家なんてのは、柔道着を着ることによって、「脱いだらどうなっちゃうんだろう？」とか、「柔道着を着たまま柔術家とやったら、寝技はど

座談会出席者

井上崇宏
編集プロダクション『ペールワンズ』総帥。山本小鉄モノマネの第一人者〝井上小鉄〟として知られる。業界マスコミという立場ではなく〝井上崇宏業〟に励む日々。

堀江ガンツ
本誌編集部。ちっちゃな頃から熱狂的プロレスファンでならし、『週プロ』の『プレッシャー』会員という恥ずかしい過去を持つ。変態座談会主宰者。

[司会]ジャン斉藤
本誌編集長。〝雀鬼〟桜井章一の内弟子を経て『Ｋａｍｉｐｒｏ』編集部へ。永久電機など、アントニオ猪木の怪しげな事業の調査をライフワークとする。

こまでできるんだろう？」というふうにファンに幻想を与えていて、それで商売をしていたと思うんですよ。

井上　測定不能にしてしまうということだよね。

ガンツ　そうそう。だから、ファンのあいだでも「実力測定のカードを組め！」とかっていう声が出たんだけど、石井の場合はデビュー戦も今回の試合も、「いまの実力はこれです」っていうのをハッキリ見せちゃってるからね。

井上　測定されちゃったわけだよね。

ガンツ　ましてや、プロとしての色気っていうのも、『炎のファイター』で入場したりとか、へんな発言とかだったりでまったくプラスになってないわけでしょ（笑）。

井上　『炎のファイター』は本当に意味がわかんないもんね。完全にサラリーマンの忘年会の余興のノリだからね（笑）。あれが流れたときに、盛り上がりもしなければ、ムカついたりもしないんだよ。

ガンツ　そう（笑）。テーマ曲で感動させる能力がないんだよね。そういうプロとしての幻想とか、自分の実力以外の要素が「金メダリスト・石井慧」という名前以外はゼロ（笑）。そこが逆に凄いというか、「新しいな」と思いますね。いままでにそんな人、いなかったよ。超大物なのに評価に上げ底が一切ないんだから。

井上　石井は小さい頃から総合格闘技が身近にある世代だから、純粋に競技としてゼロからスタートするということがあたりまえだと思っているんだよね。だから世代の話で言うと、今日は桜庭がメイヘムに2分ちょいで負けたりして、わりと象徴的な一日だったのかなと思うんだけど。

ガンツ　うん。幻想もへったくれもない世界ですよね。


大会前日に発表されたメガトンマッチ。ミノワマンの対戦候補として来日したトンプソンを迎え撃ったのはDEEPメガトン王者の川口雄介。まさかの判定決着は1Rを支配した川口がスプリットの判定勝ち。


所英男を撃破したウィッキーとフェザー級転向第2戦の石田くんの激突。石田くんの執拗なタックル攻撃をウィッキーがしのぐという緊張感ある攻防の末、スプリット判定で石田くんの勝利。2連勝。

石井慧はMMA初心者としての姿を普通にさらけ出している

井上　「桜庭はどうしてメイヘムを指名したんだろう」って考えさせられるしね。結果からすると秒殺されたわけだけど、本人は絶対にメイヘムに勝てると踏んでいたと思うんだよ。絶対に一本取れるはずと思っていたんだよ。

ガンツ　でも、試合は打撃がありますもんね。

――今回、ヘタしたら打撃で終わってもおかしくなかったし。

ガンツ　でも、あれパウンドアウトで終わらせなかったというか、パウンドで効かせたところを隙ができたから極めるっていう極め方でしたよね。

――そうですね。でも、今日は桜庭vsメイヘムが一番良かったですよね。物語として完結してるという。

井上　青木vsアウレリオも良かったし……。

――青木のあの拷問技！　あれを寝技巧者のアウレリオを相手に仕掛けるんですからね。

井上　石井もおもしろかったし、小見川もよかったと思うよ。

――だから、そこで「石井がおもしろかった」とおっしゃったじゃないですか。それは試合内容がおもしろかったわけじゃなくて、「試合を含めてドラマとして観られたからおもしろかった」ということなんですよね。

ガンツ　だから「一からやるとこれぐらいです」っていうのが出た試合なんだよね。金メダリストのくせに、MMA初心者である姿をさらけ出している、この不思議さ。でもMMA初心者といっても、このところヘビー級相手に連戦連勝のミノワマンに完勝できるんだから。これはじつは凄いことでもあるし、次に誰とやるのかというのは気になりますよね。

井上　誰がいい？

ガンツ　サクが一番いいんじゃないかな。

井上　あー、俺もそう思った。大晦日で桜庭戦というのはグッといいなあ、と。

――そのMMAの厳しさを教える構図っていうのは、石井をヨソ者としてとらえている風潮にもマッチしますよね。

ガンツ　さっき、「幻想がない」って言ったけど、試合になるとちょっと出てくる。ミノワマンを極められはしなかったけど、あんだけグラウンドで一方的にコントロールした石井と、MMAファイターのなかではいまだに屈指の極めの強さを持つ桜庭がやったらどうなるのか？　石井はあんまりパウンドが強くなさそうだから、体重差はあっても桜庭にも分があるし。

井上　桜庭vs石井はいいよねえ。

――それしかないですよね。石井はMMAの歴史を背負っている人とやるのがおもしろいと思いますよ。

ガンツ　なんだかんだ言って、石井は総合に対して真摯に取り組んでいるし、この調子で続けるんだったら、いつの間にかちゃんと強くなっちゃっているような気がするんですよね。そう考えると、「やっぱりアスリートの時代が来ちゃうな」とは思いましたよね。

世界ですよね。

井上　どういうこと？

ガンツ　なんか最近、UFCとかを観てても アスリートの能力はとんでもないなって思うんですよ。今日の石井だって実質デビュー2戦目であれだけできるし、宮田和幸のあの身体能力もおかしい（笑）。

井上　俺、わかるよ。うち、子どもがレスリングを習ってるじゃん？　完璧にレスリングびいきだからね（笑）。MMAにおけるレスラーの闘い方で、宮田なんかは最高って感じ。

ガンツ　だから殴り合う、極めそうになるだけがおもしろい試合じゃないと思うんですよね。べつに極めそうにはなってないけども、「こいつ凄いな」っていうのが見える試合はおもしろい。だから宮田vsリオン武を「つまんない」ってみんなが言うかもしれないけど、どう見ても宮田は凄かったよ。

――だから、ちょっと前までは「視聴率が低い試合はつまらない」っていうへんな認識がありましたけど、最近はレスリング系の固める試合がつまらないという認識になってきましたよね。「つまらない」という声は否定しないけど、ファッション的に言ってる人もチラホラ見かける。

ガンツ　うん。固めたらつまんないとかね。でも膠着とかいうけど、一回も固まってないじゃんね。テイクダウンの攻防って、あれ凄いよ。

――とくにレスリングを習わせている子どもがいるわけでもない堀江ガンツでもおもしろい、と（笑）。

ガンツ　うん。GSPとBJペンの試合すら「つまらない」という人がいるのが不思議でしょうがない。あのBJが手も足も出ないっていうのは、KOされる以上にもの凄く興奮するシチュエーションじゃないですか？



修斗の大物リオン武がフェザー級に参戦。"裏番長"の宮田に挑むも圧倒的にレスリング力の前に封じ込まれる。宮田は（スタミナ切れを誘発しかねないのに）ジャーマン2連発！　スゲエ！



連敗は避けたい同士の一戦。開始早々、所くんが果敢に打撃で勝負するが、ヨアキムのローが金的を直撃……！　なんとか再開するも、自力で勝るヨアキムペースとなり、三角絞めで一本勝ち！

井上　だから、今日の青木もそうだよね。ずっとマウント取り続けてね。

ガンツ　そう！　アウレリオがあんな目に遭っていることに凄く興奮する！

――だから一本を取りにいく、KOを狙いにいく試合は確かにおもしろいんだけど、それ以外は「退屈」と言いきっちゃうのは……。

井上　それはやっぱり桜庭和志の存在が大きかったと思うよ。ずっと動き回って、最後は極めがある。その両方ができたから。あれが記憶に焼きついてるんだよね。

――桜庭は一本を取れなくても、常にそういう姿勢で試合に臨んでいるっていうのはありましたよね。

井上　でもね、いろんなタイプのヤツが一つの総合格闘技のイベントにいる。それも含めて"総合"なんじゃないかと思うけどね。いまたまたまレスリングの勉強をしていて、自分で身体を動かそうとは絶対に思わないんだけど（笑）、だから宮田とかの凄さがわかる。それは俺が本来格闘技に求めている魅力とは違うんだけど、競技という目で見たらおもしろいよっていう。でも、いまだに桜庭にはその競技性を求めてないし、一つのイベントでいろんな見方ができるのが、総合格闘技のイベントなんじゃないかなと思うんだよね。

――そういう"総合"なんだ。

井上　極論すると、「もう日本はフェザー級だけやってればいいよ」っていう物言いもあるわけじゃん。その言い分もわかるんだけど、それだと"総合"じゃないじゃんみたいな。いろいろあっていいじゃんというね。

いろんなタイプがいる。それを含めて"総合"なんじゃないか

――ケージorリング論争があったときも、「やっぱりMMAはジャパニーズMMAじゃなきゃダメだ」っていう論調があったわけじゃないですか？　でも、そもそもその"ジャパニーズMMA"を主張する側が実体をわかってないじゃないですか？

ガンツ　「明るく、楽しく、激しいMMA」って言ってたけど、今回そうだったかというと、そうじゃないと思う。じゃあ、失敗だったかっていうと、そうでもない。ハッキリ言って、明るく楽しくなるよりもおもしろかったもん。ミノワマンが派手に動いて、「オイオイ！」ってやったら盛り上がっただろうけども、それって刹那的じゃないですか？

井上　刹那的な快楽だよね。だから、選手みんながみんな観客論を持って闘ってもおもしろくないと思う。

――まあ、ドン・フライは一人で充分ですよね。一人しかいないからドン・フライなわけですし（笑）。

ガンツ　そうなんですよ。みんなが必死になってやってくれて、おもしろい試合じゃなくて、凄い試合をやってくれたらそれでいいよ。

――だけど、最近はみんなが観客論を持って闘っているような気がしますね。「盛り上げなきゃ」とか「視聴率を上げなきゃ」とか。

ガンツ　石田光洋とやる前のウィッキー

や、DJ・taikiが塩漬けうんぬん言ってましたけど、いまのフェザー級サバイバルのなかじゃ、塩漬けうんぬん以前に勝たなきゃダメじゃんって。おもしろい試合より、勝って上にいくことが重要じゃんっていう。

井上　ああ、わかる、わかる。

ガンツ　つまり〝ジャパニーズMMA〟って、おもしろい試合をすることを是とするっていう意味が含まれてるよね？　でも、それならUFCのほうがよりおもしろい試合にさせるための努力をしているでしょ。一番いい試合をしたらベストファイト賞として何百万円ももらえるんだから。でも、DREAMはボーナスなしでおもしろい試合をやらせようとしてるんでしょ。だったら、そうおもしろくなるように、闘う環境を作らなきゃ。それなのにいまだに第1ラウンドは10分のルールでやっているわけじゃないですか？　膠着ブレイクがあるんだったら、なんで自動的に5分でブレイクとなる1ラウンド5分にしないのって。そこが意味わかんないんだよなぁ。

井上　ブレイクといえば、どうして今大会の直前にルール変更になったのか不思議だったよね。要はこれまでは選手にペナルティを与えるために、一回引き離してイエローカードを出す。そのためにブレイクはあったけど、それがこれからは昔と一緒で、「膠着するとブレイクさせるよ」っていうルールになったんだよね？

ガンツ　膠着でブレイクさせるっていうのは、格闘技にはレフェリーが介入しませんよっていう聖域を犯してやったルールじゃないですか？　でも、第1ラウンドを10分じゃなくて5分にしたら、何もしなくても一度はブレイクになるじゃんって思うんだよね。じゃあ、10分にしているのはなぜですか？　それはPRIDEと同じルールだという以外に何も理由が見えてこないんだよ。

――大会直前に島田裕二ルールディレクターがマスコミにルール変更を説明していましたけど、あれは意味がわかりづらくなくなかったですか？

井上　ちょっとわかんなかった（笑）。

ガンツ　でも、「膠着を誘発する動き」にイエローカードを出すルールはPRIDE時代から意味がわからなかったですよ。二人ともグラウンドで必死にやってて、極められなかったらイエローカードってお



判定決着ながら難敵アウレリオを寝技で完封した青木真也。相手の両足を足4の字でフックする変型マウントポジションを披露するなど、青木の寝技変態ぶりが炸裂した！　グラウンドの安定感は恐ろしい。

DREAM.16
座談会

おもしろい試合をするための努力。日本がするべきことは……

かしくないですか？

――だから、本当に〝ジャパニーズMMA〟を作りたいなら、ルールを改正して5分3ラウンドがいいんじゃないかって。

ガンツ　今日、一本で決まった試合で5分を超えた試合はメインのムサシvs水野だけでしょ？

――やっぱり5分超えると、パフォーマンスが落ちちゃいますよね。

ガンツ　あの第1ラウンド10分っていうのは、一本を多くするため、観客のためと言われていたルールなんですよね。それがいまや観客のためになってないのに、そこだけ聖域でいじれない。そこの意味がわからないね。

――あとマッチメイクのテーマ性にも問題がありますね。

ガンツ　今回、いいマッチメイクが揃ったと思うのよ。とくにフェザー級なんかは好カード揃い。でも、「この人が勝ったら、そこからどうなる」っていう次の展開がないよね。だって、基準がわからないじゃないですか!?（ドン）。

――お、酔いが回ってきましたな（笑）。

ガンツ　（無視して）じゃあ今日、チェイス・ビービをノックアウトした高谷裕之と、コール・エスコベドに一本勝ちした小見川。どっちがタイトルマッチに挑戦するんだって。昨年の大晦日に小見川が高谷に勝ってます。でも、高谷はヨアキム・ハンセンに勝ってます。どちらが挑戦者にふさわしいのか、甲乙つけがたい。もしくは小見川がややリードしていると思うんだけど、当初は高谷が挑戦するはずだったんでしょ？　じゃあ大晦日の試合はなんだったのっていう。普通のファンが観ていて、どうやったらタイトルに挑戦できるのかがわかりにくいんですよぉぉぉ!!

井上　ちょ、声が大きいよ（笑）。

――クックックッ。青木vsアウレリオもね、青木は凄く厳しいことやってるんですけどね。でも、じつは今回の試合って、消化試合として見てるファンも多いわけじゃないですか？　そのわりにはアウレリオという凄く厄介な相手を当てられて……。

ガンツ　青木はこれから全部タイトルマッチでいい!!（ドン）。

井上　ガンツさん、もっと飲みましょう（笑）。

ガンツ　（ジョッキを飲み干して）だって川尻戦とアウレリオ戦、どっちが大変かって言えないと思うよ。でも片やタイトルマッチで凄い試合です。片やある意味で調整試合みたいに見られてるわけでしょ？　ホントはもの凄くキツい相手なのに。こりゃ、チャンピオンなんてやってられないよ！

井上　もう飲むしかない！（笑）。

ガンツ　タイトルマッチがなんでおもしろいかって言ったら、チャンピオンになったらずっと一番強いヤツとやらないきゃいけないからですよ。毎試合〝グランプリ決勝戦〟をやらなきゃいけないから、自分が一番強くて毎回その時点の最強の挑戦者を迎え撃ってるから価値がある。それ

時代は変わる。ジャパニーズMMAのあり方も変わるべき



41歳の桜庭和志、もうそれほど長くない現役生活ではあることは確か。いったいどんな姿を見せてくれるのか、DREAM側はどんな見せ方をするのか。

なのにチャンピオンがノンタイトル戦で負けたら、その相手とタイトルを賭けてリベンジマッチとか、物語が先に進まないでしょう！

―堀江ガンツの酒のピッチだけはどんどん進む（笑）。

ガンツ　ゲガール・ムサシがチャンピオンになりました。それが、大晦日に急に出てきて、ゲーリー・グッドリッジ戦とかそういうのはもうナシ！　次に出るときはチャンピオンなんだから、常にタイトルマッチですよぉぉぉぉ！

―でも、〝ジャパニーズMMA〟的には興行の都合でいままではそうやって回してきた時代はあったけど、変えたほうがいいということですか？

井上　それが興行の都合を考えてみても、いまなら全試合タイトルマッチのほうがいいという。

ガンツ　タイトルマッチって本当は凄いものなんですよ。選手にネームバリューがなくてもタイトルマッチということでちゃんと冠ができるはずなのに。それをないがしろにしているから、いつまで経ってもタイトルマッチで商売ができないんですよ。だからフェザー級の話に戻すと、高谷には悪いけど一回負けているんだから泣いてもらって、小見川vsビビアーノを組むべきですよね。小見川が63キロに落とせないという問題はあるにしろ。

―これは、そろそろガンツさんがDREAMのマッチメイカーになるべきだな……（笑）。

井上　そして堀江ガンツが並べたカードを俺たちが叩く、と（笑）。

ガンツ　（無視して）でも、そう思いませんか？

井上　いや、腑に落ちる話だよ。

ガンツ　マッチメイカーの話はさておいても（笑）、5分3ラウンドはすぐにやったほうがいいですよね。5分3ラウンドにすることと、チャンピオンシップをしっかりやること！

井上　リングorケージ論争の次は、5分or10分論争か（笑）。

ガンツ　俺は選手が凄く頑張ってて、せっかく日本人でいい選手が揃ってるんだから、もっと多くの人にわかりやすく観てもらいたいだけなんだよ。だいたい、〝ジャパニーズMMA〟って言うけど、それも時代によって変わっているわけじゃないですか？

―だから、武藤敬司の〝プロレスLOVE〟っていう言葉に近いですよね。

井上　免罪符的なもんか。

ガンツ　だって、その武藤だって変わってるんですよ？　今度世界ジュニアヘビー級王座に挑戦するんだから！

井上　アッハハハ！　あれはやられたなー（笑）。

ガンツ　素敵ですよね（笑）。

井上　守るものがないんだよね。常に変化し続けている。

―だから、こだわっちゃいけないんですよね。苦しいときには守ろうとするんだけど、意固地になって絶対に変えないというのはマズいですもんね。いや、今回はいろいろ考えたくなる興行でしたね。

井上　そういう意味ではいい興行だったよ。そして、とにかく今晩はガンツさんに会えてこうして講話が聴けたことが僕にとって幸せでした（笑）。

ガンツ　ご清聴、まことにありがとうございました。すいません、生ビールくださ～い！

【10年9月25日／名古屋市内の居酒屋にて収録】



10.3パンクラス 弘中邦佳戦、文句ナシの激勝!!

さらばパンクラス

衝撃の一本勝ちを収めた弘中戦を最後に、北岡はパンクラスに別れを告げた。
そのラストを飾るにふさわしい完全なる“北岡劇場”の模様とは?　次の舞台へと向かう北岡の姿は美しすぎるぞ!

文／橋本宗洋　試合写真／堀江ガンツ

もがき抜いた果てに出した答えがパンクラスからの“卒業”だった

10月3日のパンクラス・ディファ有明大会で行なわれた北岡悟vs弘中邦佳戦に関して、まず言っておかなければならないのは素晴らしい試合だったということだ。

気合い充分の表情だった弘中と、気合いなどという言葉では表現しきれない顔つきだった北岡。入場の時点からフィニッシュまで、二人は一瞬の、そして微塵の妥協もない攻防を繰り返した。

ゴング直後、タックルを警戒していたであろう弘中に対し、北岡は左ミドルを飛ばす。その後も大きくステップインしながらの左フックやパンチのコンビネーションなど、北岡はいつも以上に打撃を多用しながら試合を進めていく。

試合直前、北岡の頭には「打撃でノックアウトできるかもしれない」というイメージが浮かんできたそうだ。だが、彼はそれをすぐさま打ち消した。そんなに甘いもんじゃない。そんなに簡単な相手じゃない。そう心の中で繰り返したのだ。

試合が決まってから、すっとそうだったと北岡は言う。勝つイメージができては、それを自分で否定する。何度も何度も「甘いもんじゃない」と自分に言い聞かせて、この日の闘いを迎えたのである。

実際、弘中は厳しい相手だった。1ラウンドの途中で早くも軌道修正し、北岡の打撃の間合いを外すとより遠い距離からジャブと右ミドルをヒットさせる。接近戦ではヒザ蹴り。タックルにも完璧に対処し、逆にテイクダウンを奪ってみせた。

決して派手な展開ではなかった。ジワジワと体力を、そして精神力を削り合うような攻防だ。それでも目が離せなかったのは、どちらかの体力と精神力が削りきられたとき、あるいはほんのわずかでも集中力の均衡が崩れたとき、劇的なフィニッシュが訪れることを確信していたからだ。

その瞬間は、2ラウンド終盤に訪れた。これまでと戦略を変え、タックルから引き込みに転じた北岡。弘中はマウントを奪う。だが「青木真也とのスパーでマウントはよく取られるんです。僕はディフェンスの鬼なんですよ」という北岡は足関節を取り、それを脱出しようとする動きに合わせてフロントチョークへ移行していった。

足関節もフロントチョークも、北岡の得意技である。弘中はしっかりと対策を練ってきていたはずだ。それでも北岡の腕が弘中の首に絡みついたのは、やはり尋常ならざるテンションの賜物としか言いようがない。「もし負けたら、選手を辞めてました」と北岡は言う。そういう試合に向けて、彼は勝利のイメージを何度も打ち消しながら練習を重ね、100パーセント以上の危機感を抱いて闘っていた。だから、最後の最後で「身体が自然に反応した」のだろう。

弘中がタップし、試合が終わった瞬間、赤コーナーから仲間たちが飛び込んできた。歓喜の輪の中には、青木もいた。数えきれないほどガッツポーズを繰り返し、叫ぶ北岡。一方の弘中は号泣してコーナーで座り込む。とてつもないコントラストであり、とても冷静ではいられないほどの残酷さだった。

負ければ失うものがあまりにも大きい、強豪同士のリスキーな一騎打ち。妥協のない攻防と、衝撃的なフィニッシュ。試合それ自体が素晴らしいものだったからこそ、マイクを握った北岡の言葉も重く響いた。

「今日で自分のパンクラスismは終わりですが、残ったみんながそれを見せてくれると思います。自分の20代すべてがパンクラスでした。忘れられない青春でした」

それが、北岡の出した答えだった。試合前から、彼は深読みを誘うコメントを残している。公開練習では「今回はとくに積極的に自分の弱さと向き合った」と言い、さらに「パンクラスへの思いを残さないくらいに出しきるつもり。それを後輩たちに見てもらいたい」とも。試合の4日前、パンクラス横浜道場での練習を終えると、ツイッターで「さらば横浜!」。そのすべてが“そういう意味”だったということだ。

パンクラスのディファ大会では、インタビュースペースが会場ロビーに設けられている。試合後のコメント風景をファンも見ることができるのだ。リング上での言葉に声を失なったファンが見守るなかで、北岡は自分の思いをできるかぎり、伝えていった。

「生き残ったというか、自分で自分の人生を切り拓くことができました。それが今回のテーマだったんです」

「パンクラスで試合をするのは今回が最後です。結果にかかわらず、そう決めてました。でも負けたら選手を辞めてましたね」

「(今後は)自分が納得できる条件で、納得できる場所で、納得できる相手とやりたい。(プランは決めている?)大晦日に試合したいです」

「パンクラスへの愛情には区切りがつきました。“それはそれ、これはこれ”ですね。自分のほうがかわいいってことです。いや、自分がパンクラスに甘えてたんですよ。なれ合いになってしまってた。それじゃダメなんだと、30(歳)にしてようやく気づいた」

「わかってくれとは言わないです」。パンクラスへの思いを語ったあとで、北岡はそう付け加えた。闘いの場を変えることについては「僕の人生だから」とも言っている。

北岡はここ数年、人生を自力で切り拓こうとしては挫折し、もがき苦しむ選手生活を送ってきた。現役復帰した船木誠勝に挑戦状を叩きつけるも相手にされず、新興勢力ボードッグとパンクラスが提携した際には「ボードッグよりPRIDEに出たい」と団体の流れに逆らってDEEPでのPRIDEライト級GP出場者決定戦に臨んだ。この試合で北岡は見事な一本勝ち。しかしその翌日、GPの延期が発表されるという憂き目に遭った。出場を熱望していた『やれんのか!』にはタイミングが合わず、翌年からは『戦極』へ。ここで北岡は五味隆典を下してライト級王者になる。『戦極』は自分が作り上げた。そんな自負が北岡にはあったはずだ。だが、その『戦極』は体制変更でSRCになった。

もがいてもがいて、もがき抜いた果てに出した北岡の答えが、パンクラスからの“卒業”だった。

「まだパンクラスにいろよ、とは誰にも言われたくない」。そう北岡は言った。「誰にも言われたくない」という言葉は、二度繰り返した。

弘中戦をきっかけに、北岡はこれからすべての試合、あらゆる行動を自力で切り拓いていくことになる。誰にも頼らず、かわりに誰にも遮られない人生。自分の力だけですべてを決められる人生。それが、彼の選んだ生き方だということだ。







[10.10.3 パンクラス]
東京・ディファ有明
○北岡悟 vs 弘中邦佳×
(2R 4分22秒 フロントチョーク)

あの『戦極』での入場を思い出させる気合いの表情で登場した北岡。序盤、北岡のタックルを警戒する弘中がうまく試合を運んだが、2ラウンド中盤で弘中の首を捕らえると、そこからチョークへ! この逆転劇に会場は一気に爆発!

――最高の勝利おめでとうございます！

北岡　ありがとうございます。でも、『kamipro』にとってもよかったでしょ、俺が勝って。『ゴン格』だったら向こうが勝っても記事にできるだろうけど、『kamipro』は"北岡ちゃん"じゃないと。

――ダハハハハ！

北岡　いや、ホントにそうでしょ？（笑）。

――まあ、否定しませんけど（笑）。だから、もちろん北岡選手ほどじゃないですけど、観ていてちょっと緊張しましたから。

北岡　あ、そうでした？

――試合前の煽りVでも出てましたけど、ホントにリスクの大きい試合でしたよね。

北岡　試合前は言いませんでしたけど、リスク背負ってたのは俺だけだったよなあって思いますよ。

――今回の試合に関しては、「パンクラス卒業」というのを心に決めて挑んだ試合だったわけじゃないですか。

北岡　そうです。負ければ俺の格闘技人生が終わりだとも思ってましたしね。

――なぜ、もう次の目標が決まっているなかで、あえて弘中選手みたいな本当にリスクがある選手とやろうと思ったんですか？

北岡　うーん、やっぱり最後だからこそお客さんを入れたかったし、注目してもらいたいし、まあそのほうが燃えるなって思ったんですよ。でも、もちろん葛藤はありましたよ。弘中さんってみんなが思ってる以上にホントに強いと思ってますし、相性的にも「最悪じゃねえのかな」って思ってたんで。

――だから、強い相手を選ぶにしても、よりによってよく弘中選手を選んだなって思ったんですよ。次のステップのための

独占！　衝撃のラスト・パンクラスと"次のリング"を語る！

「自分の納得できる場所で闘います」

北岡悟



なんとなんと、試合直後の北岡悟独占インタビューに成功！　大一番を終え、パンクラスを卒業、そして"次のリング"へと向かう北岡がいま考えていることとは？そしてハードルの高い弘中戦を闘った理由についても迫ってみた。凄いぞ、"北岡ちゃん"!!

聞き手＆試合写真／堀江ガンツ

試合なので、自らあえて厳しいハードルを設けてしまうという。

北岡　Sなのか、Mなのかって話ですよねえ（笑）。

――でも、北岡選手のなかでは弘中戦のようなリスクを乗り越えてからじゃないと、パンクラスを卒業できないという気持ちがあったわけですか？

北岡　これで逃げて適当な外国人ファイターと闘って、客入りもボチボチみたいなことをやってる自分には酔えないなと思ったんですよ。でも正直、青木（真也）には凄い止められましたけどね。「弘中さんみたいな選手とやる必要ないですよ」って。俺も最初に弘中さんって聞いたときはいろいろ思いましたもん。「なんでやねん」って。

――でも、結果的にそれが自分を燃やしたというか。

北岡　そうですね、結果的にはよかったですよね。

――だから、今日はひさしぶりに表情も『戦極』のときみたいに、気合いの入り方が一線を越えた表情でした。

北岡　そうでした？　もう『kamipro』に言ってもらえればボクは満足です。

――ありがとうございます（笑）。それで、そもそもの話ですけど、パンクラス卒業を考えたきっかけはなんだったんですか？

北岡　まあ……みんなそれぞれの格闘技人生だと思うんで、ボクもボクの格闘技人生をやりきろうと思ったんですよ。ボクもできることなら"パンクラスの北岡"のままでいたかったですけど、パンクラスの北岡であるために、やっぱりお互いのためによくないことがあるというか。……まあこれも話せば長くなっちゃいますから。

――やっぱり方向性が違う部分も出てきたという？

北岡　いや、そういうことじゃないですね。自分が最後におもいきって、……やっぱりこの温度やこの熱で現役を続けるのは、そんなにめちゃくちゃ続けられないんですよ。それを考えると、「やりきった」って言えるようにしたかったというか、やりきれるような状況にするためにってことですよね。

――じゃあ、今回は本当に北岡悟個人の大勝負に向かうために闘った試合だった、と。

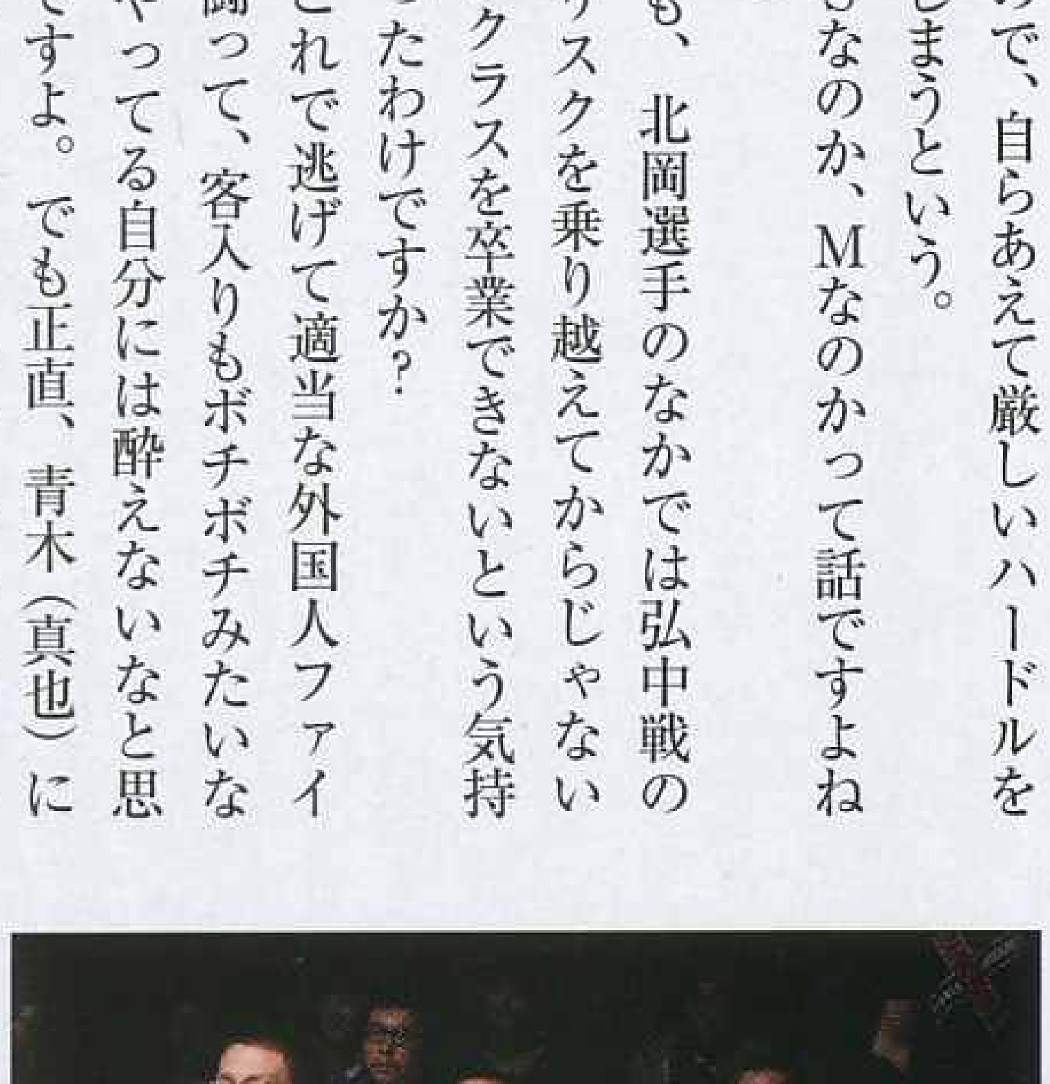
北岡　そうです。最後の目標に向かうためです。

――その目標は今後わかるという感じですか？

北岡　そうですね、はい。

――なるほど。それにしても見事な一本勝ちでしたけど、2ラウンド途中まではなかなかテイクダウンが奪えませんでした。試合中はどんな気持ちでした？

北岡　いや、弘中さんがリングで動いてるのを見たときに、構えが低くて、なんかもうボクに対応するような感じで構えてたんで……って、こんな技術の話、『kam



会場には盟友・青木真也の姿も。弘中がタップした瞬間に北岡のセコンド陣はリングの中へなだれ込むように飛び込み、大はしゃぎで北岡の勝利を祝福していた。

だから『戦極』は〝北岡悟にとってのPRIDE〟だったんですよ

ipro』で必要ないですよね？

—えっと、できればサクッとピンポイントでお願いします（笑）。

北岡　だから、ボクが恐れたのは弘中さんの強打だったり、レスリング能力だったんですけど、ちょっとあれじゃ出ないだろうなと思ったんですよ。で、1ラウンドにハイキックをもらったんですけど、そのときに「これ、たぶんガードしてなくても倒れないな」って。その時点でKOでバーンッと倒されることはないような気がして。

—だから2ラウンドはどんどん前に出てましたもんね。ジャブを食らいながらも全然怯まず。

北岡　そうです、そうです。あれは青木真也さんが「前出ろ、前出ろ」って。

—で、またちょっとだけ技術のことを聞くと、最後のギロチンもあれ最初は入ってなかったじゃないですか。

北岡　ああ、最初は首だけで取って、それをズラしていったんですけど。まあ、技術ですね。

—あれは何度も何度も首を取る練習をしてたからこそできる技というか。

北岡　まあ、スパーリングで。ボク、得意なんでね。ああ、でも極まったんですよね、ヤバいなあ、ヤバかったですね、〝北岡ちゃん〟。

—いや、〝北岡ちゃん〟、ひさびさに爆発しましたよ！（笑）。

北岡　いやー、スカッとしたっすよ！

—ハッキリ言って、『戦極』での五味隆典戦よりも気持ちの爆発があったような気がしたんですけど、どうでした？

北岡　ああ、そうですか。確かに五味戦のほうは「仕事が終わったな」って感じでしたね。

—だから、今日みたいな爆発は、PRIDE出場権を賭けて闘ったDEEPでの（ファブリシオ・）ピットブル（・モンテイロ）戦とかあっちの熱だなって感じたんですよ。

北岡　そうですね。ボクもピットブル戦を思い出すことができました。試合前に観たんですよね、ピットブル戦。

—思えばピットブル戦も〝その先〟に行くためのハードルだったわけじゃないですか。気持ち的には同じシチュエーションだったのかなって。

Satoru Kitaoka **LAST PANCRASE**



勝利の興奮が冷めやらぬ北岡とは対照的に、敗北に涙する弘中のコントラストがまたたまらない。今後の戦場についてはまだ語らなかった北岡だが、もし本当に"大晦日"出場が現実のものとなれば、またまた夢のカード続出である。

北岡　そうですね。今日の試合はその熱すら超えることができたんでホントによかったです。もしかしたら、ボクがパンクラスでやった試合でベストバウトって言える試合をやれたかもしれない。そんな気がしました。

—そして、リングを去る前に四方に向けて礼をしましたけど、あれはパンクラスへの思いというか、船木（誠勝）さんがやるアピールですよね。

北岡　まあ、あれはこれまでも勝ったときにたまにやってましたけど。だから本当は「明日また生きるぞ！」って言おうかと思ってたんですけど、それ忘れてましたねぇ。

—そこまでやっちゃうとネタになっちゃうんで、ポーズだけでよかったかもしれないですね（笑）。あと一つ感じたのは、やっぱり初代『戦極』ライト級チャンピオンの誇りというのが北岡悟を強くしたんじゃないかなって思ったんですよ。

北岡　ああ、それはありますよ。

—だからこそ、「これが『戦極』初代ライト級王者の強さです」というマイクでの発言にもなって。最後の感謝の言葉も事実上の『戦極』のトップであったJ−ROCKの國保代表の名前が一番最初だったんですよね。

北岡　そうですね。初めて自分にスポットライトをあててくれた人ですから。『戦極』は〝自分にとってのPRIDE〟だったんですよ。

—では、今回でそこに一区切りつけて、もう一つ次の戦場に行きたい、と。

北岡　……そこはなんとも濁しときますけど、自分の納得できるところで闘いたいです。っていうか、ホントにまだなんの話もしてないんで、本当にこれからどうなるかわからないんですよ！

—これからが大変だ、と。試合後のコメントでは〝大晦日〟という言葉も出ましたが、もう北岡さんのこれからの動向には目が離せませんね。

北岡　でも、ホントにまったく話はしてないんで、自分で自分の人生がどうなるかわからないです。でも、もう1年ぐらいは格闘技で食いっぱぐれないんじゃないかなって。今日の試合でその権利は得たなって思ってますね。

—いや、ホントにそれだけの勝利でした。

北岡　なんで、まあこれからまた見ておいてください。ま、言わなくても勝手に見てくれるでしょうけど。

—ええ、チェックさせていただきます。試合直後に取材受けていただきありがとうございました！

【10年10月3日／都内・ディファ有明にて収録】

「こいつの仲間は300人来てるぜ!」な読者プレゼント

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①〜⑧の質問の答えをご明記のうえ、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2010年11月19日(金)頃発送予定です)。

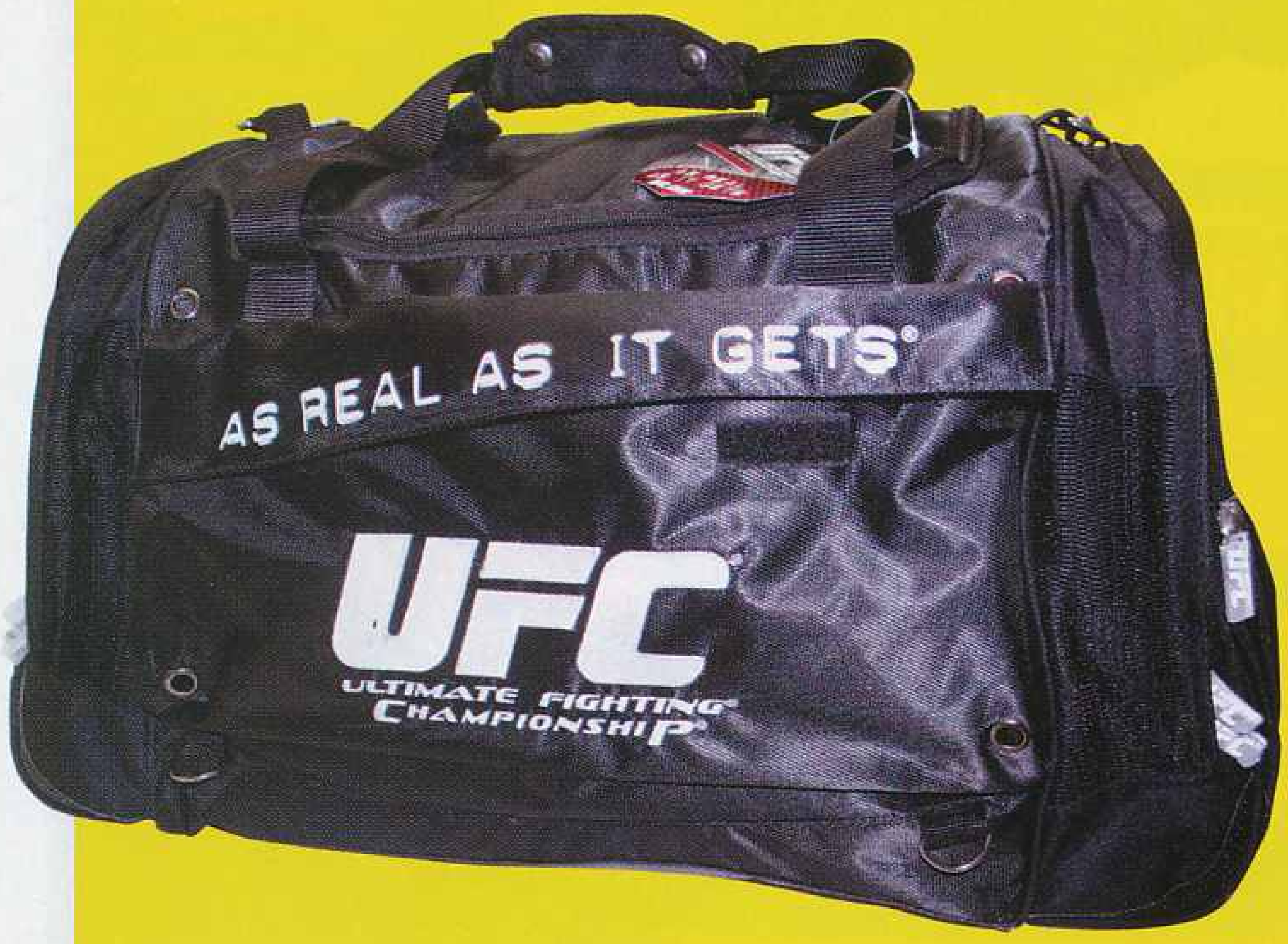
【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦あなたが大晦日に観たいカードは?⑧あなたがkamiproに望むことは?

【宛先】〒162-0805 東京都新宿区矢来町41-1 ザ・フタガミハウスNo.1
(株)ツー・スリー内『kamipro』編集部 「皆んなで手をソナGO」係まで

※応募締切は2010年11月5日(金)当日消印有効

PRESENT 01 SPECIAL PRESENT

1名様



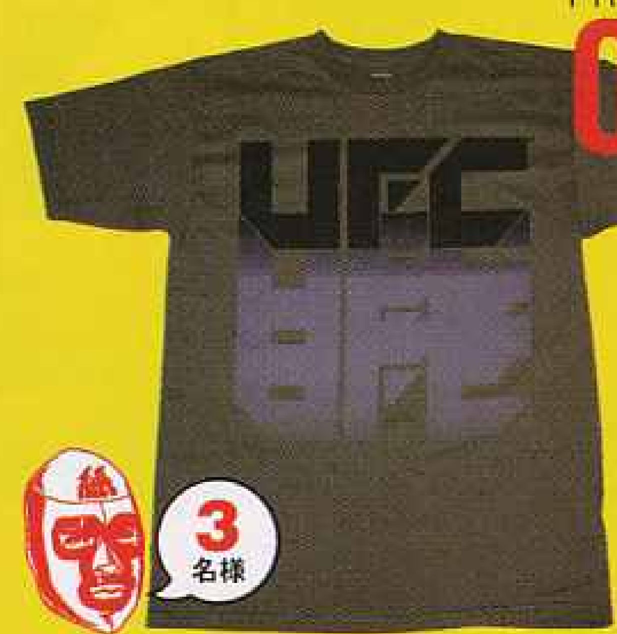
UFCバッグ

[UFC]

今回の目玉はUFCオフィシャルバッグ! サイズは縦30cm×横45cm×奥行き30cmで、ジム通いから小旅行にまでバッチリ! じつはこれ、アメリカのUFC本社に堀江ガンツが取材に行った際、ダナ・ホワイトからもらってきたもの。堀江は1時間以上待たされたのだが、ダナは「待たせて悪かったな」という言葉とともに、このバッグ目一杯にUFCのTシャツを詰め込んでプレゼント。さすが太っ腹!

PRESENT 02

3名様



UFC Tシャツ①

[UFC]

モスグリーンを貴重としたシブいUFCのTシャツ。深まりゆく秋にマッチすることこの上なし! 裏面は無地でサイズはL。

PRESENT 03

BACK / FRONT

3名様



UFC Tシャツ②

[UFC]

こちらは黒をベースとしたUFCのTシャツ。裏面の右肩にはUFCのロゴがワンポイントでプリント。サイズはM。

UFC■http://www.ufc.com/

PRESENT 04

BACK / FRONT

1名様



所英男モデルTシャツ

[リバーサル/¥5,040(税込)]

リバーサルとファッションブランド「Anarc of hex」とのコラボTシャツ。バックのデザインがZSTとも所とも読める逸品。サイズはL。

リバーサル■http://www.rvddw.com/

PRESENT 05

BACK / FRONT

1名様



佐藤豪則 モデルTシャツ

[NO NEED NEW/¥3,675(税込)]

桜庭和志率いるLaughter7所属の佐藤豪則のTシャツ。胸と左裾に佐藤のシグネチャー、左袖にはLaughter7のロゴ。サイズはS。

NO NEED NEW■http://www.no-need-new.com/

PRESENT 06

1名様



赤い軍団USSR Tシャツ

[ハードコアチョコレート/¥3,675(税込)]

ロード・ウォリアーズと抗争を繰り広げた"元祖レッドブル軍団"ザ・ラシアンズ! ワンポイントのイワン・コロフがおちゃめ。サイズはL。

ハードコアチョコレート■http://blog.core-choco.com/

PRESENT 07

BACK / FRONT

1名様



栗原あゆみ デビュー5周年記念Tシャツ

[アートジャンキー/¥3,990(税込)]

アートジャンキーからは人気女子レスラー、栗原あゆみのデビュー5周年記念Tシャツ! これを来て、栗原の実家の焼肉屋「三宝」へGO!

アートジャンキー■http://www.artjunkie.jp/

PRESENT 08

2名様



ヨシ・タツTシャツ

[WWE]

今号で取材した謙吾が、現在WWEグッズを扱う仕事をしてるとのことで、ヨシ・タツTシャツを提供! 白、黒、各1枚ずつでサイズM。

PRESENT 09

5名様



レイ・ミステリオ マグネット

[WWE]

こちらも謙吾提供。じつはこのミステリオ相手に今年WWEデビューしたのが、謙吾と縁の深いドス・カラスJr.だったりする。

PRESENT 10

5名様



WWEステッカー

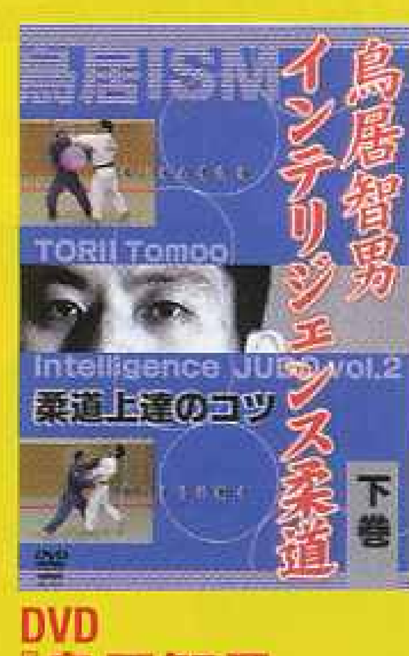
[WWE]

これまた謙吾提供。描かれているWWEスーパースターはジョン・シーナ、D-ジェネレーションX、レイ・ミステリオ、アンダーテイカー。

WWE■http://www.wwe.com/

PRESENT 11

1名様



DVD 『鳥居智男 インテリジェンス柔道 下巻』

[クエスト/¥5,880(税込)]

いまなお世界の頂点を目指し闘い続ける鳥居智男が、世界の強豪と闘うために工夫を重ね、磨き続けた柔道上達のコツを伝授!

クエスト■http://www.queststation.com/

kamipro SP NOV. 応募券 練マザ

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! http://kamipro.com/



MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
2010 NOVEMBER
2010年10月22日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一
青柳昌行

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
堀江ガンツ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎(雀王社行会のため非番)

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
高橋くん

編集次長(サンテミリオン!?)
松林 貴

デザインGM
出田さん(TwoThree)

デザイニングマネージャー
金井ヒサくん(TwoThree)

デザイン
松坂マツくん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
鐘田やっちゃん(以上、TwoThree)

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
タイコウクニヨシ
梅木麗子
丸山剛史
金山フヒト
丸山剛史

豊作&値崩れ
入江マツタケ(TwoThree)

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

業務部
樽本"ヴァンヌーボ"義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

編集チアガール
金川"ナツコ"奈津子
安部"クリン"悠子

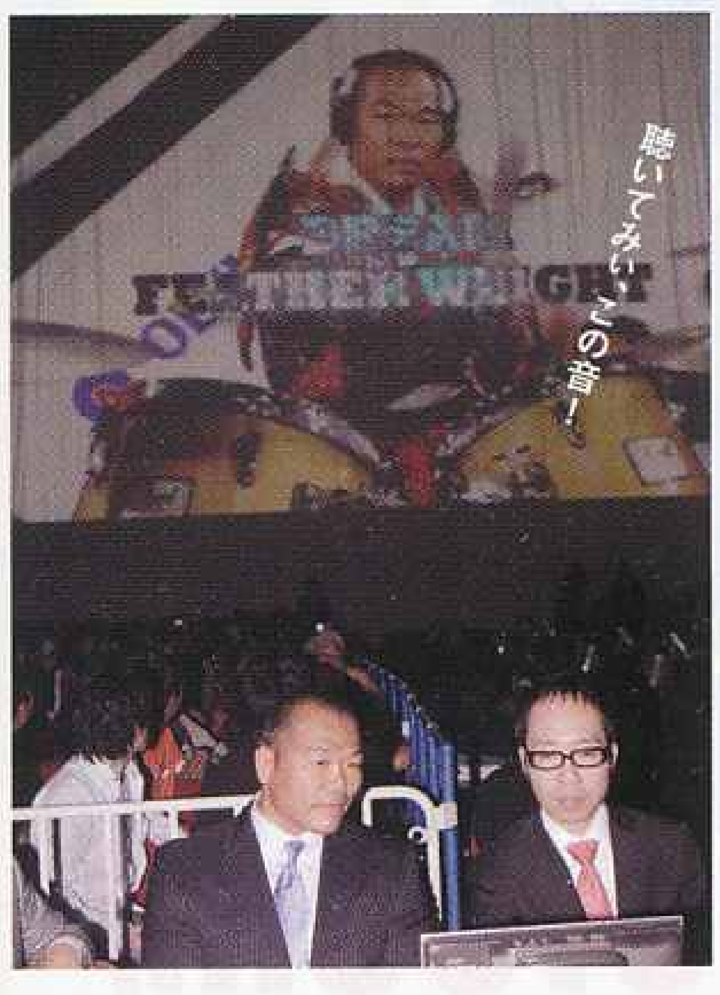
開錠マダム
廣橋久美子

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555(代表)

発売元
株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177東京都千代田区富士見2-13-3

印刷
大日本印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport



簡単キレイで経済的!
他店と差がつく

最新販促ツールで貴店舗をPR=集客力UP!!

売れてます!!

田口式 LED

世界初!! 両面タイプ

電飾ブラックボードが

驚きの!!

¥39,800

田口式LED電飾ボードはここが違う!!

1 10パターンのライティングモード

2 両面書ける! 両面光る!! 使い方色々

3 虫が寄ってきづらいから衛生的

4 LEDだから電気代が安い!!

夜はもちろん薄暗い店内、昼間も鮮やかなライトアップがとってもキレイ!!



比べて納得!! 使って便利!!

これまでの看板やブラックボードと比べてください!!

従来のブラックボードは…??
1台1万円程度
書き直せて安いけど暗い。

従来の液晶看板などは…??
1台15万円程度
明るいけれど高い。

田口式LED電飾ブラックボードは…??

実用新案登録済

液晶商品よりも安価で、両面に書ける!!
いつでも描いて、消して、自由自在!!
電気代は従来品の約1/10!! わずか18円/月



付属品
- ■ACアダプター
- ■特殊専用ペン6色6本
- ■専用クリーナー液
- ■クリーニングクロス
- ■吊り下げ用フック



Bar、レストラン、美容室、エステサロン等
使い方いろいろ…!!

製造元
株式会社タグチ・エンタープライズ
URL:http//www.cleanboy.co.jp/(動画配信中)

販売元
株式会社フィフティフィフティ
〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-31-15-305 03-5399-8020(tel/fax)

kamipro Special 2010 NOVEMBER
日本の救世主か、理解不能の怪物か——!?
石井慧は必要なのか?
2010年10月22日
発行人／浜村弘一　編集人／斉藤慎一、青柳昌行
発行所／株式会社エンターブレイン　〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
発売元／株式会社角川グループパブリッシング　〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3



定価: 本体838円 +税
雑誌61972-32 Ⓗ2011.11
Printed in Japan 大日本印刷株式会社

enterbrain
ISBN978-4-04-726879-1
C9476 ¥838E